

オバロ外伝：安穩無事  
に過ごしたい

ウキヨライフ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ふと露骨な性描写の練習をしたく、稀に濡れ場が入ります。オリ主転移物。ナザリツク勢との絡みは稀。ロアフレンドリーを意識していますが転移によるユグドラシル関係の設定や解釈は独自要素がやや強め。

# 目次

第1話：転移	1
第2話：戦闘とクレマンティーナ	37
第3話：実験とクレマンティーナ	66
第4話：主人とシモベ	99
第5話：装飾とクレマンティーナ	122
第6話：城塞都市エ・ランテル	144
第7話：媚薬と娼婦	170
第8話：魔獣登録と受付嬢	210
第9話：焼き菓子	244
第10話：アインズ・ウール・ゴウン	273
第11話：脅威	300
第12話：エリアス・ブランド・デイル・レエブン	334
第13話：依頼、領民、ときどき読書	358
第14話：召喚、娼館	384
第15話：蒼の薔薇の災難	412



# 第1話：転移

西暦2138年。枯れた大地を全地形対応車、俗に“クアッドバイク”と称される電動車両でひた走る。天気はいつも通り。防塵マスクとゴーグルがなければ健康が脅かされるレベルの粉塵が吹き荒れている。視界は最悪だ。

「酸性雨<sup>あめ</sup>じゃないだけマシか」

目の前の計器に視線を落とすと時刻は22時。

予定よりも帰りが遅れたことに内心毒づく。音楽で気を紛らわせたくてもプレーヤーは故障中。今は霞む景色の中、事故を起こさぬよう車両を転がすしかない。

震災で崩壊した完全環境都市<sup>アーコロジ</sup>の基底部を慎重に進む。崩壊から数年が経ったが、未だ当時のまま再開発されずに放置されている。人が住むには厳しい環境だが、今でも多くの人々が暮らす地域だ。

そして、俺が所属する組織の所在地でもある。

この時代、人類は完全環境都市<sup>アーコロジ</sup>市内での居住を余儀なくされている。18世紀から続い

た環境破壊が祟り、半世紀以上も前に自然環境の自浄作用が失われたのだ。大地は枯れ、海は濁り、空は粉塵で覆われてしまった。環境はすでに破局的で、人類を含む多くの生物が絶滅間際という有り様だ。

完全環境都市とは、人類が過酷な環境下で生きながらえようとして築き上げた箱庭であり、また棺だ。

しかし、ここは地震列島、日本。度重なる震災により、完全環境都市は崩壊と再建を繰り返していた。

組織の拠点は放置された建物のなかでも、比較的まともな物件を再利用している。いわゆる不法侵入や不法滞在の類だが、“中央”からはお目こぼしを受けている状況だ。

奴らは何だかんだで“外の労働力”を必要としている。不穏分子を都市の外にとどめる名目で、旧市街地のインフラ機能を最低限残し、外との適度な距離感を保とうと方々へ根をまわしているのだ。

深夜23時を回り、ようやく拠点に帰還。

仲間のエンジニアに車両を任せ、俺は宛がわれたあばら家へ引き上げる。

出迎える者は居ない。隙間風がカビ臭さを運ぶボロ屋だ。

乱暴に防塵マスクを顔から剥ぎ、蒸したタオルで顔と首回りを拭く。煤で黒ずむタオルを回収ボックスに投げ入れ、ガタつくソファアに腰を下ろす。一息ついたら専用バイザーを被り、慣れた手つきで端子を首の背面へ挿す。

毎日繰り返すいつもの行動。馴染みすぎた習慣だ。

端子を通して視界内に様々なウインドウが表示される。

おもむろに手を伸ばし、ニュース番組のアーカイブをアクティブにする。世情にさほど興味はないが、日常会話の種として出社前と帰宅時には目を通すようにしていた。

「——難民を狙った人身売——」

ウインドウをスライドさせて次の記事を読み込む。

「——これにより実質オーストラリア・エアラインのみとなりました」

飛び込んできたニュースに目を細める。

50年ほど前から数を減らし続けた航空会社が、ついに一社になったようだ。

航空機が世界一安全な乗り物だったのは大昔の話で、今や事故率が高い乗り物に成り果てている。その原因は至って単純で、プロペラやジェットエンジンのファンブレードといった駆動部が大気中の粉塵によって動作不良を起こすからだ。

推進力としてロケットが注目されたこともあったが、「大気汚染を加速させる」として政治的に計画そのものが圧殺されている。

人類は宇宙へと逃れる術も得ぬまま空から遠ざかり、人々を繋ぐのは光ケーブルによる情報網と陸海の輸送路のみとなったわけだが、そのおかげで俺のような人間にも仕事が続いてくるのだから心情としてはなかなか複雑だ。

次のニュースを読み込む。

「――欧州の完全環境都市で新たな内戦が――」

暗いニュースばかりで辟易する。

20年前、欧州で完全環境都市間戦争が勃発し、世界を震撼させた。民族対立の色が濃いこの戦争によって、推定700万人もの人々が死んだと聞く。

さらに都市機能を破壊された完全環境都市から1500万人を超える難民が溢れ、受け皿となった周囲の完全環境都市が「潜在的な危険分子」を孕んだことで治安が一気に悪化した。

結果として欧州の各完全環境都市は「戦争」から「内紛」へと移り変わったのだが、現地が混迷を極めていくにもかかわらず「より大きな戦争を回避した」と声明を出してしまう上層部には正直呆れてしまった。

「おっと、そろそろ行かないとな」

時計を見てニュースを閉じる。

そして新たに呼び出したのはゲームのタイトル画面。



体感型DMMORPG「ユグドラシル」。

その正体は、体内に注入したニューロン・ナノマシンと首に取り付けたコネクタを通して神経接続することで、仮想世界を現実のように体感できるゲームだ。

700もの豊富な種族、2000を超す職業、6000を超える魔法。武器防具、外見制作、拠点の拡張などなど、比類なき強力なカスタム要素が売りの長期ヒット作だ。

リリースは12年前。欧州と同様に内乱の危機を孕んでいた日本で、国家を再編した巨大複合企業がローマ帝国の警句を実現するために開発したゲームだ。

権力者の思惑によって誕生したもののゲーム自体に政治色は無く、度々炎上する運営にさえ目をつぶれば大衆受けはそこそこ良かった。

そして今日はユグドラシルのサービス最終日。

一世を風靡した人気タイトルだが、その長い歴史に幕を閉じようとしていた。

俺は所属ギルドが存在する「ヘルヘルム」にダイブする。

ログインまでの僅かな時間、首を右へ左へと回す。半ば癖になっているこの行為に特別な効果はない。ただ、肩の凝りと共に仮想酔いも軽くなる気がするのだ。

しばらく待つと視界があげ、一瞬の浮遊感を味わった後にホームポイントに降り立

つ。

ヘルハイムとニヴルハイムを繋ぐ「騒めく橋<sup>ギヤツルブル</sup>」と呼ばれる「橋の上の都市」、あるいは「橋状の都市」だ。実際の伝承はさておき、ユグドラシル<sup>ゲイム</sup>での扱いはモーズグズ地方の大都市であり、ふたつのワールドを繋ぐ他、珍しく人間種も滞在可能ということで露店市が盛んな街でもある。

余談だが、ユグドラシルで異形種と人間種が混在できる街は本当に珍しい。このゲームはMMOであるにもかかわらず、他種族に排他的なエリアが多いのだ。

本を正すとゲームルールの仕様に起因する過度な Player Kill<sup>プレイヤーキル</sup>が原因だ。

ユグドラシルではプレイヤー人につき1キャラクターしか作れない。2人目のキャラクターを持つことが許されていなかった。そのため、プレイヤーはひとつのキャラクターを試行錯誤しながら育てるしかない。もしも別のキャラクター、例えば「種族を途中で変えたい」場合、特定の条件を満たして転生する必要があった。

しかし、これがとても面倒で手間がかかるのだ。もちろん既存のキャラクターを削除して作り直す手段もある。ただその場合は、課金で解放した指輪などの「拡張スロット」も全てリセットされてしまうのだ。

これらの事情を踏まえたうえで、「異形種」はひとときわ不人気だった。異形種が特別

弱かった訳ではない。むしろその逆で、各能力値の成長率は人間種の3倍、レベルアップで得たポイントを種族特化で割り振って「最終種族」まで育て上げれば相当強力なキャラクターを作りだせるのだ。

しかし、ゲームバランスのために「メリットとデメリット」はセットとされていた。強力なキャラクターを作りだせる異形種もそのルールに則り、多くのペナルティを併せ持っていたのだ。

特定の職業に就けない、人間種の街に入れない、種族に応じた弱点、種族に応じた特定部位への装備不可などだ。

極めつけは人間種の幾つかの職業に「異形種プレイヤーを一定数討伐すること」が取得条件に設定されていた。この人間種による異形種狩りにはペナルティが発生しないこともあり、職業の取得とは関係なく経験値稼ぎのためだけに異形種狩りをする輩も現れ、ゲーム内で広く横行した。そのせいで「せっかくの仮想現実だし、変わった種族で遊んでみよう」などと安易な気持ちで異形種を選んでしまうと手痛い異形種デビューを飾る事になる。

最悪なのは都市内でもPKが可能なため、心休まる場所さえ無いことだ。

運営は「異形種はPKに遭うリスクが高い代わりに、能力を高く設定しているので問題は無い」としていたが、そもそも遊び始めて間もないプレイヤーが「殺され続けるゲ-

ム」に面白さを見いだせるはずがない。

人間種で再スタートするプレイヤーもいたが、一度ケチが付いたゲームに愛着が湧くはずも無く、多くのプレイヤーは低レベル帯を脱する前に心挫けて引退していったのだ。

その結果、ネットでは「人間種でキャラメイクするのが正解」とされ、サービス開始から1ヶ月経たずして人間種と異形種の比率が7対3を割り込んだのだ。

そしてこの圧倒的な種族比率を受けて、運営は慌てて救済処置として安全地帯を設定したのだ。件の「騒めく橋」のような他種族が混在し、尚且つPKができない場所がそれにあたる。

各ワールドに数か所、それは「騒めく橋」のようなワールド間の要所となる都市だけが対象だったが、多くの異形種プレイヤーにとって安心して歩けるホームグラウンドになったのだった。

「( )いつとも今日でお別れか……」

「ギヤツラルブル」  
「騒めく橋」

に降り立った俺は、コンソールを開いてアバターを確認する。

初めてユグドラシルにログインしたときは驚きの連続だった。戸惑うことも多かつ

だが、今ではこのアバターも「第二の身体」と言えるほどよく馴染んでいる。

服装は上から、シルクハットに鳥の嘴を思わせるマスク、身体にフィットしたレザーの真紅で染めている。ひと言で表すなら「赤いペスト医師」だろうか。

マスクを外せばギルドメンバーに「お任せ」で創ってもらった黒目黒髪でやや野性味のある青年の顔がある。

「騒めく橋」<sup>ギヤツラブル</sup>をホームグラウンドにしている身、当然その正体は異形種だ。この「人間の姿」<sup>スキル</sup>は、技能で擬態した商売用の外見にすぎない。

ここの連中は現金なもので、自ら醜い異形種をアバターに選んでいるにもかかわらず、容姿端麗な美男美女が売り子でないと売上げが伸びないのだ。

そんな俺の種族は粘体<sup>スライム</sup>の隠し種族、漂う<sup>デイズ・イン・グロブスタ</sup>聖なる肉塊。

青白い肉塊を核にした白く泡立つ粘体が本当の姿だ。その見た目から卑猥な蔑称で呼ばれることも多かったが、減少するプレイヤー人口に比例して悪質なプレイヤーとの遭遇も減ったので、今ではそれらも含めて笑える思い出だ。

カルマ値は100。「聖なる」などと付いてはいるものの、特別「善」に偏つてもいなければ信仰系魔法に高い耐性を持っているわけでもない。強いて長所を挙げるなら、レアボーナスの「上位生命力持続回復」が常時発動していることと、眷属召喚にいくつ

か特殊な召喚枠を持っていることだろうか。

職業構成は、メインに暗殺者アサシンと錬金術師アルケミストを、サブに付術士エンチャンターや魔術師ウィザードなどを少々取得している。

本来であれば先述の通り「種族特化」が望ましい異形種だが、生産系ギルドに所属していたことと、メンバーの脱退によって兼任作業が求められた結果の調整だ。

なお、対人戦闘のスタイルは「キヤッチ&ゴー」。俗に「拉致」や「キッドナップ」などと呼ばれるもので、敵の盾役や回復役を粘体スライムの身体に取り込み、デコイをばら撒きながら戦線を離脱、孤立させる役回りだ。

単純ながら味方への貢献度の高い嫌がらせ行為だが、相手が上級者ともなれば「行動阻害」や「転移阻害」は当たり前。そのため、装備品や暗殺者アサシンのパスブスキル、錬金術師のポーションなどを併用して、移動速度や行動阻害耐性を強化した自前の足頼みとなる。

視界の隅に浮かぶ時計を確認すると、間もなく日付が変わる。

事前にあつたアナウンスによれば0時にサービスが終了、強制ログアウトのはずだ。

「さて、最後の挨拶に行くか」

一歩踏み出すと自分を中心にノイズが波紋のように広がる。

波立つ世界に思わず舌打ちする。粗悪な端子のせいで不意に仮想現実を実感させられていけない。

「……やれやれだ」

気を取り直して向かう先は所属するギルド「異相協会」の移動式拠点。

異相協会はいわゆる中堅の生産系ギルドで、全盛期は小規模ながら砦めいた固定拠点も保有していたこともあった。

しかし、流行り廃りの荒波には逆らえず数年前から引退者が続出。ギルドメンバーが10人を切った頃には拠点の維持費を捻出するだけの接続頻度を保てなくなり、これから向かう移動式拠点の「幌馬車」に鞍替えしたのだった。

ユグドラシル後期に追加された移動式拠点は、もとは騎獣のインベントリを広げるための「拡張パック」だ。バージョンアップを繰り返すうちに規模が大きくなり、最終的には騎獣から完全に独立したギミックとして実装された。

馬車、船、飛行船の3タイプがあり、街の指定された停車場や港などに停めないと第三者から攻撃される恐れがあるものの、固定拠点と同様に課金アイテムで拡張が可能なことから少人数ギルドに愛用されていた。

また本来であれば「城」以下の拠点にはNPC製作レベルがないのだが、この移動式

拠点は300レベルものNPC製作レベルを持つていた。城のなかでも最弱の拠点で700レベル、その半分未満ではあるが、「お人形さん遊び」をしたいプレイヤーたちには大いに喜ばれていた。

運営の狙いとしては「ギルド拠点を大衆に晒す危険性」に対する言わば救済処置、「警備用NPCを作れ」ということなのだが、当の異相協会は生産ギルドの体裁を保つためにレベルの殆どをNPCの生産系職業クラスに割いていた。

ギルドメンバーが脱退するたびに穴埋めとしてNPCを再調整するといった具合で、ギルドマスターは気苦労が絶えなかつたはずだ。

そんな移動式拠点ではあるが、いくつかの欠点を持つていた。

目立つ大きな欠点としては、ホームポイント設定が不可であることが挙げられる。

ホームポイントとは、ゲームログイン時やゲーム内で死亡した際に、リスボン地点として設定できる場所のことだ。

移動式拠点が他のギルド拠点やダンジョンの出入口に横付けが可能なため、「ゾンビアタック対策」としてとられた処置だ。なのでギルド拠点到移動式拠点を登録しているギルドに所属すると、ゲーム内で死亡した際にはその場で蘇生されない限り「ホームポイント設定ができる街」でリスボンする羽目になる。

次いでギルドの最大登録人数にペナルティーを受ける点だ。ギルドであれば最大1



00人まで登録できるところを、わずか10人にまで減らされる。クランですら30人なので、その少なさが際立つだろう。これは「複数のプレイヤー情報を内包したギルド拠点<sup>乗物</sup>」を、ゲーム内で自由に移動させるだけのリソースを運営が確保できなかった結果だ。

これらの諸事情により移動式拠点そのものの戦闘利用は不向きで、所有者の多くは戦闘を行わない生産系ギルドや、俗に「エンジョイ勢」と呼ばれるプレイヤーたちだった。かくしてそんな移動式拠点の中から異相協会が選んだのは、4頭立てのアイアンホース・ゴレムが引く大型の幌馬車だ。荷台の外観は「魔女の家」を思わせるログハウスに変更していたため走る姿はなかなかメルヘンだが、実はこれでも地味な方で、中には電飾輝くデコトラや迷彩柄の装甲車などなど、プレイヤーの数だけバリエーションもある。

初めの頃こそフィールドを駆けまわりもしたが、防衛が困難になってからは「<sup>ギヤツルブル</sup>騒めく橋」の停車場に留め置かれ、今では「移動式拠点(固定)」という有り様だ。

停車場を見渡すと同じ境遇の移動拠点が雑多に停められている。まるでトレーラーハウスで集う1960年代のヒッピーだ。サービス最終日なのでいつも以上に活気、いや、悪ノリしている奴が多い。

普段であれば煩わしく思うほどの騒がしさも、最後を飾ると思えば不思議と許せてし

まう。

\* \* \*

動かぬ小屋となり果てた荷台後部の扉をノックし、返事を待たずに乗り込む。

後ろ手に扉を閉めると、外の喧騒が嘘のように静かになる。

初めて入る奴は大抵驚くが、荷台の「魔女の家」から受ける印象よりも内部は広い。これは居住空間の快適性を重んじた訳ではなく、単にユグドラシルの仕様上の都合、プレイヤー同士を過度に接触させないためだ。プレイヤーの座標や同期やらと、「大人の事情」が空間を歪ませているのだが、そこはユグドラシル、ゲーム故に「魔法の馬車」という便利な一言で片付けられていた。

間取りは3LDK。馬車後部から入ってすぐの空間は居間兼キッチンで、食料を生み出す「ダグザの大釜」を魔女の大鍋に見立て、壁の棚には様々な水薬<sup>ポーション</sup>、天井からは色とりどりの薬草が吊るし、それらをランタンの淡い光で演出している。

見渡すまでもなく、長椅子で寛ぐ3人の女性が目に入る。

そのうちの1人が俺を出迎えた。

「誰かと思えば、ヴィクトルじゃないか。……ログインしないままお別れかと思ってい

たわ」

彼女はいつもの調子で白々しく挨拶をする。

ギルドに所属しているのだからログイン通知を受けているはずだ。

真紅のローブを纏った長い黒髪の妖艶な美女。

異相協会五代目ギルド長、クラーナだ。

種族は蛇女種ラミアの最上位種族のひとつ、鬼子母神カリテイモ。

亜人属の蛇女種ラミアが鬼子母神カリテイモに進化することで、天使系の異形種に変わる珍しいビルドだ。

職業は魔力系と精神系に偏っていて、特殊なイベントで習得魔法数を拡張することでクラス秘術、妖術、禁術と手広く習得しているらしい。

お互い最初期からギルドに所属しているため、ゲーム越しとはいえ随分と長い付き合いになる。それもゲームの仕様上、ギルド長の代替わりの度にギルドそのものを再設立しなければならぬので、今日まで人間関係が拗れずに関係が続いただけでも我ながら驚きだ。

「挨拶ぐらいはしとこうと思ってな」

「そう。最後に会えて良かったわ」

サービス最終日にもかかわらず、クラーナはテーブルに様々なアイテムを広げてい

る。

「それは、買って来たのか？」

「そうよ。投げ売りされててね。この子たちの為につい買い込んでしまったわ。あ、もちろん個人資産からよ？」

クラリーナが「この子たち」と呼ぶ2人の女性はどちらも彼女が創ったN.P.C.、自動人形の「マーシヤ」と「ジル」だ。

外見は自動人形の中でも一番人間に近い“生体型”で、マーシヤは癖のある金髪を肩まで伸ばし、ジルは長い黒髪を後ろで結わえている。2人とも無料配布されていた同じ“二十歳前後の西洋人女性”の外装データを改造して使っているので髪型や髪色を除けばほぼ双子だ。

服装もほぼ同じで、頭に小さなテンガロンハットとホットパンツで一見すると脚線美を誇示したカウガールのようだが、上半身を堅革ハードレザーで固めてあるせいでどことなく世紀末の無法者を連想してしまう。

マーシヤは鍛冶師兼御者ブラックスミスで、ジルは料理人兼銃士コックガンナーだ。

今はプログラムに従って自動的にアイテム生産を繰り返すだけだが、馬車が走り回っていた頃はマーシヤが馬車を操り、ジルが屋根の見張り台に就いて、アクティブモンスターや敵対的なプレイヤーを迎撃していた。

クラリーナがコンソールを開く。

買ってきたアイテムを2人に装備させるのだろう。

マーシャには黒光りするガンブレイドならぬガンクラブが装備される。銃身は長さ40センチほどの正四角柱で、先端に小口径の穴が不気味に開いている。撃つてよし、殴つて良しの珍武器だろうか。

ジルには植物の意匠が表面に彫られた短銃パイルガン。材質は不明だが全体的に銀色で、小さな精霊数匹がスコープの周りを飛び回っている。

そして真紅に染められたお揃いのマント。表面には細かい六角形の升目模様が入っている。記憶が確かならば、機械系のイベントボスがドロップする装備で、回避率上昇効果と、装備すると呪文リストに第九位階魔法の「完全不可知化」パルフェクト・アンノウアブルが追加される代物だ。

超大型アップデート「ヴァルキュリアの失墜」で追加された自動人形オートマトンは、同時に追加されたこれら近代的な装備との相性が良い。クラリーナが買ってきた装備はまさに彼女たちのための物だった。

「この期に及んで装備に手を出すとはな。本命はそのマントか？ よく2個も買ったな」

「最終日だし、どれも捨て値よ。——つと、これでよし。銃はどっちもプレイヤーの手作り品。棍棒の名前は『第一種臨界不測兵器』。神器級ゴッスズで貫通特化だつて言つてたかな。

短杭銃バイルガンは伝説級で、森妖精エルフと山妖精ドワーフの銃工が協力して造ったって設定だったかしら。こっちは試作だから無銘らしいわ」

「このギミックは面白いな」

短杭銃バイルガンに纏わり付く精霊に手を伸ばすが、当たり前判定のないエフェクトなので触れることはできない。

「でしょ？ 連れて歩けたらもつとお洒落させても良かったんだけどね。——それよりも、アエラちゃん用の服を買ってきたからさ。連れてきてもらえるかしら？」

クラーナがアエラと呼ぶNPCは、俺が現実リアルで犬を飼いたかったというだけの理由で種族を人狼にされたNPCだ。職業クラス以外は好きにして良いと言われていたので普段は狼の姿で俺の部屋で待機させ、エンチャントが必要になった時だけ人の姿で呪文を唱えさせていたのだが——。

「狼に服は要らないだろ」

「エンチャントを手伝ってもらう度にデフォ下着で可哀想だったのよ！」

「ああ、分かった分かった。連れてくる」

下着といつても運営が用意した色気の無いタンクトップにスパッツだ。任意にこれらを脱がすことができない代わりに、例えば背中が大きく開いたようなデザインの防具を装備した際は非表示になる仕様だ。

クラリーナは同性としてお洒落させたかったのだろう。それならそうと言ってくれれば何かしら着せたのにおもわなくもないが今更である。

居間の奥、御者台へ続く狭い廊下へ向かう。

廊下は車体中央ではなく左側面、御者台に向かって右手に扉が三つ、突き当りに御者台へ続く扉がある。

廊下に並ぶ真ん中の扉。そこが俺の部屋だ。

内装は馬車の外観に合せた「ログハウス風」で、机と椅子、それに増設した収納棚しかない簡素な6畳ほどの部屋だ。

ちなみに、御者台に近い部屋がクラリーナの私室で、居間に近い部屋が課金の賜物とも言える「ハブ空間」だ。ハブ空間の中にはさらに複数の扉が並んでいて、工房や倉庫といった部屋へと繋がっている。

まさに「課金パワー金の力」で作られた「魔法の馬車」である。

自室に入り床へ目を向けると、カーペットの上に大きな赤毛の狼「アエラ」が横たわっている。

人狼が狼の姿になるにはスキルの発動と共に、それを維持する魔力コストを毎秒支払

わなければならぬ。アエラはそれを回避する常時発動型特殊技能を取得している。その分職業レベルを圧迫する事になってしまったが、ギルドが必要とする職業はきちんと取得していたのでクラーナからは許されていた。

その肝心の職業は、ギルドメンバーが脱退する度に再調整され、最後に信仰系のメンバーが抜けたのが決定打となり、回復系のスクロールやロッドの需要に應えるために信仰系に偏った職業に落ち着いたのだった。

「結局、聖職者つてことでもいいのかな？」

そう言いながら頭を撫でてやると、アエラは軽く頭を上げて尻尾を振る。

容姿、モーシヨン、AIは外注だ。依頼した先がいい仕事をしてくれたおかげで随分と癒されたものだ。

「アエラ、付いてこい」

設定された命令コマンドでアエラを追従させ、居間に戻る。

「来たわね。さあ、コレよ」

クラーナが差し出したのは、真紅に染められたナース服だった。

「邪道だ」



「邪道とは酷いわね。これでも伝説級よ。ほら、着させてあげて」

マスター権限を持つギルド長ならば自由に変更できる筈だが、どうやら俺のNPCと  
いうことで着せ替えを任せるつもりらしい。

「ちよつと待て。聖職者なんだから、そこは修道服とかじゃないのか？」

「気にしない気にしない。ナース服はもともと修道女がモデルなんだから。ほら、早く」  
「え、そうなの？」と思わず出そうになった疑問の声を飲み込み、ナース服を受け取る。

「色々物申したい気もするが。アエラ、変身解除」

アエラを人型に戻し、コンソールを開いて赤いナース服を装備させる。

丈が短いせいで下着よりは色気がある。

「ん、セクシーだけど、髪の毛も赤だからアクセントに欠けるわね」

「なら白にもど——」

「はい、黒ね」

クラーナは俺の主張をさえぎると、流石は生産系ギルドマスターと言うべきか、アイテムボックスから素早く合成素材「黒の染料」を取り出す。

ため息交じりに染料を受け取ると、コンソールを開いてナース服に適用させる。

「おお、ちよつとサディスティックでいい感じね」

「これはこれで有りか」

黒いナース服に赤髪がよく映えていて想像していたよりは良い。

改めて見ると確かに修道女を連想させる。

「アエラ、変身」

「えー、もう狼に戻しちゃうの？　せっかく買ってきたのに」

「狼がいいんだ。それに、どのみちもうすぐ終わるだろ？」

——終わる。

その一言でクラーナは素直に引き下がる。

「それにしても意外だったわ。最後に残ったのがヴィクトルとはね」

「そういうお前も、最後までギルド長を務めるとは思わなかったぜ？」

「私は、まあ、最後だから言うけど、身体が不自由でね。客を取る以外は暇なのよ」

さらりと告白されたが珍しい話でもない。義務教育が廃止されたこの時代、五体満足でない<sup>アー</sup>と完全環境都市<sup>コロジ</sup>でまともな職には就けない。障害を持つ女は親が裕福でない限り自分を売るほかないが、少なくとも買い手が居るかぎり完全環境都市<sup>アー</sup>内<sup>コロジ</sup>で生きて行く事ができる。

クラーナは続けて「新しいゲームを一から覚えるのも億劫でね」と笑う。

「ヴィクトルは？　他のゲームに移らなかつた理由。なにかあるの？」

「他に選択肢が無かった。それだけだ」

「へえ、そこまでユグドラシルに愛着を持っているとは思わなかったわ」

「いや、違う。バージョンアップできないんだ」

そう言いながら俺は自分の頭を人差し指でコンコンと指す。

「不認可の病院で手術したせいで状態が悪くてな。まあ、つまりそういうことだ」

「それは。ごめんなさい、言葉が無いわ」

「気にするな。既に受け入れている」

コネクタは多くの社会問題を引き起こしているため、説明にもなっていない台詞でも伝わったようだ。医療技術が発達したとはいえ、首の後ろに設置するコネクタ周りの事故は昔から後を絶たない。接続不良による記憶障害、ニューロン・ナノマシンがバグを起こして全身麻痺に陥ったり、膨大なデータが流入して発狂したりなんて話はよく聞くものだ。

都市伝説じみた「ハッキングされて他人と精神が入れ替わってしまった」なんて話は別として、命に関わる事故が多いので笑い話にはできない。

「病院へは？」

「金が無い」

腐りきったこの世界で生きるのに必要な物が二つある。ひとつは人工心臓で、もうひ

とつがネットへ接続するためのコネクタだ。

前者は文字通り生存に関わり、後者は経済的な活動に必須だ。

俺が最初に受けた手術は人工心臓。

命が掛かっているのだから当然と言えば当然で、信用のある病院で手術を受けた。

しかし、高額な手術費に財産を失った。

それからしばらく経ってからコネクタが開発された。

最初期は大変高価で手が出せず、軍事や産業の発展によつて安価になったと言われる今でもまだまだ高い。

そして、いつの頃からか選民思想を持つ企業がコネクタの普及を目論み、雇用条件に定め始めた。日本を牛耳る巨大複合企業に逆らえるはずがない。コネクタが無ければ仕事を得られなくなるだけでなく、完全環境都市アーコロジの最下層からも締め出されかねない状況になったのだ。

コネクタの手術費の9割を企業が負担するという見え透いたキャンペーンに乗っかり「市民」になったが、術後のバージョンアップは自腹。2度3度とバージョンアップを繰り返すうちに資金が尽き、ついには安く済ませようと不認可の病院で手術をしてしまったのだ。

人工心臓のローンと、年々上昇する物価で貯蓄できない者にとつて、正規の病院へか

かる選択肢は無かったのだ。

しかし、仕方が無かったとはいえ、今はその手術が爆弾になってしまった。今では金があつたとしても無事に交換できる保障もない。

直ぐにどうこうなる訳では無いが、コネクタの劣化が激しく、また型落ちしてしまつている為に変換器を噛まして騙しだまし接続しているのだが、このまま放置すれば遠くない未来、俺はこのネット社会から隔絶されるだろう。

「バージョンアップできない」とはそういう事なのだ。

「まあ、そんな訳でな。接続できるうちに挨拶できて良かった」

「やめてよ、今生の別れみたいな言い方」

「そろそろだな」

「え？」

視界の隅に映る時計を確認すると、サービス終了まであと僅か。

湿っぽい話は苦手だ。このまま終わるのもいい。

「ね、ねえ。このままお別れなんて言わないわよね？　メアドに連絡先送るから、一度くらい会わない？　打ち上げてことでさ。確か、同じ旧米帝区よね？」

正直面倒臭い話だが、声からはクラナーの真剣さが伝わってくる。

ユグドラシルのアバターには表情が無いため、声の調子から相手の機嫌を探るのが上

手くなった気がするの、は気のせいだろうか。

しばし思案した後、了承する。

「別に構わないが、外の人間だぞ？ 信用できるのか？」

「お気遣いなく、そんなの気にしてたら客なんて取れないわよ」

ありがたい言葉だ。社交の類は苦手だが、最後までくらはこのギルドマスターに付き合うのも悪くはないかもしれない。

「分かった。第五までは昇れるからその辺で頼む。というか、お前の方こそ出てこれるのか？」

「なんとかするわ。それよりもほら、連絡先送っておいたから確認して」

視界内にメールの通知がポップアップする。

「確かに受け取った」

「日程はそちらに合わせるわ」

「ああ」

時計を確認する。サービス終了まで既に一分を切り、秒読みを開始している。

ここに至り互いに話す事はなく、ただ共に物思いに耽るだけだ。

終了間際、タイミングを計ったかのようにクラーナが口を開く。

「最後までありがとう」

「お前もな。お疲れ様」

「また会いましょう」

0時になり、目を閉じる。

ログアウトを待ちながら、今後の予定を考える。

まずはクラリーナのメールを確認だろうか。

「あれ？」

クラリーナの声につられて目を覚ますと、先ほどと変わらず馬車の中にいる。

「サーバーダウンが延期になったのかしら」

単純に考えればその通りだ。

GMから不具合の通知がないかコンソールを開こうとして――。

「開かない？」

「え？ あ、本当だ」

クラリーナも空中に手をかざし、コンソールを呼び出すモーションのまま止まってる。  
俺は続けて、コンソールを介在しないGMコール、強制終了を試すが、どちらも不発

に終わる。

これは明らかに異常事態だ。

「クラーナ、GMコールと強制終了を試してくれ。俺はできなかった」

「どれもダメね」

置かれた状況を整理しようと互いに見つめ合う。

そして、強烈な違和感に襲われる。

ユグドラシルはこんなにも鮮やかだったのだろうか。

こんなにも解像度が高かったのだろうか。

一瞬、クラーナの長い黒髪が流れたように見え、眉を顰める。

「クラーナ、お前——」

「クラーナ様、ヴィクトル様、今までご寵愛くださり、ありがとうございます」

突然の涙声。

その「第三者の声」に驚き、俺たちは側にいるNPCを凝視する。

「今、貴女が喋ったの？」

クラーナが平静を装いながらNPCのマーシャに語りかける。

NPCは会話を交わせるほど高度なAIを組まれてはいない。平時であればなんとも滑稽な姿だ。しかし——。



マーシヤは椅子から立ち上がり、クラーナから数歩距離をとると床に片膝を付く。「許可なく発言したことをお許しください。世界が終わるとお聞きし、せめて最後に、感謝の気持ちをお伝えしたく思いました」

間違ひなくマーシヤが喋っている。

続いてジルもマーシヤの隣で片膝を付く。彼女も口には出さないが、マーシヤと同じく意思を持った目をしていた。

「気持ちは受け取ったわ。2人ともそのまま待機していなさい」  
『はー!』

不意に俺の足元から小さく「グルルル」と獣の唸る声が聞こえた。

「アエラ?」

「ガウ!」

アエラに呼びかけると今までにない躍動感で飛び起きる。

頭を撫でると、グローブ越しにも柔らかい毛を感じることができた。さらに良く観察すれば、毛の一本一本がきちんと存在しているのが分かる。

そして、アエラがお返しとばかりに舐めたグローブが、しつとりと湿ったのも確認できた。

在り得ないことだ。いくら体感型ゲームとはいえ、これほど緻密に再現するのは難し

いはず。

なによりも、俺の端末が許容できるデータ量ではない。

いや、出来ないというのは俺の思い込みで、実際にはユグドラシルがアップデートされた可能性もある。

しかし、サービス最終日に何のアナウンスも無くしでかすだろうか。

「アエラ、お前も指示があるまでマーシャたちの側にいろ」

「ガウー！」

一吠えすると、コマンドには無い単語に従う。

「クラーナ、俺は聞き込みをしてくる」

サービス最終日でもそれなりの人数が接続していたので、この異常事態に自分たちだけが陥っているとは思えない。コンソールは使えないものの会話自体は問題なく行えた。他のプレイヤーともきつと可能だろう。

彼らと協力できれば進展があるかもしれない。

「ちよ、ちよつと待つ——、きや!?!」

『クラーナ様!』

俺を追いかけようと立ち上がったクラーナが、その勢いのまま盛大にすつ転ぶ。

転倒した主に駆け寄ろうとマーシャとジルの2人が即座に反応するが、当のクラーナ

に手で制され踏みとどまる。

「待機と言ったはずよ」

『はっ！』

思わぬ拒絶の姿勢に愕然とする2人だが、唇を噛み、悲壮な表情で再び跪く。

その表情や咄嗟の行動に疑問を覚える。ユグドラシルのNPCに“忠誠心”というステータスは無い。にもかかわらず、彼女らを見る限り本心からクラリーナを気遣い、命じられた待機に耐え忍んでいるように見える。

「痛った。まったく、冗談じゃないわよ」

「大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ」

クラリーナに手を差し伸べると、思いのほか強く腕を引っ張られる。

言葉とは裏腹にその表情は強張っていて、とてもアバターとは思えない。

やはり、表情がある。

そして、彼女の次の言葉で察する。

「どうしよう、歩けないわ。これじゃ現実リアルと同じよ」

「さっき言っていた“不自由”ってのは、脚か？」

「左足がちよつとね。杖があれば生活に支障はないんだけど。でも、ゲームの中でこん

な気持ちになるなんて、最悪だわ」

小さな不具合なら笑い話にでもできるが、流石にこれは度を越している。運営にクレームを入れようにも、連絡手段が無い現状では手詰まりだ。

「すまないが、さっき言った通り俺は聞き込みをしてくる。待っていてくれ」

「分かったわ。でも、なるべく早く戻って」

「すぐ戻る」

踵を返し馬車後部の扉を開け放つと、ギョッラルフルの騒めく橋の停車場——、ではなかった。

「!? な、なんだ!?!」

ヘルヘイムは常闇と冷気の世界。

しかし、眼前に広がるのは満天の星と見渡す限りの草原。それもヘルヘイムならではの「凍てついた草原」ではなく、ごく普通の草原、フィールドダメージとは無縁の大自然だ。

「プレイヤーの攻撃か?! いつからだ? いつ、転移させられた!?!」

「ど、どうしたの?」

クラリーナの声に振り向きながら、後ろ手に扉を閉める。マーシャがクラリーナを助け起こして、椅子に座り直させているところだった。

「ねえ、外に誰かいたの?」

声には不安が現れているが、先ほどよりは表情に落ち着きがある。

「いや、違う。説明するからちよつと待ってくれ」

俺は状況が飲み込めず言い淀む。

しかし、素直に伝える以外にない。

「思っていたよりも状況が悪いかもしれない。まず、外が普通の草原だった。俺たちは馬車ごと別のワールドに転移している可能性がある」

「ヘルヘイムじゃないって、——確かなの？」

クラリーナは信じられないといった表情だが、俺だつて信じられない。

「10年以上過ごしたワールドだぞ。ヘルヘイムに『まともな草原』が無いことはお前も知っているだろ」

長年、共にヘルヘイムで異形種プレイヤーを相手に商売をしてきたのだ。今更住み慣れたワールドを見間違ふはずがない。クラリーナも俺の言葉に納得してくれたようだ。

「でも、都市内からワールド間を強制転移だなんて、聞いたことが無いわ」

「起こったのは事実だ。コンソールが開かないからどのワールドかは分からんが、人間種が多いワールドだとしたら厄介だぞ」

「うーん、世界級アイテムでも使われたのかしら」

「それはない、と思う。俺らにも世界級アイテムがある。干渉するはずだ」

世界級<sup>ワールド</sup>アイテム。それはユグドラシルにおいて比類なき力を有する破格のアイテムの事だ。高いカスタム要素を売りにするユグドラシル内でも僅か200種しか存在せず、その効果は世界をも破壊しうる——とは言い過ぎだが、運営に掛け合いゲームバランスを変えてしまえる物まであるのだから、あながち大袈裟という訳でもない。

そんな強力無比な世界級<sup>ワールド</sup>アイテム故にだろうか、世界級<sup>ワールド</sup>アイテムを所持する者同士は、互いにその効果を受けない。

そして、この異相協会は世界級<sup>ワールド</sup>アイテムを4個所有している。3つは歴代のギルド長が受け継いできた物で、内ひとつは俺の身体に埋め込まれている。

仮に世界級<sup>ワールド</sup>アイテムによる転移だとしても、俺たちには効かないはずだ。

「だとすると、サービス終了のタイミングでバグったのかしら?」

「かもしれないが、まずは馬車を人目に付かない場所へ移動させないか? この状況下でサービス継続気分の奴に襲われるのは面白くない」

「それもそうね。でも、コンソール開かないんでしょ? 行先指定できないわよ?」

失念していた。馬車にはふたつの操縦方法がある。ひとつはコンソールから行先を指定する“自動運転”。もうひとつはプレイヤーが操縦する“マニュアル運転”だ。

コンソールが開けないので自ずとマニュアル運転になるが、今は考えなければならぬ。いことが多く、マルチタスクに陥ることは極力避けたい。

それに、未知のエリアで当てもなく彷徨うのは不安が大きい。どうするべきか迷っているとマーシヤが身を乗り出す。

「差し支えなければ、このマーシヤにお任せください」  
喋るNPCにまだ慣れない。

少し考え、彼女の御者設定に賭けることにする。

「マーシヤ、頼めるか？」

「ご命令頂ければ、いつでも」

「よし。——アエラ、人の姿になれ」

アエラは人間の姿に戻るとマーシヤたちと同じように跪く。

「御身の前に」

確信は持てないがNPCたちの眼差しは真剣。

今は信じるしかないだろう。

俺はクラーナへ向き直る。

「クラーナ、彼女たちに任せよう。俺から指示を出すのが構わないか？」

「え？ ええ、いいけど。私はこんなだし、わざわざ聞かなくてもいいわよ」

「異相協会は組織で、お前はその長だ。こんな時だからこそ規律は必要だ」

「案外お堅いのね。——分かったわ。じゃあヴィクトル、指揮を任せるわ」

「了解した」

クラリーナの言葉に頷きで返し、NPCたちに指示をだす。

「マーシヤは俺と御者台へ。運転は任せる。ジルは<sup>ハイフェクト・アンノウアブル</sup>〈完全不可知化〉を使ってから銃座に就け。上から馬車を隠せそうな林か森が見えたら教えてくれ」

『畏まりました』

「アエラ、お前はクラリーナを部屋に運んで脚の回復に努めろ」

「仰せのままに」

「……良し。行動開始だ」



## 第2話：戦闘とクレマンティーン

星空の下、手綱をマーシヤに任せ、あてどなく馬車を走らせる。

流れる景色と記憶の中のワールドマップを照らし合わせても、該当するものがない。10年以上遊んだゲーム、何度となく各ワールドに遠征したのにも関わらずだ。

しばらく経ち、屋根に就いたジルから報告が入る。

「ヴィクトル様、方位2時に明かり、11時に森と思われる影を発見しました」

「それぞれの距離は？」

「明かりまでは2キロ、森は4キロほどです」

優先すべきことは馬車を隠すこと。

明かりは後回しだ。

「森に向かう。マーシヤ、進路を11時に」

「はい。進路を11時に取ります」

ジルの案内で辿りついたのは、馬車を隠すのに適した森だった。木々や藪は乱雑に生

い茂り、人の手が入った様子はない。馬車を50メートルほど奥まった場所に停め、マーシヤとジルがかき分けた轍を隠蔽する。

その様子を興味深く観察する。なぜなら、馬車に紐付けられていたNPCが、馬車から降りることができたからだ。

隠蔽し終えたのを見計らい、次の指示をだす。

「お前たちはこのまま馬車の護衛だ。俺はさつき見えた明かりを調べに行く」

「お一人では危険です！ 私共かアエラを同行してください！」

マーシヤが慌てたように声を上げる。

しかし、連れて行く訳にはいかない。彼女たちは馬車の付属品として、迎撃用のAIを搭載しているが、馬車を離れてもそれらが機能するのかが分からないからだ。もしかしたら傭兵NPCのように立ち回れるかもしれないが、今は大人しく留守番をさせるのが無難だろう。

「お前たちには馬車の護衛を命ずる。分かったな？」

「……畏まりました」

俺の有無を言わさぬ物言いに、2人は不承不承引き下がる。

「そう不安がるな。ただの偵察だ」

念を押すと2人は渋々ながら頷いた。

\* \* \*

俺はマーシヤたちをその場に残し、謎の明かりを目指す。

向かう先に人間種がいることを想定して、外見は人間の姿を保っている。変身中は能力値が低下してしまうが、粘体の姿を見咎められて問答無用で襲われるよりはマシだろう。

少し走ると都市にたどり着く。十分な距離を保ちながら正門と思われる大きな門を観察すると、遠目にも門番が「人型」だと分かる。恐らくは人間種の街なのだろう。

異形種の性か、無意識に正門を避けて外周をぐるりと巡り、人気のない入口を探す。

ここまでの道中で、新たな発見があった。

本来、背中に感じるはずの「背もたれ」の感触が無くなっていた。いくら体感型ゲームとはいえ、感覚の全てをゲーム側に奪われるのは異常だ。地震や火災に対応できるだけの現実世界の感覚は残すよう法的にも定められているのだ。

それが今、仮想現実の「仮初の身体」に現実味を持って実体感を覚えてしまっている。

さらに言及すると、この「人間の姿」が本当の意味で「擬態」であることも自覚した。この身体には「骨」がない。

幸いにも特殊技能が機能しているので、意識しなくても容姿を保つことができている。逆に意識さえすれば手足を伸び縮みさせることができたのだ。

それもユグドラシルの仕様よりも自由が利く。

ユグドラシルでは異形種の多くが爪や牙、角や尻尾などの部位で攻撃することができた。粘体であれば触手を鞭のように振るえ、特殊技能を取得すれば触手に毒を纏わせたり、先端を刃物のように鋭く固くすることもできる。

ただし、繰り出されるモーシヨンはプログラムによって補正されており、「腕を振る感覚で」簡単に触手を操れた訳だが、その反面、見た目の挙動は概ね固定されていて個性のない動きだった。

プレイヤーが介在できるのは力の強弱とタイミングだけ。人間に備わっていない触手や翼などを動かそうと言うのだから当然の制限だ。

それが今、自分のイメージ通りに触手を伸ばし、変形させることができるのだ。

身体の調子を確かめながら都市の外壁を巡る。

「静か過ぎるな」

サービス最終日とは思えない静けさだった。騒めく橋ギヤツルツルのように花火もなければ、普段なら無駄撃ちできない経験値消費型の大技も飛び交っていない。街は寝静まったかのように静寂に包まれている。

いや、夜なのだからこれが正しい「夜の街」なのかもしれないが、しかし、これでは他のプレイヤーとの接触が難しいのではと不安になる。

「定番は酒場で情報収集なんだが……」

外壁に触れるが「警告メッセージ」がない。

仮にこの街が人間種の街であれば、警告の後に衛兵NPCによる通報判定が行われ、一歩でも侵入すると街に居る人間種プレイヤーへ強制的にアウンスされる理不尽な仕様があるはずだ。

それらが無いということは「中立エリア」なのかもしれない。  
「悩んでいても仕方がないな」

外壁を難なく登攀し、街を見渡す。

街並みは西洋風。何重もの防壁と張り出した側防塔が、この街が軍事的な要所であることを示している。

今いる場所は大通りから外れているためか、街灯は少なく薄暗い。周囲は住宅地とい

うよりは倉庫街、同じ規格の建物が延々と続いている。

意を決して街の中へ飛び降りる。

「……入れた。中立エリアか？」

無事に侵入できたことに安堵したのも束の間、不意に話しかけられる。

「おやおやく。こんなところからのご入場とは怪しいねえ」

若い女の声に視線を向けると、建物の影からロープで顔を隠した女が現れる。

己の迂闊さに舌打ちする。警告も無く侵入できたことで気が緩んでいた。不法侵入の現場を目撃されるとは余りにもお粗末だ。

ただ、この女は衛兵NPCのように騒ぎ立てる様子がないので、プレイヤーか運営のどちらか定かではないものの、いわゆる「肉入り」で間違い無いだろう。貴重な情報源だと思えば不幸中の幸いだ。

女はロープで隠していた顔を晒す。

第一印象は犬より猫。肩口で切り揃えられた金髪に、整った顔立ちは如何にも男好き

そうだ。

そして、例の如くこの女にも表情がある。

まずは取り繕いつつ、情報が得られないか探りを入れる。

「ああ、説得力は無いかもしれないが、怪しい者ではない。この街の者と情報交換がしたくてね」

「あはは、ほんと説得力なさすぎだよ。お話したいならさ、その怪しい仮面くらい取つたら？」

その言葉に久しく感じなかった新鮮味を覚える。

わざわざアバターを確認したがる奴も珍しい。幾らでも顔を変えられる仮想現実<sup>ム</sup>で、素顔を見せる行為が「誠意」を表す意味合いは極めて薄いからだ。

拒否してもよかったが、もしかしたらそういうロールプレイなのかもしれない。

ここは心証を良くするために彼女に倣って素顔を晒す。

マスクを外すと粘体種特有の視界に切り替わる。

粘体<sup>スライム</sup>は人間とは異なる視覚を持つ。暗視、全周囲の視覚、動く物体の強調表示などのメリツトと、青黒い色相視覚、100メートルまでの視界、動かない物体の遠近感の喪失などのデメリツトを持つ。

余分な視覚情報を削ぎ落すことで情報処理を軽減できるため、適合者は格闘や不意打ちにめつぼう強くなる。その反面、癖のあるパノラマ視界は人を選び、100メートル先までしか見通せない視界はとかく嫌われていた。なので多くの粘体<sup>スライム</sup>プレイヤーは見

難しい視覚を嫌い、人間種と同じ視覚を得るアイテムを常備していたものだ。

実際問題、上級者による超長距離射撃が可能なので、常に防御に徹してくれる仲間がないと運用には覚悟のいる種族特性だと言える。かく言う俺も、今外したペストマスクに視覚変更のデータクリスタルを組み込んでいたのだが、こうして青黒く歪んだ視界を目の当たりにして早くも気が滅入ってきている。

既に接近している相手であれば、<sup>スライム</sup>粘体の視覚でも不安を覚えることはない。——そう思っていたが、マスクを外した際、<sup>リアル</sup>現実の習慣で深呼吸をした瞬間、ゾワリと鳥肌が立つような感覚に襲われ、ヤバいと直感する。

自室のカビ臭さを感じなかったからではない。  
血の匂いだ。

一瞬、<sup>リアル</sup>現実の身体に何か異変が起こったのではと錯覚するが、どうやら血の匂いは少し離れたところから漂ってきているようだった。

しかし、動かない何かから漂っているとすれば<sup>今</sup>スライムに<sup>俺</sup>それを視認することは難しい。  
い。

緊張が高まるなか、目の前の女に不審がられないように「眼鏡」を装備する。



ペストマスクと同じように人間の視覚を得ることが出来るアイテムで、視覚に加えて鑑定や翻訳などの効果を幾つか付与した「買い出し用」の眼鏡だ。

改めて匂いの元を目で追うと、茂みの中に隠しきれていない死体を発見する。濃厚な血の匂いから察すると死体は一つではないだろう。

しかし、問題は血の匂いそのものではなく、電脳法で禁止されている「嗅覚の再現」だ。

マスクをしていて気づかなかつたが、もしかすると馬車の中もハーブの香りで満たされていたのかもしれない。

「へえ、意外といい男だねえ。その淀んだ目とか、割と好みだよ。あ、私はクレマンティーヌ。よろしくね♪」

「俺はヴィクトルだ。で、聞きたいんだが、ここは何というワールドだ？ コンソールが開かなくて困ってるんだ。お前はどうか？」

死体のことには触れず、クレマンティーヌと名乗った女の様子を窺う。

「は？ 世界？ 制御卓？ ……ここが何処かって意味なら、リ・エステイゼ王国の城塞都市エ・ランテルだよ？ 何々？ 迷子かな？」

リ・エステイゼもエ・ランテルも聞いた事がない。

クレマンティーヌが嘘を吐いているのでなければ未知のエリアという事になる。

「あはは、その反応からするとほんとうに迷子なのかな？ でも安心しなよ。迷う必要がなくなるように手伝ってあげるからさ。気付いてるんでしょ？ こ・れ♪」

クレマンティーヌが抜き放ったステイレットで死体を指し示す。

「ああ」

ここで生まれる新たな疑問。

クレマンティーヌに殺されであろう者たちの正体。

それが、気になる。

死体がNPCであるなら演出かもしれない。だが、もしもプレイヤーの死体であったならリスポーンしていない事に違和感を覚える。

リスポーンが制限されているのか、そもそもリスポーンが存在しないか。

危険だ。既知のユグドラシルとは明らかに違う。一度死んで確かめてみようなどと到底思えない程に異質だ。

「という訳でー、死んで欲しいんだけど。いいかな？」

「待て。俺はこの街の人間じゃない。このまま後腐れなくさよならってのはどうだ？」

「んー、残念だけど、それは無理♪ やっぱ目撃者は消しとかなきゃじゃん？ この街の人間じゃないなら追っ手も付きにくいかもだし……。そうだっ！ 殺し合いは止めて、勝った方が負けた方を好きにして良いってのはどうかな。死んだ方がマシっていうく

らい愛してあげるよ？」

クレマンティーヌがマントを脱ぎ棄て、引き締まった若々しい肉体を晒す。はつきりと板金だと分かる個所は胸当て、肩当て、籠手、腰当てだけ。それらを繋ぐ革紐を除けば残りはリネンを重ねた下着のような格好だ。

ビキニアーマーほど卑猥ではないものの、目のやり場に困るほど防御面が少ない。

彼女がゆつくりとステイレットを構え、対峙する。

結局戦うんじゃないかと悪態をつきたくなる。

擬態を解きたいが街中で正体を晒すのはリスクが高い。

とはいえ、武器を向けられて無防備でいるわけにもいかない。こちらもダガーを抜いて正眼に構える。

「お？ このカラダを見てやる気になっちゃったかな？」

ケラケラと笑うクレマンティーヌを無視する。

正直な気持ち、この異常な世界で戦闘はしたくない。ここに来るまでに常時発動型特殊技術ハッパンスキルが働いているのは確認したし、不思議と自分に出来る事と出来ない事も分かるが、このアバターのビルドは器用貧乏で戦闘向きではないからだ。

レベル差が不明なのが怖い。粘体スライムは物理攻撃に高い耐性を持つので、見るからに剣士スタイルのクレマンティーヌとはそこまで相性が悪くない筈だが、不安は大きい。

戦うか、逃げるか。

迷っているとクレマンティーヌに先制される。

「んじやくいつきますよ〜」

宣言と同時にクレマンティーヌがノーモーションで突っ込んできた。

「くっ!?!」

虚を突かれたが問題無く見える速さだ。

粘体スライムの動体視力に頼らずとも知覚できたことに安堵する。

しかし、安堵したのも束の間、ステイレットの突きをダガーの峰で弾こうとすると、直進していたクレマンティーヌの満面の笑顔が不意に横へ流れる。

そして、ステイレットが在りえない速度で軌道を変えると、真つすぐ心臓を目掛けて滑り込んできた。

「な!?!」

ガギン、と鈍い音が響く。

「かったいなー……。ただのレーザーアーマーじゃないでしょ、それ」

望み通り貫けなかった事にクレマンティーヌが悪態をつく。手にしたステイレットを肩にのせて余裕の態度だが、その睨みつける視線は鋭い。

刺突を受けた箇所を確認すると無傷、欠片も抉れていない。

防具の性能に助けられた形だが、これでクレマンティーヌのステイレットが、眼鏡で得た情報通り、レアリティの低い金属だと確信する。『鑑定』は正常に働いている。

「これでも希少な龍皮を使っているんでね。魔法も幾つか付与してある」

「へえ。じゃあ、私が貰っちゃおうかな♪」

「傷すら付けられないくせに、勝つ気でいるのか?」

「言ってくれるねえ。まあ、いいか。じゃあ、次は……」

クレマンティーヌが地面に接するほどの異様な前傾姿勢を取る。四肢がしなり、全身のバネに力が蓄えられたのが分かる。クラウチングスタートで突っ込んでくるつもりだ。

そして「なるほどな」と納得する。露出の高さが目立つ装備だが、この姿勢で対峙すると板金で覆われた箇所が前面に集中する。つまり、これこそが彼女本来のスタイル。一般的な軽戦士よりさらに尖った高速戦闘タイプだ。

気を引き締める。警戒すべきはスキルと思われる慣性を無視した急激な動きの変化。あれに対応出来ない<sup>と</sup>再び打ち込まれる恐れがある。

素早い敵はまず「足<sup>部位</sup>を潰<sup>破壊</sup>す」、だったか。

俺が構えた瞬間、クレマンティーヌが凄まじい加速力をもって突っ込んでくる。

だが、問題なく目で追える。

やはり反応出来ない速さではない。

この女は基礎能力値が低い。

地面スレスレの位置から繰りだされるステイレットは明らかに顔を狙っている。素直といえば素直な攻撃だが、一撃目の不可解なスキルがあるので油断はできない。

サイドステップでステイレットを躱し、突っ込んできたクレマンティーンの真横に付く。そして部位破壊を狙うべく体重の乗った軸足へ蹴りを叩き込む——が、まるで堅固な城壁にでも阻まれたかのように弾かれ、逆に体勢を大きく崩される。

「クッ?! ーこれもスキルか!」

俺の隙を逃すまいとクレマンティーンの追撃が迫る。

ダガーで迎え撃つが、ステイレットは再び不自然な軌道を描く。そしてダガーを持つ右手、グローブとレザラーアーマーの僅かな隙間をステイレットが貫いた。

そして、その状況に激しく動揺する。

ダメージを受けた感覚はない。物理無効が正常に働いていることを実感するが、問題はそこではない。俺が動揺したのは、グローブとレザラーアーマーの間を縫って粘体スライムの本体を直接貫かれたことだ。

ユグドラシルでは、各装備が持つ防御値の合計値が「防御力」としてステータス欄に表示されていた。基本的にどの部位に攻撃が当たってもこの防御力と能力値からダ

メージが算出される。

つまり、長年ユグドラシルをプレイしてきたことで、例え鎧の隙間からアバターの「素肌」を突かれたとしても、初撃と同じ、無傷で済むと思いついでいたのだ。

しかし結果はご覧の通り、ステイレットは手首を貫いている。この状態で万が一にも筋力値で負けていれば、武器（#）を持つ手（#）を封じられたことになる。

これはクレマンティヌを評価せざるを得ない。

感心していると、クレマンティヌはせっかく刺したステイレットを手放し、再度その場で身体を翻させる。

まだ彼女の攻撃は続いていた。

いつの間にか逆手に新たなステイレット。

眼前に迫った満面の笑みが大きく歪む。

避けられない。

「死ねえっ!!」

「ぐ、お、っ!!?」

殺意の乗ったステイレットで左のこめかみを貫かれる。擬態とはいえ頭部は人間にとつて重要器官。異物に対し本能的な忌避感を覚える。

「まだまだあ!!」

喜々としたクレマンティーヌの声に続き、ステイレットに込められた魔法が解き放たれる。

発動したのは稲妻。種族特性として脆弱性を持ったため、全身を切り裂く衝撃に硬直してしまふ。

そこを3本目のステイレットが右のこめかみに突き立てられ、またもや魔法が発動する。

「燃えちまえっ!」

今度は炎が頭の中で暴れ回る。

雷と炎、執拗に流し込まれた魔法で頭が燻る。

立て続けに弱点属性を食らった訳だが、へ上位魔法軽減3のおかげで体力の減りは微々たるもので済んでいる。当のクレマンティーヌは俺の死を確信したのか、殺人の余韻を楽しむかのようにステイレットをグリグリと捻っている。悪趣味な女だ。

俺はそんなクレマンティーヌの片手をおもむろに掴み、手首にステイレットが刺さったままの右手のダガーで一閃する。

「——え?」

クレマンティーヌが籠カクレット手ごと切断された己の左手首を凝視する。その表情は驚愕よりやや気の抜けた茫然としたもの。何が起こったのか理解できないでいる顔だ。



「今のがダメージを負う感覚、か」

魔法が込められていたことは戦闘中に鑑定済みだ。

攻撃を喰らうつもりは微塵も無かったが、クレマンティーヌの戦闘センスにしてやられた。

「馬鹿な！　なんで死なない!?!」

クレマンティーヌが右手のステイレットをこめかみから引き抜こうとするが許さない。逆に強い力で押さえ込んで頭の中に引つ張り込むと、ようやく状況を把握したクレマンティーヌが叫ぶ。

「人外か!」

「ゴ明察」

俺は革手袋を解除し、逃れようとする彼女を素早く抱き寄せる。

「くそっ!　放せ、変態!!」

クレマンティーヌが渾身の力で振りほどこうとするが、格下の軽戦士然とした彼女では抗えない。

「取りあえず、その装備を破壊する」

「つ!?!　あああああああああ!　ああああつ!!　はつ、はなせえええつ!!」

両手から強力な酸を分泌する。スライムおはこ粘体種十八番の〈装備破壊〉だが、クレマンティーヌ

が激しく暴れるせいで留め具だけ溶かすつもりが素肌をも巻き込んでしまう。

俺の酸はその筋の粘体スライムと比べるとお遊び程度だが、それでも時間さえかければ伝説級レジェンドも破壊できるもの。肌に着着すれば当然ただでは済まない。

一通り破壊してほぼ全裸となったクレマンティーヌを突き飛ばすと、驚くことに爛れ続ける肉を庇いながらも背を向けて走りだす——が、数歩も進まぬうちに地面に倒れてジタバタともがく。

「ちくしょう!! 切ったな!!? 糞つたれ!!!」

己の身に何が起こったのか悟ったクレマンティーヌが、俺を大声で罵倒する。

何のことはない。俺は逃げだそうと背を向けたクレマンティーヌの「両足首の腱」を、伸ばした腕を鞭のように振るって切断したのだ。

「裸にすれば羞恥心で動けなくなるかと思っただが、そんな玉じゃなかったようだな。……お前は強かった。俺は逃げ回るのが専門でね。正直、翻弄されたよ」

地面に転がるクレマンティーヌを仰向けになるよう蹴とばし、その無防備に晒された腹へ馬乗りになる。

手足の武器を残しているものの、ほぼ全裸の女に跨る。

その行為に対し運営からの警告を待つが連絡はこない。運営が見ていないのか、それともこの世界には運営が不在なのか。どちらにせよ、18禁行為に厳しい運営の目が届

いていない事は確かなようだ。

気を取りなおしてクレマンティーヌに話しかける。

「さて、確か、『勝った方が負けた方を好きにして良い』だったか？　これでお前は俺の物だ。少々危険な実験に協力して貰うぞ」

「……好きにしな」

左手と両足の腱を失ったクレマンティーヌに拒否権は無い。彼女は小さく呻き、切断された左手首を右手で必死に止血している。その目には僅かに怯えを宿しているものの、まだまだ気力はあるようだ。

「そのまま大人しくしている」

ビクつくクレマンティーヌの首筋に顔を近づけて匂いを嗅ぐ。首、胸元、腋と嗅いだ後、今度は「手のひら」で同じように、首、胸元、腋をなぞる。

戦う前から気になっていた疑問のひとつが氷解する。汗と血、酸によって爛れた肉の匂いを手から感じ取れたのだ。ペストマスクを外した時、鼻から血の匂いを感じたと思ったのはどうやら錯覚で、この粘体スライムの身体は部位に関係なく、外気に接していれば匂いや味を感じ取れるのだ。

そして不意に在るべき物が無いクレマンティーヌの乳房が目に入る。

クレマンティーヌの両腕を無理やり万歳させて乳房を晒す。

両乳首が抉り取られていた。傷跡から察すると古傷、拷問の跡のようだ。

「……」

「あはは！ 色気の無い身体で残念だったねえ！ “下” はもつと酷いよ」

クレマンティーヌを見据えたまま無言で股間を弄る。

見るまでもなく無いのが分かる。クリトリスも大陰唇も小陰唇も、何も無い。ただケ

ロイド状に荒れた股に尿道と膣、二つの穴が開いているだけだった。

「こんな身体でも、死んだ方がマシっていうくらい愛してくれると嬉しいなあ♪」

強がってはいるが失血の為か顔色は悪い。

「黙ってる」

せつかくの情報源に死なれても困る。アイテムボックスから下級治療薬マイナーヒーリング・ポーションを取り

出そうとして――。

「なるほど、こうなるのか」

コンソールが開けないのを失念したままアイテムを取り出そうとしたら、手首から先が虚空に消えていた。ユグドラシルの仕様とはだいぶ異なるが、不思議とその先にあるアイテムの存在を感じ取れる。

マイナー・ヒーリング・ポーション  
下級治癒薬を取り出してクレマンティーヌの傷口に振りかけると傷口が瞬時に塞がる。そのまま身体全体に振りかけて酸で爛れた肌も治してやる。低レベル帯の水薬でこの効き目から察すると、この女のレベルは40代には届いていないのかもしれない。

ただ、ひとつ気になる点がある。

欠損した手首から先が再生しない。状況から判断すると下級治癒薬は切り傷は治せても欠損部位を再生させるだけの力は無いことになる。

もっと上位の回復手段であれば再生できるかもしれないが、その実験は後回しだ。

「い、いま、何を使ったの?」

クレマンティーヌが関心を示す。

「ただの水薬だ。それよりも、今からお前の腹を裂いて中を見せてもらう」

「……」

「なんだ、暴れないのか?」

「どうせまともな死に方はできないと思っていたからね」

「いい覚悟だ」

万が一にも舌を噛まぬよう本人のステイレットで頬を左右に貫く。

「ぐっ!? かつ……あ……、て、てへえ!」

その乱暴な扱いに不満の聲が上がるが、口に麻痺薬を流し込んで黙らせる。

すぐさま薬が効き、クレマンティーヌは何の抵抗も出来ないまま動かなくなる。

「安心しろ。死なせるつもりは無い」

ここに至り、この世界がユグドラシルでもなければ元居た世界でもないことに薄々気が付き始めている。いや、クレマンティーヌの手首の断面や自分の身体の変化で既に確信に変わりつつある。

しかし、もうひと押し、覚悟を決めるに足る何かが欲しい。この世界の住人がポリゴンとテクスチャの集合体ではなく、血肉の詰まった生き物であることをこの目で確かめたい。

クラーナやマーシャたちでは怖くて試せない実験だが、覚悟を決めるためには必要だ。

「スキルで女の腹を裂くことになるとはな……」

指先をメスのように変形させてクレマンティーヌの腹部にあてがう。

そして内臓を傷つけないように、一気に腹を切り裂く。

腹を裂き、臓腑を押し下げ、肺を分ける。

立ち昇る臓腑の温もりと血の香りの中に、規則正しく脈打つ心臓があった。

切り裂く肌の感触、皮下脂肪の滑り、血の香り、鼓動する心臓に循環する血液――。

それらを見て、触って、感じて、そして、絶望する。

俺は医療従事者でもなければ哲学者でもない。目の前で起こっていることが現実なのか、それとも仮想現実なのか。それを見抜く術が俺にはなかったのだ。

現実だと認めたくない。

ユグドラシルの不具合だと思いたい。

運営が対応している最中だと信じたい。

だが、スペック不足なのだ。

目の前の事象を再現できるだけの性能を、俺のコネクタは持っていない。

思い至った結論に自我が揺らぐ。

ともすれば発狂してもおかしくない状況だが、粘体ゆえの〈精神作用無効〉がそれを

許さない。

ただひとつ、確かなことがある。

目の前に握り潰せば消える命がある。

「……生きているんだな」

そう認識する。

いや、そう自分に言い聞かせる。

クレマンティーヌは体内を弄られているせいか、細かく痙攣していた。

結論が出た以上、いつまでも腹を開いていてもしかたがない。裂いた腹とステイレットで開けた穴を水薬で癒し、万能薬で麻痺を解除してやる。

「さてと、取り急ぎ済ませたかった実験は終わった。残りは拠点に戻ってからだ」  
「拠点？」

「ああ、仲間がいる」

「お前みたいな化け物が他にもいるのかよ」

「口には気をつ——」

「居たぞっ！ こっちだ!!」

突然の声と共に複数の人影が現れる。街の衛兵では無さそうだが、今の俺は裸の女に跨った不審人物。側に転がっている死体と関連付けられたら完全に危険人物だ。

右も左もわからないこの世界で「指名手配」は避けたい。

集団から男がひとり歩み出る。

「その女を渡してもらおうか」

変わり果てたクレマンティーヌを一瞥し、その身柄を要求される。声の調子から俺を警戒しているのが分かる。要求こそすれども近寄ろうとしないのがその証拠だ。



態度からクレマンティーヌの仲間ではなさそうだが男達の強さを掴みきれない。

小声でクレマンティーヌに問う。

「知り合いか？」

「まあ、追っ手つてところだね」

挟られた乳房が目に入り、思わず勘ぐってしまう。

「連中にやられたのか？」

「あはは、そうだよって言ったら、おっぱいの仇を討つてくれるの？」

「……」

その問いには答えず、静かに立ち上がって男達に向きなおる。

消すか。

素顔を目撃されてしまったては逃げる訳にはいかない。〈コントロール・アムネジア  
記憶操作〉を覚えていればやり過ぎせたかもしれないが、ここは気持ちを切り替えて、どうせなら別の特殊技能<sup>スキル</sup>を試そうと思う。

「おい！ 聞いているのか！ その女を我々に引き渡せ！」

怒鳴る男を無視し、無言のまま忍ばせた瓶を投擲する。

瓶は錬金術師<sup>アルケミスト</sup>の特殊技能<sup>スキル</sup>で正確に集団の中央へと着弾し、内容物が男達を包み込むように飛散する。

「な、なんだ!? 抵抗するのわ!」

「これは!? う、動けない!」

罵声が飛んでくるものの、もぐくだけで何か仕掛けてくる様子はない。

投げたのは粘着薬<sup>ステイッキー</sup>。常時発動型特殊技能<sup>パッシブスキル</sup>で強化されているものの、効果は単純な行動阻害。しかし、ひとりとして動けないところを見ると、連中全員が対抗手段ないし無効化系装備を持っていないようだ。

もしかしたら持つてはいるが品質が低すぎてそれらの効力を貫通している可能性もある。

続いて業火<sup>インフェルノ</sup>の瓶を投擲する。

今度は着弾と同時に爆炎と悲鳴が上がり、10秒も経たずにその断末魔も途絶える。

“可燃物”が一瞬で燃え尽きたことで炎はない。代わりに体毛や爪などが燃えた不快な臭いだけが残っている。

「弱すぎて参考にならない」

ダメージログも見れないので諸々の判断に困る。

判明したのは錬金術師<sup>アルケミスト</sup>の攻撃スキルが使えたことだけだ。連中には“弱かった”以上の感想がない。

「ふむ」

撤退を急ぎたいものの気になることがあるので、しばし黒焦げの集団を観察する。

「リスポーンしないな。おい、こいつらは死んだんだよな？」

「見りゃわかんذار。——この様じゃ蘇生も無理じゃない？」

質問の内容を思えば当然だが、クレマンティヌはやや呆れた様子だ。自ら殺した相手を前に「死んでいるのか」とは随分と間抜けな話だ。

「さて、移動するぞ。これ以上の面倒事は御免だ。——動くなよ」

レザーアーマーを解除しながらクレマンティヌを抱き起こす。

「ちよ、ちよつと！ なにす——っ!? うわっぶ!!」

「暴れるな。運ぶだけだ」

クレマンティヌを体内に丸呑みする。

脱がした装備もアイテムボックスに放り込み、外壁を登攀して街の外へ出る。

走り出してから不思議に思う。

俺は体内にプレイヤーやモンスターを飲み込めるようになる特殊技能スキルへ底無しの汚泥スラッシュ3を取得している。今、クレマンティヌを飲み込んで走っているのだが擬態アバターした姿の外見が崩れていない。体内に女クレマンティヌひとり分を感じるが、容姿にも走行にも支障がない。ユグド

ラシル時代は仕様として気にも留めなかったが、こうして現実世界で目の当たりにすると仕組みが気になって仕方がない。

「おい、聞こえるか？」

「い、息がつ！ 苦しい！」

「ん？ ああ、空気が」

飲み込んだ先は密閉空間。当然、酸素呼吸を必要とする生き物はすぐに酸欠に陥る。

試行錯誤しながらアバターの気管に分岐を作り、クレマンティーヌがいる空間へ繋げる。そういつた事が出来てしまうのがこの粘体スライムの身体だが、自分の“身体の中”を変形させる感覚はなんと奇妙なものだ。

さらに〈全方位視覚〉が不完全ながら内部にも及んでいるらしく、意識すれば飲み込んだクレマンティーヌをかううじて見ることができた。

「どうだ？」

「さつきよりはマシだけどさ、暗くて何も見えないし、今どうなってるの？」

「拠点に移動中だ」

「あー、ここはその、胃袋？ ——ですか？」

その慣れない口調に苦笑しつつも、クレマンティーヌの予想は当たらずと雖も遠からず。

彼女が置かれている空間は、いわば粘体の中に浮かぶ肉袋だ。

「酸を分泌できるから胃袋と言えなくもないな。他にも色々分泌できるからそれも含めて後で実験だ」

「……聞かなきやよかった」

今後行われる実験が何を意味するのか察したようだ。

同情できなくもないが、俺にとって優先すべきはギルドの仲間たち。この世界で多少なりとも手間をかけて手に入れた素材を今更手放すつもりはない。

「念を押すが、戦いを望んだのはお前で勝ったのは俺だ。諦めろ」

「……」

「そう悲観するな。実験が終わるまで生きていたら、飼ってやるさ」

その励ましにもならない言葉にクレマンティーヌは溜息をつく。

「はあ、喧嘩売るんじゃないかった」

「ある程度の自由はやる。まあ、放し飼ってやつだな」

「はは、いいね、それ」

そんなクレマンティーヌの乾いた笑いを最後に会話が途切れ、無言のまま帰路につくのであった。

## 第3話：実験とクレマンティーヌ

城塞都市エ・ランテルを脱出して馬車に戻ると、マーシャとジルがホツとした表情で出迎えてくれた。生体型自動人形のため感情が読みやすく助かるが、同時に気恥ずかしさもある。現実では防塵マスク越しの取引が多く、こうして素顔でのやり取りは慣れない。

「お前たちの技能は馬車の中からでも利きそうか？」

マーシャであれば斥候パトロー、ジルであれば猟兵イーガーや狙撃手スナイパーの職業が索敵系の技能スキルを持つ。

「問題なく機能しております」

「では周囲に罠を仕掛けたら中に戻れ」

彼女たちの報告によれば周辺に魔物の気配はない。本来ならそれでも見張りを立てるべきだが、今は各々の実態調査を優先したい。

「畏まりました。罠を設置後、馬車に戻ります」

マーシャが復唱し、2人が作業に移ったのを見届けてから俺は馬車に入る。

「お、お帰りなさい。早かったわね」

後ろ手に戸を閉めながら妙にどもるクラーナに目を向けると、彼女は見知らぬ少女たちに囲まれていた。十代前半ぐらいの少女が3人。なぜか全員とも下着姿だ。

「……説明させて貰えるかしら」

「簡潔に頼む」

要約するところだ。

クラーナはサービス終了日にハーレムを作ろうとして、生産施設の管理をさせていたインブインブを女淫魔サキユバスに進化させたらしい。一通り設定し終わったタイミングで俺のログイン通知を受け、慌てて自室へ押し込んで隠したとのことだ。

「あの3匹が随分と見違えたな」

元は〈矮小化〉させた醜い小悪魔インブが、今や見目麗しい三姉妹だ。名前も数字の連番から、リリ、リエ、リオと改名。顔の造形にこだわりが無いのか、それとも意図してなのか、3人とも同じ外装データを基に最小限の改造にとどめているようだ。

外見は小麦色の肌、金色の瞳に黒い縦長の瞳孔。銀髪からは黒い山羊の角が覗き、腰からは純白の翼が生えている。個性と呼べるのは髪型だけで、リリがポニーテール、リエが夜会巻き、リオが三つ編みだ。

「ひとり召喚士サマナーがいただろ。どいつだ？」

「いの子よ」

クラリーナが三つ編みのリオを前に出す。

生産施設の管理の他、ソロプレイヤー向けの召喚グッズを担当していた稼ぎ頭だ。 囃  
役や盾役、回復役といった具合に、召喚系のアイテムは水薬系ポーションに次いで需要が高い。

そして、不意にリオの下着が男性用だと気づく。

つまり、ひとりだけ男淫魔インキュバスだ。

「こいつだけ男なのか」

「そうよ。髪型と性別しかいじっていないから、完璧よね」

何が完璧なのか分からないので曖昧に頷き返す。

「なるほど。で、隠し事はこれだけか？」

「ええ、誓ってこれだけよ。……怒ってない？」

「この程度で怒らんさ」

呆れてはいるが怒りは無い。「状況に応じて使えるように」と余らせていたギルドポイントなのでどう使おうがマスターの勝手だ。

この転移劇自体が予測不可能だったことを思えば不可抗力。レベル1の人造人間ホームンクルスを大量生産しなかっただけマシだろう。

「それよりも、こいつを見てくれ」



クラリーナの弁解が終わったのを見計らい、俺はクレマンティーヌを床に吐き出す。

「は？ ええ!？」

突然のことにクラリーナは目を白黒させ狼狽える。裸同然の欠損女性を目の前に吐き出されたのだから当然だ。

そんな彼女に俺が導き出したこの世界について伝える。考察を交えながらクレマンティーヌの身体で「エ・ランテルでの出来事」を再現してみせると、初めは半信半疑だったクラリーナも徐々に、しかし無理矢理に理解を示す。流星に目の前で実演されては信じない訳にはいかないといった感じだ。

事が終わり、接合されずに残されたクレマンティーヌの右足にアエラが嘔り付いている。

その横ではクラリーナが指で血をすくい、ペロリと味見をしていた。異形化の影響で人間の血に忌避感が無くなったらしい。その事に衝撃を受けているようだが、取り乱す様子が無くて安心する。

正直なところ、人間でなくなったことに落ち込まれてもどう慰めていいのか分からない。

「信じたくはないけれど、そういうことなのね。それで、これからどうする？ 他のプレイヤーを探す？」

「その前に装備の点検とスキルの確認だろうな。戦ってみて分かったがユグドラシルと変わっている部分が多い。俺は先にこいつから情報を聞きだす。それが終わり次第、製薬関係のスキルを実験するつもりだ」

「なら効果を確かめるついでにへ人物支配ドミネイトで聞き出しちゃえば？」

クラリーナのもつともな提案にクレマンティーヌの鋭い声上がる。

「まって！ ま、魔法はダメ、です」

それまでですがままだった彼女の目には怯えが宿っている。短い付き合いだが命の危険を感じていることだけは理解できた。

「急にどうした。大人しく実験を受けるんじゃないのか？」

「漆黒聖典、私がいた組織なんだけど、隊員は秘密保持の呪いを受けているから。知っていることはなんでも正直に話すからさ、魔法は使わないで、ください」

俺とクラリーナは思わず目を合わせる。

お互い知らない魔法の存在に脅威を感じたのだ。

クラリーナが早く立ち直る。

「ヴィクトル、私に任せてもらっていいかな」

「どうするつもりだ？ 死なれると面倒なんだが」

時間が惜しい今、情報源を失なうことは避けたい。

「あら妬げちやう。こういう娘が好みだったの？」

茶化すクラリーナに両手を広げ、無言で抗議する。

「ふふ、冗談よ。解呪を試すだけだから」

素晴らしいながら彼女はクレマンティーヌに手をかざす。

「ディテクト・マジック魔法感知グレイター！アブレイザル・マジック、確かに魔法の影響を受けているわね。上位魔法鑑定グレイター！アブレイザル・マジック、第五位階の呪

い。うわあ、えげつない効果」

「どなんだ？」

「なにかしらの強制力のもとで3回質問に答えると『頭の中』で魔法が炸裂するみたい。貴女、転職した方がいいわよ」

「だから逃げただしたんだけど、ね」

クレマンティーヌの恨めし気な視線が俺に刺さる。あの男たちを追手と称していたので、逃げていたのは本当のことなのだろう。

俺はクレマンティーヌを無視してクラリーナに向きなおる。

「解除できそうか？」

「うちの商品で余裕よ。つまり、アエラちゃんのグレイター！デイスベル・マジック魔法解呪グレイター！デイスベル・マジックでね。私の

ウイッシュユ・アボン・ア・スター

〈星に願いを〉でも解呪できるけど、この状況で経験値消費系はちよつと怖いわ」

「確かにな」

クラリーナの懸念は理解できる。レベル90代に習得できる経験値消費型の特殊技能<sup>スキル</sup>や超位魔法は強力で有用だが、それは経験値を稼げる手段があつてこそそのもの。良質な狩場を確保するまではクラリーナに無理をさせるわけにはいかない。

「——アエラ、頼む」

「仰せのままに」

切断されたクレマンティーヌの脚を喰らつてた狼が瞬く間に人の姿へと戻る。

口元を血で濡らしたアエラが近づくと、クレマンティーヌが僅かに身構える。

「じ、人狼!？」

「ふふふ、貴女、美味しかったわ。ご馳走様」

アエラがクレマンティーヌの頭に手をかざしてへ上級魔法<sup>グレート・マジック</sup>解呪<sup>グレート・マジック</sup>を発動する。

するとクレマンティーヌの額が青白く光り、次の瞬間には小さく「パリン」とひび割れて霧散した。

「クラリーナ様、ご確認を」

「魔法感知<sup>マジック・感知</sup>」、うん、解除できたみたい。良かったわね、これで心置きなく支配できるわ」

「え——」

「――ドミネイト・パースン人物支配」

クレマンティーヌが何か言うよりも早く、俺はクラリーナの合図を受けて魔法を行使する。

瞬間、クレマンティーヌの顔から感情が抜け落ちる。ユグドラシルならこのタイミングで簡易的な行動指示アイコンが表示されるのだが、どうやらこの世界では単純に「術者の命令待ち」状態になるらしい。

『只今戻りました』

クレマンティーヌが操り人形になったところで罫を設置し終えたマーシャたちが戻る。

「よし、全員揃ったな。今から全員で工房に移動する。各自装備とスキルの確認だ。何か異変を感じたら俺がクラリーナに報告しろ。いいな?」

『畏まりました』

\* \* \*

工房に移動し、各々の能力を確認する。

クラリーナは呪術や占術、マーシャは鍛冶スキル、ジルは料理、リオは召喚魔法、アエ

ラは信仰魔法だ。

俺はその傍らでクレマンティーヌから情報を引き出す。

国家、物価、魔法、武技、生まれながらの異能、冒険者、モンスターなどの情報の他、プレイヤーと思われる神にまつわる伝説などなど。得られた情報の密度からなかなか良い拾い物をしたと思つた矢先、質問内容がクレマンティーヌの装備に移つたところで雲行きが怪しくなる。

この世界で作られたと思われる魔法のステイレットは興味深かつたが、下着めいた軽装鎧に問題があつた。

「呪われてたから同情していただけ、ヤバいくらいのシリアルキラーじゃない」  
途中から話を聞いていたクラリーナが呆れたような眼差しをクレマンティーヌへ向ける。

鎧にあつた問題。それは鎧に縫い付けられた様々な金属片からなるアクセサリーだ。数にして60個前後。初めはオシャレ感覚で付けているのかと思つたが、話を聞けば「殺した冒険者たちのネームプレート」だという。つまり、狩人が仕留めた動物の牙や角を「ハンティングトロフィー」として飾るように、彼女は殺した冒険者のプレートで着飾つていたのである。

すでに「人物支配」は解除されているが、クレマンティーヌはクラリーナの言葉に反応は

示さない。この世界の（ドミニイト・パースン）人物支配は支配中の出来事が記憶が残るらしい。自分が何を喋らされたのか理解している彼女は、己の人となりがバレたことで言い逃れができないと諦めているようだ。

クレマンティーヌが縋りつく様な目を向けてくる。元からまともな出会いではないので、ことさらに庇い立てする義理は無い。この女がしてかしてきた事を考えると殺処分してしまった方が異相協キルド会にとって最善なのかもしれないが、拷問の傷跡から「歪んでしまった原因」を推し量ってしまい、俺もクラーナも踏み切れずにいる。我ながらなんとも甘い。

「まったく、お前を追ってた連中には悪い事をしたな」

「……」

俺の皮肉にクレマンティーヌが顔を伏せるが、俺自身は本気で悪いとは思っていない。

アバターの素顔を見られたのもあるが、スレイン法国の存在を知った今では「引き渡していたら」などとは思えない。もしも引き渡していたら「漆黒聖典を倒せる存在」として目をつけられていただろう。

あの国とは極力距離を取るべきだ。

俺はマーシヤを呼ぶ。

「マーシヤ、このプレートを潰してくれ。このままだと占術で辿られる恐れがある」  
「別のアイテムに作り変えては如何でしょう。より安全かと思われませんが」  
「いや、まだ溶かすだけでいい。こいつが生き残ったら用途を考える」  
「畏まりました」

実験を前に改めてクレマンティーヌの身体を確認する。最初に切り落とした左手は今も無く、右足はアエラのお腹の中。左足は接続実験でくっ付いてはいるものの、足首の腱は切断したままだ。ちぐはぐだがモルモットとして申し分ないだろう。

まともに残っているのは右手だけというアンバランスな裸体を抱き起し、製薬系スキルの実験開始を告げる。

「始めるぞ。腹の中で精製した薬を色々と試す予定だが、まあ、最後まで生きていたら飼ってやるさ。放し飼いは、要相談だな」

「……」

無言のクレマンティーヌを飲み込んで体内で薬を精製する。

俺は現種族の漂う聖なる肉塊の他に滋養の泥濘を取得している。また上級錬金術師マスター・アルケミストの他に医薬師ファイジナと暗殺者デヴァイン・グロブスターといった職業も取得している。これらは製薬系スキルドクター・ブレイク



相乗効果がある常時発動型特殊技能を持ったためユグドラシル時代は重宝したものだ。

精製から数分も経たぬうちにクレマンティーンが苦しみ悶えるが、実験の目的には経過観察も含まれる。手心を加える気はない。

「ふむ？　手が空いたな……」

クレマンティーンをただ観察するだけでは手持無沙汰なので、表の自分も錬金台を扱えるか試すことにする。なかなか便利な身体になったものだ。

意外と粘体の身体も悪くないと思えてきた。

「どう？　扱える？」

「ああ、どういう訳かな」

錬金台であれこれと調べていると、クラーナが興味深げに近づいてきた。

現実で触ったこともない道具を問題無く扱える。ユグドラシル内で実習を受けた記憶はない。ただレベルを上げ、取得したいスキルをボタンひとつで選択しただけだ。

にもかかわらず自然とその使い方を理解している。

「理屈は分からんが名ばかり錬金術師にならずに済みそうだ」

「それは良かったわ」

「うお!!」

俺は身体の中の異変に気づき、思わず身体を震わせる。

そして近場の椅子にへたり込む。

「ど、どうしたの!? どこか悪いの!？」

不安そうな顔を向けてくるクラーナになんと答えた物か。

「……漏らしやがった」

「え?」

「あいつ、俺の中で脱糞しやがった」

「あ、ああ。その、ご愁傷様?」

俺はその言葉に首を振る。

「違うんだ。脱糞された事よりも、糞を不味いと感じないことの方がつらい」

「ええ!？」

クラーナがドン引きする。

その気持ちは痛いほど分かるぞ。

「まてまて、そんな顔をするな。いいか、これは粘体スライムとしての性質だ。有名どころは下水道

道とかに湧くからな。きつとその影響だ。そうだと信じたい」

「ああ、私も血を美味しく感じたし。な、なるほどね」

「俺の味覚、大丈夫かな」

現実世界でもまともな食事をとっていなかったが、自分の味覚がどう変化したのかが

気がかりだ。不浄な物しか口にできない可能性に思い至り、不安に駆られる。

「アエラ、すまないがジルに料理を頼んでくれ」

「畏まりました。どのようなバフをお望みですか？」

「何でも構わん。味覚を確かめたいだけだ」

アエラに実験を中断させてジルの料理を注文する。

実はアエラも専門職と呼べるほどではないが、度重なる再編成の名残りで〈料理人<sup>コック</sup>〉を取得している。作れるのは軽食カテゴリーのみ。時間が空いた時にでも彼女の料理も試してみよう。

アエラを見送り、俺は改めてクラリーナに宣言する。

「クラリーナ。今後、俺はどんなに頼まれようと女しか飲み込まないからな」

「まあ、うん、了解」

「男の糞は御免だ」

「分かったから！ そんなこと口に出して言わないで！」

とんだハブニングだったが実験再開だ。

錬金台を触って判明したことがある。ユグドラシルでは『処方書』に登録した薬し

か作れなかったが、この世界ではその制限が解除されていた。馬車の外で気まぐれに摘んだ植物でも薬効があれば水薬ポーションにできたのだ。特殊技能スキルも正常に機能して、強化、濃縮、融合なども可能ときた。

レベル上限に達したプレイヤーが新たな処方薬を取得する。これは大きな発見だ。

この世界にきて不安ばかりだったが、これでいくらかは希望が持てた。倉庫で眠っている錬金術に関する本を読み直す必要があるだろう。

勉強は柄じゃないが今は知識が必要だ。

\* \* \*

ヴィクトルと名乗った化物は宣言通り、私の身体で実験を始めた。

こいつらの正体は見当がついている。本国の暗部に触れてきた者として「極力敵対してはならぬ者」の特徴を叩き込まれてはいた。でもこの状況は想定外だ。深夜の倉庫街で「100年毎の顕現」とやらに遭遇してしまうとは不運も甚だしい。

こういうのは信心深い村娘とか献身的な破滅願望に酔った神殿騎士の役目だったはずだ。

抵抗の意思はない。いや、抵抗は得策ではない。今は最悪の心証を少しでも良い方向

へ誘導しなきゃいけない。何としてでも生き残る。でなければ何のために国を出たのか分からない。

実験に関して詳しい説明はなかった。要は何かしらの薬物とその解毒薬を試したいらしい。

言葉にするとどうと言うこともない。でも「解毒薬」が曲者だった。ひとつ薬物を試す度に毎回丁寧に戻される。その「振り出しに戻る」感覚が想像以上に過酷で精神にくる。しかも薬品ひとつひとつに対して皮膚、眼、口、肺、胃、血管、膻、肛門等、複数の投薬手順、薬効経路を執拗に調べるといった念の入りようだ。

実験開始からどれくらい時間が経ったのか分からない。

肉袋の中は終始暗闇。薬の効果も相まって感覚の全てが曖昧だ。

「ふっ、うっ、ぐう！」

今、肉袋の中で一心不乱に腰を振っている。身体を支えているのは口に差し込まれた呼吸用の触手と、尿道と肛門に差し込まれた「粗相防止用」の触手だけ。欠損した身体では上手く身体を動かせない。それでも必死に身体を揺する。

視覚と聴覚、そして嗅覚が完全に利かない。辛うじて残る触覚はとても鈍く、自分の

身体と肉袋の境目が分からない。ほぼ全ての外部刺激から隔絶された結果、こうして喉と肛門を扶る「内部の刺激」を求めてしまった。

肛虐趣味は無い。それでもこの刺激だけが己を感じ得る唯一の存在証明。自我を保つにはこうするしかない。

汗を滝のように流し噴水のごとく潮を噴く度に、触手を通して大量の水を直接胃に流し込まれる。脱水症状にならないよう手厚く扱われている。だけどそれは実験がまだまだ続くことを暗に示しているのだと少し経ってから理解した。

不意に回復されると声が響く。

「おい、聞こえるか?」

ズルリと口に差し込まれていた触手が引き抜かれる。

「げえ! げほっ! き、きこえ、る」

これまでの実験が終始無言で行われていたから普通に会話ができて安堵する。

まだ受け答えできるだけの理性を保っている。

「次で最後だ。お前の所持品にあつた“ライラの粉末”を改良した。この世界で記念すべき新薬第一号だな。元の効果の増幅に、感覚の鋭敏化を追加してみた。そこそこの媚



トルは否が応でも刺激を与えるに違いない。

「あ、あ！ あああ！ やつやめえ！ い、ひい！」

予想した通り、触手が絶え間なく動きだすと早々に快感と多幸福感で脳が満たされる。このままでは意識を保てないどころか己を見失いかねない。

「おお、いーき、きこえてんだろ!? 待てっ！ まっ、とまってください、いつ！」

堪らず喉に挿入されていた触手を引き抜いて静止を乞うても応答がない。股間に突き刺さった三本の触手で尿道を擦り、膣内を抉り、肛門を嬲られ続ける。

そして触手で一際深く膣を突きあげられたとき、我にも無く絶叫する。

「あ、ああつ!? あ、ああああ、あ、あ、あ、あああつー!!」

瞬間、絶叫に驚いたのか触手の動きがピタリと止まる。

膣内を抉っていた触手が静止した場所は幸運にも損傷を免れていた子宮口。

触手が深く突き上げた時、偶然にも無防備な子宮口を引っかかれたのだ。

「ハッ……ハッ……ハッ……!!」

辛うじて気絶せずに済んだものの呼吸ができない。むかし受けた拷問以来の激痛に鼓動が早くなり呼吸が荒くなる。「息も絶え絶え」とは正にこの事なのだろう。呼吸ひとつで勝敗を決する戦場に身を置いてきた者としては忌々しい事態だ。

下腹部の奥が痺れたまま治まらない。純粋な拷問とは異なり、媚薬により激痛の他に



甘美な昂ぶりが確かな余韻として残っている。

快樂と苦痛、相反する刺激に脳が混乱している。

様子を探るかのように触手がヌルりと子宮口をひと撫でする。

「ひゃあ!!」

弱味を見せれば責められる。 “反応してはいけない” と理性が訴えるが、自分でも信じられないほど身体が跳ね、甘い嬌声を上げてしまう。

間を置いて再びペロリと撫でられる。

「いひいひい、いひっ!!」

自分で自分の身体を制御できない。膣がまるで自我を持ったかのように収縮し、勝手に触手を締め上げる。己の “女” を強制的に自覚させられているようで悔しい。

不意に両肩へ肉壁がズンとのしかかる。

続いて胸部と脇腹にも肉壁が迫り、徐々に身体を圧迫されていく。肌に触れられるだけで膣が反応してしまうのが情けない。

そして、気づいてしまった。

「ま、まさかっ!?! お、おまええええ! は、放せ! はなせええええ!!」

腰を軽く支えられていた今までは違い、全身をがっしりと固定されては腰を浮かして触手から逃れることができない。

飛ばされる。そう確信した瞬間、尿道が、膣内が、肛門が触手によって突き上げられる。下から上へ、ただ突き上げるだけでなく、脈動する触手が螺旋を描くように蠕動する。

「あ、ああつ！ い、っ!? ま、まって！ いぐう！ いぎすぎるからああ、ああ!!」

絶頂で身体が強張り、果てたかと思えば休む暇もなく再び絶頂が襲う。寄せては返す波のように絶え間ない快楽が全身を激しく痙攣させ、何度も何度も股間を往復する触手が一突き毎に、巧みに調子を変えながら少しずつ速度を加速していく。

“ぬちゅぬちゅ”と控えめだった音が徐々に“ぐちゅつぐちゅつ”と湿り気を帯び、今は“ぼじゅるるうっ！ ぶちゅじゅるるるっ！”と下品な音を奏でながら媚薬と蜜を織り交ぜたドロドロの粘液を盛大にまき散らしている。

快感が痛みを塗りつぶしていく。そんな中、触手に違和感を覚える。

少しずつ形を変えている。膣内の感触を確かめるように撫でまわし、ひとつ反応を得ると“ツボ”を責めるのに適した形へと変化している。

だからだろうか、与えらえる快楽にいつまで経っても慣れることが無い。

そのことに恐怖する。

私は知っている。人間は大抵の刺激にはすぐに慣れてしまう。それこそどんな拷問であれ、同じ刺激、同じ苦痛であれば10分も続けられれば無反応になるものなのだ。

だからこそ、腕の良い拷問官は同じ刺激を被験者に与えない。

「いひいひい！ いぐっ！ いっ！ んん！ ふ、深すぎい、い！ ああ、あっ!!」  
刺激が際限なく強くなっていく。いや、触手が身体に最適化されていく以上、いつかは上限があるのかもしれない。

ただ、その最適化が完了した時、それに耐えられる自信が無い。

多幸感と快感に吞まれながら、何度も絶頂と気絶を繰り返す。

夢心地のままいつしか意識が朦朧とし前後不覚に陥ると、私は無意識に腰を振るだけの存在に成り下がるのだった。

\* \* \*

俺たちは一通りの実験を終え、ジルが作ったサンドイッチを居間で楽しんでいた。

異常事態であることには変わらないが、それでも美味しいものを食べると不思議と心が落ち着く——こともなく、俺とクラーナはその美味しさに終始感動していた。

「めっちゃ美味しいんですけど!?!」

「そうだな、ここまでは思わなかった」

現実では液体食料が主食だった。サンドイッチに限らず固形食品は手の届かぬ高級品。下層で出回っている物の多くは偽物で、大半は危険な薬品による成型物だ。

もつとも、上層の連中が口に行っている料理でさえ原料の多くが昆虫を粉末にしたもの。手に入れたからといって特別有難がって食べるものでもないのだが。

「良かった。普通の食べ物も美味しく感じる」

料理を普通に楽しめる自分に心底安堵する。

「味覚は大丈夫ってこと？」

「大丈夫というか、<sup>スライム</sup>「楽しめる幅が広がった」と考えるべきかもな。味の好みは現実の自分と変わらない気がする」

粘体スライムになったことで大抵の有機物を食べられるようになっただけで、人間だった頃の嗜好はそのままだ。<sup>リアル</sup>

好き好んで不浄な物を食べようとは思わない。ただそれだけのことだ。

「まあ、そう考えた方がポジティブよね。で、あの娘どうするの？ まだ実験中？」

「最後に媚薬を試しているところだ。でもまあ、そろそろ終わりにするか」

薬効の効果時間については調べが不十分だが、製薬関係の特殊技能スキル確認はできた。いつまでもクレマンティーヌを黽ムシついても仕方がない。

反応が無くなってから随分と経った気もするが、ひとまず床の上に吐き出す。

「うわあ、えっぐ」

「ベチャリ」と吐き出されたクレマンティーヌを見たクラーナの率直な感想だ。

全身を体液と媚薬で濡らしたクレマンティーヌは濃厚な雌の香りを放っていた。身体は脱力し、嬲られ続けた穴という穴が弛緩して開いたままだ。意識も朦朧としているのか表情は無く、だらしなく半開きになった口からは舌が垂れている。

浅く上下する胸と痙攣する腰だけが彼女が生きている証だ。

「結局飼うの？」

「約束は約束だからな」

俺はクレマンティーヌのベトベトの髪を掴み上げ、顔を寄せる。目の焦点が合っており、虚空を見つめたままだ。

「聞こえるか？ 俺を見ろ、クレマンティーヌ」

「う……、あ……あ？」

顎を掴んで強引に視線を合わせてやる。

反応は弱いが意識はある。

「約束通りお前を飼ってやる。まずは身体の再生だな」

クレマンティーヌから一旦離れ、クラリーナたちに声をかける。

「欠損を再生できるか実験をする。クラリーナも見ておいてくれ」

「了解」

アエラに合図を送り〈大治癒〉を発動させる。

魔法の淡い光がクレマンティーヌを包む。光の粒子が欠損していたパーツを型どると、左手首、左足、脚の腱、両乳首、陰核クリトリス、大陰唇、小陰唇が次々と再生を果たす。

見た目には健常者そのもの。全身の汚れを流せば完了だ。

アエラに無ピッチャー・オブ・エンドレス・ウォータ限の水差しを手渡す。

「アエラ、すまないが外でこいつを清めてきてくれ」

「畏まりました、ヴィクトル様」

2人が出ていくとクラーナがからかうような口調で言う。

「ふふふ、扱いには気を付けなよ？」

「裏切ったら責任もって処分するさ」

「違うわよ。アエラちゃんの方よ」

「アエラが？」

てつきりクレマンティーヌの事かと思えば意外にもアエラの名前が出る。

「貴方リアル、現実で子供がいたとか、ペットを飼っていたとか、そういう経験ある？」

「いや、そもそも現実リアルで飼えないからアエラを作った訳だし、俺は独身だ」

クラーナは納得したとばかりに頷く。

「やっぱりね。じゃあアドバイスをしてあげるわ。アエラちゃんとクレマンティーヌに序列を与えなさい」

「序列？」

「そう、ちよつとしたことでもいいの。いいえ、違うわね。ちよつとしたことが重要なもの。例えば、声をかけるときはアエラちゃんから、次にクレマンティーヌの順につて感じに」

「それに意味はあるのか？」

要領を得ない会話だ。

クラリーナは真面目な表情で続ける。

「大有りよ。貴方が出かけている間に聞いたんだけど、NPCあの子たちは造られてからの記憶を持っているわ」

「なに？」

突然明かされる事実困惑する。

「間違いないわ。この馬車に乗り換えてからだから、だいたい4年かしら。ユグドラシル換算だと80年近くもアエラちゃんは貴方に尽くしたことになるの。それなのに貴方の注意が新参者のクレマンティーヌに向きっぱなしになってごらんさい。間違はなく疎外感を覚えるはずよ。顔に出さなくてもストレスは心を蝕む。気を付けなさいな」

「なるほど、なんとなくだが理解した。俺としてもアエラをないがしろにするつもりはないさ」

「それでいいわ。——言っておくけど、あの子たちの忠誠心は異常よ。死ぬと言えば喜んで自害するレベル。接するときには下手なことを言わないことね」

「そんなにか」

自我を持たなかったNPCたちがユグドラシル時代を覚えているとはにわかには信じられない。しかし、それを前提に接したほうが良さそうだ。

「クラーナ、あの三つ子はどうなんだ？」

「記憶を持つてるわ。『新規』じゃなくて『編集』だったから記憶が残ったんじゃないかしら」

「なら、お前も気をつけないな。マーシャとジルを含めると5人だろ？ 大変だな」

「も、もちろん平等に可愛がるわよ」

クラーナが5人の世話を焼く姿を想像し、思わずニヤついてしまう。

「設定は変えたのか？」

「使用人のままよ。たださつきも言ったけど、『狂信者の使用人』ね。あの子たちも絶対服従なのは間違いないわ」

「そうか。まあなんにせよ、お前がああいう趣味だったとはな」

「いいじゃない、着せ替えくらい楽しんだって。せつかく夢が叶ったんだから」

クラーナは実験に先立ち、三つ子を着せ替えていた。それもなぜか3人ともメイド服



だ。黒地にロングスカート。飾りといえるものはホワイトブリンムと、ギルドロゴが刺繍された紅い腕章だけ。

一見するとオーソドックスなメイド服を踏襲しているが、クラーナの意向で全員下着を付けていない。リオだけが納まり悪そうにしているのは、独りだけ“付いている”からだろう。同性のよしみで彼には優しくしてやりたい。

マーシャが工房から戻ってくる。

「ヴェイクトル様、プレートを全て溶かし終えました」

「ご苦労、少し休むといい。そういえば、マーシャは飲食できるのか？」

ふとテーブルのサンドイッチに目がいき疑問に思う。

マーシャとジルは自動人形<sup>オートマトン</sup>。種族名に“人形”とは付いているが、ユグドラシルでの

扱いは“機械生命体”に近い。見た目の機械色が濃いギア型、生身に近いバイオ型、前者ふたつを併せたシリコン型の3系統あり、“設定上は”どれもダイナモコアで動いている。

そして当の彼女らは、“ダグザの大釜”から自動補給するようにAIを組まれている。この世界ではどうなのだろうか。

「可能です。補給に言及するならば、摂取する対象は吸収効率の面から液状が望ましく理想的です。または以前いただいた『賢者の石』のような高エネルギー体であればバフ効果込みで長期間補給の必要が無くなります」

「賢者の石か、そんなこともあったな」

賢者の石。錬金術を題材にする作品では何かともてはやされる賢者の石だが、残念ながら世界観を北欧神話からとっているユグドラシルでは上級錬金術師マスター・ケミストの職業クラスを取得すれば誰でも作れる消耗品だ。

高レベル帯の特殊技能スキュルや高位階魔法の触媒に使われたりするため、精製に高価な材料を必要とするものの需要の高さから吐いて捨てるほど露店に出品されていた。

「今はマスターよりお預かりしたリング・オブ・サステナンスを装備中ですので飲食自体が不要となっています」

食事と睡眠が不要になる指輪。そんなアイテムもあつたなと思います。

となると気になるのはアエラだ。彼女にはリング・オブ・サステナンスを装備させていない。ギルドの運営コストを切り詰める必要があるのなら指輪を用意しなければならぬ。

「クラーナ、アエラにもリング・オブ・サステナンスを装備させた方がいいか？」

「その必要はないわ。オートマオートマシン人形は燃費が悪いから、緊急時の今だけの処置よ。それに余

剰分の生産物をエクステンジ・ボックスに放り込めば食費くらいは捻出できるから、心配はいらないわ。ああ、指輪で思い出した」

クラリーナが腕章と指輪を取り出す。

腕章はリリたちが付けていたものと同じ物だ。

「はい、これ。アエラちゃんに」

「この指輪は？」

「不老の指輪よ。作ってみたの」

「ユグドラシルには無かったよな？」

頷くクラリーナは誇らしげだ。

この短時間でユグドラシルの魔法に手を加えて作り出したのならその表情にも納得だ。

「私たち異形種には寿命が無いじゃない？ 老化が止まるにしても、この手のケアは若いうちからしていた方がいいのよ」

「そんな設定よく覚えていたな。で、どうやって作ったんだ？」

「神秘と禁術の合わせ技よ。あと言い忘れてたけど、マスターソースを開けたわ」

「おいおい、そういう大切なことは忘れずに頼む」

転移後一番の朗報だ。

「報告が遅れたのは悪かったわ。私の部屋でしかまだ試していないし、無くなっていた項目があったけど、ギルドの運用には支障無さそうね。後で貴方の部屋でも試してみてください」

「部屋、か。ユグドラシルじやどこでも開けたのにな。不便だが開けないよりはマシか」  
「マシなんてもんじやないわよ！ これで馬車をあれこれいじれるんだから。でも、ひとつ問題があるのよね」

食い気味に反応したクラリーナが急に声を落とす。

「なんだ？ バグでもあったのか？」

「そんな大袈裟な問題じやないわ。ほら、生理現象があるじやない？ お風呂とトイレを追加したかったのよ」

「ああ、そういう」

相槌を打つものの粘体スライムの生理現象とやらを想像できない。とはいえアエラも自我を持った。部屋を共有するなら改装も必要になる。今後は収納だけでなく居住性にも目を向けなければならなそうだ。

「水は流れたわ。ただ、排水管が繋がってなくて」

クラリーナ曰く、風呂もトイレも「機能はする」という。お風呂もトイレも本来はジョークアイテムだ。お風呂は入浴できても何かバフ効果があるわけではなく、トイレも水が

流れる演出こそあるものの扱いは「椅子<sup>家具</sup>」だ。

この世界でも水が流れることから、恐らく「水が流れる」というジョーク機能がこの世界にローカライズされた結果、ビッチャー・オブ・エンドレス・ウォーター無限の水差しのような魔法的な力で水が供給されるようになったと思われる。

そして部屋に設置したアイテムは基本的に壁を越えてパーツがはみ出ることはない。それがこの転移世界にローカライズされた結果、下水管問題になっっているわけだ。

「排水か。部分的に床を上げて、その下に排水用の容器<sup>タンク</sup>を置くしかないんじゃないか？」  
「そうよね……、うん、マーシヤに作ってもらおうわ」

成るようにならなないのでこの件はクラーナに任せる。女性陣には気の毒だが最悪オマルなり簡易トイレを作れば解決する問題だ。

「話を戻すけど、内装を変更できることは確認したから。まあ、相変わらず小型か中型しかダメだったけど。アエラちゃんと一緒なら色々必要でしょ？」  
「そうだな。あとで外装データを漁ってみるさ」

新たに模様替え問題が浮上したところでアエラとクレマンティーヌが戻ってくる。

「ヴィクトル様、クレマンティーヌの洗浄を終えました」

アエラは仕事ぶりを披露するかのように裸のクレマンティーヌを居間の中央に立たせる。

髪は濡れたままだが体液に塗れていた身体はすっかり綺麗になっていた。

「ご苦労、アエラ。よくやった」

「も、勿体ないお言葉！——あう?!」

クラリーナの言葉を思い出し、試しにアエラの頭を撫でてやると顔を真っ赤にして顔を伏せた。流石に頭を撫でるのは子供扱いしすぎたかと反省するが、口元がわずかに緩んでいるので喜んでくれているのだろう。

クラリーナへ目を向けると「それで良いぞ」と言わんばかりに大きく頷いている。

「クレマンティーヌ、お前は俺の個人的な所有物だ。いいな?」

「……畏まりました。誠心誠意、ご奉仕させていただきます」

クレマンティーヌにしては謙虚な言葉だ。

後で聞いたところ、どうやらアエラが入れ知恵したらしい。

「右足のお礼<sup>おやつ</sup>」として、

身体を洗うついでに異相協会の序列やらを諸々と説いたと言う。

クレマンティーヌはただそれを静かに聞き、なすがままに洗われていたらしいが、その間、彼女が何を思っていたかは分からない。

## 第4話：主人とシモベ

クラナーナの言葉を思い出し、自室でコンソールとマスターソースの呼び出しを試したが駄目だった。これでアバターの基本情報が見れなくなった他、課金アイテムの入手も不可だと分かった。

「覚えているうちに書き出さないとヤバイな……」

取得している特殊技能スキルや魔法を確認できないのは痛い。俺が取得している魔法は40弱、そして製造できる水薬ポーションは100近くある。薬の方は「処方書」があるので問題はないが、魔法に関してはどうも覚えのものも多い。特に高レベル帯の狩場では使わなくなった低位階魔法などはあやふやだ。

ただ魔法の40個程度で音を上げるわけにはいかない。なぜならクラナーナよりは大部分マシだからだ。彼女は呪術特化なのでその数は俺の比ではない。「純粹な魔法職に比べるとう少ない」と彼女は言うが、それでも特殊条件を満たして取得枠を600前後まで拡張していたはず。全て暗記しているとは思えないので、早いうちに書き出すよう提案するべきだろう。

「処方書じやうほうしょを読み返しておくか」

アイテムボックスから取り出した処方書は、ゲーム特有の「誇張されたデザイン」のせいでやや大きい。書き込まれた文字はまるで印刷したかのように達筆だが、もちろん俺の字ではない。調査を成功させた時に自動記入される「手書き風フォント」だ。

今後は自分で記入しなければならぬとなると気が滅入る。

ちなみにユグドラシルの処方書は錬金術師にとってひとつの「財産」だ。ゲーム内で最も一般的な水薬の製造方法は、特殊技能と魔法を合わせたもの。しかし、ユグドラシルではマジックポイントの回復手段が限られていた。アイテムによる回復手段がなく、1日の使用回数制限がある特殊技能を除けば時間経過による自然回復だけ。MP切れで生産が止まるデメリットがあった。

そこで鍵になるのがMPの回復中を繋ぐ「魔法に頼らない製造方法」だ。当然「未知を既知とする事」をテーマにしているユグドラシルではプレイヤー自身が「調査素材の組み合わせ」を見つけ出さねばならない。

つまり、「情報の秘匿性」と「限られたMP回復手段」が、処方書に財産たる付加価値を生む訳だ。

「この世界でも素材集めか。目的もなくこの世界を彷徨うよりはマシか？」  
行動指針だと思えばいくらか気が楽になる。



\* \* \*

自室でマスターソースを開けなかったので、模様替え用の外装データを手にクラリーナの部屋に足を運ぶ。扉の前で一呼吸。ゲーム時代は不躰に入れたが、流石に現実リアルになった女性の部屋に許可もなく押し入るのは躊躇ヒシわれる。

ノックをするとマーシャが出迎えてくれた。

「模様替えを頼みにきた。取り次いでくれ」

「承っています。どうぞ中へ」

案内されたクラリーナの部屋は既に改装済みだった。

ゲーム時代は俺と同じように収納力を重視していたはずだが、今は豪華な内装と調度品が並んだスイートルームだ。意匠にシダ植物を描いた壁紙を見れば、部屋全体がヴィクトリア朝様式だと分かる。個人的には派手に感じるが、〃ギルドマスターの部屋〃であることを加味すると丁度いいのかもしれない。

「待ってたわ。じゃあ寝室に行きましょう。マーシャ、ジル、呼ぶまで立ち入り禁止よ」

『畏まりました』

マーシャとジルを横目に、クラリーナの寝室に入る。

「外装の変更に人払いが必要なのか？」

疑問を口にしながら視線を戻すと、全裸のクラリーナが片手で杖をつき立っていた。

クラリーナは軽くビッコを引きながらすぐ目の前にやってくる。

透き通るような白い肌に長い黒髪が良く映える。視線を落とすと円錐形の見事な乳房に目を奪われるが、何よりもまず、状況が掴めない。

「なんのつもりだ？」

「理想の身体を手に入れたことだし、私と良いことしない？」

「……で、本音は？」

その質問に一瞬クラリーナの目が揺れ、そして諦めたのか顔を伏せる。

「貴方を、繋ぎとめておきたくて」

「こんなことをしなくても、ギルドを出てく気はないぞ？」

「それでもよ。……誤解させたくないからにはつきり言うけど、愛とは違うの。もちろん貴方のことは好きよ。ただ、この訳の分からない世界で独り生きて行くのは辛すぎる。傍に居てくれるなら、精一杯尽くすわ」

ここで黙って抱き寄せれば男も上がるのだろうか、ついさつきまでアバター越しに接してきた相手に距離感を測りかねる。

思い返せばロールプレイをしている彼女しか俺は知らない。

「元氣に見えたが……、ずいぶんと参っているようだな」

「空元氣よ。ギルド長としての見栄もあつたし……。今は貴方を失うことがなによりも怖い。貴方は“こんなこと”って言うけれど、私にはこれしかないのよ」

“売り”をしていた彼女の“確固たる資本”は自分自身だと言いたいのだろう。今も昔も、老若男女問わず、献身は保証を得るひとつの手段だ。

だとしてもだ、右も左も分ならず、立ち位置すら不明なうちに安売りするものでもない。

危うく溜息をつきそうになるが我慢する。

経験上、女の前で溜息をつくと碌なことにならない。

「傍にいてやるさ。ただ、いつも通りで頼む。変に気を回す必要はないぞ」

「そう……。ありがとう。約束——つきや!？」

不意にクラリーナを抱き上げ、ベッドに放り投げる。

「ちよ、ちよつと！ 何するのよ!？」

「話は終わったろ？ “据え膳” ってやつだ。どうせなら実験に付き合ってくれ」

「実験？ 普通にするとかじゃなくて？」

「まあ、実験というよりは演技指導だな。お前の“変身”と違って俺のこの姿は擬態だね。自由が利く反面、演技を交えないとどうにも不自然なんだ。例えば——」

俺は言いながら股間を露出させてクラリーナに示す。そして通常状態の陰茎ペニスを、何の前

触れもなく勃起させて見せた。擬態で作りだした陰茎ペニスに生理的な機能は無く、変幻自在で自分の意志ひとつで勃起が可能だ。それゆえに演技しなければ不自然なのだ。

今後この世界で性交渉が必要になる日が来るかは分からないが、備えとして『プロ』の演技指導を受けようと思った次第だ。

思ったのだが。

「あつはつはつは！ 何それ！ あははは！ 面白すぎい！ ひひつ！ く、苦しいっ！」

急激な勃起がツポにハマったのか、クラーナは腹を抱えて笑い転げている。

「……………おい」

「あはは！ だめ！ お腹痛い……………、た、助けて。あつはつはつは！」

話にならない。笑われ続けるのも癪なので陰茎ペニスを萎えさせるが、それを見たクラーナは更に笑い転げ、今度は過呼吸に陥ってしまう。

逆効果だったようだ。

「ひっひっひっ、し、死ぬ！ や、やめ！」

クラーナを落ち着かせると先程よりも表情が明るくなっていた。

ひとしきり笑ったことで色々と吹っ切れてくれたようだ。

改めて向き合うと気恥ずかしさに襲われる。『お互いに裸だから』というよりは、目の前に居るのが間違いなく『本人なのだ』と今更ながらに実感したのだ。

例えるなら、ゲーム時代の『アバター越しの交流』は言わば仮装パーティー。それが突然仮面を取り上げられたのだから落ち着かない。

切り出し方を迷っていると、クラリーナに先を越される。

「ねえ、ヴィクトル。一応聞くけど、性欲はあるの？ その……、種族的にって意味で」  
「お前やクレマンティーヌの裸をエロいと感じるし抱きたいとも思う。ただ、俺自身が元人間だから『人間の女』に反応しているだけなようにも感じる」

俺の「粘体要素」と「神話要素」の比重は、粘体側スライムが重い。裸のクレマンティーヌを見た時も、欲求としては性欲よりもさきに食欲を強く覚えたほどだ。

「上手く言えないが、性欲と食欲が混ざって嗜虐心が強くなった気がするな」

「あらあら、『そういうプレイ』の演技指導も必要かしら？」

「あー、まあ、ノーマルで頼む」

「ふふふ、冗談よ。——それじゃあ、始めましょうか」

小さく笑ったクラリーナが俺の首に両腕を回して身体を預けてくる。どちらからともなく唇を合わせ、ベッドに身を沈める。

実技を交えて演技指導を受けたが、結果は散々だった。いや、セックス自体は及第点だ。射精も睾丸内に作られた「精子が詰まった握りこぶし大の袋」を破って擬似男根を通して排出できた。

しかし、表情を上手く演出できなかったのだ。もちろん、現実の俺にも感情はあった。ただそれら喜怒哀楽の表情は無意識にでるもの。それを急に意識してやれと言われるとなかなか難しい。

しかも擬態の顔は粘体製。表情を作る「表情筋」なんぞ無いのだからなおさら難易度が高い。

「落ち込む必要はないわよ。何事も一日でどうこうなる訳じゃないでしょ」

「まあそうなんだが……、先が思いやられるな」

「それよりも掃除しなきゃ。潤滑液は多いにこしたことはないけれど……、量多すぎよ」  
 クラーナの言う「潤滑液」とはもちろん精液ザーメンのことだ。

突然だが、どうやら俺の身体は「雄」だったらしい。

「らしい」とはなんとも曖昧な表現だが、そもそも粘体の性別なんて考えたことも無いのだから仕方がない。粘体スライムといえば漠然と雌雄同体なのではと思っていたが、もしか

したら漂ディヴァイン・グロフスターう聖なる肉塊の設定が影響しているのかもしれない。

「人間のよりキラキラして綺麗なのが腹立つわ。コレ、瓶詰にして売れないかしら」  
 クラーナが胸元に残る精液ザーメンを指ですくい取る。

「誰が買うんだよ……」

「あら、あつちでも需要はあつたのよ？」

「精子バンクのことか？ あれは受精できてこそだろ」

件の精液ザーメンは、精子と保護粘液で構成されている点では人間の物とさほど変わらない。しかし、種族はあくまでも粘体スライム。人間や亜人相手に受精できるとは思えない。

「試しに鑑定してみなさいな。仮にも『神の種』でしょ？ 凄い効果があるかもしれないわ」

「お前と違って元ネタがっただけだ」

やるせない気持ちを抑え、言われるままに己の精液ザーメンを鑑定する。

「どう？ 売れそう？」

「お前なあ……」

食い気味に確認してくるクラーナに若干引きつつも鑑定結果を伝える。

肉体強度、疫病耐性の上昇。血液成分の正常化。性欲や性機能の維持。精神高揚化、鬱耐性上昇。内臓脂肪型肥満、高血糖、高血圧、動脈硬化の予防。消化促進、薬効の即

効化。眷属召喚の媒体、等々。

自分でも驚くほどの数だ。

「そんなに!？」

「どっちの効果か分からないがな」

「ああ、合わせた効果なのね。でもやっぱ売れるわよ、それ」

「正直な気持ち、売りたくはないぞ」

何が悲しくて己の精液ザーメンを精製して商品にしなければならないのだ。

そのまま「生でいいわよ。売らなければいいでしょ?」

「そう来るか。気になる効果でもあるのか?」

「強いて挙げるなら精神高揚化か鬱耐性上昇かしら。別に鬱病って訳じゃないけど、

リアル現実になった役職が重すぎるとのよ」

遊ゲームが遊びではなくなった。ギルドマスターが背負う責任も現実味を帯びた訳だ。

「考えておく。ただ課題もある。時間をくれ」

スキル特殊技能で特定の薬効を抽出することはできる。問題はモルモットが居ないことだ。

クレマンティーヌで色々と実験をしたが彼女は人間。異形種や亜人種でも試さないと

実用は怖い。

「分かったわ。———そういえば、見た目“もうひとつあったわよね? 見せてよ”



「ん？ ああ、アレか」

クラリーナの催促で擬態用のアバターを二つ登録していたことを思い出す。

ひとつはこの成人男性の外見。もうひとつは12歳くらいで腰まで届く黒髪の少女だ。どちらもギルドメンバーが作った商売用の側だが、少女の方は早々に使わなくなった。なにせ口を開けば自分の声おじさんが転びでるのだ。自分で言うのもなんだが、ちよつとしたトラウマものだ。

狩りや戦闘で〈擬態〉を使うことが無かったので今の今まで忘れていた。ガチの粘体スライムプレイヤーは〈擬態〉に宝箱や岩などを登録しているらしいが――。

「まだ試してなかったな」

意識の中で、登録してある少女の姿を思い浮かべるとすぐに外見に変化が現れた。

縮んだ身体はクラリーナと比べると小柄で、肉付きは薄くて「なだらか」だ。

クラリーナが歓声をあげる。

「あら、可愛いじゃない」

「これこそ上手く演技できる気がしないぞ……」

声も少女のものだ。

「この世界ではボイスチェンジャー無しでいけるらしい。

「外見が複数あるだけで役に立つわよ」

「そっちはどうなんだ？ その姿以外にはないのか？」

「無いわよ？ あとは変身を解いた蛇女ラミア本体だけ。見てみる？」

俺の返事を待たずにクラーナは変身を解く。

瞬く間に両足がひとつにまとまると、鱗を生やしながらスルスルと伸びていく。さながら特撮モノの変身シーンのようで、7メートルほども伸びればその存在感に圧倒される。上半身の色白の肌はそのままだに、黒髪だったものがキラキラと輝く黄金の髪に変わり、黒かった瞳も真つ赤な爬虫類のそれになる。

外見が基本的に醜くなる異形種にしては、珍しくまともな部類で、目元を覆う鱗にさえ目を瞑れば、その長い舌を含めて好事家の受けは良さそうだ。

そして、本来は亜人種である蛇女種ラミアを異形種たらしめている要素が、頭上に輝く円盤と背中に生えた純白の翼に見てとれる。鬼子母神カリテイモは、種族ツリーの果てに亜人種から異形種に変化する珍しい種族だ。

「元が亜人でも醜くないな。流石は隠し種族といったところか？」

「狙って取得した訳じゃないから能力とかまったく活かせてないけどね……」

クラーナは手鏡を片手に、頭上の円盤を指で突いている。俗にいう天使の輪だがドーナツ型ではなく、まったく厚みを感じない薄い円盤のようだ。

しげしげと眺めていると光の円盤がスゥーと消える。

「お、消せた！ オーラと直結してるのね」

「こんな事になるなら俺も何か取得しておけばよかったな」

「まあ、製造に役立つオーラなんて稀だし、仕方ないわよ。それよりさ、その姿でもう一戦、どう？」

返事をする間もなくクラリーナに押し倒される。

異形種は方法が何であれ、人間種へ姿を変えると能力値にペナルティが発生する。本来の数値的には僅かに勝っているはずだが、小柄な少女の姿では正体を現したクラリーナに抵抗するのは難しい。

「両刀だったのか？」

「私が選べる立場だったと思う？」

「……その返しはするいぞ」

「まあまあ。演技が無理ならマグロでいいからさ」

クラリーナは既に長い舌を身体に這わせている。彼女のハーレムを思い返せばこの姿はストライクゾーンだったのかもしれない。

「好きにしろ」

「やったー」

ギルドマスターを元気付けるためと自分に言い聞かせてクラリーナを受け入れる。

やることは大して変わらないしマグロで良いと言うのなら任せるだけで。その後、情事を終えた頃には空は半ば白み始めていた。

\*\*\*

自室に戻ると外装が無事に更新されていた。

中型外装のなかから広そうな部屋を選んだ。以前と同様「ログハウス風」でトイレ風呂付きのワンルームだ。部屋自体は長細く、入口からトイレと風呂、続いて居間、仕切り代わりの収納棚を挟んだ最奥は寝室と書斎を兼ねた雑多な空間だ。

居間にはソファアと背の低いテーブルが設置してある。この部屋で客をもてなす予定は無いが、現実となったこの馬車は言わばこれから住み続ける家だ。寛げるようにしておいて損は無いと考えた。

居間と寝室を仕切る収納棚には「アエラ専用」も用意した。本当はアエラ専用のベッドも用意する予定だったが、本人は愛玩動物としての矜持からか狼の姿で床に寝れば問題無いと言い張ったためにセミダブルのベッドひとつで済んだ。

ベッドを取り囲むようにある本棚には宝物庫に放り込んであつた錬金術師用のレシビア魔法詠唱者用の魔導書を発掘して並べた。

「アエラ、今まで通り自分の部屋だと思って自由に使うといい」

「畏まりました。——ヴィクトル様、私の姿は普段どちらをお望みですか?」

その質問に、ふとアエラの「正体」について考える。

アエラの種族は人狼。

一般的な伝承はさておき、ユグドラシルでは吸血鬼ヴァンパイアと対をなす存在。吸血鬼ヴァンパイアと祖を同

じくするも、「生き方」を違えて敵対関係にある種族だ。そして他の異形種と同様に正

体は醜い化け物だ。

「真祖」トゥルーヴァンパイア

でもあれば、地を這うような猫背に大きく裂けた口には鮫のような何列

にも並ぶ鋭い牙を持つ。同様にアエラも人狼ワウルフの上位種「古狼の血脈」としての醜い正

体を持っている。 「普段は狼だ。……だがそうだな、正体を見せてくれ」

「はっ」

返事と同時にアエラの身体がにわかに膨れ上がる。

装備は自動解除され、全身が紅い狼の毛皮に覆われた二足歩行の魔物が姿を現す。身

長は2メートル強、狼が二足歩行したような外見という点では普通の人狼ワウルフと変わらない

が、身体の各パーツが酷く醜い。口は耳を通り越し喉元まで裂けていて隠し切れない大

量の牙が無秩序に伸びている。両腕はやや長く、ごつくて大きな手には太くて長い指、

その指先には20センチほどの鉤爪が備わっている。爪の一本一本がまさに凶器だ。

プレイヤーが種族に人狼フールフを選ぶと、月齢に比例して暴走するリスクを孕む。これは吸血鬼ヴァンパイアの持つ種族ペナルティー〈血の狂乱〉と同じようなもので、NPCであっても例外ではない。

NPCの場合、基本的に拠点から外に出られないので暴走する機会はなかなか無いが、例えば館や砦、城などの大型拠点の「中庭」のように「拠点の内」と判定される野外であれば、月の影響を受けて暴走する条件を満たすことになる。

——では、アエラは暴走するのだろうか？

答えは「暴走しない」、だ。

アエラは俺が「犬を飼いたい」という欲求から生まれたNPC。本来、狼の姿を維持するには魔力コストを毎秒支払わなければならないが、アエラはそれを回避する為だけに種族レベルを高レベルまで上げている。それにより様々な常時発動型技能パッシブスキルを取得しているのだが、そのひとつに月の影響を理性で抑え込む〈古の血〉を取得している。

だから今のように本人の意思で変身する以外には正体を現すことはない。

「アエラ、次は人間の姿に。全裸になって両腕を左右へ水平に広げる。両足は肩幅に」  
彼女は素直に指示されたポーズをとる。

これはクリエイティブツールでアバターを登録する際の基本姿勢だ。

アエラを観察しながら彼女の周りを一周する。

アエラは完全な肉体をもって立っていた。

ユグドラシルでは性器の再現は不可。アバターのデータは服装込みでひとつの完成データだ。本来、データ容量を軽減する為に服に隠れる肌や性器は「無」、つまりデータとして存在しないものだが、目の前に立つアエラの身体は余すところなく再現されている。

正面へ周り頭を撫でる。少し癖のある髪質が肩より少し長めに伸びている。髪を掻き分けても頭に狼の耳は無い。人狼の人間形態は幻術ワイルドではなく、「完全なる変身」、人間種には見破れないという架空の伝承がある。その設定が利いているなら外見から正体がバレる心配は無い。

次に胸を見る。クレマンティヌのそれよりも大きい。俗にいう「円錐型」で乳頭はやや上を向いている。「完全なる変身」のおかげで乳房は一对、狼のような副乳は見当たらない。

乳房に軽く触れるとキュツと乳首が引き締まる。

ふとアエラの顔を見ると琥珀色の瞳が震えていた。

僅かな期待の他に、緊張と恐怖が宿っていることに気付いて反省する。

考えてみればこの状況は彼女にとって異常事態だ。

行われているのは「査定」や「品評」であり、NPCとして問題があれば消去される可能性もあると思えば怯えもするはずだ。

「両手を下ろして楽にしろ」

俺はベッドに腰を下ろすとアエラに質問を続ける。

「異相協会が砦を持っていた頃の記憶はあるか？」

「いいえ、ありません。私の記憶はこの馬車で創造されてからになります」

名前はもちろんのこと、アエラの外装データや制御するAIはずつと使いまわしてきたが、今の証言から砦時代のアエラとは別人という事になる。使用しているギルドポイントがそもそも違うのだから当たり前と言えば当たり前だが、今の返事で創られてからこの瞬間までの記憶を有していることがわかる。

ゲーム内の1日は72分。現実換算で80年近く仕えてくれたことになる。

「俺の愛玩動物だと自覚し、慰めることが義務だと言っていたが……。クレマンティーヌのような奉仕をする気はあるか？」

「ヴィクトル様がお望みならば喜んでご奉仕いたします」

「俺の意志を考慮せず、お前自身の気持ち聞きたい」

「そ、それは」

アエラが言い淀む。



「素直な気持ちを聞かせてほしい」

「はい。許されるのであれば、私も夜伽のお相手をしたく思います。ヴィクトル様からクラーナ様やクレマンティーヌの匂いを強く感じると、どうしようもなく身体が疼くのです」

「そうか」

クラーナの言葉を思い出す。アエラに疎外感を与えないと約束したがさっそく破つてしまったようだ。

ベッドに座ったまま自分の太ももを叩いてアエラを手招きする。

「背を向けてここに座れ」

「はい。し、失礼します」

太ももにアエラの柔らかい尻が乗ったのを確認すると背面からアエラを抱きしめる。

「寂しい思いをさせたようだな」

「い、いえ！ そんなことはありません！ 側に置いて頂けるだけで幸せです！」

「アエラ、俺がお前を愛玩動物として創るにあたって望んだのは、狼の姿で側に侍ることだ。だがこの世界でお前は自我を持った。であればもつと我が儘に振る舞っていいぞ。愛玩動物の我が儘に振り回されるのも主としての楽しみだと知れ。今後はもつと甘えてこい。それが許されるのが愛玩動物だ。分かったな？」

「はい。ありがとうございます」

「そういえば、夜伽の相手をと云ったが、知識はあるのか？」

「はい。未経験ですが、知識はあります」

その知識がどこから来ているのか気にはなるが、動物が本能で交尾できることを考えれば自然と備わっていても違和感はない。

「自慰も未経験か？」

「はい。申し訳ありません」

「謝る必要はない。……ではそうだな、いまから俺に身体を預けろ。何をされても抵抗はするな」

「畏まりました」

アエラの返事を受けて整った乳房に手を這わす。

乳房の輪郭を確かめるように縁を撫でる。くすぐったそうに身を震わすアエラに構わず、撫でる指先を肌に微かに触れる程度の力で徐々に乳房の先端、乳首へ向けて撫でていく。

指先が乳輪を捉えたところで両胸の乳首を摘まみ上げる。

「んふう!？」

アエラから甘い声が漏れる。

彼女の手を乳首に導く。

「自分でも触ってみろ。強く揉む必要はない。優しく、指の腹を擦り合わせるだけでいい。まずは“ぐすぐぐ”たさ”を楽しめ”

アエラは恥じらいながら自分の胸を愛撫する。

ぎこちない手つきだったが、暫くすると慣れてきたのか次第に動きが滑らかになる。

「気分が乗ってきたようだな。胸を愛撫したまま、次は股を開け”

アエラは言われるままに両足を開く。いわゆる背面座位と呼ばれる格好だ。

今、誰かが部屋に踏み込めば彼女の陰裂は丸見えだろう。

アエラに自分の胸を愛撫させながら、俺は両手で彼女の胴体を撫でおろす。

引き締まった腰をゆつくりと下に撫で、腰に達したところで両手を下腹部へ回す。左

手で下腹部を、そして右手で恥丘に茂る陰毛をならすように撫でる。

アエラが軽く身悶える。初めて他人に触れられる臀部が心地いいのだろう。

陰毛を指で掻き分け、包皮越しに陰核クリトリスの位置を確かめる。

何もかもが初めての相手に直接陰核クリトリスへ刺激を与えるのは辛いだろうと考え、まずは包

皮越しに陰核クリトリスをやさしく揉みほぐす。

恥丘越しにアエラの陰莖クリトリリスをゆつくりと揉むと、未知の快感に彼女は太ももを強張らせる。

アエラは刺激を受けて反射的に脚を閉じようとするが、その脚に自分の脚を絡めて防  
止する。

「んん！ はあ……はあ……、あ……」

初めての刺激にアエラの息は荒い。時折、快感の高まりに耐えきれず小さな嬌声を漏らしている。初体験にしては上々だろう。

心臓の鼓動も速く体温も上昇している。肌は薄つすらと汗ばみ、抱いているだけで粘体スライムである俺からするとアエラが丸々塩味を得たようにしよっぱく感じる。

「自分で陰核クリトリリスを揉んでみる。初めは皮越しで構わない。中の芯を確かめるように、ゆつくりしごいてみる」

アエラは恐るおそるといった感じで恥丘を揉み始める。

徐々にその動きが呼吸とともに早くなるが止めずに見守る。

「はあはあはあ……、んん！ はあはあはあ……」

「いい子だ。そのまま逝ってみろ」

瞬間、絡めていたアエラの両脚に力が入るのを感じる。

「あつ！ ふあああ！ んんん！」

突然身体を大きく反らしながらアエラは小さく潮を嘔く。太ももが痙攣するたびにピュツと潮を飛ばし床の絨毯を濡らす。

「も、申し訳ありま……せん。そ、粗相を……してしまいました……」

「気にするな。絶頂は我慢するものではないからな。しかし……、普通は陰核<sup>クリトリス</sup>だけで潮を嘔くのは難しいらしいんだが。——淫らな身体だな」

耳元でそう囁くとアエラは羞恥のためかそっぽを向く。

その仕草に嗜虐心がそえられる。

クレマンティーヌのように絶え間ない絶頂を与えたくなるのを我慢して、いまだに息の荒いアエラをなだめるように、優しく下腹部を撫でてやる。

「初めて逝ったんだ、余韻を楽しめ」

どのような力が働いてこの世界に転移したのかは分からないが、ただのAIだったNPCが自我をもって応えてくれるのは良いものだ。

落ちて着いてきたアエラを後ろから強く抱きしめる。

「ヴィ、ヴィクトル様!?!」

ユグドラシルでは感じ得なかったその肉感をひとしきり味わうと彼女を解放する。

「……今日は……までだ。風呂に入っ……い」

「……はい」

## 第5話：装飾とクレマンティーヌ

アエラを部屋に残し、俺は「工房」へと足を運ぶ。

ハブ空間に位置し、アイテムの製造を一手に引き受けるという意味では異相協会の中  
枢とも呼べる一室だ。12畳ほどの間取りにワークベンチ、錬金台、付術台、炉、鍛造  
台、鑄造台などが周囲の壁伝いにぐるりと取り囲んでいる。

利便性だけを追求して生まれた、洒落っ気の無い工房だ。

そんな工房の中央にはマーシャが作った分婉台が配置されおり、全裸のクレマン  
ティーヌが大きく開脚した状態で拘束されていた。

そして側にはコウコウと熱を発する簡易炉があった。

クレマンティーヌへ目を向けるとその表情は不安気だ。

裏の世界を知るからこそ、これから起こりえる未来を察しているのだろう。

控えていたマーシャに目で合図を送ると、ヤットコを炉に突っ込み、赤熱化した金属  
の輪っかを取り出す。

発光していて見難いが、表面には精巧なアラベスク模様が浮かび上がっている。

「見えるか？　これがお前の首輪だ」

不安を煽る意図はなかったが、俺の台詞に合わせてマーシヤが良く見えるようにとクレマンティーヌの目の前に首輪をかざす。

赤熱化した金属を前にクレマンティーヌは諦め顔だ。

「手持ちの金属で作らせた。アダマントタイト以上だから、簡単には壊せないぞ」  
「はは、上等」

台詞こそ強気だが口調には覇気がない。彼女の情報が正しければ、この世界の人類にこの首輪を破壊することは困難。スレイン法国の宝物庫になら破壊できる神器があるかもしれないが、お尋ね者の彼女に国を頼る選択肢はない。

つまり、首を刎ねる以外に取り外す手段がない訳だ。

「マーシヤ、始めてくれ」

「畏まりました」

マーシヤは冷め始めた首輪を簡易炉に突っ込み、足元のペダルを踏みしめ鞆ふいこを吹かす。

熱と弾力を取り戻した首輪をヤットコで広げると、躊躇いなくクレマンティーヌの首に巻きつける。

「ぎゃー、ぐー!!」

クレマンティーヌは歯を食いしばって悲鳴を押し殺す。

素肌と首輪の間に僅かな隙間ができるよう配慮はされているが、赤熱化した金属を相手に耐えられる距離ではない。文字通り身を焦がしながら痙攣する相手に、全く肌に触れずにいることは不可能だ。

加工開始から早々に肉の焼ける匂いが工房に充満する。

淡々と作業をこなすマーシャとは対称的に、クレマンティーヌは勝手に暴れる身体を必死に抑え込もうとしている。

彼女には申し訳ないがその四肢にも鉄輪を嵌める予定だ。唯一の慰めにもならない心遣いとして、一見して精巧な模様が施された装飾品に見えることだろうか。

それから少し経ち、首と手足に鉄輪を付け終えたところで工房にクラリーナがやってくる。

もちろん物見遊山で顔を出した訳ではない。

「そろそろ何かしら？」

「来たか。こいつを嵌めたら始めるぞ」

首輪の正面に位置する個所に、ギルドマークが彫られたコインを嵌め込む。

これで真正正銘、クレマンティーヌはこのギルドの一員だ。



クラリーナがスンスンと鼻を鳴らす。

「見た目は痛々しいけど、食欲が刺激される香りね。回復はしないの?」

「これから穴を開けるんだ、回復は最後でいいだろう。マーシヤ、準備をしてくれ」

マーシヤが簡易炉を下げて代わりにダイニングカートを引いてくる。

カートにはピアスホールを開けるためのニードルと鉗子、そして様々な大きさのピアスが並べられている。ピアスは全てクレマンティーヌが集めた冒険者プレートが材料だ。

言わずもがな、これからクレマンティーヌの“飾り付け”が始まる。

殺した冒険者たちのプレートを一生背負うことになるわけだが、言い換えればハンティングトロフィーという名のコレクションを身につけることができるのだ。感謝してほしい。

「それじゃ始めるわよ。ヴィクトルの了承を得て私が指示をだすけど、飼い主はヴィクトルなんだから、何かリクエストがあつたら言つてね」

「リクエストと言われてもオシヤレには疎くてな。付術さえ施せばいいさ」

そう、本命は付術。永続化した<sup>ノンディテクション</sup>へ占術妨害でクレマンティーヌを追手から守るのが目

的だ。

偽名を名乗らせる案もあったが没になった。クレマンティーヌによればこの世界にも上位の占術がある。今回の追手、つまり所属していた組織に本名が割れているため、偽名に期待できないらしい。

逆に言えば名前バレさえしていなければ偽名を名乗るだけで防げることになる。だからこそ漆黒聖典の隊員は異名を持ち、占術対策の一環として本名を隠しているという。クレマンティーヌであれば「疾風走破」がそれにあたる。

そして、なぜ符呪対象がピアスなのか。

事の発端はクラーナが俺の目の前で全ての指輪を別の指輪へと付け替えたことに始まる。

言葉にすると何でもない行為に思えるが、ユグドラシルプレイヤーには信じられない行為だ。なぜならゲーム内で指輪を装備できる部位は基本的に二カ所、左右の人差し指にそれぞれひとつずつ、指輪右と指輪左だけ。装備枠を増やそうと思ったらリアルマネーを支払うしかない。

だがこの課金がえげつない。

指輪の装備枠を拡張する際、どの指にどの指輪を装備するかを指定する必要がある、課金で拡張したからといって自由に付け替える事ができない鬼畜仕様だったのだ。

翻つて今、クラナはこの世界で指輪の付け替えに成功した。これは多くの部分でユグドラシルのルールに囚われている身としては大きな発見だ。

しかし、指輪の付け替えが自由にできることは判明したが、一つの指に二つの指輪をすることは何度試してもできなかった。

恐らくだが、この世界では指に指輪を通す行為はできて当たり前で、そこに転移してきたユグドラシルの存在がこの世界のルールを基準に破綻の無いようにローカライズされた結果だろう。

つまり、基準となるのはこの世界で、我々ユグドラシルの存在はそれに合わせて変質している可能性がある。

指輪は課金枠から解放された。しかし、ひとつの指にひとつの指輪しか付けられず、その他の装備枠も相変わらずユグドラシルのルールに縛られている。頭、顔、胴、内着、腕、手、腰、足、靴の九ヶ所に加え、指輪を除く装身具枠が三ヶ所のまま。それも装備できるのは取得している職業クラスが許す物に限る。

では、この世界の住人は？

その疑問に考察と実験を重ねた結果、クレマンティーナにピアスを施すことになったのだ。

結論から言うと夢の無いものだった。この世界の住人はひとつの指に何個も指輪を

付けられるし、ユグドラシルと違って重ね着もできた。しかし、同じ個所に複数の魔法アイテムを装備しても、効果が出るのは最後に付けたアイテムのみだったのだ。

安易なチートは許されなかった。この世界はそれほど甘くはなかったわけだ。

結局のところクレマンティーヌをスレイン<sup>ノンディテククンヨン</sup>法国とやらから守るためにも、〈占術妨害〉をピアス<sup>ピアス</sup>と判明した「ボディーパーアス」に付与することにした。そして指輪にしなかった理由は「簡単に取外しできないよう身体に通してしまえ」という乱暴な発想によるものだった。

「飼い主の言質は取ったわよ」

クラーナの機嫌がやたらと良い。

昨夜、というか明け方に抱いた効果だろうか。

「まずは乳首！　と言いたいところだけど、初めはやっぱ耳からよね。マーシヤ、右はコンク、イヤローブ。左はヘリックス、コンク、イヤローブに宜しく」

「畏まりました」

施術を任されたマーシヤは躊躇なくニードルを突き刺す。

血が僅かに滲むが、マーシヤは構わずにリングを通しボールで固定すると施術を終え

る。

その手際の良さに当のクレマンティーヌも驚いているようだ。

「次、舌を出しなさい」

クレマンティーヌは言われるまま口を開けて舌をだす。

「マーシヤ、ボールは5ミリね」

「畏まりました」

マーシヤは鉗子でクレマンティーヌの舌を挟むと、耳と同様にニードルを刺す。その後は先ほどと同じだが、今度はリングではなく棒状のシャフトを通してボールで固定する。

「いい感じね。じゃあ次、乳首の根元に内径15ミリのリング。それが終わったら乳輪の縁を左右から摘まむ感じで20ミリのシャフトに6ミリのボールで留めてみようか」  
乳首にピアスを施すと聞いたクレマンティーヌは心底憂いた顔になる。何年越しかは分からないが、やっと取り戻した乳首を他人に改造されるのだ。心穏やかではないだろう。

だから、という訳ではないがつい口を挟んでしまう。

「ちよつと待て。乳首のリングは好いが、乳輪はよさないか？　あまり好みじゃない」

同情したと思われたくないのでやむなく自分の好みとする。

「そう？ 常時摘ままれたような『下品な形』になって面白いんだけど。まあ、好きな仕方ないわね」

クラーナは特に追及もせずマーシヤに乳首のピアッシングを指示する。クレマンティーヌを見ると涙を浮かべているが、乳輪を歪められずに済んでいくらかはほっとしているに違いない。

続いてヘソピアスも一瞬で付け終わるとクラーナが喜々として宣言する。

「お待ちかね、おまんこの飾りつけよ」

マーシヤが開脚しているクレマンティーヌの正面に陣取ってクラーナの指示を待つ。

「まずは陰核包皮クリトリスフードを縦に、ボールは3ミリでいいかしら。そしたらアウター・ラビアね。左右三つずつ、30ミリのシャフトで肉を寄せ集めて8ミリで固定。インナー・ラビアは左右二つずつ、内径10ミリのリングにボールは3ミリで良いかしら」

スラスラと伝えるクラーナもどうかと思うが、それに応えて施術するマーシヤも凄  
い。

立て続けにブツブツとニードルに肉を貫かれ、クレマンティーヌの肌に薄つすらと汗が滲む。素早い施術とはいえ敏感なところに穴を開けているのだから相当痛いはずだ。彼女なりの意地なのだろうか、声を上げないのは大したものだ。

「やたらと詳しいが、現実リアルでしてたのか？」

「まさか、興味はあつたけど耳だけよ」

鬼かこいつは。いや、魔女だったな。

「陰核はそのままか？」  
クリトリス

「ふっふっふ。マーシャ、例のアレを」

「はい、こちらに」

柄でもないキャラでマーシャに取り出させたのは注射器型の吸引器だった。

「前から拡張にも興味があつてね。自分で試すの怖いからクレマンティーヌで試そうか  
なつて」

「そ、そうか」

やっぱ鬼だな。

「あまりデカくして欲しくないんだが。ほら、股間に長いのがあるとチンコを連想する  
だろ？ 正直萎える」

ダメもとで拡張具合を牽制しておく。

なぜ俺がクレマンティーヌの身体をここまで気遣わねばならないのだろう。

「え、じゃあ3センチくらい？」

親指の第一関節くらいを想像する。

ギリギリ許せそうな気がする。

「それで手を打とう」

「了解。じゃあ、ヴィクトル。火傷の治療と、媚薬を塗ってあげて」

「必要か？」

「痛いだけじゃ可哀想じゃない」

20カ所も穴を開けておいて「可哀想」などとよく言えたものだ。

「それに今日の施術はこれで終わりだから」

「そういう事なら治療しよう」

職業技能クラススキルで指先から媚薬を分泌する。

この技能スキルは、過去に精製したことのある薬をスキルレベルの数だけ任意に登録することができるものだ。素材消費無しで、必要に応じて魔力のみで再精製できる。

素材のレアリティに比例して消費する魔力も増えるため、魔力を補給する術が無いユグドラシルでは正直微妙な技能スキルだったが、逆に素材の補充がままならないこの世界では有用な技能スキルに早変わりだ。

クレマンティーヌの首と両手首、両足首の火傷に指を這わせて治療してやる。

続いて陰核クリトリスを潤すのに十分な媚薬を分泌し、包皮を剥いて可愛い豆を晒す。そして、優しく媚薬を塗り込む。元がライラの粉なので飲用が望ましいが、粘膜からでも効果が発揮するのは本人で実証済みだ。



「ひゃっ!? んん♪」

クレマンティーヌから甘い声が漏れる。

「このぐらいで良いか?」

「そうね。それじゃあ<sup>ドミネイト・パリスン</sup>人物支配<sup>ン</sup>をかけてちょうだい」

言われるままにクレマンティーヌを支配すると、クラーナの指示をなぞるように命令する。

身体の拘束を解き、クレマンティーヌに吸引器を手渡す。これから自分で自分の陰核<sup>クリトリス</sup>を拡張させるのだ。

注射器型の吸引機を陰核<sup>クリトリス</sup>にあてがわせる。

瞬間、クレマンティーヌの身体がビクリと跳ねる。<sup>ドミネイト・パリスン</sup>人物支配<sup>ン</sup>の力が及んでいても身体<sup>ン</sup>の反射までは抑えられない。

「取っ手を回せ」

クレマンティーヌが吸引機の先端にある取っ手を回し始める。

「ふうっ!!? んん! んん! んん!」

実はこの吸引機、外見こそ普通の注射器だが仕組みは若干異なる。

内径の棒がネジ状になっていて、回すことで吸引力を発揮する。つまり、手を放しても簡単には吸引力が失われないのだ。

「いひいひ、いひつ!! ああ、あああ!!」

クレマンティーヌが激しく身体をよじるが、支配下にあるためネジを回す手は止まらない。

取り戻して一日も経っていない陰核が、ネジを捻る度に少しずつ、自らの手で吸引され、強引に引つ張りだされる。相当強烈な激痛が襲っているに違いない。

「後は適当に引つ張ったりして、抜けたら始めからやり直し。それじゃあ、私たちは部屋に戻りましょう」

クラーナの放置宣言に従って工房を後にする。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。三センチ育てるのに数ヶ月くらいかかるんじゃないかしら」

「……未経験なのに詳しいんだな」

「勉強したからね！ これから毎日吸引して磨き上げるわよ！」

遠回し過ぎた嫌味を笑顔でさらりと流され、クレマンティーヌの装飾ショーはお開きとなった。

\* \* \*

暗い部屋の中でクレマンティーヌは目を覚ます。泥のように眠っていたせいかな身体はやや重いものの、気分はそれほど悪くはない。

視線がゆらゆらと泳ぐ。寝起きの余韻に浸りながら、焦点の定まらない目に見慣れぬ天井が映る。

「えっとう？」

意識が覚醒するにつれ、自分が全裸で寝かされていることに気づく。それも分婉台もどきの怪しい台座ではなく、ただの木の床にだ。

状況を整理しようと記憶を掘り起こし、無様にも醜態を晒してしまった事を思いだして顔をしかめる。

拉致されてから休みなく続いた実験と凌辱。肉体の損傷はその都度治してもらえませんが、疲労と精神の摩耗はずっと放置された。その状態で精神支配を受け、自分で自分の身体を延々と拡張させられた結果、支配が解けて最初に欲したのは解放ではなく、睡眠だった。

「拉致当日を含めれば不眠不休で丸二日。精神が限界に達し「寝かせて下さい」と何度も懇願してしまつたのだ。

始めはもう少し堪えられると思っていた。これが普通の任務や、人の手による拷問であればもう数日堪えられたはずだ。だが、絶対的な回復手段に裏打ちされた絶命寸前の

実験の数々と、今までの人生で経験したことのない無かった快樂の渦には勝てなかった。

クレマンティーヌは自分の身体をまさぐる。穿たれたままのピアスが、今までの出来事が夢ではないと物語っていた。

ゆつくりと身体を起こす。拘束はされていない。願ひ通り、ただ寝かされていたようだ。その事実に驚き、屈辱を感じ、そして安堵する。

「起きたのか？」

唐突に投げかけられた言葉に身構える。なぜ気づけなかったのか、ヴィクトルが近くソファアで寛いでいた。その足元では赤毛の大狼が耳だけをこちらへ向けながら寝ている。

見た目は人間と狼。でもクレマンティーヌは身をもって知ってしまった。彼らが神や魔神、従属神の類いであることを。

「どうした？ どこか痛むか？」

「神さまでも冗談いうんだ。あんなだけ奇跡をぼんぼん使つといてさ。笑えないよ」

「……なら、何故泣いているんだ？」

何を言われたのか理解できなかった。「泣いている」。その言葉を何度も頭の中で反芻する。そして、そつと自分の頬に触れて自覚する。

「答えないならへ人物支配ドミネイト・パースンで聞き——」

「い、言いますっ!」

クレマンティーヌは反射的に土下座する。その突然の行動に驚いた大狼が顔を上げ、ヴィクトルも不審そうにクレマンティーヌを窺う。

「支配は、嫌、です」

「そこまで嫌がられると傷つくぞ」

既にスレイン法国の呪いは無く、死の危険もないのにとヴィクトルは続けるが、こればかりは仕方がない。どんな責苦も「敗者の宿命」と甘んじて受ける覚悟はあつた。しかし、自分が自分ではなくなるへ人物支配<sup>ドミネイト・パース</sup>は駄目だ。

体一つで過酷な世界を生き抜いてきたクレマンティーヌにとって、意思に反して身体を支配されるという状況は耐え難い苦痛であつたのだ。

クレマンティーヌが恐る恐る顔を上げると、ヴィクトルが顎で発言を促す。

しかし、言葉に詰まる。これが戦闘であれば状況分析には自信がある。だけど今求められているような、「己の内面」といった自己分析は苦手だ。元々、感情は整理するよりも発散させる質なのだ。

「どうした?」

ヴィクトルの催促に焦る。いまさら「実は欠伸が——」などと云える雰囲気ではないし、奴隷の立場で「何も答えない」という選択肢も無い。ヴィクトルの虚ろな目がただ

ただ不気味だ。

クレマンティーヌは必死に考える。目覚めて何を思ったのか、何を感じたのか。言葉を絞り出す。

「生き残れて安心したというか、気が緩んだ、のかな」

「……」

「そ、それと、無防備に寝たのは、いつ以来かなって。ずっと武器を手放せなかつたから」  
熟睡が久しぶりだったのは嘘ではない。漆黒聖典だった頃は戦い詰めだったし、抜けてからはなおさら武器を手放せなくなつた。まともに寝た一番古い記憶は十数年前、実戦に備えて訓練を受けていた幼少期の頃だ。久方ぶりの安寧に感化され、記憶の奥底に沈んでいた幼少期の思い出が無意識に浮上したのかもしれない。

それが涙腺が緩んだ原因だとは認めたくはないが、目覚めの一瞬、安らぎを感じてしまったのも事実だ。

「ふむ、もう少し気丈夫かと思つたんだがな。——まあいい、聞け」

ヴィクトルが改めてクレマンティーヌの目を覗き込む。

「俺を神と呼ぶな。それと、この部屋にいる間は床で過ごせ。許可が無い限り家具の使用も禁ずる。——これを渡しておこう。アエラと相談して寝床を決めろ」

そう言つて投げてよこされたのは見たこともない上等な毛皮だ。

思わず感嘆する。

「すつごい柔らかい」

「ん？ ああ、名前は何だったかな。ニードルラビット 針 兎だか、スジェアラビット 槍 兎だったかの毛皮だ」

その名前とは裏腹にふかふかに柔らかい毛皮を抱きしめ立ち上がると、いつの間にか人化したアエラに腕を取られる。

「クレマンティーヌはこつち」

相談しろと言われた筈だが発言権は無いらしい。

アエラが指さしたのは書斎の本棚と衣装棚とのわずかな隙間。

指示されるまま毛皮を敷くと、クレマンティーヌは不思議な感覚に襲われる。目の前にあるのは床に敷いた毛皮だ。だがそれは自分に与えられた唯一の居場所でもある。

クレマンティーヌは思う。出会いこそ最悪だったが悲観するほどの事でもないのはと。なにせ本国の連中が待ち望んでいた神の御許だ。服従を強いられてはいるが、これほど安全な場所は無いだろう。

「2人ともこつちに来い」

ヴィクトルに呼ばれアエラとともに彼の足元に侍ると、目の前に陰茎ペニスが差し出される。

「あ……」

初めて「外」で見るヴィクトルの陰莖<sup>ペニス</sup>。歪で醜悪、人間のそれと大きくかけ離れた形状だ。だが、それを目にした瞬間、身体が嫌でも反応する。下腹部がカツと熱くなり自然と秘裂から蜜が垂れる。陰莖<sup>ペニス</sup>を形どる凹凸のひとつひとつを身体が覚えていたのだ。ヴィクトルの中で散々自分を黽つたあの最適化された触手だ。

そう理解したクレマンティーヌは反射的に仰向けに寝ると、両足をM字に開脚する。そして自分の臀部を抱え込むように両手をまわすと、大陰唇のリングに指を通し左右に大きく広げる。

クラリーナに仕込まれた「服従と「おねだり」のポーズ」だ。

「覚えていたか。だが、まずは奉仕だ。アエラ、服を脱いでクレマンティーヌの顔に跨れ。クレマンティーヌも分かるな？ 口でアエラを満足させる。それができたら使つてやる」

その言い様に軽く自尊心を傷つけられるがぐつと堪える。彼らにとって自分は文字通り塵芥にも等しい存在だ。今は少しでも心証を好くし、待遇が良くなるように振舞うだけだ。

「うっ、ふううっ!!」

息苦しさを我慢しながらあてがわれた秘裂に舌を這わすと、すぐにアエラの放つ雌の香りにあてられて疼きが強くなる。膣がうねり小陰唇がヒクヒクと痙攣する。



早く逝つてほしい。そう強く願うが、奉仕経験などないクレマンティーヌにアエラを素早く満足させられるだけの技量は無い。

互いに交わす言葉が無いまま、湿った卑猥な音と、時折漏れるアエラの喘ぎ声だけが部屋に響く。アエラが達し、顔面をその蜜で濡らしたクレマンティーヌがご褒美にありつけたのは、もうしばらく経つてからだった。

\* \* \*

翌日、馬車で城塞都市エ・ランテルを目指すことになったので、出発の前に「出自設定」をどうするか、現地人のクレマンティーヌを交えて話し合う。「異世界からきました」と素直に言えれば楽なのだが――。

「スレイン法国や竜ドラゴンロード王を相手にコソコソはしたくないわよね」  
クラーナが強気だった。

「本気か？ 竜ドラゴンロード王は間違いなくカンスト級だぞ」

「敵対しなければいいのよ。定住するにしろ放浪するにしろ、今までの異相協自分たち会を捨てるのつて癪じゃない？」

「まあな。でも、だからと言ってプレイヤーであることを公言する必要はないと思うぞ」

「そりやね？　ただ、身分を偽るにしても大きくいきましようよ。貴族とか、王族とかさ。——クレマンティーヌはどう思う？」

「う、嘘を見破る術があるので、下手に偽るのは危険だと思いまあ、ずう」

話を振られたクレマンティーヌは朝から陰核クリトリスを拡張しているので息が荒い。

「ああ、そんなのもあつたわね」

対するクラリーナは意に介さず受け答える。

「た、ただ王国も帝国も身分とか権威つてやつに弱いんで、多くを語らず、勝手に、い勘違いさせるのは、有りかなと」

「それ採用。いいわよね？　ヴィクトル」

「ああ、それでどんな設定にするんだ？」

「某国から逃げ延びた貴族つて事にしましょう」

クラリーナが言うには全盛期の異相協会は拠点持ちだったので「城に住んでいた」や、ユグドラシルは「終わった」のだから「帰る場所を失った」も嘘にはならない。「占いや物品販売で生計を立てている」も後期のギルド形態から大丈夫だろうと。

つまり、これらの言葉尻から何を想像するかは聞き手次第だ。

「その為には馬車の外装も変えなきや駄目ね」

「なんだ、魔女の家じゃダメなのか？　なんだかんだ愛着があつたんだがな」

「地固めするまでは我慢なさい。こういうのはハツタリが大切なのよ」

「そういうものか？」

「そういうものよ」

そこまで言うのなら異論はない。

自信たっぷりなクラリーナに任せることにした。

「分かった。さっそく始めよう」

## 第6話：城塞都市エ・ランテル

「で、これがお前の言うハツタリか」

「そうよ。ゴージャスでしょ？」

城塞都市エ・ランテルへ向かうにあたり、馬車はクラーナの手によつて『魔女の家』から『汽車の客車』に換装された。外観の特徴としては窓がなく、一点の曇りのない純白を基調に金細工の貝殻や植物を意匠としたロカイユ装飾が細部に至るまで施されている。客車の側面や御者台の日差し部分には異相協会のロゴマークが配置されていた。

4頭のアイアンホース・ゴレムもさながら白馬のようで、馬車と同様の装飾からそれ単体で芸術品と見紛うばかりの姿だ。

なお、出入口が左側面にひとつ増えた以外は内部に変更はない。

「これだけ大きいと威圧感があるな」

荷台の全長は6メートル、高さは3メートル近くある。本来は繊細さや優雅さを放つ意匠が、その大きさと高貴さが相まって近寄りたいたい雰囲気醸し出している。

「狙い通りよ。さあ、出発しましょうか」

『設定』に従いエ・ランテルへは南から目指す。

ほどよく離れた地点に転移した後、何食わぬ顔で馬車で乗り付ける手筈だ。

\* \* \*

「意外と並んでいるな」

昼頃に着いた南門には審査待ちの馬車が列をなしていた。

どうやら自由な往来はできず、検問や徴税を受ける必要があるようだ。

俺の疑問にクレマンティーヌが答える。

「居住区が複雑だからさ、こーして外を回ったほうが速いんだよね」

夜に訪れた時には気づかなかったが、聞けばエ・ランテルは背の高い城壁からなる三重構造で、都市中央部には行政区などの重要な区画が占めているらしい。そのせいで周囲の市街区の移動、とりわけ南北や東西のように都市の反対側への往来に難があるとのことだ。

また地理的にも三ヶ国の中心に位置するため、他の王国の都市よりも物流が盛んらしい。

遠目に荷馬車の御者らが衛兵に何かを提示している。

通行証の類いで審査を簡略化しているのか、順番待ちの列は少しずつではあるが止ま



彼が俺を無視して「お嬢さん方」と言ったのには訳がある。屋根に就く俺とジルは透明化していた。彼には御者台に座るマーシャとクレマンティーヌしか見えていないのだ。

「お務めご苦労様です。我が主の名はクラリーナ・デア・セルペンス・ウエネフィカ様です。遙々南の地より旅をしてまいりました。主は都市長との面会をご希望されております。お取り次ぎ願います」

クレマンティーヌは用件だけを述べる。彼女曰く「命令され慣れている相手」には、できる、できないを問わず、要求だけ付きつけるに限るらしい。

「か、畏まりました。すぐに伝令を向かわせます。それと、反対車線を止めてるので、今のうちに馬車を進めていただけると助かります」

その言葉に改めて門を見ると、確かに都市を出ようとする馬車が止められている。

「お心遣いに感謝します」

クレマンティーヌが目配せすると、手綱を握るマーシャが待機列から馬車を出し、門へ向けて進ませる。

順番を抜かされた者たちの視線を浴びるがそこに怒りは無く、どちらかと言えば見たことのない豪華な馬車に強い興味を示していた。

俺は屋根の上で思わず感心する。

「お前の言う通りになったな」

「連中は名前が3つ以上連なる相手を貴族様だと思い込んでいるからね」

「これだけの馬車を目にすればその思い込みも強くなるってわけか」

「そーいうこと。いまごろ紋章官が慌ててるんじゃないかな」

「これが記録に残るのか」

異相協会のロゴは「丸い赤地」の中央に、手の平に「目」を持つ人間とも異形ともとれる「黒い五指の手形」が配置されたものだ。生産系ギルドなので職人の手を表しているということがある。

「そだね。特に指摘しない限り「ウエネファイカ家の紋章」として記録されるんじゃないかなあ。そして潜入している帝国と法国の諜報員がその情報をすっぱ抜くってわけ」

ギルドロゴが個人の家紋になるのはクラーナも望まないだろう。

どうするか相談が必要だ。

「それにしても、この国の行く末が心配になるザルさだな」

門を抜けると広い空き地――、次の市街区の入口まで広場になっていた。駐屯区なので有事の際はこの広場に兵が整列して出撃に備えるのだろう。平時の今は荷の積み替



えをする商人の荷馬車や、護衛に雇われた傭兵たち、これから遠征に向かう一団でこつた返していた。

異相協会の豪華な馬車が周囲の注目を浴びる。商人の下男や傭兵らの下卑た視線がマーシャとクレマンティーヌに向けられるが近寄って話しかけようとする者はいない。その様子からはわずかに貴族への畏怖を感じる。

この地の権力者に「切捨御免」きりすてごめんのような特権があるのかはわからないが、少なくとも彼らを隔てる「身分の差」は確かにあるようだった。

馬車を誘導しに若い衛兵が現れた。

「市長の元へ使いの者を出しましたので、戻るまで今しばらくこちらでお待ち下さい」

「畏まりました」

「あと記録を残さなきゃならんので、お手数ですが代表者のお名前と人数、来訪の目的をご記入下さい」

衛兵が台帳のようなものをクレマンティーヌに差し出す。

クレマンティーヌがスラスラと記入する姿を上から覗いてみるが、翻訳機能のないペストマスクでは文字が読めなかった。後で知ったことだが、本来はここに記載された内容を元に通行税が決まるらしい。

「どうぞ、ご確認下さい」

「人数は9名。目的は補給と商いですね。ご協力ありがとうございます」

台帳を確認し終えると衛兵は立ち去る。クレマンティーンは通行税の有無を聞かない衛兵も確認しない。クレマンティーンは意識してのものだが、衛兵は職務を全うする気があるのかあやしいところだ。「上に連絡取っているし、彼らが何とかする」とでも考えているのだろうか。

「ヴィクトル様、迎えと思われる馬車が来ました」

再びジルからの報告に視線を上げる。

直後に数名の衛兵を連れた黒塗りの馬車が横付けする。

中から仕立ての良い服を着た男が降り、クレマンティーンと二三言葉を交わす。

「私は秘書官を務めるミカル・アルテンと申します。ウエネフィカ様のお迎えに上がりました。こちらの馬車にてご案内したく、お手数をお掛けしますが乗り換えを願います」

「主に確認します。少々お時間を頂きます」

用件を聞いたクレマンティーンが馬車に入り、しばらくするとクラリーナを伴って現れる。

クラリーナを見た秘書官が息を飲む。それもそのはずで、彼女の衣装は色こそいつもの真紅だが、普段着ているローブではなく貴族風の豪華なドレスを着ていた。膨らんだス

カートは薔薇の刺繍で溢れ、裾や袖といった端々が白いレースで飾られている。造花をあしらったベルジエールハットを被ったその姿は、アバター由来の整った顔立ちと濡れ鳥のような長い髪も相まって完成された美となつて佇んでいた。

クラリーナは金細工で飾られた漆黒の杖を突き、クレマンティーヌに手を引かれながら馬車を降りる。

そして迎への御者に声をかける。

「出迎えご苦労様です。私がクラリーナ・デア・セルペンス・ウエネフィカ。道中、良しな  
に」

「ここ、こちらこそ！ あの、こちらの都合で恐縮ですが、従者をお連れの場合は2名までとさせて頂きたいのですが、宜しいでしょうか」

「このクレマンティーヌのみで構いません」

「畏まりました。では、さっそくですが、乗車願います」

俺は馬車の出発に合わせてマーシャとジルへ新たな指示を出す。

「ジル、〈パーフェクト・アシッドアップル完全不可知化〉のまま付いて行け。万が一の時は撤退を優先しろ。発砲も許す」

「お任せください」

短い返事と共にジルの気配が消える。

「マーシャ、このまま外で警戒を頼む。判断に困る問題が起こったら直ぐに呼べ」

マーシヤは周りの目に不自然に映らないよう無言のまま小さく頷いてみせた。

\* \* \*

俺は工房に移動する。今からこの地域の通貨を調達するために、ありふれた物で、且つ物欲をそれなりに刺激する品を見繕う必要がある。

とはいえ錬金術師アルケミストの俺に用意できるものは少ない。それも「クレマンティーヌ先生」のお眼鏡にかなう物となると相当な制限を受けることとなる。

「薬と香水で何とかなればいいが」

この世界の技術水準は低い。例えるなら駆け出しプレイヤーたちの集まりにカンスト勢が紛れ込んだようなもので、詰まるところ異相協会の品は「良すぎる」のが問題だ。

つまり、やりようはある。別にユグドラシル産のアイテムが全て良品である訳ではない。「低品質なアイテム」と常時発動技能パッシブスキルを切った「素の製作技能クラフトスキル」で、低レベル帯向けのアイテムを作ればいい。

「意図的に品質を下げた各種治療薬」と言うこと聞こえは悪いが、要は誰もがお世話になる初心者用の水薬だ。ポーション

「こんなもんか」

鞆には薬の他、念のために護符の類いも詰めた。

もちろん護符の効果も初心者向けだ。

目下の課題はふたつ。金稼ぎと、物件探し。この世界の因習に詳しくはないが、少なくとも馬車生活には限界がくるはずだ。不動産事情は追々調べるとして、理想は土地込みで家を手に入れたい。

そして、それらギルドの事情とは全く関係なく楽しみなことがある。

「アエラ、立て」

寝そべっていた狼状態のアエラを立たせる。

体長が2メートル弱、床から肩まで体高は70センチ弱。大型と言っても差し支えない彼女の身体にハーネスを付け、そこに先ほど用意した鞆を固定する。

そう、アエラを「外」に出すのだ。念願の散歩に心が躍る。

「重くないか？」

『大丈夫です。運ぶだけならまだまだ余裕です』

俺の問いにアエラはマジックアイテムを通して念話で答える。本来は互いに離れた場所にいる者同士で意思疎通する小道具だが、彼女の首輪に仕込むことで狼状態でも会話ができるという訳だ。

「それなら素材も少し持っていくか」

言いながら錬金術用の素材を追加する。当然これらも低位の物で、且つプランターで生産できるものだ。

\* \* \*

俺が諸々の準備を終えた頃にクラリーナとクレマンティヌが戻ってきた。

それも見知らぬ男をふたり連れて。

初老の男が感嘆する。

「こ、これは、本当に魔法の馬車なのです。ああ、これは失礼いたしました、バルド・ロフォーレと申します。この都市で商いをさせていただいたる者です。そして隣におりますのが——」

「私は衛兵隊長を務めております、ベルハルト・セデルホルムと申します。今後の入場を容易にするため、恐れ入りますが馬車の中をあらためさせていただけます」

「ヴィクトル・ヴィ・ニエボ・アルヒミアだ。宜しく頼む」

居間で挨拶を交わし、クラリーナに視線を送って会話を促す。

手狭なので接客するジル以外は他の部屋で待機だ。

「レッテンマイア都市長、ラケシル魔術師組合長、そしてこちらのロフーレ様が共同保証人になってくれたわ」

「共同保証人？」

俺の疑問にバルドが補足する。

「エ・ランテル限定ではありませんが、ウエネフィカ様とアルヒミア様を貴人として認めるものになります。他の王国内の都市へ移動される場合は、先方の都市長へ提示すれば基本的に貴人待遇は継続されるはずですよ。入国許可証と通行証、取引許可証は準備中とのことですので後日届くはずですよ」

彼に言わせるとこのような話は珍しいものではないらしい。隣国同士ならまだしも交流の無い国や遠方からの旅人は身元を保証できない。そのため滞在先の名士が保証人となる習わしがあるのだ。もちろん保証人となるからには詐欺師を見抜くそれ相應の洞察力と目利きが必要になる。会談に魔術師組合長と大商人が同席したのはそうした査定のためだ。

そして社会的信用を賭けてまで“旅人”の話を聞く理由は外からもたらされる情報に価値があるからだ。この世界には人間より強い種族や魔物が多くいる。そんな中で“無事に伝達された情報”が重宝されることは想像に難くない。高度な通信手段や記憶媒体がない世界ならではの“情報の価値”だ。

大昔の地球、陸路と川岸しか貿易手段がなかった時代、地域に関係なく普遍的であった価値観。シルクロードを繋ぐ人々が客人を手厚くもてなすのはそんな理由からだ。

「なるほど、共同保証人の件は了解した。——商談があるならクラリーナに任せろ。セテルホルム殿、検分するなら案内するが、どうする？」

クラリーナとクレマンティーヌがどのように保証を勝ち取ったのかは後で聞くとして、俺は衛兵隊長に向きなおる。

「あ、はい。宜しくお願い致します」

察するにベルハルトは気後れしているようだ。

それも仕方がない。「馬車で長旅」と聞いてくたびれた幌馬車を想像していたのだから。それなのに目の前に現れたのはそこらの貴族ですら所有していない豪華な馬車——「魔法の馬車」とくれば気後れしない方がおかしい。

\* \* \*

ロフーレをクラリーナに任せ、俺はベルハルトを案内する。

最後尾の居間——かつては魔法の巨釜に見立てた「ダグザの大釜」があつた空間から廊下にする。そして手前から順当に「ハブ空間」に繋がる扉を開く。



「倉庫ですわね？」

「ああ、基本的には食糧や補修材などの消耗品がしまつてある」

本来なら様々な部屋に通じる扉が並んでいるはずだが、ベルハルトには別のものに見える。エ・ランテルに入場する前から現地人を招き入れることを想定して強力な幻術で隠したのだ。

五感を騙すほどの幻術なので、彼がいま見ている何かを手にとろうとも看破は難しいだろう。

「畏まりました。では次の部屋をお願いします」

部屋をひとつ移動して俺の部屋へ案内する。

扉を開けるとアエラとクレマンティーヌが寛いでいる。そこへ――

「うわ?!」

ベルハルトが怯んだように一歩下がる。

「お、狼?」

「入る前に言うべきだったな。驚かせてしまったなら申し訳ない。――アエラ」

アエラを手招きしてお座りさせる。

きちんと躡けていることをアピールする。

「名前はアエラという。人を襲うことはないから安心してくれ」

「撫でてでも大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

念話でアエラに念を押しつつベルハルトに安全を保証する。

種族特性でカルマ値がマイナス寄りのアエラだが、愛想よく振る舞える程度には演技ができるようだ。

ベルハルトが恐る恐るアエラを撫でる。

「た、確かに賢そうな目をしていますね。ただ、もし連れだすなら手綱を付けてください。これだけ大きいと不安に思う住民もいると思いますので」

「了解した。用意しよう」

やはりと言うべきか、大型の獣が繋がれることなく野放しでいるのは問題らしい。

「クレマンティーンは——、既に会ってるか。なら散らかって見苦しいかもしれないが自由に部屋を確認してくれ」

そう言いながら俺はソファーに腰掛け、ベルハルトに確認作業を任せる。入口から見渡せる程度の広さしかなく、かつ家具も多くない。彼に付いてまわる必要もないだろう。

ベルハルトは軽く目を通しただけで検分を終えた。

無造作に置いてある物を失敬した素振りも無い。

アエラとクレマンティヌを部屋に残し、最後の一部屋、クラーナの部屋に案内する。ここには幻術で角と翼を隠したりリ、リエ、リオの三人がいる。

「彼女たちはクラーナ専属の侍女だ」

ベルハルトがリリたちと挨拶を交わしている様子を見守る。

リオのことはあえて説明しない。そもそも「男の娘」をどう説明していいのか分からない。

ベルハルトは部屋を見渡す。

「それにしても、先ほどの部屋もそうでしたが、感覚がおかしくなりますね」

どうやら外から見る馬車の大きさと内部の広さのズレに違和感を覚えているようだ。確かにゲーム時代には大して気にならなかつたが、現実となった今ではなんとも言えない不思議な感覚に陥る。例えるなら遊園地にある視覚や平衡感覚の錯覚を楽しむ見世物小屋に入ったような感覚だ。

「慣れるものさ」

「正直いいますと羨ましい。我が家も広くしたいものです。——さて、検分はこれくらいで充分です」

俺の部屋に続いて検分の割にはずいぶんと確認がおざなりだ。

「もういいのか？ 隅々までひっくり返されることを覚悟していたんだが」

ベルハルトが静かに首を振る。

「ご婦人の部屋ということもありますが、私も我が身が可愛い。あからさまに不審でなければ深く追及はしませんよ」

「そうか」

反応の薄い俺に、ベルハルトが真面目な表情を向ける。

「老婆心ながら申しますと、今後出会う王国貴族にはお気をつけください」

「何が言いたい？」

「貴方がたの身分はレッテンマイア様がお認めになりました。それも貴族待遇です。

——これはリ・エステイーズ王国では重要な意味を持ちます。貴方がたは言わば「王派閥」の客人となりましたが、同様に「貴族派閥」からも接触があるはず。どちらに付けとは言いません。ただ、ご用心ください」

どうやら政争に巻き込まれないか心配してくれているようだ。

「流れ者に王派閥だの貴族派閥だのと言われてもな。だが忠告はありがたく受け取ろう」

最下層民だった俺には政治自体が無縁だった。

面倒ごとに巻き込まれる予感を覚えつつも、クラーナに丸投げしようとして心に決める。

そんなことを考えていると部屋の主が現れる。

「ここに居たのね。これからロフール様のお屋敷に移動するわよ」

\* \* \*

場所は移り居住区内の一角、馬車はロフール商会が所有する別荘に到着する。

バルドの計らいでエ・ランテル滞在中は屋敷を借りることになった。

俺は馬車の外で手綱を付けたアエラをベルハルトに見せる。

「これでどうだ？」

「はい、これなら大丈夫でしょう。ただ今後のためにも冒険者組合で魔獣登録することをお勧めします」

「それは、何か制約を受けるのか？」

「いいえ。本来は冒険者が使役する魔獣を登録するものですが、稀に冒険者以外——例えば趣味で魔獣を飼う場合にも登録を推奨しております。手続き自体はすぐ済みますよ」

ペット登録だと言われてしまえば拒めない。

「近いうちに登録しよう。ところで、この近くに薬屋はあるか？」

クラリーナが商人を連れて戻ったのは予想外だったが、俺は俺で当初の予定どおり手持

ちの商品を売りさばくつもりだ。それにこの世界の錬金術にも興味がある。それを調べたい。

「もちろんありますよ。ここら一帯が商店街ですので、おすすめはバレアレ薬品店ですね。この都市一番の水薬屋ポーションです。この先の通りにある『小瓶の絵』の看板が目印の店です」

「ありがとう、さっそく行ってみるよ。世話になった」

「いえ、こちらこそ貴重な経験をさせていただきました。アエラちゃんも、街中だけでも我慢してくれな」

ベルハルトは動物好きだった。初めこそ恐る恐るといった感じだったが、別れ際に頭を撫でるくらいには慣れたようだ。

これなら街中へ連れて歩いてても大丈夫だろう。

アエラを連れながら教えてもらった店を目指す。

日はやや傾き始めているので過ごしやすい。何十年振りかに見える青空だ。

城塞都市なので物々しい雰囲気を想像していたが、こうして実際に歩いてみると道行く人々は活気に満ちていて表情は明るい。

気になる点と言えばむしろ自分自身で、コスチューム外装がゲーム時代のままなので、赤毛の狼「赤毛の狼」を連れているのだからとかく人目を引く。初代ギルドマスターの「商人営業は目立スタイルってなんぼ」で慣れ親しんだものだが、しかしゲームとは違い「生の表情」で見られるとなんとも居心地が悪い。

商店街を見渡すと色とりどりの看板が目に入る。文字は小さく、とにかく扱っている商品をそのまま絵に描きおこしたものが多い。家具屋なら机や椅子、酒屋なら酒樽やコップといった感じで分かりやすい。

クレマンティーヌからリ・エステイーズ王国は識字率が低いと聞いていたのでこの看板の作りにも納得だ。

「アーンだな」

目当ての店を見つけ、扉を開けるとチリンチリンと鈴の音が鳴る。

その音に店主と思われる老婆が顔をだす。

「いらつしやい。……何を求めだい？」

一瞬言い淀んだところをみると、赤い格好の俺を不審に思っているようだ。店に入る前にマスクを外すべきだったと反省する。

素顔を晒し、改めて用件を述べる。

「今日の都市に着いたばかりの旅の者でね。路銀を工面したい。手持ちの水ポーション薬や素材

を買い取って貰えないだろうか。ああ、それと、こいつを入れていいか？」

店の外に待機させていたアエラを見せると老婆が目丸くする。

「こりやまた大きな狼だねえ。まあ、きちんと躡けてそうだし、奥の工房に入れなければ構わんよ。——さて、気を悪くしないでほしいんじやが、取り引きの前に『通行証』を見せてもらおうかね」

「通行証はないが、これでどうだ？」

都市長が用意してくれた身分証明書を見せる。クラーナ経由で受け取っていたものだ。

「どれどれ、……なんだい、小綺麗な顔といい名前といい、おぬし貴族かなにかかい？」

まあ、これなら問題なさそうじゃな。わしはレイジー・バレアレ、ここの店主さ。ほれ、買い取ってほしいものがあるなら出しておくれ」

言われるままに持ってきた物を机の上に並べる。

「気になるものがあつたら言ってくれ」

「ふむ、鑑定させてもらうよ」

レイジーが呪文を唱えて品定めする側で、俺も店の商品を鑑定してまわる。ざつと見渡しても話に聞いたとおり下級治癒薬マインナーヒーリング・ポーション以上のものは見つからない。しかし、ゲームには無かつた日常生活に即した薬が散見されて興味深い。



そんな薬を眺めながらリイジーに話題を振る。

「バレアレ殿、やはり無許可の取引は違法なのか？」

リイジーが最初に通行証を求めたということは自称旅人が正規のルートで都市に入場したのか確認するためだ。不正に入場した者との取引を禁止する規則があるのかも  
しれない。

「規模によるのう。小口の取引で王国国民同士ならいちいち許可なんぞ要らんが、商いを生業とするなら領主や組合の許可が必要じゃ。怪しい品々から民を守るのも為政者の務めじゃからな。まあ、おぬしの場合は都市長の後ろ盾がある。露店を出す程度なら大丈夫じゃろ。——ほれ、選んだぞ」

リイジーが選んだのは薬草2種類に茸が1種、ドラゴン由来の素材がふたつ。それに水薬ポーションがひとつ。

素材はそれぞれユグドラシルではナイトシエイド、コーンフラワー、ルミナス・ルー  
ジユラ、ドラゴンの血、ドラゴンの胆汁と呼ばれていたアイテムで、水薬ポーションには  
ニョートルライズ、ポイズン  
〈毒の中和〉が込められている。

「ここらじや見ない品種だね。それに、この解毒薬はわしが作るものよりできがいい。  
——どこで手に入れたんだい？」

リイジーの目がスツと細められる。

熟練の錬金術師アルケミストの顔だ。

「自作だ」

「こりや驚いた。おぬし、同業者かい」

「そうだ。それで、どうだ？　いくらになる？」

リイジーは一瞬なにかを言い淀む。

「——そうさね、薬草と茸は合わせて金貨5枚、ドラゴンの血と胆汁は金貨30枚、水薬ポーションは金貨20枚、合わせて金貨55枚でどうじゃ」

「それでいい」

「なんじゃ、もつと高くしようとか思わんのかい」

即答した俺にリイジーは呆れた様子だが、相場が分からないのだから了承するほかない。  
い。

「その手の交渉は仲間に任せっきりでね、苦手なんだ」

嘘は言っていない。ゲーム時代は商人職を持つメンバーに売買を任せていたし、彼らが引退した後は付き合いの長いプレイヤーに委託していた。

いま異相協会で商人職を持っているのはマーシヤのみ。それもエクステンジ・ボックスで査定額を底上げする特殊技術のためだけで、残念ながらそれすら最大効率を出せるレベルには達してはいない。

「むう、なんか悪い気がしてきたのう……」

眉をひそめながらも金貨を用意するレイジーだが、そこへ鈴が鳴り新たな来客を知らせる。

「レイジーさん、——つて、お邪魔だったかい？」

現れたのは化粧の濃い40代前後の女。

俺の姿を認めると様子を窺うように声を落とす。

「なんだいマリ。いつものかい？」

「え？ ええ、そうなんだけど、取り込み中なら出直すわ」

「いや、丁度いい。今から向かうよ。おぬしも付いておいで」

話についていけず返事に困っていると、レイジーがたたみかける。

「なに、希少な素材を都合してくれた礼じゃよ。小遣い稼ぎだと思っついておいで。

このままじゃ寝覚めが悪いからのう」

「そういう訳ならついでにこう」

素材を安く買い叩いたことを気にしているようだ。

そうと分かれば老婆の心を軽くするためにひと肌脱ぐのも悪くはない。

それにレイジーが興味を示さなかった品を売る機会だと思えば渡りに船だ。

「孫に店を任せてくるから、ふたりとも外で待つておいで」

店の外でマリーと呼ばれた女に話しかけられる。

「ねえ、見ない顔だけど、レイジーさんとどんな関係？」

「ただの客だ。旅の路銀を工面していたところだ」

「ふーん、旅人ね。あ、もしかして少し前に南門に着いた馬車？」

「そうだが……」

「呼び込みの子たちの間で噂になってるわよ、貴方たち。怖くて近づけなかったってねえ、旅をしてきたならさ、色々溜まってるんじゃない？ うちにいい娘がいるわよ」

最後の言葉で察する。

これから向かう先はその手の店なのだろう。

「生憎と大所帯でね。無駄遣いできないんだ」

「あら酷い。無駄遣いだなんて傷つくわ」

「マリー、色をかけるんじゃないよ。これから世話になる相手なんだ」

レイジーの助けが入る。

マリーはバツが悪そうにするが反論する。

「レイジーさん。でも、こんな色男を連れていたらうちの娘らだって大騒ぎよ？」

「騒がないようにしつかり手綱を握つときな。こやつはわしより腕が良いんだ。せつかくの機会をふいにするつもりかい。おぬしも仮面で顔を隠しな」

促されるままペストマスクを装備する横で、マリーが信じられないといった表情を浮かべる。

「リイジーさんよりも腕が上!？」

その様子に堪らず口を挟む。

「待て。俺に何をさせるつもりだ？」

「話は後じゃ。今は先を急ぐよ」

リイジーは周囲を気にしながら声を落とすと、俺とマリーを急かすように歩き出すのだった。

## 第7話：媚薬と娼婦

バレアレ店を出た俺は、リイジーとマリーに導かれるように街中を歩く。行き先はマリーの勤め先だ。

道すがら話を聞くと、どうやらマリー自身は女将ではなく事務仕事に従事する「引退組」らしい。

進むにつれて街の様相が徐々に派手になる。昼過ぎにもかかわらず、どこもかしこも店支度に追われている。つまりは繁華街よりも歓楽街、行き先が行き先だけに夕方以降に営む店が多いのだろう。

そして、店構えの派手さに反比例するように路面が悪くなる。中央の大通りは石畳だったが、ひとつ区画がずれただけで建物の基礎部分だけの敷設になり、通りは砂利を敷いただけになってしまった。この世界にローマ帝国は現れなかったようだ。

「ずいぶんと中途半端な整備だな」

「道のことかい？ この辺はまだいいほうだよ。ああ、そうだ。貧民街には行くんじやないよ。治安が悪いからね」

リイジーの忠告にマリーも頷いている。

統治するうえで治安維持は重要な要素だ。しかし、完全環境都市の下層や外がそうだったように困窮する人々の制御は難しい。異相協会の設定を思うと忠告に従って距離を置くべきだろう。

「着いたよ。裏に回ろうか」

「店構えが違うのは面白いな」

「裏」と言うので勝手口から入るのかと思つたら裏は裏で別の店だった。表通り側は娼館で裏通り側には洗濯屋の看板が掲げられている。娼館に勤めるマリイが裏から入るということは建物自体が内部で繋がっているはずだ。

俺が面白がっているとマリイが振り返る。

「珍しいかい？ どこも同じだと思つていたよ」

彼女によれば少なくとも王国や帝国では珍しくもない営業形態だという。特に売春を兼業する店が多く、奉公先に恵まれなかった者——例えば口減らしにあつた者、容姿に恵まれなかった者、元奴隸、身体が不自由な者などなど、生きていくだけでやつとの者たちが最後に流れ着く場所らしい。

思いかえせば完全環境都市の中下層区や外縁区にも確かに存在した。言わば行き場を無くした者たちの緊急避難先だろうか。そこでどう扱われるかは本人の能力と運次第なのだが。

「洗濯女、飯盛女、湯女といえはほとんどが訳ありさ。娼婦一筋でいける女は一握りよ。さあ、入って」

店に入ると扉が堅く閉じられる。鍵をかけ、さらに門までもかける用心深さだ。

奥へ向かう途中、通りかかった洗濯場で水が張られた桶を前に数人の女が揉み洗いをしていた。

洗濯に集中している女もいればペストマスクの俺にギョツとしている女もいる。

それらを横目にさらに奥に進むと通路の雰囲気が変わる。恐らく娼館側の区画に入ったのだろう。一番奥まった部屋に案内された。

室内には小さな机がひとつに椅子がふたつ。粗末だが清潔なシートが敷かれたベッドがひとつだけという簡素な部屋だ。

俺はペストマスクを外し、リイジーに向きなおる。

「そろそろ説明してくれてもいいんじゃないか？」

「なに、診察を手伝ってもらうだけじゃよ。ただ、わしは規約違反、おぬしは組合未加入だからのう。人目のある所で話せなかつただけじゃ」

詳しく聞けば神殿や薬師が提供する価格帯では治療を受けられない者たちを相手に、通常よりも安い値で診るらしい。そのため人目のある大通りで話すわけにはいかなかったのだ。特に神殿勢力が治療に関して口煩く、冒険者組合にまで圧力をかけるほど



だという。

とはいえ、貧しい職人やその家族が身を売るのはよくある話のようで、大衆の「売春行為」への理解は少なからずあるらしい。そのおかげで男娼や娼婦はいまだに市民権を失わずにすんでいるとのことだ。

レイジーは嘆息する。

「おおつぴらに診てやることはできんが、まあ、奴らにも世間体がある。ひつそりと診ているうちはわざわざ扉を蹴破ってまで咎めにはこないさ」

「お目こぼしがあるだけマシってところか」

「そんなところじゃ。さあ、準備をするよ」

準備を進めていると扉が開く。目を向けるとマリーよりさらに10歳ほど齢のいた女が立っていた。

白髪で細身のその女は親しげにレイジーに話しかける。

「レイジーさん、今日はふたりで来たんだって？」

「臨時の助手じゃ。質のいい品を扱っているから見とくんだね。ここで買わないと損だ

よ」

「貴女にそこまで言わせるなんてね。後で見せてもらうわ。そして、初めまして。助手さん」。この女将をやつてるグニラ・ブレンドレルよ。グニラって呼んで」

「ヴィクトル・ヴィ・ニエボ・アルヒミアだ。好きなように呼んでくれ」

「あらあら、ご立派なお名前ねえ。せっかくだから名前で呼ばせてもらおうかしら」  
グニラの目に艶が増す。

そんな彼女の態度にリイジーが呆れる。

「お前さんまでそんな調子じゃ先が思いやられるわい」

「あら、引退したとはいえ女を捨ててはいないわよ？」

「いい加減にせい。早く娘らを連れてきな」

「あつはつは、はいはい。すぐに戻るわ」

ふたりのやり取りは気心の知れたそれだ。

長い付き合いであることがわかる。

娼婦を待つかたわら最終確認をする。

「何人診るんだ？ 手順は？」

「9人じゃ。わしが“こいつ”で娘たちを調べる」

リイジーが小指ほどの“青く細長い紙”を取り出す。

「唾液を含ませて赤くなったら健康、橙色は風邪、黄色は性病を表しておる。症状にあわ

せてそこにある薬を渡してやっておくれ。簡単じゃろ？」

風邪や性病にも種類があるはずだが、リイジーが用意した薬は少ない。鑑定するとそれぞれが複数の効能を持つ合剤で、ひとつの薬で幅広く対応できるものだった。

しかし、目の前の薬とリイジーの能力が釣り合っていないように感じる。ユグドラシルでも合剤系の技能はレベル30代から習得できた。技能レベルに比例して重ねられる効能が増えるものの、欠点として重ねる数が増えるごとに各効果が減少する特徴があるのだ。

それらを踏まえて薬を改めて見ると、効能の数と効果の高さがユグドラシルのそれと比較しても高い水準だ。リイジーの推定難度は30前後、レベルにして10代と思われる彼女が作ったとなれば、武技と同様この世界独自の理が働いているのだろう。

「よくひとつにできたな」

「王国以外じゃ使えんがのう。数十年の賜物じゃよ」

リイジーの口ぶりからすると、この地域で多くみられる病に限定して調合しているようだ。長く地域に貢献してきたからできる技だ。

「予防薬は渡してある。居てもひとりかふたりぐらいじゃろう。——来たようじゃな」

扉へ目を向けると女たちが現れ、入室と同時に黄色い歓声が小さくあがる。俺の顔をマジマジと観察する者もいれば、アエラに興味を示す者もいる。作業場で見た女もいる

ので改めて兼業しているのだと分かる。

彼女たちは作業着のまま化粧もなくすつぴんで、金髪碧眼が多い。ただ身体的特徴は様々だ。片足を引きずる者、片目が無い者、火傷痕が顔の半分を覆う者、両手首から先が無い者、四肢の無い者。五体満足なのは9人中4人だけだ。

そんな彼女たちは診察に慣れているようで、ベッドの両側に人数を分けて腰かける。

「リイジーさん、頼んだよ」

最後にグニラが俺の横に陣取る。とりたてて何かをする素振りはないが、もしかしたら監督義務があるのかもしれない。

「それじゃあ、口を開けな」

リイジーが娘たちの舌に例の紙片をのせてまわる間、俺はアエラに指示をだす。

『アエラ、彼女たちの相手をしてやってくれ』

『お任せください』

現実では廃れてしまったセラピードッグの存在を思い出し、アエラに娼婦たちの相手をさせる。「相手」といっても順繰りに撫でさせるだけだが気晴らし程度には効果があるだろう。

そこへ――。

『面白いことをしているじゃないか』

レイジーの診察を眺めていると、クラーナから〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>が入る。どうやら占術で覗いているようだ。

『ああ、返事はしなくていいわよ、情報共有するだけだから。私と貴方、第五位階まで使えることになってるから。覚えておいて』

その言葉に内心訝しむ。

事前の話し合いでは第三位階、精々第四位階を上限と決めていたはずだ。第五位階ともなれば国家に一人という希少性。世間の扱いは英雄級、下手したら吟遊詩人に歌われていてもおかしくないと聞く。

だからこそ突然の路線変更に戸惑う。クラーナを聞いたただしいが〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>は発声した音を相手に届ける魔法。この場で急に独り言を始めたなら、そもそも〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を懐疑的に思うこの世界の住人に不審がられてしまう。

ここは聞き手にまわるしかない。

『それと、彼女たちに恩を売っておいて。やり方は、そうね——』

ベッドを一周して、最初の娘から順に紙を回収したレイジーが指示を出す。

「エレンとリタは手を上げな。ヴィクトル、ふたりに風邪薬を。その小瓶じゃ」

リイジーが用意した薬から該当するものを処方する。

調剤済みなのでラベルにかかれた注意書きを伝えるだけの作業だ。

「6日分だ。朝食後、忘れずに飲むように」

エレンとリタに薬を手渡す。ふたりは娼婦としての矜持か、笑顔を作ってしつかりと名を売ってきた。エレンは二十歳前後、リタは二十代半ばの娘だ。

「随分と若いな」

「そういうことはもつと齡を取ってから言うものよ。半分はヴィクトルとそう変わらな  
いんじゃないかしら」

独り言を隣にいたグニラに拾われてしまった。

そして自分のアバターの外見が「青年」であることも失念していた。

「すまない、素直な感想だ。他意はない」

「因みにこの中で一番若いのはソフィアよ」

グニラが目を向けた見るからに若い娼婦が顔を赤らめる。

「ヴィクトル、誤解のないように言っておくけど、こう見えてこの子も17歳。成人よ」  
想像以上に若くて思わず聞き返してしまう。

「待ってくれ。王国は何歳から成人なんだ？」

「15歳よ。——ふふ、本当に遠くから来たのね」

グニラは俺の世間知らずなところを面白がっているようだ。

そこへリイジーが回収した紙を調べながら会話に加わる。

「ここ数年で若いのが増えたね」

「そりや毎年戦争してればね。客入りがいいからうちも増やしたいんだけど、部屋が足りないので」

「昔は相部屋があつたじゃないか」

「いつの話だい。他がみんな個室だし、客も嫌がるのよ」

「ああそうかい。——次、アンナ、ナタリー、リリア。客から貰つちまつたようだね」

リイジーが会話を区切り、再び娼婦たちの名前を呼ぶ。

今度は3人、彼女の予測通り感染者がいたようだ。

娘ふたりが手を上げる。ソレーヌと呼ばれた隻眼の娘と、ナタリーと呼ばれた両手の無い娘だ。娘と称したがふたりとも30代くらいだろうか。

ソレーヌに用法用量を伝えて薬を渡す。そして、手のないナタリーへの対応と、そもそも手を上げなかつたリリアはどの娘だろうと悩んでいると、横にいたグニラから声がかかる。

「ヴィクトル、ナタリーとリリアの分は私が預かるよ」

グニラや娼婦たちの雰囲気ですれとなく察する。ベッド中央に寝かされていた四肢

の無い娘がリリアだ。

リリアの傷跡は古く、欠損箇所は不揃い。痛みを感じている素振りはないものの、注意散漫で心ここにあらずといった様子だ。なぜここに居るのかすら理解できていないようだ。

「この子は心が壊れちまっていますね。まあ、大人しい子だよ」

グニラによると、王国が「奴隷解放令」を制定した際に捨てられた奴隷らしい。悲惨なことに走行中の馬車から捨てられて後続の馬車にひかれたという。

「行きずりのワーカーに助けられたただけだね。持て余していたから私が引き取ったのさ。誰彼かまわず客を『お兄ちゃん』だと思ひ込むから好事家には受けがいいんだけどねえ」

そう語るグニラは僅かに憐憫の相を浮かべた。

「さて、わしは店があるから先に帰る。グニラ、支払いはヴィクトルに渡しておくれ」「待つてくれ、これで終わりか？」

診断を終えて帰ろうとするレイジーを呼び止める。

流石に薬を手渡しただけで終わるとは思っていなかった。



戸惑う俺にリイジーは肩をすくめる。

「これ以上は目を付けられる。診て、渡す。線引きとしては妥当じゃろ。——じゃあ、わしは行くよ。おぬしはこのまま稼ぐといい」

「そうか、色々と助かった。感謝する」

「なに、またエ・ランテルに来ることがあったら寄るといい。今度はもう少しまともな値で買い取るよ」

リイジーが帰り際、グニラに釘をさす。

「グニラ、買い叩くんじやないよ」

「安心おしよ。しっかりと払わせてもらおうわ」

\* \* \*

「さあさあ、自慢の品を見せてもらおうかね」

「自由に手に取ってくれ。各種“香り”と保湿剤、あとは護符の類だな」

アエラの背から鞆を外し、持ってきた商品を広げると娼婦たちが活気づく。リイジーに売却した品以外は酒場で飲んでる男どもを相手に「女への手土産」として売るつもりだったものだ。

「丁度切らしてたのよ」

「わあ、どんな香りがあるの?」

「見て、袋も可愛い!」

彼女たちは職業柄、あるいは女に生まれた性分か、己を飾る香りに興味を示す。香水や匂い袋は大小中があり、価格は銅貨1枚から10枚。お手頃な値段のはずだ。

ただ、個人的には保湿剤も推したい。薬を手渡した時に気づいたのだが、彼女たちは日々の洗濯作業で痛々しいほどに手が荒れていたのだ。スクアレンを主成分とした保湿剤は、そんなヒビ割れて赤剥けた肌に効く。

もつともその原料が「グレマンティーヌ由来」であることは口が裂けても言えないのだが。

「魔除けに健康祈願、まるで雑貨屋さんね」

グニラが盛り上がる娼婦を眺めながら感想をもらす。

「仲間が器用でね、色々扱っている。——そうだ、バルド・ロフーレの屋敷は分かるか?」

「ロフーレ商会の? ああ、知ってるよ」

「今そこに間借りしててな。俺を訪ねてくれれば他の商品も披露できるんだが」

「あら、お誘いを受けたからにはお伺いしようかしら?」

グニラがなにやら含んだ笑みを浮かべる。

「ヴィクトル、惚れ薬はないのかい？」

その一言でわいのわいのと騒いでいた娼婦たちが一齐に押し黙り、全員がその好奇心を隠そうともせず視線を向けてきた。乙女恐るべしと気おされそうになる。

しかし、用意した品に惚れ薬は無い。そして「ありません」では稼げない。

「惚れ薬は無いが、〃その気〃にさせるものならある」

「娼薬かい？ 中毒性が気になるけど、どんなのがあるんだい？」

「お香、塗香、香水、それに飲み薬」

部屋全体に効果を与えるもの、香りを身につけるもの、服用するものを並べてみせる。

「どれも値が張りそうね」

グニラが苦笑する。事実これらの娼薬は先のものとは比べると銀貨3枚から5枚とやや高価だ。なので俺は〃笑顔を作る〃。

「この中からふたつ買ってくれたら、どれかひとつお付けしますよ」

「抱き合わせることね。なら遠慮なく選ばせてもらおうわ」

品定めするグニラに補足する。

「お香、塗香、香水は自分と相手の双方に効く。こっちは無味無臭で飲んだ本人に効果が現れる。どれも感度上昇と多幸福感を得られるが——、飲み薬以外は効果を抑えている。

香りは相手を選ばないからな」

空气中に拡散する香りは少し離れた程度では逃れられない。抵抗力に個人差はあれど嗅げば誰にでも効果がでる。ただでさえレベルの低いこの世界の人間相手では、意的に効果を抑えないと不味いことになるはずだ。

「——そうね、このふたつを頂こうかしら」

グニラが手にしたのは二種類のお香。

「では、ひとつづつ自由どうぞ」

「この香水にするわ」

「飲み薬を選ぶと思っただがな」

「疑う訳じゃないけど、飲み薬は怖いわ」

王国には「黒粉」と呼ばれる麻薬が蔓延していると聞く。店を切り盛りする者としては真つ当な判断だ。しかし、知識として持つていないのか薬効経路の認識が低い。特に皮膚からの浸透を甘くみているように感じる。

現実でも見た目のインパクトでガスマスクばかりが目されがちで、防護服への理解は低かった。湿布や塗り薬には頼るのに、肌を晒すことへの危険性に思い至らないのだから不思議な話だ。

娼婦のひとりが会話に入る。

「試飲できるなら試してみたいわ。女将さん、いいでしょ？」

「カロリーネ。……でもねえ」

顔に大きく火傷痕のある娼婦が名乗りであるがグニラの表情は渋い。

「私、”こんな”だし。ね?」

当のカロリーネからは僅かな焦りがうかがえる。

察するに火傷痕のせいで客を取るのが難しく、稼ぎがないまま世話になることに引け目を感じているのだろう。少しでも役立ちたいという想いが伝わってくる。

「——分かったわ。ヴィクトル、お願いできるかしら」

「もちろんだ。さあ、ここに座って」

アエラのサドルバッグから無ビッチャー・オブ・エンドレス・ウオーター限の水差しとコップを取り出し、注いだ水に媚薬

を数滴たらしめてカロリーネに手渡す。無味無臭でさらに無色なので一見してただの水だ。

「綺麗なコップね。——うん、変な臭いはしない」

カロリーネは口を付ける前に恐る恐る臭いを嗅ぎ、そして一気に飲み干した。

グニラの心配をよそに仲間の娼婦たちが興味深げに取り囲む。

「ね、ね、どんな感じ?」

「味はどう?」

「気分は?」

「冷たくて美味しい水、——変な味はしないわ」

カロリーネはエプロンを外し、動悸を確かめるように胸元へ手を当てる。

「初めてお酒を飲んだ時みたいなの、フワフワする感じ」

「それならお酒に混ぜたほうが自然なのかしら」

グニラが使い方を思案している。

「なんだかんだで興味はあるようだ。」

「あ、身体の奥がジンジンしてきた」

カロリーネが服を緩め、上半身と下半身を恥ずかしげも無く露出する。自慰に耽る訳でもなくただ座っているだけだが、乳首は見るからに固く尖り、秘裂からは早くも蜜が溢れている。

その様子を見た娼婦たちがヒソヒソと囁き合う。

「数滴でこれって凄くない?」

「遅漏の男にも効くのかしら……」

「まだそんなに時間経ってないわよね?」

カロリーネは気分が乗ってきたのか、下腹部を撫でながら俺の手を取る。

「んん、ね、ねえ、触ってよ」

「そうだな、実演してみよう」

一瞬迷ったが、確かに飲んだだけでは周りに葉の凄さは伝わらない。デモンストレーションは必要だ。

俺はカロリーネの横に移動して露出された下腹部を撫でる。

「くすぐりたいけど、す、凄く、気持ちいい!」

カロリーネは撫でただけで身体をビクビクと痙攣させる。秘裂から溢れる蜜が濁り、量も増える。臀部から滴る愛液で椅子はヌルヌルだ。

下腹部を撫でていた手をそのままスルスルと恥丘まで撫で下ろす。陰毛を弄るように陰核を手探ると、探すまでもなく自己主張する芯を見つけたことができた。

「きゃっ!!?」

包皮から顔をのぞかせていた陰核クリトリスを中指の腹でタツピングする。

すでに愛液に濡れていたのので叩くたびにピチャピチャと音が響く。

「あ、あっ! い、っ!?! と、トントンスされるだけでっ!!?」

たいした前戯もなく、タツピングだけでカロリーネは椅子から腰を浮かせて身体を強張らせる。そして彼女の絶頂を察知し、それまで陰核クリトリスを叩いていた中指で尿道口を擦り上げ、そのまま一気に膣へ挿入する。

カロリーネが一際大きくビクツと身体を震わせ、挿入した指を膣が締め付ける。

それでも手を止めない。

「いひいひい！ ああ、あつ？!! ま、まって!! い、クリトリスつてるの、おお!!」

絶頂を繰り返すカロリーネの静止を無視して陰核の芯を裏から責めたてる。プシツと尿道が決壊しチヨロチヨロと尿が漏れるのもかまわず責め続けると、やがてカロリーネは全身を大きく反らせ、間髪入れず盛大に潮を吹きながら果てた。

その様子を目撃した娼婦たちが再びヒソヒソと囁き合う。

「凄い。手だけでこんなに？」

「あつという間だったわね……」

「ちよつと怖いわ」

「薬の効果は十分理解してもらえたかと思う。せつかくだ、未知の薬を飲んでくれた勇氣を称えて感謝を示したい」

娼婦たちが各々感想を述べる中、俺は果てたままぐったりしているカロリーネの後ろに回り、商品にはなかった軟膏を新たに取り出してみせる。

「ヴィクトル、それはなんだい？」

「まあ見ていてくれ」

俺はカロリーネの髪をかき上げて顔の火傷痕を晒す。

「怖がらなくていい。身体を楽にして」

果てたばかりで朦朧とする彼女を諭し、顔の火傷痕に薄く軟膏を塗る。



「……温かい。でも、ピリピリする」

「痛くはないだろ？」

「ええ」

カロリーネは信用してくれているのか、完全に身を任せてくれている。

「何が起こってるんだい？」

俺とカロリーネのやり取りにグニラは落ち着かない。

頃合いを見計らって手をどけてみせる。

軟膏は軽傷治療キョアウインズと生命力持続回復リジエネトからそれぞれ要素を抽出したもので、効能を極力弱めてある。カロリーネには申し訳ないが、この軟膏ではギリギリ完治には届かない。それでも薄く赤味が残っているだけで、化粧をすれば十分隠せるほどには回復している。

「うそ、治ったの？」

「凄い！ え、魔法!？」

「ほら！ カロリーネ、鏡！」

仲間から手鏡を受け取ったカロリーネがその場で泣き崩れる。彼女の身の上は知らないが、顔の火傷痕が原因で辛い思いをしてきたのなら喜びもひとしおだろう。

「グニラ、この軟膏に値を付けるならいくらになる？」

俺の問いにグニラは逡巡する。

しばし考えを巡らせ、すぐに首を振って項垂れた。

「値段なんてつけられないわ。私を知る限り、治療が遅れて傷跡になつてしまつたら治せないはずよ。よほど高位の魔法でないと無理なのよ」

冒険者たちが良い例だとグニラは言う。箔が付いたと古傷を誇る冒険者は多いが、要は金策ままならない駆け出し時代に治療が遅れて痕が残つただけなのだとか。

「それは神殿や王族が知れば必ず欲しがるものよ。価値なんて想像もつかないわ」

「〴〵もしも〴〵で考えてほしい。商売としてだ。対象は平民で女限定、在庫も考えなくていい。どうだ？」

俺の質問にグニラが質問を重ねる。

「ひとつ聞いていいかしら」

「ああ、何でも聞いてくれ」

「どんな傷でも治せると思つていいのかしら」

「後天的かつ毒や呪いによるものでなければな。この火傷もあと一回施せば完治するはずだ」

それを聞いた娼婦たちが騒めく。

グニラはそんな彼女らを目で制す。

「それなら値段は薬そのものじゃなくて、傷のある部位〴〵につけるべきかしらね」

「面白い着眼点だが、その心は？」

「こんな薬、持っていても手に余るだけよ。過ぎたものは身を亡ぼすわ。あんたも襲われないように気をつけなさい」

「ずいぶんと慎重だな。でもまあ忠告はありがたく受け取ろう。——それで、部位に値を付けるとしたらいくらにする？」

なおも値を聞こうとする俺にグニラは呆れ顔になる。

「私ならそうねえ、顔は金貨1枚、片腕銀貨3枚、片足銀貨1枚。身体は上下で分けるか迷うところだけど、とりあえずまとめ銀貨2枚つて感じかしら。この娘らには少し高い値だけど。出せない額じゃないし、平民相手ならこんな感じね。これが貴族相手なら3倍は吹っ掛けても大丈夫よ」

挙げられた値段はグニラが考える重要視する部位順なのだろう。

リイジーの店で見かけた水薬ポーションの値段は、第一位階相当の魔法が込められたもので金貨2枚、第二位階相当で金貨8枚だった。つまりこれら以上に高価だと水薬ポーションを買うか、そもそも神殿に駆け込んだ方が早いことになる。それらを踏まえるとグニラが挙げた値段は効果を弱めた軟膏にしては破格の値だ。

「なるほど、参考になる」

「でも、ひとつ問題があるわ」

言葉を濁すグニラに先を促す。

娼婦たちも静かに聞き入っている。

「客足が凄いいことになるわよ。女は美に対しては貪欲なんだから」

何の事は無い。この薬が世間に知れたら引く手あまたになることは容易に想像できることだ。

「その辺はうちの会長殿がなんとかするさ。——さて」

知りたいことも知れたので会話を区切る。

「希望者がいれば今回は特別に無料で——」

「はい——」

リタが勢いよく手をあげる。

そして上着を脱いで胸元を晒す。

「客に噛まれてさ。この歯型を消してほしいの」

見れば乳房にハッキリと歯型が残っている。

客が独占欲でキスマークを残すなんて話はよく聞くが、噛みつきは行き過ぎだ。

そして、リタの傷を癒している間にも娼婦たちが我先にと服を脱ぎ始める。切り傷や火傷痕、なかには首輪や足枷の痕、鞭打ちの痕などが晒される。「女は美に対しては貪欲」というグニラの言葉が実証されたわけだ。

グニラを見ると当然とばかりに頷いている。そして俺への報酬を用意してくれたのだった。

\* \* \*

稼ぎを終えた俺はクラリーナの部屋に直行する。

豪商の屋敷だけあり応接室はそこそこ豪華だ。

これからクラリーナとふたりきりのギルド会議が始まる。

「おかえりなさい」

「あれで良かったのか?」

「ええ、十分よ」

「それで、目的は?」

「足掛かりにエステでも開業しようかと思つて。前の世界でも紀元前からマツサージはあつたから、もしかしたらつて思つただけど。この世界にもあつてよかつたわ」

「どうやらバルド・ロフールを介してこの世界のことを探りを入れてるようだ。」

マツサージの方法は様々だと聞くが、文化圏によって身体の末端から中心に向かつて施術か、またはその逆で身体を中心から末端へ向かつて施術するかの違いがあるらし

い。どちらにおいても医療行為として認識されてはいたはずだが――。

「異相協会は例えるなら道具屋だろ、なんでエステなんだ？」

「もちろん魔導具は扱うわよ？　ただヴィクトルも実感したとは思うけれど、異相協会の商品はこの世界にとつて劇物。気軽には扱えないのよね」

言いたいことは分かる。「この世界の基準」と言つていいのかはまだ分からないが、周囲に合わせた商品を用意することはできるものの、それは異相協会の本来あるべき姿ではない。かといつてユグドラシルと同じ感覚で商品を用意しても、そもそもそれらを買うだけの財力を持った者は限られるだろう。

ユグドラシルで高レベル帯のプレイヤー相手に商売をすれば平気で億単位の金貨が動くわけだが、だからといつて現実世界の彼らが同じだけの財産を持っているとは限らない。現実とゲームの金銭感覚は異なると考えるのが自然だ。

「悩ましい問題だな」

「だからね、まずは会員制にして客をよりすぐろうかなつて。貴族が幅を利かす社会で女に金をかけられる男が狙いめかしら」

エステを利用する女ではなく、それを支援する男が標的だと言われるようになるほどとは思ふ。

「あと、余裕があれば娼館組合も作りたいわ」

「娼館組合？　すでに在りそうなもんだが」

「在るにはあるけれど、実態は徴税官が税を取り立てるためだけの名簿でしかないみたいなのよ。公娼と私娼を区別するものかしら。犯罪組織と繋がっていることが多いから手を出さない方がいいとは言われたけれど」

その忠告は素直に聞くべきではなからうか。

「危なそうだが、エステだけじゃだめなのか？」

俺の問いに少し間を置いてクラーナが答える。

「娼婦を救いたい——ってのはちよつと大袈裟だけど、神殿のせいで立場が弱いみたいなのよ」

バルドによると、神殿勢力が売春行為を墮落だとして批判的な立場らしい。売春行為を生業としている男娼や娼婦、それらの雇い主などに対して非常に排他的で、神殿での結婚式、祭壇での祈り、奉納などが禁止。果ては墓地への埋葬までが拒否されるという。その影響力は他の組合にも及び、各組合員が男娼や娼婦と結婚することを委縮させるほどだという。

リイジーから掻い摘んだ話と符合する。

「随分な影響力だな」

「まったたく、あつちの歴史をなぞっているようで嫌になるわよね。いいえ、むしろあつち

の方がマシかも知れないわ」

「そうか？ 何の効果もない湧き水を崇めるようなものがマシとは思えないがな」

俺たちの時代では水は奪い合うものだったが、かつては飲んだり浴びたら不治の病が治ったとかで湧き水を奇跡の水だと騒ぐ連中が世界中にいた。湧き場を聖地とし、救いを求める傷病者を信者へと変えた時代があったのだ。

だが、奇跡を裏付けするものはない。科学的に検証しようにも「神への冒瀆」とやらで有耶無耶にされ、50年後か100年後か、人々の記憶が曖昧になり、証拠が無くなった頃になって「あれは奇跡だった」と宣うのだ。

「逆よ逆。効果が無いから依存しなくて済んだの、医学が発展したの。でもこっちは違う。魔法奇跡が実在する。私たちが想像するよりもこっちの世界の神殿は力を持っているわ」

数百年前、プレイヤーらしき「口だけ賢者」なる牛頭人ミノタウロスがこの世界の住人に「手術」を伝えた際、身体を直接開いて治療するその行為を「多くの種族がおぞましく野蛮な手法として受け入れられなかった」とクレマンティーンは語った。その情報と合わせればクラーナの指摘するようにこの世界の住人が水薬ポーションや信仰系魔法に頼り、同時に魔法という奇跡がいかに尊ばれているのかが容易に想像ができる。

癒し手を抱え込む神殿の権力が高いのも頷ける。



「なるほど。売春に携わる者の境遇は理解した」

「この世界の神が救いの手を差し伸べないのなら、いつそ私が困っちゃおうかなってね。でもまあ、個人的な感情によるものだから、ヴィクトルが反対なら諦めるけど」

現実世界で生業にしていたからこそ、クラーナはこの世界の娼婦たちが置かれている状況に思うところがあるのかもしれない。

「先に俺の考えを伝えておく。無償で助けるつもりなら反対だ。対価は金でなくてもいいが、とにかく無償だけはやめておけ」

「対価を取れば協力してくれる？」

「もちろんだ。ただ、お前は『困む』と言ったが、困まれるのは俺たちの方だ。さっきの話を思い出せ。無償にしたら奇跡を求める人が際限なく押し寄せるのが目に見えるだろ。神殿が治療費を取るのはその対策でもあるはずだ」

「確かに、治療方法が魔法ならMP消費は問題よね。信仰系魔法詠唱者を雇って補助おとしたら報酬が必要になる」

無償で人は雇えない。志に惹かれた者が協力を申し出てくれるかもしれないが、そんな奇特な人は稀だろう。善意を当てにする商人はいない。

「神殿の代わりをしたいのなら診療所でもいいと思うがな。漠然と労働組合みたいなものを想像しているのかもしれないが、わざわざ娼館組合を作る必要はないと思うぞ」

「うーん、そうねえ」

悩むクラリーナに助け舟を出す。

「エステにこだわるなら美容以外の売りを用意すればいい。『健康になれる』とか『病気に強くなる』とか宣伝して実際に実感させるんだ。そうすれば娼館組合の方から接触があるだろうさ」

「そう、ね。そうかもしれない。ちょっと難しく考えすぎていたわ」

既存の団体組織に割って入るのは骨だ。利用したほうが手っ取り早い。

「そういえばメッセージで第五位階がどののと言っていたが、詳しい経緯を頼む」

「ああ、あれね」

クラリーナ曰く、都市長との会談の中でクラリーナの世間知らずな様子が「流浪の貴族」設定に真実味を持たせ、うまい具合に話が進んだという。しかし、馬車ひとつで大陸を渡り歩くにはこの世界の人間は脆弱過ぎたようで、それをなした異相協会の武力に話題が及ぶと設定に綻びが生まれたという。そこにクレマンティーヌが即興で補足を入れて事なきを得たらしい。

内容としてはマーシャとジル、それにクレマンティーヌがアダマンタイト級の冒険者

に匹敵し、主人であるクラーナと俺は第五階魔法まで行使できるといったものだった。

しかし、3人のアダマンタイト級に加えて英雄級ふたりは偏りすぎている気がする。「俺まで第五階階はやり過ぎじゃないか？」

「私もそう思ったんだけどね。ほら、最初にクレマンティーヌと相談したじゃない？」

でも、彼女もこの世界では強者の部類でしょ？ その辺の感覚が少しずれていたみたいでさ。最初に決めた設定じゃあ無理があったみたいなのよね」

要約すると国が滅ぶようなできごとから生き延びるには英雄級の武力が必要なようだ。

扱える位階はそのまま異相協会の品揃えになると思えば悪い話ではない。

「地球も酷かったが、こっちの旅行もハードルが高そうだな」

「向こうには観光地なんて残ってなかったじゃない」

辛辣な返しに「それはそうだ」と苦笑する。

クラーナが続ける。

「ああ、あと都市長だけど、上手く豚を演じてはいたけれど、あれは曲者よ」

「腹芸ができるってことか？ そういえば衛兵隊長が派閥がどうのと言っていたな。ま

あ、そいつの相手はお前に任せる。ただ、治療を提供するとなると神殿や裏組織とやら

がちよっかいをかけてきそうだが、その辺はどう考えている？」

「利権もあるし揉め事は避けられないと思うわ。対応のしかたはユグドラシルと同じ。有力ギルドを懐柔して味方にする。この世界だと貴族とか商人が相手になりそうだけれど」

その言葉に俺は腕を組んで考える。

ユグドラシル時代はゲーム内ランキングやコミュニティから他のギルド情報を拾えた。書き込まれた情報の真偽を見極める必要があるものの、手っ取り早く候補を絞り込めた。しかし、この世界では情報収集すらままならない。

クレマンティーヌで例えると、法国出身、家柄が良い、特殊部隊所属等の経歴から彼女は優良な情報源だといえる。しかし、一般人が知り得ない情報を多く持つ反面、市井の情報や市民感覚には少々疎い。その綻びとして現れたのが先に挙げた「一般人を演出する設定」だ。彼女が直接現地に赴いて諜報工作活動をする『風花聖典』に所属していればまた違った設定を思いついたはずだ。

「情報収集が大変そうだな」

「私には占術があるし、それは任せて。都市長やローレとも知り合えたわけだし、地道に人脉を広げていくわ」

頼もしい言葉だ。

「表立つた活動は任せる。代わりに手を汚す必要があれば言ってくれ。俺がやろう」  
俺の提案にクラリーナはわずかに目を細める。

「気遣いは嬉しいけど、独りで背負うものではないでしょ」

「いや、一度手を染めると無自覚に慣れていく。異形化したとはいえ一線は越えないほうがいい」

「それは……、経験則かしら?」

遠慮がちなその問いに緊張が窺える。

「言っとくがやむを得ずだぞ。本業は運送屋だ。扱っていた物がヤバかったからな。襲われることも多かったんだ」

「運び屋つてやつかしら? ——まあ、深くは詮索はしないわ。ただ、やつぱり気遣いは無用よ。異相協会が組織だつて言つたのは貴方よ。それもたつたふたりのね。〃隠し事は無し〃なんて束縛するつもりはないけど、共有と分担は柔軟にしていきましょう。無理なときはハッキリと言うから。ね?」

自分なりに気をつかつたつもりだったが、クラリーナが望むならと引き下がる。

「分かつた。——それで足掛かりには言うが、どこまで手を広げるつもりだ? まだこの街に落ち着くかどうかどうかも分からないんだろ?」

「先立つものは必要だから集金できるようにしたいのよね。運営は現地人に任せるとし

て、飲食、芸事、賭博、手広くやりたいわ」

そう言ったクラーナは一旦言葉を切り、ふと思い出したように続ける。

「ユグドラシルの都市型ギルド拠点みたいに税収をゲットできたら楽よね。ああ、あとお布施でも稼げるんだっけ。そう考えると神殿も有りよね」

俺は返答に窮する。件の娼婦らを擁護する、または純粹に金儲けのためなら神殿も悪くはない。だが目的がお布施である以上この世界では「信仰」が関わる。

であるなら確かめなければならないことがある。

「それは、どつちだ？」

「ん？ なにが？」

気持ちにはやり言葉が足りなかった。

「つまりだ、神殿を建てたいのは現実リアルのお前とアバターのどちらか、って意味だ」

俺の問いにクラーナが困惑する。

「お金のため、と言いたるところだけど、とても曖昧。私を崇め奉る人間を集めたいと欲する気持ちもあるわ」

自身の変質を確信したクラーナは息を深く吐くとソファアの背に身をまかせて天井を仰ぎ見る。

「まあ、そんな顔をするな」

「そうは言っても、これは来るものがあるわよ」

先日あった味覚のような感覚的なものとは違い、今回は人格や思考にかかわる変質だ。

だが、気にしすぎてもしかたがない。

「いいじゃないか、元々ココソコソする気はなかったわけだしな。それに一般人設定に無理が生じたばかりだ。いつそ設定に素直になった方が楽かもしれないぞ。邪神って訳じゃないんだろ？」

互いに異形種だが幸いなことにふたりともカルマ値は口ウ寄り、クラーナに至っては天使種だ。設定に従ったところで忌避される存在にはならないのではとフォローする。

「どうかしら。向こうの神様って人の影響を受けるのよね。人の世が平安なら善神になるし、乱れれば世界を創りなおそうと破壊神になるみたいな」

「設定は覚えているか？」

「うーん、安産がどうか書いてあった気もするけど、ユグドラシルにそんなシステム無かったし。——そういえば」

クラーナが何かを思い出し、そして重く口を開く。

「赤子を喰らうわ」

「マジか」

「ちよつと語弊があるわね。伝承通りなら改心しているはずだけど、ほら、ゲーム独自の解釈つてやつが入っていた気がするのよね。カリティモも本来は『訶梨帝母』だし」

「外見もアルビノの蛇女ラミアに天使の羽根だしなあ」

蛇と縁のある神話生物は子供や赤子を食べる説を伴うものが多い。ユグドラシルの鬼子母神カリティモはそれらを混ぜ合わせた『何か』だ。

互いにしばらく押し黙り、進展が無いと分かるとクラーナが吹っ切れたように手を左右にパタパタと振る。

「ふう、もう神でもいいわ、前向きに考えましょう。ひとまず組合に関しては白紙にするわ。私の気が早かったということ忘れてちょうだい。私が神になる前提なら別の道筋もあるだろうし」

「はは、随分と割り切ったな。だが物事に対して否定的になるよりはいい」

「そういえば、娼館はどうだった？」

クラーナが気分を変えようとしたのか、俺がさつきまで居た店に話題を移す。

「どうだったと聞かれてもな。洗濯屋を兼業していたのはお前も見ただ通りだ」

「兼業自体は珍しくもないわ。他に気づいたことは？」

「石鹸の香りが弱かった。ああ、強いて言えば専用の洗い場を持っていたことか。こっちでも水は貴重だと聞いていたが、魔導具マジックアイテムで水を生みだしているようだったな。ただ



まあ従業員——娼婦が洗濯の残り水で身体を拭っていたから惜しげもなく使えるようではなさそうだが」

「それは私も聞いたわ。都市が管理する水源から公共洗濯場に水を配ってるって」

クレマンティーヌによれば自然にある水源の多くは人間よりも強い魔物に占拠されている。平原に追いやられた人間が水辺に都市を築けなかった場合、水を確保する手段は雨が降るのを待つか井戸を掘るしかない。魔法での生産は魔法詠唱者の絶対数が少ないため、それこそ貴族や大商人に仕えるのが慣例だという。故に一般市民にとって水は貴重なものとなっていた。

そして風呂事情も一般人には厳しかった。温泉が湧いていればそのまま利用できるが、そうでなければ自力で沸かさねばならない。城塞都市内で燃料目的の植林は非現実的、籠城に備えて果実のなる木を植えるのが一般的だ。地下に化石燃料でもなければ遠方から遙々輸入するしかない。となれば販売価格もおのずと高くなる。

「価格を抑えれば風呂屋は儲かりそうだな。蒸気風呂スチームバスでもやるか？」

「大浴場も上流階級向けみたいだからやりようはあるかもしれないけれど、風呂屋ってインフラが整ったらお終いよ？ 現実リアルを思い出してごらんなさい。その手のサービスは将来的に個々が所有するものでしょ」

「まあそうなんだが、水を贅沢に使ってみたいじゃないか。エステのついでにどうだ？」

「サウナとかエステと相性良さそうだろ？」

「なんだかんだ水には憧れがある。」

「ふと今日の出来事を思い出す。」

「そして少々不満気にクラーナを睨んでみせる。」

「おい、まさか俺を客寄せにするつもりで軟膏を使わせたのか？」

「正解、と言いたいところだけど、本命はあくまでも軟膏のほうよ。ただ、会員制にして、その中でも一部の上客に、<sup>〃</sup>ヴィクトルに塗ってもらえる<sup>〃</sup>って売り込むのはどうかしら」

「俺にも相手を選ぶ権利が欲しいがな」

「まあそこは女性に限定するからさ」

「理不尽な物言いのクラーナが不意に真面目な表情になる。」

「ねえ、マッサージってできるのかしら？」

「試したことは無いが、たぶんできるぞ」

アルケミスト クラス  
錬金術師の職業を持つ俺は当たり前のように錬金台を扱えた。同様にゲームで得た  
ドクター・ブディング アサシン ファイジシャン  
滋養の泥濘、暗殺者、医薬師といった種族や職業によって、普通の人間よりも「生物」に  
対する理解が深まっている気がする。

「注意するべき点があるとすればうっかり殺さないように加減することぐらいだが、ユ

グドラシルにおける“治療行為”として行なえば、カロリーネの治療のように失敗はしないだろう。

細かい機微は相手の反応を見て学べばいい。

「それを聞いて安心したわ。実は料理を試してみたんだけど、何度試してもダメだったのよね」

「どういうことだ？」

「ユグドラシルに存在したスキルでかつ未修得のものは実践できないか、習得に途方もなく長い訓練期間が必要だと思った方がいいわよ」

「装備枠と似たような縛りか。覚えておく」

クラーナサービのやりスたい内ことは何となく理解した。容

あとは「いつ・どこで」だ。

「肝心の店はどうする？」

「仮拠点のつもりだから出費は控えたいわね。理想は既存の店を買収してリフォームか  
し」

「城塞都市だと物件を探すのも骨が折れそうだな」

城塞都市のように“外への拡張”が望めない環境では限られた土地を分け合うしかない。当然そこにも利権が関わってくるはずだ。利便性の高い土地であれば所有者も

簡単には手放さないだろう。

「ふふ、そうね。そのためにも都市長お勧めの大浴場に通うつもりよ」

クラーナは都市長から大浴場を勧められたらしい。これには長旅の疲れを癒す以外にも別の意味合いがある。つまり、クラーナが——というよりは、異相協会が様々な品を扱っていると知った都市長が、社交場でもある大浴場で人脈を広げられるようにと気を配ったのだ。

「護衛を連れていけよ」

「何言ってるのよ。貴方も一緒よ？」

一瞬なにを言われたのか理解が追いつかなかつた。

「混浴なのか？」

「そうじゃなくて、幼女形態があるでしょ？」

「せめて少女って言え。というか、怪しまれるだろ。検分の時に居なかつたんだぞ」

「申告漏れなんてよくある話でしょ。後で辻褄を合わせれば大丈夫よ」

青年と少女、ふたつの姿で同時に存在できないと指摘したかったが、ドッベルゲンガ二重の影を召喚

すれば解決できてしまう。

「どう紹介するつもりだ？」

「親戚の娘とかかしら。両親や友達を失って無口になつたつて紹介するわ」

「それなら執拗に話しかけられることも無いか……」

「そういうこと。私の近くに居てくれればいいわ。その方が情報共有の手間も省けるでしょう。」

確かにその場に居れば共有もへつたくれもない。

一番の懸念はやはり演技だ。

「分かった、居るだけでいいなら付いていこう」

「渋々ね。男ならもつと喜びなさい。せつかくの異世界なんだから楽しみましょうよ」

ついさつきまで落ち込んでいた人物とは思えない発言だ。

「話をまとめると、当面はエステの開業を目指して動くってことでもいいんだな？ 他に

議題が無いなら戻るぞ」

「そうね、今日のところはお終いでいいわ。お疲れ様」

「ああ、お疲れさん」

クラーナの部屋を後にし、部屋に戻った俺は面倒なことになったと深く息を吐いた。

## 第8話：魔獣登録と受付嬢

エ・ランテルに到着した翌日、俺はクレマンティーヌに「放し飼い」を告げた。首輪は魔法で追跡できると念押しして、<sup>メッセージ</sup>へ伝言には必ず応じるように厳命した。それ以外は自由だ。呼び出すまで外泊を続けてもいいし、食事と寝る時だけ帰ってきてもいい。もちろん異相協会に迷惑をかけることが大前提だ。

初めは戸惑った素振りで馬車から離れようとしなかったクレマンティーヌだったが、そのうち「やり残した事がある」と言って姿を消した。

なおクラーナと一緒に大浴場へ行く件は、当のクラーナから「下調べが必要」と後日に回された。

そして俺はといえば、衛兵隊長に促された「魔獣登録」をしにアエラを連れて冒険者組合を訪れていた。

組合の入口広間からラウンジを抜けて受付へ。受付嬢と挨拶を交わして用件を伝えると、担当者が来るまで待機するように言われる。

待機中、周囲をうかがうと冒険者たちの表情が硬い。狼姿のアエラを警戒しているのかとも考えたが、どうも違う。ピリピリしているような、それでいて何かに耐えている

ような、そんな複雑な表情だ。

「アルヒミア様、お待たせしました。魔獣登録担当のウイナ・ハルシアと申します。さつそくですが部屋へご案内いたしますね」

ウイナ・ハルシアは昨日の娼婦たちを参考にすると20代前半くらいだろうか。金髪碧眼でやや痩せ型だ。

彼女に案内されてギルド2階の一室に移動する。

部屋は十数人で会議ができる広さだ。机を挟んで向かい合うように椅子が並んでいるので、ここは依頼人と冒険者が諸々話し合うための部屋なのだろう。

階が変わり扉も閉めればラウンジの喧騒も遠のく。

静かな部屋のなかで先ほど気になったことをウイナに質問する。

「冒険者たちが殺気立っていたが、何かあったのか？」

「殺気立って？ ああ、先ほど戦士長様がおいでになりました」

彼女の話は物騒なものだった。

俺たちが冒険者組合に到着する少し前に、組合長と王国戦士長との間で対談が交わされたそうだ。そして対談後、組合長から内容の一部が公表されたという。

曰く、王国領南部を中心に村々が襲われている。生存者の証言から隣国のバハルス帝国の兵士が目撃されている。街の外で活動する冒険者は以上のことを留意し、現場に遭

遇した場合は慎重に行動すること。

「確か、冒険者は戦争に関与してはならない決まりがあるんだったな」

「仰るとおりです。ですが、その、あくまでも『不文律』ですので、農村出身の冒険者を縛る絶対的な掟ではありません。ラウンジが殺気立って感じたのは、そんな彼らの自心の表れだと思います」

国家間の戦争に関わる決まり事が不文律だとは驚きだ。「組合」を名乗るほどの組織力を持つならば明文化して然るべきだ。さもなければ「強制的に徴用だ」と言いだす権力者を止めることができない。

「村人を助けるために手を出したらどうなる。国から咎められるのか？」

「戦争中であれば揉めた国へ引き渡されますが、今回はわかりません」

「というところ？」

「はい、今回は宣戦布告もなく越境と襲撃ですので、もしかすると正規軍からこぼれた愚連隊かもしれないと。その場合は野盗などと同じ扱いになりますので」

「なるほど、難儀だな」

生存者が「バハルス帝国の兵だった」と証言しているのなら鎧や旗などに分かりやすい印があったはず。冒険者たちが襲撃現場に出くわしたとしても咄嗟に正規軍と非正規軍を見極めるのは至難の業だ。



俺が冒険者に同情を示すとウイナは「規約ですので」と諦め顔だ。

ウイナが改めて澆刺とした声で俺に向きなおる。

「手続きを始めましょうか」

「宜しく頼む」

俺は机を挟んで向かい合う位置に座り、マスクを外して眼鏡に換える。

眼鏡は翻訳のためだが、同時にとある魔導具マジックアイテムを起動してマスクの下に隠す。更に今

回は現地人相手に試したかった指輪を装備する。

魔導具はユグドラシルでMOB避けに使われたものだ。狩場の敵を前にして戦闘準

備や仲間の回復を行なえる「安全な空間」を作ることができる。遠ざける対象は種族

やレベル帯で限定することができ、今回持ってきたのは人間種に限定したいわゆる「人

払い用」だ。

そして指輪は「装備者の魅力を上げて交渉を有利にする」と曖昧なフレーバーテキストが書かれたアーティファクト「調音の指輪」だ。効果は「売買価格3」へ賄賂の成功率3」へ説得の成功率3」で、そこそこRPGを遊びなれた者ならばこの指輪がプレイヤー相手には使えないものだと思しがつくだろう。

この「調音の指輪」はNPCの好感度を上昇させるだけの代物なのだ。多くの場合、指輪の有る無しでNPCの態度が180度変わる。それこそ手のひらドリルと言わんばかりの変容で、その変わり様はしばしばネタにされるほどだ。

しかし、こんな指輪ではあるが、予想が正しければ「魔法の発動を伴わない」ので対象は無自覚に影響を受けるはずだ。クレマンティーヌの件で「魅了」や「支配」などの精神操作系魔法は操作中の記憶が残ることが分かっている。無自覚なら勘違いや思い過ごしだとしてすぐ悪感情に傾くこともないだろう。

ウイナに目を向けると、書類を広げたまま呆けて——、明らかに俺の顔に見惚れていた。生まれ持った本当の顔ではないが、潤んだ目でこうして見つめられるのも悪くはない。

期待した効果はあくまでも好感度上昇なのだが、この顔を制作してくれたギルメンには感謝だ。

俺は軽く咳払いしてウイナにお願いしてみる。

「ハルシアさん、ついぞと言ってはなんだが、王国の文字を教えてほしい。せめて名前くらいは自分で書けるようにしたいんだ。いいかな」

「は、はい、確かに署名はできたほうがいいですね」

俺が異邦人であることは受付で用件と共に伝えてあるので、このお願いにウイナも真

摺に向き合ってくれた。

ちなみに代筆の手数料は銅貨5枚。受付で支払い済みだ。

「ありがとう」

礼を言ってもう一步踏み込んでみる。

席を立ち、ウイナの隣に座って身を寄せる。

「え!? あ、あの、アルヒミア様!!」

「文字を習うんだ。こつちの方が書き順が分かりやすいだろ?」

ウイナは顔を真っ赤にするが、すぐに取り繕う。

「そ、それでは説明させていただきます」

俺は記入項目をひとつひとつ読み上げるウィルにその都度丁寧に答えていく。同時に文字を書き取りながら見える範囲の文書に目を通す。すると眼鏡の効果で翻訳された内容がAR眼鏡のように浮かび上がる。魔法様様だ。

各項目は簡素で、飼い主の名、魔獣の品種、魔獣の名、所在地の確認と、街中で連れて歩く場合の注意事項などだ。

品種の項をなんとか迷ったが、無難に「狼」とした。

書類を一通り埋め終わるとウイナがアエラを見る。

「では、アエラちゃんでしたっけ。こちらで〈模写〉をいたしますので、私の前をお願い

します」

魔獣登録には「魔獣の姿」も含まれる。受付で手描きと魔法のどちらがいいかを聞かれ、俺は迷わず魔法による模写を選択した。理由は手描きよりも早いと言われたからだ。運び屋の性分とでも言おうか、「時は金なり」とは誰の言葉か知らないが、何事においても拘束時間は短い方がいい。

だが、それはそれとして先にやりたいことがある。

情報収集だ。いまは精度よりも量、クレマンティーンとは違った視点の情報がほしい。それになんだかんだクラーナに任せきりなのも性に合わない。

「少し休まないか？ もっと色々なことを教えてほしい」

俺は準備するウイナの手を取って密かに粘体スライムの特殊技能スキル、〈接触注入タッチ・インジェクション〉を使う。

注入するのは赤根草ブラッドルートの毒。効果は判断力の弱体化だ。

俺は後ろからウイナの腰を引き寄せる。

「あ、あの、困ります。夫ある身ですから」

口では嫌がるものの振りほどく素振りはない。

指輪の力か下手に騒がないのはありがたい。

「ただの気分転換、ふたりだけの秘密だ」

「何を、知りたいんですか」

ウイナは諦めたのか強張らせていた身体を和らげる。

「そうだな、この街で一番優秀な冒険者は？ 依頼時の参考にしたいい」

手始めに冒険者組合の内部事情を聞いてみる。

「個人の力は分からないけど、クラルグラ、天狼、虹の3チームがミスリル級よ、……ん、あ?！」

腰に回していた手でスカート越しに愛撫する。

彼女は咄嗟にその手を取って止めようとするが、形だけの抵抗だ。

「ミスリル級？ アダマンタイト級はいないのか？」

「ん、く……、この都市にはいないわ。蒼の薔薇、朱の雫の2チームが王都の組合に所属してるけど」

驚いた。これだけ大きな城塞都市なら名のある冒険者がいるものだと思っていた。

それがアダマンタイト級どころかそのひとつ下のオリハルコン級すらいない。挙がったアダマンタイト級チームもたったのふたつだ。

「オリハルコン級が居ないとは思わなかったな」

「居ないというか、んふう……、引退するのよ。稼いだお金で身を落ち着かせる人が多いわ。う……ん、いい……、そこ」

シヨーツがじんわりと湿り気を帯びてきた。

体温の上昇に伴いウイナの呼吸も荒くなる。

「王国に冒険者はどれくらい居るんだ？」

「ふう……ん……、だいたい、3000人くらいだつて聞いたことは、ある。あ……っ！」

意外と少ない。しかし、「身を落ち着かせる」と言われれば「そんなものか」とも思う。第三位階魔法を使えるだけで白金級プラチナ、一目置かれる存在だ。ミスリル級ともなれば扱いは上級冒険者、食い扶持に困ることはなくなるだろう。人生設計を考えた時、そこからさらに上位のオリハルコン級やアダマンタイト級を目指すかどうかは「個人の意思」だけではないにもならないはずだ。

必要なのは共に命を懸けてくれる仲間。だがそれを得るのが一番難しい。

現実リアルを思い返す。長く運び屋稼業を続けたなかで、背中を預けられた奴は何人居ただろうか。

考え事しているとウイナの両足から力が抜けて取り落としそうになる。軽く気をやったようだ。

「さあ、机に身体を預けて」

ウイナを机に、上半身を預けるように指示する。

自然と尻を突き出す格好になった彼女は、自らスカートをたくし上げて俺を誘う。

「お、お願い……、して」

ウイナは旦那への後ろめたさがあるのか、誘いはするものの机に伏したまま顔を隠している。

突き出された尻に手をやりショーツをずらすと、蜜に濡れた秘裂が物欲しそうにひくついていた。

「旦那に悪い。満足するまで愛撫するぞ」

「いいから！　ここ、う、埋めて——、んあッ！」

最後まで言わず陰茎ペニスを一気に膣の奥まで挿入した。

伏せるウイナに身体を重ね、彼女が動けないようにしっかりと机で挟む。

「なら、遠慮なく」

「あんっ！　んんっ、ひう、あ！　い、いきなり、激し……いい！　ん、ん、ああっ！！」

事前に愛撫した甲斐もあって内部は潤っている。

初めから全力だ。

ウイナは職場での情事のためか必死に声を殺そうと袖を噛んでいる。それでも無理やり与えられる強い刺激に彼女の腰が跳ね、そのたびに甘い嬌声が漏れる。愛撫で昂る身体は、とことん刺激に敏感だった。

「ずいぶんご無沙汰なようだな。声を抑えないとラウンジの連中に聞かれるぞ」

「んふう!!　そんなこと、言わないで……あ、ん、ひいんっ！」

腰を打ちつけながら濡れた陰茎クリトリスに指を這わす。強がっていても陰茎ペニスを通してウイナの身体が「ご無沙汰な刺激」に喜び震えているのが分かる。

その後しばらくはウイナの相手をしながら情報を集めた。クレマンティーヌからは得られなかったより一般的と思われる情報や噂などをだ。

「それ、いゝいゝ！ あゝ！ んゝん、いゝ、いくうっ!!」

生まれたての小鹿のように震えるウイナを絶頂へと追い立て、肉壺がギュツと引き締まるのと同時にトドメのひと挿し、子宮口を深く抉る。

ウイナがピンと仰け反る。下腹部の深部で発生した絶頂の波が膣から腰、脊椎から脳へ駆け巡ったのだ。

「ああっ!? やだ、んゝんふ……、と、止まらないい!」

何事かと視線を結合部に向ければ痙攣するウイナが盛大に失禁していた。シャーと小気味いい音とともに足元の水溜まりも大きくなる。

「やっちまっつたな」

「はあ、はあ……、そ、掃除しないと」

職場でのお漏らしで興が冷めたのかウイナが服装を正す。

それを合図に俺も身なりを整える。

「空気も入れ替えなきゃ」



ウイナが換気しようと窓を開ける。

掃除用具で後始末をしているが匂いまでは誤魔化せない。

「不審に思われたらアエラのせいにするばいいさ」

「ガウツ!!」

アエラが不満げに鳴く。

流石に他人の粗相を肩代わりするのは嫌なようだ。

「しばらく掃除中の札をかけとくわ」

ウエナはアエラ的心情を知ってか知らでか、俺の言葉に同意することなく掃除を続けた。

「アエラ、そこでお座りだ」

場が落ち着き、改めてアエラの〈模写〉が行なわれた。

俺はその様子を見守る。

魔法による模写なので紙に筆を走らせる訳ではなく、実態はオカルトめいた念写のようだった。

ウイナが魔法を唱えると徐々にアエラの姿が紙に写し出されていったのだ。

その後滞りなく手続きは進み、最後にアエラの名前が刻まれたプレートを受け取った。

プレートは首輪に付けることで冒険者プレートと同じ効力を持ち、冒険者組合が認知されている地域であればアエラが登録済みの魔獣であることを証明してくれるらしい。目的は果たしたので次の目的地へ向かう。

行き先はバレアレ薬品店だ。

\* \* \*

「いらつしやいませ、——アルヒミア様ですね？ お婆ちゃんにご用ですか？ あ、初めまして。僕は孫のンフィーレアといいます」

バレアレ薬品店の戸をくぐるとリイジーではなく孫を名乗る少年が出迎えてくれた。俺のことはリイジーから聞いていたのだろう。さして警戒心もなく挨拶をしてくれた。

長い金髪の前髪が邪魔をして顔立ちは分からないものの、磨り潰した薬草の汁が染み付いた使い古した作業着を見れば彼も薬師だと分かる。

「宜しく、ンフィーレア君。俺はただの旅人だ。畏まって様付けする必要はないぞ。適当にヴィクトルとでも呼んでくれ。リイジーさんはご在宅か？」

「はい、少々お待ちください」

ンフィーレアはカウンター裏の扉からリイジーへ声をかける。

奥は工房なのか、ンフィーレアと入れ替わるようにリイジーが姿をみせる。エプロンで手を拭いながら現れたので作業中だったのかもしれない。

「昨日の今日で何の用だい？」

ぶつきらぼうだが嫌味さはない。初対面の時もそうだったので、きっとこれが普段の彼女なのだろう。

「連れがこの街でエステを開きたいらしくてね。助言がほしい」

「定住でもするのかい？」

リイジーは意外だと言わんばかりに驚いた表情を見せる。

「さあな。それは気次第ってところだ」

「ふむ、ロフーレの世話になってるのなら彼に聞いたほうが早いと思うんじやが——」

そういうとリイジーは値踏みするかのように俺を見る。

「そうさねえ、エ・ランテルで商売をするなら何をおいても取引許可証が必要じゃ。準備できそうかい？」

「今朝、都市長から届いた」

「それなら後は開業届と店じやが、一番の問題は店じやのう。土地を買うか、借りるか。

生憎とわしにはそつちの伝手が無い」

リイジーが申し訳なきそうに肩をすくめてみせる。

「では、例えば既に店を営んでいる者の中で一番の有力者は誰か分かるか？」

「イズエルク伯爵だね。この街の大きい風呂屋、大衆浴場はだいたい彼の息がかかっておる」

伯爵とはいかにも地位が高そうだが、大衆浴場——、城塞都市内で水を潤沢に扱える立場とはいかほどのものなのだろうか。

「しかしのう……」

言い淀むリイジーを促す。

「なにか心配事が？」

「もし接触するつもりなら用心おし。あまりいい噂を聞かないからのう」

「都市長と比べてどちらが強い？」

「貴族を強弱で語るのおよし。……当人たちの身分に大差はないはずじゃ。ただ貴族は面子や礼節にこだわる。イズエルク伯爵もエ・ランテル内では都市長を立てるはずじゃ。それでなくともエ・ランテルは国王直轄領、都市長は言わば国王の代行だから表立って反発はできんじやろ」

つまり、万が一の時は都市長を頼ることができる。

リイジーが続ける。

「イズエルク伯爵は領地もあり、兵力もあり、商売に通じた人脈もある。俗に『六大貴族』と呼ばれる連中ほどではないとは聞くけどね、発言力は中堅と呼べるじやろう」

「了解した。それだけ聞ければ十分だ」

突然、パリンとガラスの割れる音が響く。

「これンファイレア！ 今日だけで幾つ割るつもりだい!？」

「ズ、ごめんなさい!」

奥の部屋で孫が何かを割ってしまったらしい。

「ああ、すまんのう。いつもはもう少し慎重な子なんじゃが……」

「なにかあったのか?」

リイジーは視線だけ奥の部屋に向けて小さく溜め息をつく。

「近隣の村々が賊に襲われているなんて噂を聞いたらしくてのう。好いておる娘が気になってしかたがないのじやろう」

おそらく冒険者組合で聞いた話だ。

「その噂なら俺も聞いた。そのために王国戦士長が来ているらしいぞ」

「おや、そうなのかい。それなら続報を待つかのう。あの子には気の毒じゃが薬草の仕入れはしばらくお預けじやな」

錬金術師として興味深い話がでた。  
アルケミスト

薬草の採取はRPGではお馴染みのクエストだ。だが現実世界でなら自家栽培しようと思う者がいてもおかしくはない。現にユグドラシルでも薬草を自家栽培している設定の魔術師や錬金術師のNPCがいたし、当の異相協会も課金アイテムのプランターで何種類も育てている。製造職にはほぼ必須の生産環境だ。

「その村で薬草を仕入れているのか？」

「正確には村近くの森でじゃな。ニユクリ、アジーナ、ングナク、エンカイシは天然物のほうが効能が高い。そこがうちの売りなんじゃよ」

森の土になにかあるのか、それとも森そのものに秘密があるのか分からないが、同じものでも個体差があるなら採取する価値はある。薬草採取クエストがいつまでも無くならずには有る仕組みを垣間見れた気がした。

「おや、いらつしやい」

ひとりそんな事を考えていると店に客が来た。

赤毛の女。格好から冒険者、前衛職だろう。

「あ——、えつと、水薬ポーションが欲しいんですけど」

「俺はそろそろおいとましよう。リイジー、助言を感謝する」

俺は女冒険者の用件を聞いて帰ることにした。

リイジーの商売を邪魔してまで長居するつもりはない。

「世間話に感謝なんぞいらんわい。まあいい、今度は茶のひとつでも出すよ」

俺は軽く手を振ってバレアレ薬品店を後にした。

\* \* \*

「お帰りなさいませ、ヴィクトル様」

フロレー宅に戻るとリオが出迎えてくれた。ノーパンであることに目をつむればメイド服姿は屋敷によく馴染む。なおリとりエのふたりは生産ラインを維持するために馬車の中だ。

「ただいま、何か変わったことは？」

「はい、ヴィクトル様に来客がありました。クラーナ様が接客中です」

意外な言葉に思わず立ち止まる。

「相手の名は？」

「グニラ・ブレンドレル様、カーリン・ルトストレーム様、エレン・エイセル様、ダーニ・ヘフネル様です」

グニラとエレンは昨日会った。カーリンとダーニは覚えがないが、グニラが連れてき

たなら関係者にちがいない。

グニラには商品を見せると約束していた。きっとそれで訪ねてきたのだろう。「分かった、すぐに向かう」

応接室に顔を出すと、背の低いテーブルを挟んでクラーナとグニラたちが座っていた。

「お待たせしたかな」

「こ、これは、アルヒミア様っ！」

「そのままでもいい。——というか、どういう状況だ？」

グニラが仰々しく挨拶をしようとしたので止めた。それはいい。ただ、ひとつ問題があった。

女性陣がソファアーに座る横で、見知らぬ強面の男が床の上でもがき苦しんでいた。

改めてグニラたちに視線を向けるとこちらも様子がおかしい。昨日は俺を名前呼びするぐらいには砕けた調子だったグニラの表情が硬い。それは同伴している女ふたりも同じだ。

「クラーナ？」



「そんな目でみないですよ。ちよつと『お話』してただけよ。ね？」

話を振られたグニラたちは首を縦に振るだけで会話にならない。

「ヴィクトル、立ってないでまずは座りなさいな」

釈然としないままクラリーナの隣に座る。

グニラは俺が来たことで少しホッとした様子だ。その隣には初対面の40代女性、瘦せ型で気難しそうな顔はまだ硬い。そしてこの中で一番若いエレンはやや怯えながらもはにかんでみせてくれた。

「そちらの方は初めましてですね。ヴィクトル・ヴィ・ニエボ・アルヒミアだ」

「は、初めまして、カーリン・ルトストレームと申します。グニラと同じく経営に携わる者です」

「するとそこで転がってるのがダーニ君か。4人とも俺の客だと思っただが、何があつたんだ？」

俺の問いにグニラたちの視線がクラリーナに向かう。

「そうね、私から説明するわ」

クラリーナの説明を要約すると、初めは俺の客として普通にもてなしたそうだと。ところが間を置かずしてダーニ・ヘフネルと名乗った男がクラリーナを脅迫したという。

彼はグニラの店があつた地域を仕切る裏社会の人間で、街で「羽振りのよさそうな貴

族の馬車」の噂を聞きつけ、またその馬車の関係者である俺がグニラの店に入ったのを知って娼婦たちから俺の事を聞き出した。そして「金になる」と判断した彼は、様子見を兼ねてやって来たというのだ。

「様子見のはずが女子供しかいないから強気になった訳か」

「それで私が大人しくさせるついでにお話を聞かせてもらったの」

女主人は脚が悪く、お付きのメイドも見た目は10代前半だ。ダーニは男手他が居ないうちに強引にでも収穫を得ようとした。その結果、彼は床を這うことになった訳だ。

大人しくさせた方法は複数の呪い。酷く疲労した様子他の他、肌は薄つすらと変色し、生きながらにして腐敗が始まっている。動死ゾンビ体化だ。

ここに外を見張っているマーシャカジルが居ればあるいはひと思いに射殺してくれただかもしれないが、魔女を怒らせたらどうなるか、今回はその見本になったようだ。グニラたちが怯えるのも無理はない。

「ヴィクトル、彼女たちはシロよ。厄介ごとを招き入れてしまったけれど、この男は軟膏のことを知らなかった。彼女たちは――、まあ打算もあつたんでしようけど、秘密にしたの」

俺がグニラたちを疑っていると思ったのかクラナーナのフォローが入る。

確かに口止めはしていない。吹聴して回ったところで咎めるつもりはない。むしろ

クラリーナの思惑では女たちの口コミで噂が広がることを期待していたはずだ。  
「何故だ？」

「い、言える訳ないわよ。金になると分かれば平気で人を攫うような奴らよ。それに上納金を納めてるだけで仲間じゃないわ」

その答えに一応は納得する。

この手の連中が資金調達する方法は色々とあるが、ダーニが所属する組織は人心掌握に失敗しているようだ。グニラは俺と連中を天秤にかけて、俺を取った。クラリーナのいう打算とは俺という伝手を保持すること。良質なアイテムを得る機会を失いたくなくなつたのだろう。

「信じよう。で、こいつはどうする？」

「このまま消えてもらおうわ」

クラリーナの目に怒りが宿り、言葉にも怒気が含まれる。

余程無礼なことを言われたようだ。

「急に消えたらグニラたちに疑いがかからないか？ このまま組織とやらの防波堤にする手もあるが」

「大丈夫よ。監視が無いのは確認済みだし、いくらでも言い逃れはできるわ。彼女たちにも口裏を合わせるよう言つてあるし。ああ、それと、彼女たちは異相協会のものにな

つたから。引継ぎが現れても無視、上納金は支払わない」

「さて、異相協会のもの？」

さらつと開示された新事実には眩暈を覚える。

「詳しく話せ」

クラーナ曰く、グニラとその従業員たちを丸ごと雇い入れたらしい。「何をするにも人手は必要だからね」とは彼女の言だが、実際は異相協会の庇護下に置くことで接触を凶る者たちを見極めるつもりらしい。初手からクラーナや俺に接触をしようとするのと周囲の者に探りを入れてから接触するのでは接触者の性質が異なる。その手段や過程を観察すれば人物評価の判断材料になるというのだ。

「ここで決めてしまっているのか？　つまり、ここに居ない娘たちの意思は？」

多くの娘たちは本人のあずかり知らぬ場所で裏社会と敵対することになる。怖がる者や組織側に付く者が現れても不思議ではない。

俺の疑問にグニラが答える。

「それは大丈夫です。その、契約書がありますので」

「契約書？」

業務内容が突然変わっても有効なのだろうか。

腑に落ちない様子の俺にクラーナが補足する。

「端的に言うとな隷なのよ。所有権を持つグニラが私に譲渡したの」  
「廃止されたんじゃないやなかったのか？」

事前情報では「黄金」と謳われる慈悲深いお姫様の働きかけで廃止になったと聞いた。

「長く続いた制度ほど急に変わるものじゃないわ。な隷を解放したていで改めて雇用契約書で縛ってるのよ」

「クラーナ様の仰る通りです。元々公娼に登録できるのは戦争未亡人や戦争孤児だけ。徒弟制度からあぶれた者を救済するのが目的です。な隷は対象外でしたが役人に賄賂を渡せば登録できたんです。今は雇用契約があるので、ある意味では雇用者の責任は重くなりましたが」

正直驚いた。驚いたが、しかしグニラの口振りからすると明確にな隷だった頃よりは扱いがマシなのだろう。

「ヴィクトル、ここは人権宣言がない世界なのよ。身分が義務と権利を決めるの。あと数世紀、いいえ、人間以外の種族も居るし、下手したらこの先数十世紀以上はこのままかもしれないわ」

「ふん、人権なんて久しぶりに聞いたぞ」

市民階級が全てを決める点では完全環境都市と封建社会は似ているのかもしれない。

階級によって「自由の幅」が異なるのだ。王には王の、民には民の「自由」がある。

ユグドラシルも同じだ。ゲームのスタート時は公平でも、資金力リアルマネーによって平等性は損なわれていた。プレイヤーの財力でゲーム内の自由度が変わるのだ。

事情は理解した。

「リオ、こいつを別の部屋へ押し込んで」

「畏まりました」

控えていたリオに呻くだけの耳障りなダーニを別室へ運ぶよう命じる。

小柄なリオが軽々と成人男性を運ぶ様子に、グニラたちが目を丸くする。リオはあの容姿でNPCのなかではアエラに次いでレベルが高い。召喚特化の彼でもレベル70代ともなれば素のステータス値も高いのだ。

「仕切り直そう。これからどうする?」

「ヴィクトル、グニラに若さの開花ブルーム・オブ・ユースを渡して。試したいことがあるの」

「試したいこと? ああ、そういうことか」

若さの開花は変成魔法が込められた水薬ポーションだ。効果は攻撃、防御、素早の値に僅かな

ボーナスを得る地味なものだが、ある種のデバフを打ち消すために使われるのが主な用途だ。速度低下のデバフを受けたら速度上昇の水薬ポーションを飲んで打ち消すように、若さの開花は能力値へのデバフを打ち消す。能力値へのボーナスはオマケだ。

それをなぜグニラにと思ったが、フレーバーテキストを思い出してクラリーナの「試したいこと」を察した。「一時的に老いた肉体を若返らせ、失われた活力を取り戻す」とかなんとか、そんな感じのことが書いてあったはずだ。

ユグドラシルのステータスに年齢の項は無い。例えへ老衰スエイライテイのような呪いを受けてもアバターの外見に変化はなく、単にステータス上の能力値が低下するだけだ。他にも〈時間停止〉がサーバーの時間ではなく対象のみを一時停止するのと同じ理屈で、ゲーム内には名前負けしている魔法や技能スキルがあった。クラリーナはそういったもののフレーバーテキストが現実になったのではと考えたのだろう。

「クラリーナ、お前の狙いは分かったが未検査の水薬ホイシヨウを飲まずのは反対だ。代わりにこれを使おう」

「あら、その指輪は？」

取り出した指輪にクラリーナが興味を示す。

数は3個。デザインは同じだが微妙に色合いが違う。

「若さリシク・オブ・ユースフルの指輪だ。若さフルム・オブ・ユースの開花と違ってデバフは打ち消せないが、攻撃、防御、素早の値を上昇させる。ここにあるのは性能値がそれぞれ15%、30%、50%上昇するものだ」

「フレーバーテキストは？」

「覚えていない——って叩くな。肉体を若返らせるようなことは書いてあつたはずだ」  
まさかフリーバーテキストをきちんと覚えていないだけで叩かれるとは思わなかつた。

呆れ顔のクラリーナが不意に眉をひそめる。

「他の魔導具マジックアイテムと同じなら上昇値分若返るのかしら。50%をふたつ付けたら消滅なんてないわよね？」

「指輪の効果が重複しないのはクレマンティーヌで確認済みだろ。それよりもこの指輪の効果は固定値じゃなくて割合だろ？ お前の作った指輪と同時に装備すれば年齢を固定できると思うんだが、どう思う？」

クラリーナが禁呪を応用して作りだした「老いることを禁ずる指輪」は本人も含めNPC全員が装備している。効果は老いを禁じるだけだが、これと若さリング・オブ・ユースフルの指輪を同時に装備すればその若さを固定できるかもしれない。

「確かに、併用すれば固定できそうね。でもそれを検証するには時間がかかるわ。だから、まずは若さリング・オブ・ユースフルの指輪の効果を調べましょう。グニラ、この指輪をつけなさい」

「か、畏まりました」

クラリーナが手渡したのは若さリング・オブ・ユースフル III。

グニラが指輪を受け取るが拒否する素振りがない。クラリーナが魔女ウィッチの呪文、



〔ビガイリング・ギフト〕  
〈騙しの贈り物〉を無詠唱化しているのかとも考えたがそうでもない。例の雇用契約書以外にもふたりの主従関係を決定付ける何かがあったのだろう。

グニラが震える手に指輪を装備する。

「う、っ!? あ、熱い!」

瞬間、指輪を中心に蜘蛛の巣が広がるように身体が光る。

「凄いわね、こんなエフェクトだったかしら?」

「いや、金色のパーツイクルが一瞬光るだけだったはずだ」

ユグドラシルにはPVP要素があった。なので超位魔法などの例外を除けば対戦の妨げになるような過剰な演出は無かった。それなのにいま目の前で起こっている現象は人間の肉体年齢を逆行させるものであり、この世界ではそれ相応の演出が入るのだと知る。

グニラの発光がおさまると、隣に座っていたカーリンが安否を確かめるように彼女の肩を揺する。

「グニラ、大丈夫?」

「ええ、だ、大丈夫よ」

「えっ!? 凄い!」

顔を上げたグニラにみんなの視線が集まる。

「成功ね。見た目は25前後かしら。ほら、グニラ。自分で見てみなさい」  
クラリーナが手鏡をグニラに渡す。

「ああつ！ こ、こんなことが!? 本当に!!」

「その顔は貴方の若い頃の顔で間違いないかしら？」

「はい！ 間違いありません、ウエネフィカ様!!」

「次はその指輪を付けたままこの指輪を装備なさい」

続けて若さの指輪リング・オブ・ユースフルⅠをグニラに渡す。

今度はやや老けた。

「40代くらいかしら。後から付けた指輪の効果が優先されるみたいね」

仮に重複していたら18歳くらいになっていたはずだ。

「ふふ、なんて顔してるのよ。若さの指輪リング・オブ・ユースフルⅠは外していいわよ。もう片方は我々に忠

誠を尽くす限り貸し与える。——ヴィクトル、いいでしょ？」

俺が無言で頷くとグニラがおずおずと若さの指輪リング・オブ・ユースフルⅠを外し、そして席を立つ。そし

て対面に座るのは畏れ多いと言わんばかりに膝をついて頭を垂れる。

カーリンとエレンも慌ててそれに続いた。

そんな3人を、しかしクラリーナは冷めた目で見る。

「ヴィクトル、この世界は残酷よね」

「急にどうした？」

「この世界の人間の平均寿命は環境がよくて40年、農奴は30年だそうよ。薬草や魔法があるのに、私たちの知る封建社会より少し毛が生えた程度なのよ」

俺たちが漠然と中世と呼ぶ時代、とりわけ庶民の一生は短かったと聞く。地域や年代にバラツキはあるものの、恵まれた環境で30年、不運な環境なら20年だ。乳幼児100人のうち18歳を迎えられるのは54人。そんな時代だ。

「そうなるどグニラは長老クラスになるのか？」

話に聞いた都市長や魔法組合長たちは比較的若い印象だ。俺らのいた世界で会長といえど50代60代が当たり前の役職、下手したら70代だっていた。

「そうね、まともな人間関係を築いていればそれなりに尊敬を集める年齢ね。——だから残酷なのよ。エレン、だったかしら。貴方の年齢は？」

「は、はい。19です」

エレンは伏したまま微動だにしない。

「〴〵いい人〴〵は居るの？」

「良くしてくださいるお客様はいますが、まだ」

最後のほうは声小さく心なしか震えて聞こえた。

「ヴィクトル、私たちの感覚で19歳といったらまだまだこれからよ。でも15歳で結

婚適齢期を迎えるこの世界では違う。20歳で未婚ということは後が無いのよ。そうでしょ、グニラ」

「仰る通りです。身受けする側も跡取りを考えますし、やはり若い娘のほうが受けがいいです」

グニラの答えにクラリーナが頷く。多産が求められる世界。そうしなければ種として維持できないこの世界では若さこそが重宝される、それは必然なのだろう。

「大昔の娼婦は22歳で『長寿』だったそうよ。ほとんどが栄養失調と病気で死ぬの。でもこの世界は違う。魔法や水薬ポーションで生きながらえてしまう。苦しい生を余儀なくされるの」

クラリーナの言葉に何と返そうかと迷う。死を望むほどの苦しみに苛まれる者に「死ぬな、諦めるな」なんて言葉は届かない。少なくともクラリーナは死を望んだ経験があるのかもしれない。

俺が迷っているのを見てクラリーナが自嘲気味に笑う。

「ふふ、加えて言わせてもらおうならこの住人は顔が良い。些細な傷でも致命傷になりかねない程にね。まったく、嫌になるわ」

顔面偏差値が高い。そう考えると高級娼婦でも身請けの機会は少ないのかもしれない。グニラの店にいたかたわの娘たちであればなおさら望みは薄いはずだ。

もしかするとクラーナはそんな彼女たちと現実リアルの己を重ね、俺が考える以上に彼女たちに己を投影しているのかもしれない。

俺は堪らず話題を変える。

「グニラたちを抱え込むなら常時発動型技能の確認はどうだ？」

「あら、それもそうね」

クラーナの頭上に黄金の円盤が浮かぶ。

彼女が神格をどの程度の頻度で露出させるか分からないが、事前にこの世界の住人が「どのように認識するのか」を調べるつもりだ。

天使の輪を浮かべたクラーナの前に、グニラたちが片膝をつき祈るように両手を組んでいる。

クラーナがふたつの呪文を唱える。ディテクト・ソウツ。〈思考感知〉と〈感情分析〉。どちらも初級の占術だ。

そして俺もグニラたちの背後から〈状態確認〉が込められた巻物スクロールを使用する。

「鬼子母神カリテイモの影響が少しでてるな」

「どんな感じ？」

「病気耐性、呪い耐性、精神異常耐性の上昇はユグドラシルと同じだが、加えて信仰心の付与、妊娠率の上昇と安産もあるな」

「ああ、まあそうなるわよね。信仰心の付与ってのがなんなのか気になるけど」

予想していたのかクラーナの反応は薄い。

信仰心に関してでは確かに気になる。文字通りに解釈するならクラーナを信仰対象として認めさせるものだとは思うが、どの程度の影響力なのだろうか。NPCのような狂信者を作りだすだけだと困る。

「そっちは何か分かったか？」

「初めは恐怖が勝っていたけど今はだいたいぶ落ち着いているわね。信仰を伴う信念と柔軟性が急激に育ち始めている。精神異常耐性と信仰心の付与が働いているようにも見えるし、心が壊れる前に神を受け入れようと折り合いをつけているようにも見える。自分を騙しているとも取れるわね。あとは、わずかに愛を感じる。これは敬愛かしら、悪い感情ではないわ」

クラーナが人間の姿だとはいえ、グニラたちは神格存在を前にずいぶんと気丈だ。普通なら恐慌状態、下手したら狂気に陥ってもおかしくはないのだが、同時に精神異常耐性や信仰心を与えているならこの反応も納得だ。クラーナが善性寄りなものもあるだろう。

クラリーナが切りだす。

「知りたいことは知れたわ。今日のところは帰りなさい。そして従業員たちにきちんと今後のことを説明すること。カーリンとエレンはグニラが本物であるとちゃんと証言するのよ。それと明日でいいから全員分の契約書を持つてきなさい」

有無を言わせぬ物言いにグニラたちは従うしかないようだ。

こうして、俺は長い一日を終えた。

## 第9話：焼き菓子

「おはよう、ヴィクトル。——なにしてるの？」

エ・ランテル3日目、朝。

俺はクラーナに起こされた。

「もう朝か。なに、これが落ち着くんだ」

「平穩を求めた結果がそれなの？」

今の状況を説明すると、俺は〈擬態<sup>ミミツク</sup>〉を解いてバスタブの中に収まっていた。俺の正体を知らない者が見れば白く泡立つ液体がバスタブを満たしているようにしか見えな  
いはずだ。

ではなぜバスタブに収まっているのか。「起こされた」と表現したが、実のところ  
<sup>スライム</sup>粘体の種族特性で睡眠は不要だ。しかし同時に嗅覚と振動感知に優れ、加えて全周囲視  
覚だ。つまり常時覚醒状態で周囲を知覚できてしまうわけだが、これが元人間である俺  
にはこたえた。精神作用無効があるとはいえ落ち着きたいときに落ち着けないのだ。

「ベッドだと肌に触れるシーツが気になるんだ。かといって休憩したいのに仮面や眼鏡  
で視覚を矯正したままってのも変だろ？」



色々試して導き出した答えが「〈擬態〉<sup>ミミック</sup>を解いてバスタブに入る」だったのだ。これで蓋を被せれば完璧だ。

「難儀なものね。——というか、その状態だと目が無いからどこを見て話せばいいか分からないわ。これ、視線は合ってると思っただけいいのかしら」

クラーナは眼球の無い粘体<sup>スライム</sup>の姿にやや困惑している様子。

今は核にあたる青白い肉塊に話しかけている状態だ。

ユグドラシルの粘体種<sup>スライム</sup>は共通する特有の視界を持つ。暗視、青黒い色相の全周囲の視覚、動く物体の強調表示、100メートルまでの視界、動かない物体の遠近感の喪失だ。

しかしその容姿に関しては様々だ。眼球の有無、爪牙の有無、外殻の有無、肉質、なかには燃えていたり凍っていたりと特徴を挙げるときりがないが、基本的には最後に取得した種族の姿を基礎として外見に特徴が現れる特殊技能<sup>スキル</sup>などによって個性が生まれる。

俺の場合は隠し種族の漂<sup>ディヴァイン</sup>う聖なる肉塊が最終種族だが、外見は青白い肉塊を核にした白く泡立つ粘体。ユグドラシル時代はテクスチャだけで表現されていた質感もいまでは現実のものになっている。

そして現実になってひとつ安堵したのは粘体の粘度が思いのほか高く、また床を這つてもナメクジとは違って目立った跡を残さないことだ。粘体<sup>スライム</sup>の姿でシートに寝そべつ

でも軽く湿りこそするもののベチヨベチヨにはならない直ぐに揮発する。むしろ粘度の高さが災いして接地面の埃を綺麗に吸収してしまうほどだ。なお泡は石鹼よりは水飴などの気泡に近い。

「合っているんじゃないか？ この状態だと前後左右が無い。視界が球体状に広がっていて死角がないんだ。意識を向けた先が『前』になる感じだな」

ちなみに粘体の中心にある『核の沈み具合』で重力を感覚として得ている。なので上下の感覚は人間時と変わりはない。

「それで、俺になにか用か？」

人間の姿に擬態しつつ用件を聞くと、凶形が描かれた紙を数枚渡される。

「私の紋章、コレにするわ。ヴィクトルのも案を出したから、参考にしなさいな」

紋章のことをすっかり失念していた。クレマンティーヌに紋章官の存在を教えられ、個人を表す紋章をギルドマークとは別に作るようになっていた。

クラーナの紋章は王笏に巻きつく羽の生えた白蛇だ。これだけでもカッコいいが、正体のアバターを晒したときに真意がわかるのも面白い。

対して自分の紋章をどうするか、粘体スライムの意匠なんてパツと思いつかない。実家の家紋を使うのも違う気がする。

クラーナが挙げた図案に目を通す。

幾つかある粘体スライムを模したシンボルはどれも極端だ。造形を簡略化するとコミカルすぎるし凝りすぎると不気味になる。粘体スライム以外のシンボルだと、ペストマスクからはカラスや錬金術、アエラであろう狼のシンボルなどもあった。

しばし悩み、クラーナにふたつのシンボルを示す。

「このふたつを組み合わせよう」

カラス「鳥と逆三角？ 粘体要素は入れない感じ？」

「普段の格好から連想しやすい方がいいだろうと思つてな。一応この逆三角形が水を暗示する。少し強引だが粘体を含めてもかまわんだろう」

ユグドラシルで得たゲーム知識だが、逆三角形のシンボルは錬金術と水を同時に暗示できる便利な記号だ。粘体スライム要素はできれば隠し、暗示する程度にしたい。「これは何ですか？」と聞かれたら説明が面倒だ。

「でもまあ、こつちの人間に向かうのシンボルが伝わるか怪しいところだな」

シンボルをどう捉えるかは民族性が強くでる。例えば「三又の槍」を海神のシンボルとする地域がある一方で、それとは別に悪魔のシンボルだとする地域もある。さらに形だけではなく色にも地域差はある。「太陽を描いて」とクレヨンを渡されれば多くの日本人は赤色を選ぶが、これも地域によっては黄色や橙色だったりする。

つまり、俺たちの世界でさえひとつのシンボルに解釈の幅があったのだから転移した

この世界ではなおさらだろう。

そんなことを考えているとクラリーナから指摘が入る。

「分からないわよ？ 物好きなプレイヤーが位階魔法みたいに伝えていられるかもしれないじゃない」

「シンボルをか？ まあ可能性はあるな」

言われてみれば確かにそうだ。プレイヤーの痕跡がある以上、位階魔法以外にも俺たちの世界由来の何かが伝わっていると考えるのが自然だ。

「ヴィクトルの装備をモチーフにするならカラスの色は赤かしら。逆三角は杯にもなるわよね。——うんうん、まとまってきたわ」

クラリーナが新しく紙を取り出すとスラスラと図形を描き始める。

はたから見ていると意外と絵心がある。

「これでどう？」

「それっぽいな、いい感じだ」

小さな王冠を被った赤いカラスが片足で杯を掲げている。

俺自身ブランドイングとやらに明るくはないが、初代ギルドマスターのスタイルは分かりやすい。やはり相手の記憶に残った方が活動しやすいのだ。

「じゃあ今後はこれがヴィクトルの公的な紋章ね。よし、工房に行ってくるわ」

クラリーナは紋章が決まって満足したのか鼻歌交じりに退室していった。

正直そこまで紋章が必要になる機会はないと思うのだが、まあクラリーナが楽しそうにしているのでよしとしよう。

\* \* \*

昼過ぎにグニラが現れた。

クラリーナに催促された雇用契約書を持ってきたのだ。

昨日と同じく応接室へ案内されたグニラは、嚴重に束ねられた雇用契約書をクラリーナに差し出す。

「ご苦労様。王国出身者7人、帝国出身者3人、法国出身者2人。計11人。意外と国際色豊かだね。言葉が通じちゃうから現実むじょうよりは働きやすいのかしら」

「俺にも見せてくれ」

クラリーナと契約書を回し読む。

全員女性で男手がないのは意外だが、ダーニ何某が荒事を引き受ける“ケツ持ち”だったと考えれば不自然ではない。国際色が強いとはクラリーナの感想だが、そもそも言葉が通じなくてもできるのが性交渉。国家間の交流が稀になった完全環境都市では高

齢者の外国人しか残っていないが、「出稼ぎ」がまだあった頃の色街には毛色の違う奴がゴロゴロいたものだ。

「名前の隣は借金額か。なるほど、儲けは少ないが衣食住の保障はある。悪くはないな」  
「そうね。返済できるかはともかく、最低限生きてはいけるわね」

リ・エステイゼ王国は奴隷制度を廃止した。だが雇用契約書を見る限り古代社会における家内奴隷と扱いが似ている。言い換えるなら奉公制度だろうか。

まず前提として奉公人に発言権はない。家長への従属が絶対だ。家長は奉公人に対して監督・支配権がある代わりに衣食住を保障する責任を持つ。血縁でなくとも両者は「親」と「子」の関係を持ち、この共同体を指してファミリアやファミリアなどと呼称される。ユグドラシルを思い返せば「○○ファミリア」なんてギルドはごまんとあった。

今回の場合、家長がグニラからクラーナに変わったことで、グニラ含め店の娼婦たちはウエネフィカ家の一員となる。

似たものに昨日グニラが口にした徒弟制度がある。特殊技能習得のために「特定のNPCに弟子入りする」なんてのはユグドラシルでもお馴染みのイベントだが、多くの場合この「師」と「弟子」も主従関係にある。親元を離れた弟子は師の世話をする見返りに社会的地位を保護されながら技術の継承を目指すのだ。

クラーナが誰に言うともなくささやく。

「奴隷が禁止されても抜け道はあるものね」

「その辺は俺たちの世界と変わらん」

人身売買や人身取引と呼ばれる行為は俺たちの世界でも横行していた。買う側の目的はなんであれ、それ自体は特別なことではない。戦争や飢饉が起こればどの国でも行なわれたし、時代によつては「養育」を免罪符に政府が認めることすらある。それもこれも社会を維持するため、弱者救済のため。違法性の程度は地域や時代によつて異なるものだ。

完全環境都市アーコロジしかり、大昔の日本しかり。伝統芸能であるところの「能」に身売りする少女の悲哀を扱う演目があるほど身近なものだったのだ。

リ・エステイーズ王国が未亡人や戦争孤児に限つて公娼を認めているのも、「どんな形であれ社会貢献させたほうが無駄死にさせるよりいい」と考えてのことだろう。認めるだけで勝手に身体を売つて税を納め、うまいこと身を固めてくれればこれまた勝手に次の労働力を生み出す都合のいい存在だ。

国家が弱者を一方的に救済するには「余裕」が必要だが、はたして魔物蠢くこの世界の人類に余裕が生まれる日が来るのかはわからない。かつての日本も一度は福祉政策を「弱者の社会への完全参加」まで果たしたが、滅びゆく世界の前では余裕も失われ、それまで獲得した倫理感も崩壊した。

クラリーナが机に数々のアイテムを並べる。

「グニラ、これらを渡しておくわ。しばらくは今まで通り店を維持しなさい」  
「畏まりました」

「それと、上納金を払って奴が来たら私が対応するから、こちらに回しなさい。念のためこの鈴も渡しておくわ。——振ってみて」

ふたつある鈴のひとつを受け取ったグニラがチリンチリンと振ってみせると、共鳴でもしたかのようにもう片方の鈴が鳴る。

「急を要する場合に限り鳴らすこと」

「お、お預かりします」

グニラが鈴を恭しく受け取ると、クラリーナは顔をほころばせる。

「さて、お堅い話はお終い。グニラにお願いがあるんだけど、いいかしら」

「私でお役に立てることがあれば、何なりとおっしゃってください」

「ウエネフィカ様、こちらが材料です」

「材料が少なくないわね。ジル、覚えてちょうだい」

「畏まりました」



場所は応接室から台所に移り、グニラが買ってきたばかりの品を並べる。薄力粉、卵、蜂蜜、植物油、砂糖、シナモン。現実ではお目にかかれなくなつた食材を前に懐かしさが募る。

クラーナがグニラにお菓子を作ってくれと頼んだのだ。

「始めに油の入つた鍋を火にかけます。適温になるのを待つ間に薄力粉少々、卵白1個分、蜂蜜大匙一杯を混ぜます。今回は奮発して蜂蜜にしましたが、樹液甘味料や砂糖でも代用できます」

グニラが深めの鉢ボウルに材料を入れて混ぜ合わせる。

生地の様子を確かめながら次第に水を追加していく。

「薄くなり過ぎないように注意してください。——これくらいです」

調理用のヘラで生地の混ぜ具合を確かめる。

とろみは強く、ヘラですくえば角が立つほどだ。

そして油の熱を確かめると、スプーンですくつた生地を静かに落としていく。ジュワーと小気味いい音が厨房に広がる。

油の中で生地の色が変わっていき、少し経つと立ち昇る煙に香ばしさが混ざる。

「こんがりとしてきたら取り出して、こちらの布巾で油を切りながら冷まします。あとは、お好みによって香辛料を振りかければ完成です」

グニラがヘラで器用に揚げ物を取り出していく。

布巾に次々と並べられていく揚げ菓子が早くも食欲がそそられる。

クラリーナが感嘆する。

「こうして料理を目の当たりにできるなんて感動ね」

「ああ、そうだな」

クラリーナの感動をよそに、俺はキッチンペーパーが無いことに内心驚いていた。消耗品として、冒険者組合では藁半紙めいた薄茶色の紙が掲示板に貼られていたし、都市長からの書類などは小奇麗な白い紙が使われていたが、どうやら台所への進出は果たしてないようだ。

なお現実では中下階層の住民は基本的に調理をしない。レトルト食品をコンビニで買い、自宅の電気ヒーターで温めて食べる。地球に居ながらにしてかつての宇宙ステーション内と同じ食事情だと思えば色んな意味で味わい深い。

ちなみに食の質をさらに下げると、空き缶片手に液体食料の配給を受けることになる。

思考の海から浮上すると、程よく冷めた揚げ菓子が皿に移され、仕上げにシナモンが振られているところだった。

「完成です。どうぞ、温かいうちに」

促されるままひとつ手に取って口に運ぶ。

サクツとした歯応えとともに香辛料独特の風味と、さっぱりとした甘さが口に広がる。

「甘さにしつこさがない。いいな、これ」

「そうね、美味しい。気に入ったわ」

人工甘味料の口にしつこく残る不快な甘さとは違う。

俺たちの反応に、グニラが今日初めての安堵の表情を見せた。

\* \* \*

「ヴィクトル、準備はいい?」

「準備も何も、ほとんどお前が用意したじゃないか」

「心の準備よ」

「ああ、まあ、問題ない」

俺は少女の声でそう答える。

ついに、という訳ではないが大浴場に行くことになった。それもクラーナのいう「幼女形態」でだ。使わなくなつて長い外見だが、これからはちよくちよくお披露目するこ

とになりそうだ。何にせよこちらの世界では「声の心配」をする必要がない。必要なのは俺の覚悟だけだ。

「強いて言えば名前をどうするかまだ迷っている。あと、関係性か」

「私の親戚でいいわよ。まったくの他人だと扱いづらいし、ヴィクトルの親戚設定で一人二役なんてことになったら面倒でしょ？」

少女のアバターは普段使いの青年のアバターと同じ制作者。幸いなことにクラリーナの人化した姿も黒目黒髪なので「民族性」を演出できるのはありがたい。

「確かに。——じゃあ、ついでに名前も頼む」

クラリーナに命名権を譲るとうーんとひとつ唸る。

「そうねえ、じゃあ、ソフィアにしましょう。私の名からセルペンスをとって、ソフィア・セルペンス・ラヴーシカ」。愛称はソーニャ」

「愛称？」

「親しさを演出するには必要でしょ？」

「なるほど」

「変えるなら今のうちよ」

「いや、それでいい。じゃあ、行くか」

「あ、そうだ。無口設定だけど、言葉使いには気をつけなさいよ」

「——はい」

時刻は夕方。俺たちは辻馬車を拾って大浴場へ向かった。

メンバーは俺とクラーナ、お供にマーシャとジルを連れている。服装は脱ぎやすさ重視でローブだ。クラーナが用意したので彼女とお揃いだが仕方がない。マーシャとジルは過度な武装に見えないよう普段の装備からいくつか「厳ついパーツ」を外している。

到着した大浴場はなかなか豪華な外観だ。それと知らなければ美術館や豪邸のようにも見えるが、建物後方にはエ・ランテル内でも珍しい高くそびえる煙突がある。

辻馬車を降りて利用客の集まる玄関ホールを抜けて受付へ向かう。クラーナが入場料を払う間にも新たな利用客が次々とやってくる。身なりの良い裕福そうな者から町民や職人などその客層は広い。

しかし、聞き及んでいた通りその比率は裕福な者、それも圧倒的に男性客が多い。社交場を兼ねた場所での男女比から透けて見えるのは、この世界——少なくともリ・エステイゼ王国の政は男性を中心に回っているのだろう。

そして偏った客層はそのまま各浴室の広さにも比例する。つまり、男湯は女湯の3倍

もの敷地面積があるのだ。

「お待たせ。ソーニャ、行くわよ」

支払いを終えたクラーナに頷きで応じ、次は脱衣場へと向かう。

床一面が装飾と滑り止めを兼ねたモザイク張りで、床下暖房が利いているのか足元からそこそこの熱気を感じる。脱衣場へ向かう途中から徐々に室温と湿度が高くなり、ここにきてようやく風呂屋だと実感する。

ベンチと棚が並ぶ脱衣場にはロッカーのような扉付きの収納棚がない。脱いだ衣類はそのまま棚に置けということだろうが些か不用心だ。

「もしや、ウエネフィカ様では？」

「ええ、そうですが、——どちら様でしょうか」

クラーナに付いて脱衣場内を歩いていると見知らぬ女に呼び止められる。40代前後、痩せ型で顔つきはやや鋭い女だ。身なりは良く、侍女をふたり連れていることからおそらくは貴族だろう。

記憶をたどるとこの女は俺たちのすぐ後に玄関ホールに現れ、クラーナに続いて支払いをしていたはずだ。

「私はビルギット。きちんとした自己紹介の前に、まずは場所を移しましょう。こつちよ」

俺たちは促されるままビルギットと名乗った女に続いた。すると脱衣場の奥に装飾で縁取られた出入口がひとつ。開閉する扉が無い代わりに出入口の横には警備員を兼ねた女性従業員がいる。

進んだ先も脱衣場だが、こちらは幾らか高級感と清潔感があった。

「貴女が買ったのは一等券でしょ？　こちらを利用しないと勿体ないわよ」

「あら、そうでしたの？　窓口では教えてくれませんでしたわ」

「でしようね。あの受付、人を選ぶきらいがあるから」

クラーナが周りに気づかれぬよう俺に小さくウインクする。彼女は下調べしたうえで大浴場に来た。当然ここの仕組みも確認済みだ。何も知らないで話を進めているのは相手を立てるためだ。

この大浴場は三等級制で、各等級ごとにサービスの質は異なる。ビルギットの口振りからも分かる通り、クラーナが購入した一等券は最上級のサービスを受けられるものだ。しかし、流れ者であったことから適切な説明もなく粗略な扱いを受けたことになる。

案内された一等級の脱衣場は相応の豪華さだが、見渡すと先客の使用人らしき者たちがその主の所持品を守るように見張っている。

警備員が居ても少なからず盗難の被害がありそうだ。

俺は服を脱いで腰布一枚になると、物理的に広がった視野でさらに広い範囲を窺う。

脱衣場から見える中庭を模した広場には円形の水風呂がある。天窓はあるもののが傾いているので室内は薄暗い。数少ないコンテイニアル・ライト「永続光」を囲むように、育ちの良さそうな婦女子たちが幾つかの組に別れて世間話に花を咲かせていた。彼女たちは娼婦らと比べると肉付きがいい。それだけ良いものを食べているのだろう。

そして中庭を中心に蒸気風呂、サウナ室、マッサージ部屋、垢すり部屋といった看板がぐるりと囲んでいる。どうやら中庭から各サービスに繋がっているようだ。

「個室が空いているそうよ。付いてきて」

周りに做つてジルを見張りに残し、ビルギットに付いていくとあることに気づく。中庭を通る際、それまでお喋りに興じていた幾つかの集団が声を落とし、好奇、憧憬、嫉妬、畏敬と様々な反応をみせた。視線の多くは先頭を歩くビルギットに向いている。

ビルギットはかなりの影響力を持つ者だ。

「ハイハイ」

案内されたのは十二畳ほどの広さの個室。中庭に面した壁が無いので「個室」と呼んでいいのかは疑問だが、入口に目隠し用の衝立があり、一応は中庭からの視線を遮っていた。

部屋の中央に寝台とバスタブがそれぞれふたつ、半身浴ができそうな三畳ほどの大き



さの浴槽がひとつ、水分補給用なのかポットとコップが複数個、それに籠いっぱい果物があつた。

5人でこれらを専有できるのならサービスとしては申し分ない。

「改めまして、ビルギット・エック・デイル・イブルよ」

名前の長さからすると間違いなく貴族だ。

問題は位の高さだが、中庭にいた女たちの反応から上位に違いない。

「クラーナ・デア・セルペンス・ウエネフィカです。流浪の身ゆえこの地の作法には疎く、

——無作法をお許し下さいませ、イブル様」

「ビルギットでいいわ。それにしても、堂々としてくれて助かったわ。話に聞いた通り、

貴女はこちら側の人間ね」

ビルギットはクラーナの立ち居振る舞い——貴婦人然とした風体が入ったらし

い。

しかもクラーナの事を何者かから伝え聞いている。時期的にもおそらくは共同保証人の誰か。何をどう聞いたのかは分からないが、俺たちに都合よく勘違いしているようだ。

ビルギットが不意に俺を見る。

「そちらのお嬢さんを紹介して頂けるかしら」

マーシャには軽く視線を送っただけで俺に言及した。

おそらくクラリーナが代表であることやマーシャが従者であることは知っていて、情報のない少女俺に興味を持ったのだろう。

「この子はソフィア・セルペンス・ラヴーシカ。私の縁者です」

クラリーナがそつと俺の頭に手を乗せ、さも辛い過去がありますといった表情で続ける。

「今は訳あつて声を失っています、聡明な子なんです。さあ、挨拶して」

俺はビルギットへ視線を向け、ペコリと頭を下げる。

表情はあえて作らない。その方がそれっぽいだろう。

「ずいぶんと辛い思いをされたとか、うちの娘と重ねると心が痛むわ」

「あら、お子さんが？」

「ええ、息子がひとりに娘がふたり。末娘のベツテなら齢も近そうだしお友達になれるかしら」

「機会があればご紹介ください。——ところで、私たちのことをご存知のようですが、どちらで？ こちらに来てまだ日が浅いですし、特に目立つことをした覚えも無いのです  
が」

「これは不躰だったわね。貴女のごことは夫から。レッテンマイア様とお会いした時に

色々伺ったそうよ。この国でその容姿は珍しいから、すぐに分かったわ」

受付がクラーナを異邦人と判断したくらいだ、嘘ではないだろう。そしてやはり言うべきか、情報は共同保証人、それも都市長経由だとすると無下にしていい相手ではない。

「レッテンマイア様から？ どのように噂されているのか気になりますわ」

「夫からの又聞きだから確かなことは言えないけれど、悪いようには言われていないわ。ふふ、少なくとも『女神のように美しい』は真実だったようね。貴女が困っていたら話を聞いてほしいと頼まれたのよ」

「便宜を図って頂けるのはありがたいのですが——」

クラーナが神妙な表情で返事を躊躇う素振りを見せる。

「なにか不安がおりかしら？」

「レッテンマイア様の伝手となりますと、ビルギット様は王族寄りなのでしようか。私たちはまだ王国に来たばかり、国王の人となりも知りません。いまは距離を保ちたいのです。それに、この国では魔法詠唱者マジックキャスターは肩身が狭いとも聞きます。不安ですわ」

「あらあら、リ・エステイーズ王国についてお調べになったのね。でも偏っているわ。——ヘルタ、入口で見張りを」

「マーシャ、ソーニャを先に洗ってあげて」

ビルギットが侍女に人払いを指示し、それに倣いクラーナも俺とマーシヤを遠ざける。

ここからの会話はデリケートなものになるのだろう。もつとも同じ室内なので遠ざけられても筒抜けではあるのだが、そこは相手が子供だからかビルギットも気にはしていないようだった。

俺はマーシヤにワシヤワシヤと洗われながらクラーナたちの会話へ耳を傾ける。

「確かにこの国の王侯貴族はふたつの派閥に分かれています。ただ実情はもつと細かくて複雑。イブル侯爵家は王族寄りの親バハルス帝国派よ」

「それは意外ですわ。帝国とは毎年小競り合いをしていると聞きました。王族側に帝国を擁護する派閥が属しているとは思いませんでした」

「歴史を辿れば不思議な話でもないわよ。王国と帝国はもともとひとつだったの。だから国境を中心に血が混ざっているのよ。貴族派閥にも親バハルス帝国派はいるわ」

まさかの侯爵家、上級貴族だ。

リ・エステイーゼ王国の貴族でありながら親バハルス帝国派と言われ首を傾げたが、理由を聞いて納得した。まったくの異民族同士というわけではなく、もとがひとつの国であったなら繋がりがあつて当然だ。

貴族は血縁関係を尊ぶ。より強い貴族やより古い血と関係を持つことで勢力を伸ば

すと聞く。貴族の男女に自由恋愛なぞ望むべくもなく、家の繁栄のために婚姻を結ぶ。婚姻による結束は強く、ゆえに封建社会では一蓮托生の関係性を生む。逆に一度でも縁を切られると関係の修復は困難だ。

そんな背景もあり、「血で繋がる諸貴族」は余程の不都合がない限り国家の垣根を越えて関係を維持するのだという。辺境に領地を持つ貴族は特にその傾向が強く、それは厳しい環境では「人」という括りで助け合わねば生きていけないからだ。ビルギットは補足する。

「国王陛下は齢60の老王。年齢的にも王位を息子に継承させるべきなんです。けれど、ふたりの息子のどちらにするか決めかねているようね。国の立て直しにも尽力されてはいるけれど、結果は振るわないわ。まあ、暗君ではないわよ」

ともすれば不敬と取られかねない発言をビルギットは恐れず言い切った。「後継者の指名を先延ばしにされると困るのよね」と続け、女には女の勢力争いがあるのだと愚痴をこぼす。

クラーナが小さく相槌を打ちながらビルギットの苦労に共感を示す。

相手の発言にただ共感する。下手な言質を取られぬように気を配りながら配慮していることを暗に訴える手法だ。

「あとは、——魔法詠唱者マジックキャスターに関してね。残念だけれど、貴女が聞いた通りよ。王国貴族は

勇猛さを誉れとする。この国で魔法詠唱者マジックキャスターに理解があるのは冒険者や商人くらいね。私が言うのも変だけれど、もしこの地に腰を落ち着けるつもりならバハルス帝国にも一度は足を運ぶべきよ」

「バハルス帝国ですか」

「帝国には三重魔法詠唱者トトライアットと名高いフルルダ・パラダイン様がいらつしやるわ。帝国魔法省や帝国魔法学院もあるし、魔法詠唱者マジックキャスターの扱いは王国と比べ物にならないわよ」

ビルギットは一旦言葉を区切り、真剣な表情になる。

「貴女、第五位階魔法を扱えるらしいわね。どんな傷も治せる魔法か薬に心当たりはないかしら」

「どんな傷も」ときた。その言葉に俺もクラナも僅かに目を細める。

余りにも時宜に即した、俺たちに都合のよい話題だ。

グニラたちから巡りめぐって伝わったとも考えにくい。彼女たちは存外現実的だ。俺が売った嗜好品の類は客を通して噂が徐々に広がっているが、件の軟膏に関しては隠している。

沈黙は揉め事を避けたい彼女たちなりの保身の表れだが、一方でグニラはリシグ・オブ・ユースフル若さの指輪を装備したままなのだから若さへの渴望とは恐ろしいものだ。

遅かれ早かれ本来のグニラを知る者から噂が広がるだろう。

クラリーナが言葉を選ぶように口を開く。

「察するに、私に接触したのはそれが目的ですね？」

クラリーナの問いにビルギットが頷く。

ここで出会ったのは偶然だったのかもしれない。しかし接触には明確な目的があった訳だ。

クラリーナは続ける。

「ご息女——、そうね、長女が事故に遭われたのかしら」

その言葉にビルギットが驚く。

「よく分かったわね。心を読まれたみたいだわ」

「ただの推測です。侯爵家ならば領地をお持ちのはず。でも夫婦揃って最前線ともいえる城塞都市にいらつしやる。旦那様が都市長と会談できるほど健康なら、治療を必要としているのは家族ではと」

「確かに、エ・ランテル滞在の理由は治療法を探すため。ここは帝国だけでなく法国との繋ぎを得るにも適していますから。でもなぜ長女だと思いに？ 政略結婚の駒として見ればあれには予備がある。家督を継ぐのも長男。長女は優先度が下がるとは思わなかったのですか？」

貴族社会にとって子とは繁栄のための駒にすぎない。その中でも直系男児は家の存

続の為に重宝されるが、女兒は他家と繋がる為に送りだされてしまう。それすらも場合によっては養子で代替できてしまうのだ。

ビルギットはクラリーナが迷わず長女を選んだ理由を知りたいようだ。

「ビルギット様は『怪我』ではなく、『傷』とおっしゃった。武勇を誉れとする王国男児ならば傷のひとつも箔となりましょう。家督を継ぐ者なら婚姻話に困ることもない。ソーニャのお友達にとベツテ嬢の名を口にしたときも躊躇いが無かった。つまり外に出しても問題が無い」

「消去法で長女が残ったのね」

「はい。それもおそらくは傷のせいで縁談が流れようとしている。齢は18以上、婚期を考えると早めに送りだしたい、といったところでしょうか。加えて夫婦揃って奔走していることを鑑みれば、長女は第一子で夫婦仲も円満。深い愛情を感じます。私の両親もそうであれば良かったのですが」

ビルギットはクラリーナの足が不自由だったことを思い出したのか少し気まずそうだ。言い回しからは両親たちの事故後の対応に問題があつて後遺症が残つたと受け取れる。

事実は分からないがビルギットに対するブラフ、ただの匂わせの可能性もある。

「詳しい症状をお聞かせください」

「お転婆が過ぎて落馬したのよ。落ちた先が悪くて、右頬から口にかけて割けてしまっ



たの。水薬<sup>ホーシヨウ</sup>で応急処置をしたけれど、領地に高位の神官様が居なくて」

ビルギットの話をまとめると、長女は顔の傷以外に骨折もしていた。下手に動かせないと判断し、治療ができる者を領地に招致しようとしたらしい。しかし敵対派閥の横槍でなかなか神殿から招くことができず、多額の寄付を申し出てようやく遠方の神殿から神官を呼び寄せたが時すでに遅し、完全な治療は叶わなかったという。

「それで傷痕が残ってしまったと。——マーシヤ、籠を」

クラーナが石鹼や香油、タオルなどが入った持ち込みの籠を要求すると、ビルギットは期待せずにはいられないのか身を乗りだす。

クラーナが取り出したのは俺が娼婦たちに使った例の軟膏を新たに改良したもの。より正確には腐敗化による消費期限の追加なので改悪、ダウングレードなわけだが、あえて消費期限を付与することで定期的な廃棄を促して売り続ける算段だ。

なおこの世界には品質や鮮度を保つ魔法<sup>プリザベーション</sup>〈保存〉があるが、それを以てしても腐敗の進行を限りなく遅くすることができただけで腐敗化を完全に止めることはできない。具体的には効能が徐々に減衰し、最終的には液状化の後に揮発する。

「これをお譲りしましょう」

「軟膏ね？ 用法を教えてくださいただけるかしら」

ビルギットが大切そうに、それでいて物珍しそうに小瓶を受け取る。見た目は30g

ラムほどの軟膏が入った小瓶で、蓋には異相協会のロゴが入っている。

「塗るだけで大丈夫です。そうね、まずは古傷を持つ配下の方で効果を確認してください。それと軟膏は半年は保ちますが、どうぞお早めに」

ビルギットの感情が揺らいだのを感じた。すぐにでも持って帰りたい、そんな想いが伝わってきた。

しかし、彼女は自制するとクラリーナへと向きなおる。

「ごめんなさいね。貴女を疑う訳ではないけれど、これが本物と分かるまでは形あるもので感謝を伝えられないわ」

「お気になさらずに、ビルギット様のお立場では当然です」

侯爵夫人ともなれば下手な口約束はできない。

慎重になって当然だ。

「ありがとう。でも、このままお別れする訳にもいかないわね。どうかしら、まずは友人として、今の私にできることはあるかしら」

ビルギットの言葉にクラリーナは笑顔で応える。

大浴場で最良の人脈を得たと言っていていいだろう。

その後、大浴場の本来の目的——みんなで汗を流してサツパリすると、俺たちはビルギットの案内で中庭へ移動した。彼女と交流のある派閥内の婦女子に紹介するためだ。

クラリーナたちは、この場では軟膏に触れなかった。代わりに試供品の香水を配った  
り、ちよつとした占術を披露して婦女子らとの交友を深めた。

俺は「設定」を活かして最初に軽く挨拶だけ交わし、身体を冷やすでいで集団を抜け  
出す。

「ソフィア様、どうぞ」

マーシヤが果物を持ってきてくれた。しっかりと保冷されていて、しかも甘くて美味  
しい。

彼女はクラリーナの指示で俺のお守をしている。クラリーナの護衛から外れることにな  
るが、客観的に子供をひとりにするのも体裁が悪いので致し方がない。

ただこの大浴場——女湯は至って平和だ。常時暗殺者の特殊技能で警戒しているが  
脅威は皆無。なんなら女湯を特殊技能を使ってまで監視している俺が一番の不審者だ  
ろう。

それからいくばくかの時間が流れ、クラリーナが貴族的な世間付き合いを終えて屋敷に  
帰った頃にはすっかり夜も深まっていた。

屋敷の居間に辿りつくとクラリーナはグツタリとソファアに沈む。

気怠くしているものの大浴場自体には満足したご様子だ。俺も潤沢に水を浴びて心が躍った。機会があれば男湯も行ってみたい。

「それにしても想像以上に香水の受けが良かったわね」

「ああ、そうだな。あの手のものはグニラたちにも人気があった」

「きつとこの世界では黒死病ペストが流行らなかつたのね。香水や匂い袋サシェの品質がそこまで高くない。これは商機よ」

この世界の住人は上流階級でもなければ毎日風呂や水浴びをする習慣はない。それでも水やお湯に忌避感がないおかげで暗黒時代と比べても体臭は薄く、ゆえに香りの研究もそこまで盛んではないのだろう。

香りは強さよりも継続力、それに種類を豊富に用意してパッケージングすれば市場に食い込めるはずだ。

そんなことをクラリーナと相談しながら一日を終えた。

しばらくは今回得た伝手を活かしての商売、情報収集をするつもりだ。

## 第10話：アインズ・ウール・ゴウン

宵のうち、俺たちはエ・ランテルでも名高い最高級の旅館を訪れていた。

宿泊のためではなく、大商人のバルド・ロフーレから食事に誘われたのだ。貴族も利用する歴史ある旅館と聞き、俺は錬金術師衣装からクラリーナが見繕ったものに替えている。

いまはバルドが手配したテーブルで当の本人を待っている状況だ。

「カツコイイわよ」

「人気があつたのは知っていたが、こうして着ることになるとはな」

クラリーナが用意したのは旧イタリアの国家憲兵をモデルにした制服だ。現場の人間が身につけるには装飾過多な気もするが、武器も携帯できて実戦にも耐えられる作りになっている。流石にマントは取り外しているが、こうした上品でお堅い場にはよく馴染む。

心配事といえばテーブルマナーだが、そもそもが異世界、他のテーブルを覗き見て学ぶことにした。

俺の着こなしを満足そうに眺めていたクラリーナがふと視線を上げる。

つられて顔を向けると、バルドが足早に近づいて来るのが見えた。

「おふたりとも失礼いたしました。ご招待した身でお待たせしてしまい、申し訳ない」  
「お気になさらずに。大丈夫でしたか？」

「ええ、声はかけましたが……」

バルドが言葉を濁す。

実は入店して早々、店内に若い女のヒステリックな声が響いたのだ。

バルドの知人だったらしく、彼は様子を見に席を外していたのだった。

「元氣なお嬢さんだったな」

「はい、帝国の方なのですが、御付きの方が立派なだけに同情してしまいます」

聞けば帝国から訪れた大商人のご令嬢で、ここ数日は「黄金の輝き亭」で豪華な生活をしていたという。その我儘ぶりは目に余り、振り回される執事に多くの同情が集まっているのだとか。先ほどの一幕も「この場にいる方々のお食事は私の方で支払わせていただきます」と支払いを申し出ていた。あの調子だとさぞや苦心していることだろう。

「ささ、料理を楽しみましょう。私の卸した食材です、美味しいですよ」

バルドはエ・ランテルで食料取引の多くを担う大商人。その彼が味を保証するなら疑うべくもない。姦しいご令嬢のことは忘れ、料理に集中する。

バルドが給仕に合図を送ると料理が次々と並べられていく。

卵のスープに薬草ハーブをまぶしたサラダ、豆と鶏肉の煮物、ワイン煮込みの焼き鳥などなど。パンも上流階級に相応しく真つ白で柔らかそうだ。

こつそり鑑定すると「豆と鶏肉の煮物」と、量は少ないが「チーズ」の栄養価が高い。得体のしれない「味付けされたなにか」で飢えを凌いでいた身としては、自分が何を食べているのか知れるのは素晴らしいことだ。

目の前の料理にクラーナも好奇心を隠し切れずにいる。

「美味しそうですわ」

「さあさあ、頂きましょう」

バルドに合わせながら食を進める。

「美味しい」

「それは宜しゅうございました。仕入れ先が品種改良に力を入れてまして、自慢の食材です」

「どうりで、どの料理も素晴らしいわけだ」

この世界の農作事情は知らないが、少なくとも魔法による〈鑑定〉がある。農家の経験則に頼るだけでなく、魔法的な裏付けもあるのなら品種改良も捗るのだろう。

なにより実食した感想は「最高」につきる。バルドが保障する通り、味は確かだ。

俺たちは世間話に花を咲かせた。ずいぶんと街の空気にも慣れたが、それも保証人であるバルドのお陰だ。エ・ランテルに来て日の浅い俺たちに事あるごとに世話を焼いてくれた。しかも、ただ人が良いだけではない。損得をもとに接してくれるので一定の信頼を置けるのだ。

「ロフール殿、我々は近いうちに王都へ行こうと思っている。出立前に挨拶を兼ねてお時間をいただきたい」

「おお、左様ですか。では商会の割り印を、ご用意いたしました。私共の支店で提示していただければ色々と融通が利きます。補給や宿の調達などお申しつけください」

「感謝する。我々の商品も各支店へその都度卸すつもりだ。話を通しておいてくれると助かる」

「ええ、もちろんですとも。——おっと、そうでした」

それまで笑顔だったバルドが声を落とし真面目な表情になる。

「エ・ランテル近郊には派手に暴れている野盗集団がおります。異相協会の武力を侮るわけではありませんが、もし護衛や案内役が必要でしたらお声かけください。信頼できる者を、ご紹介させていただきますよ」



流石は大商人。商隊を運用する規模になるとセキユリテイ意識も高い。

ただ彼も言っているように異相協会の戦力を考えると杞憂だ。

「ご忠告ありがとうございます。しかしご心配には及びません。冒険者登録こそしておりませんが、私どもの従者はアダマンタイト級の實力。野盜風情が100人襲つて来ようとも後れは取りません」

「ふむ。これが並みの商人なら小言のひとつも言いたいところですが、大陸を渡つてきた猛者の言葉ともなると納得するしかないようですね」

「せっかくのご親切なのに申し訳ありません」

「氣にする必要はありません。正直に言いますと、恩を売りたいのですよ」

「すでに十分過ぎるほどの恩を受けていますよ」

この言葉に嘘は無い。既得權益を侵すリスクはバルドを挟んでかわす目論見もあるが、異相協会の品を彼の商会に卸すのは恩返しを兼ねてのもの。もし彼でも難儀する横槍が入るようなら裏から手を回すつもりでもいる。

「そう言っていただけだと励みになります。今後とも宜しくお願いいたします」  
バルドがグラスを挙げたので乾杯する。

結局この街の風呂屋を牛耳るイズエルク伯爵には会えなかつた。しかし、都市長に大商人、それに侯爵夫人と、この世界ではなかなかの伝手を手に入れた。地固めとしては

順調な滑り出しだ。

\* \* \*

王都に向かう前日、俺たちはお世話になった人たちに別れの挨拶をして回った。

たかだか1週間ほどの滞在では出会える人数は限られる。しかし電子メールもなく王国語も書けない俺たちはひとりひとり会って別れを告げるしかなく、丸一日をかけて挨拶を終えた頃には日もとつぷりと暮れていた。

屋敷の居間でリオがくれた紅茶を飲みながら寛ぐ。

バルドの屋敷でゆっくりするのも今夜で最後だ。

「ヴィクトル、王都にはお城のほかにも宮殿があるらしいわよ」

「インヴェイジビリティへ不可視化」で見て回るか？」

レッテンマイア都市長の保証書を握りしめながら城門を叩いてもいいが、国の重要拠点を観光できるとは思えない。手っ取り早くすませるなら覗きか侵入、然るべき手続きを踏んでまで見たいかと問われると答えは否だ。

「良いわね、それ」

どこまで本気なのかわからないクラーナの相槌に、俺は当面の問題点を挙げる。

「道中をどうするか、だな」

問題とは各領主が課す税。ひとつの国を名乗ってはいるが、このリ・エステイーゼ王国は各領主の裁量で様々な税を徴収していた。例えば王都に近い領地——魔物の出現が比較的に少ない地域では通行しやすい峠や橋などの要所に関所が設けられている。場所によつては井戸や粉引場などにも税がかかると聞く。

もちろん異相協会の馬車でならそれらの問題を物理的に避けて通ることは可能だ。

「そうねえ、*「バレなければ」*とも思っけれど、揉め事の原因になりそうだし順当に——っ!？」

突然「チリンチリン」と鈴の音が鳴りクラーナの言葉を遮った。

以前グニラに渡した共鳴する魔法の鈴。

急を要する場合に限り使うようにと指示してあつたはずだが——。

クラーナが魔法を発動する。

「*「へ伝言」*、——グニラ、聞こえる? どうしたの?」

クラーナはグニラに呼びかけながら遠隔視の鏡をインベントリから取り出す。

音声だけの*「へ伝言」*と合わせて状況を素早く把握するつもりだ。

「不死者? 落ち着きなさい、いま見てるわ」

不穏な言葉だ。

席を立ててクラリーナの肩越しに遠隔視の鏡を覗く。

「これは、何が起こってる?」

「見ての通りよ、街なかに不死者が闊歩しているわ」

月明かりの中、大通りを多くの人が逃げまどっている。

さらに目を凝らすと動死体や骸骨などの初級モンスターと衛兵が戦っていた。しかし不死者の数は多く、対する衛兵たちは劣勢だ。衛兵が下がるに比例して街への被害も広がっていく。

「ハロウインって訳じやなさそうだな」

「ヴィクトル、アエラちゃんを呼んで。行くわよ」

クラリーナの〈転移門〉で娼館へ移動すると、怯えた様子のグニラ、カーリン、マリーが出迎える。経営組の3人だ。

玄関側には「客」らしき男らが数名、即席の武器を手に外を警戒していた。彼らは突然現れた俺たちに驚いた様子だったが、グニラたちが駆け寄ったことで味方だと察したようだった。

「ウ、ウエネフィカ様! 外に不死者が!!」

「分かつてるわ。でも店は大丈夫そうね」

他の通り沿いの建物がその出入口や窓を境に不死者アンデッドと攻防を繰り広げているなか、この娼館だけがまるで無視されているかのように避けられていた。

「多分こいつのお陰だろう」

「ああ、なるほどね？ 備えあればって奴かしら」

入口横の壁に飾られた護符、俺が売った魔除けだ。

クラーナが周囲を見渡す。

「グニラ、彼らは客？ 他の娘は？」

「仰る通りお客様です。あとふたり居たんですが、家族が心配だと言って飛び出してきました。娘たちは上の階に。みんな無事です」

「よく対応してくれたわ。貴方たちも騒動が治まるまで2階で休んでいてちょうだい。カーリン、マリー、彼らを案内してあげて」

外を見張っていないと不安だと主張する男たちを、カーリンとマリーが半ば強引に連れていく。クラーナの正体を知る彼女たちにとってその言葉は絶対だ。

男たちの気持ちは理解できる。しかし今はその目が邪魔だ。

俺はアエラに彼女たちに付いていくよう命じる。アエラの姿を見れば娼婦たちも安心するはずだ。

それにアエラは常時発動型技能の〈清浄なるオーラ〉を取得している。味方へのバフ、不死者の能力値低下、アエラと不死者のレベル差があれば継続ダメージを与えることもできるオーラだ。実際アエラが街を練り歩けばいま暴れている低級不死者の殆どは勝手に滅ぶだろう。

ただそこまでやる義理はない。

俺は玄関先に立ちグニラに手招きする。

「グニラ、こうした不死者の発生はよくある事なのか？」

「共同墓地でならあると聞きますけど、こんな規模で、しかも居住区まで襲われるのは初めてです」

詳しく聞くと、不死者の発生自体はよくあることで、だからこそ普段から墓守や神殿関係者、冒険者組合などが協力して共同墓地を維持管理しているという。

「となると人為的なものか？」

疑問を口にしながら店内に戻ると、クラリーナが突然〈変身〉を解いた。

そして立て続けに呪文を詠唱する。

〈占術妨害〉、〈念視感知〉、〈偽りの情報〉、〈探知探索〉、〈上位呪文抵抗〉、  
〈上位抵抗力強化〉、〈上位魔法盾〉

その様子に何が起こったのかを察し、俺はグニラへ戸締りを命じる。

「グニラ、扉を閉めて鍵をかける」

この混乱した状況でクラーナの正体が明るみになるとあらぬ誤解を受ける。戸締りを確認し、俺も〈擬態〉<sup>ミミック</sup>を解いて狩り兼PK用の装備を纏う。

クラーナの行動はプレイヤーに走査された時のもの。敵対的なプレイヤーと遭遇する可能性を前にして俺たちのような異形種が、それも製造職が人の姿弱体化を続けるのは自殺行為だ。

詠唱を終えたクラーナが状況を説明する。

「ヴィクトル、誰かから〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>が来たわ」

「——出ていいぞ」

クラーナに応じながら俺もバフ用の水薬ポーションを数本飲む。

「もしもし？ ——あら、こんばんは。貴方もこちらへ来てらしたのね」

クラーナが俺に向かって手のひらを下にヒラヒラとしてみせた。

問題が無いことを伝えるハンドサインに領き返し、俺は再び人間の姿に擬態する。

クラーナが通話を続ける。

「それは心中お察しいたしますわ。——じゃあ、この騒動も？ え!? ああ、——それは不味いわね」

クラーナが俺と目を合わせる。

声の調子からそこそこ悪いことが起こったようだ。

「ええ、私から伝えるわ。じゃあまた後で」

通話を切つて一呼吸。

クラリーナは続ける。

「ヴィクトル、良いニュースと悪いニュース、どっちから聞く？」

良いニュースがあることにひとつ安堵する。

「悪い方から聞こう」

「クレマンティーンが死んだわ。ただこれは事故だと思つて」

まさかの内容に一瞬思考が止まる。

「そうか。良いニュースは？」

「アインズ・ウール・ゴウンがこっちに来ている。いまの〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉はモモンガさんよ」

異形種ギルド、アインズ・ウール・ゴウン。そしてそのギルドマスター、モモンガ。ユグドラシルにおいてはかなりのビッグネームだ。全盛期はギルドランクの上位に位置し、ロールプレイを重視したメンバーが多いにも関わらず、敵対プレイヤーによる大規模な拠点侵攻を撃退できるほどの実力を持つ強豪だ。

そして、異相協会のお得意様でもある。クラリーナは同じギルドマスター繋がりでもモンガと懇意にしていたが、俺にとっては取引先の上役としてのイメージが強い。



異相協会とアインズ・ウール・ゴウンの付き合いは長い。始まりはクラリーナがギルドマスターになる前、アインズ・ウール・ゴウンがまだ克蘭時代だった頃にまで遡る。ただギルド間の付き合いは長くても、双方のメンバーが仲良しだったかと問われるとそうでもない。

遊び友達というよりはビジネスパートナーだ。

俺が個人的に交流を持っていたと言えるのは獣王メコン川とヘロヘロのふたりだろうか。きっかけは俺が所有する希少アイテムを獣王メコン川が欲したことが始まりだ。急を要すものの資金が無いと言う彼に、俺が出した交換条件でヘロヘロが巻き込まれた形だ。

「アインズ・ウール・ゴウンが」ってことは、拠点ごとなんだな？」

「そうみたい。色々と相談したいから会いたいそうよ」

「分かった。なら馬車に戻って準備をしたほうがいいな」

グニラたちに騒動が治まるまで待機を命じ、俺たちはギルド拠点の馬車に戻った。クラリーナによれば間もなくモモンガから連絡が入る。

あの「伝言」の後、モモンガは冒険者モモンとして不死者騒動を解決した。そして早々

に事後処理を冒険者組合へと丸投げし、異相協会との会談の場を設けるそうだ。

「アインズ・ウール・ゴウンの拠点名が思い出せん。行ったことはあるのか？」

「ナザリック地下大墳墓よ。入口前にだけ、5代目就任の挨拶で行っただけね。取引はいつも向こうから来てくれてたし、中はないわ。ほら、あの頃に“燃え上がる三眼”の件があつたから」

「ああ、そんなこともあつたな」

情報の秘匿性が高いユグドラシルにおいて、その情報を盗み出して有料サイトで公開していたギルドがあつた。被害にあつた上位ギルドが連合を組んで滅ぼしたのだが、あの事件以来スパイを警戒する各ギルドの加入が難しくなつたと聞く。

「俺は動画や情報サイトでしか見たことがない。ちよつと楽しみだ」

「あら、意外と乗り気ね」

「まあな、伝説のギルドだ。興味はあるさ」

過去にナザリック地下大墳墓攻略を狙う大規模な攻勢があつた。傭兵NPCを含む1500人からなる討伐隊をわずか41人で撃退した配信は、その後の炎上も絡めて再生数を記録的に伸ばした。

情報サイトにはその際に判明した「第八階層」までが載っていた。

「私もよ。——さて、準備もできたことだし、あとはお迎えを待つだけね」

俺とクラーナは異形種ギルドにお呼ばれしたとあって本来の姿に戻っている。何度見てもクラーナの本体は迫力がある。粘体スライムの身体も扱い方の言語化は難しいが、7メートル近い蛇の身体を動かす感覚とはどんなものなのだろうか。

\* \* \*

「ヴィクトル、連絡が来たわ。——もしもし？ ええ、準備は出来てるわ。防壁は切つてるから、いつでもいいわよ。え？ それはいいけれど……、分かったわ」

〈伝言メッセージ〉を切つたクラーナが困惑していた。

「どうした？」

「ロールするから合わせて欲しいって。ほら、NPCの目があるから。あと名前をアイズ・ウール・ゴウンに改名したって」

「ギルド名に改名？——まあそれはいいが、向こうの設定なんて知らないぞ。アドリブは苦手なんだが」

「私が喋るから、ヴィクトルは適当に相槌を打つてちょうだい」

任せると言う間もなく〈転移門ゲート〉が居間に開かれる。

「次からは外に繋いでもらおう。狭くてかなわん」

拡張されているとはいえ、流石に馬車の中に繋げられると圧迫感が凄まじい。

そんな俺の愚痴と同時に〈転移門〉からひとりのメイドが現れた。

眼鏡にメイド服、夜会巻きの女だ。情報サイトには載っていないかと思う。となる  
とあの大侵攻を免れたNPCか、新たに創られたNPCだろうか。

メイドがお辞儀する。

「ナザリック地下大墳墓の支配者、至高の御方であられるアインズ・ウール・ゴウン様に  
忠義を尽くす戦闘メイドが一人、ユリ・アルファと申します。主の思し召しによりお迎  
えに上がりました。準備はお済みでしょうか」

「大丈夫よ。私と彼、あとこの子ね」

ユリと名乗ったメイドが、「この子」と紹介されたアエラを見て僅かに怪訝な表情を  
みせた。

しかしすぐに姿勢を正すと、彼女は何事もなかったかのように一礼する。

「では、こちらにどうぞ」

ユリの案内で〈転移門〉を抜けると、そこは半球状の大きな部屋だった。

眼前には巨大な扉が鎮座していた。扉の右側には女神の、左側には悪魔の姿が彫刻さ

れている。情報サイトには無かった空間だ。たまたま撮影を免れたのか、はたまた未知の階層か。どちらにせよ年甲斐もなくワクワクしてしまふ。

「この奥が玉座の間でございます。アインズ様はそちらでお待ちです」  
 ユリが深く一礼すると重厚な扉がゆっくりと、それも誰も手を触れていないにもかかわらず開いていく。

玉座の間は天井が高く、豪華なシャンデリアが幻想的な虹色の輝きを放っていた。白を基調とした壁や柱には金による細工が施され、天井からは床まで垂れさがる旗が列をなしている。

俺たちは中央に敷かれた真紅の絨毯を進む。

左右にはユグドラシルではお馴染みのモンスターが並んでいた。どれも高レベル帯のモンスターだが、こうして目の当たりにする日が来るとは思わなかった。

絨毯の先には階段があり、各段には動画で見たことがあるNPCたちが佇んでいた。  
ヴァーミンロード  
 蟲 王の<sub>アーティデヴァイル</sub>コキュートス、ダークエルフ闇妖精の<sub>トゥルーヴァンパイア</sub>アウラとマールレだ。ただ真祖のシャルティアと

最上位悪魔のデミウルゴスの姿が見えない。それに玉座近くに侍る翼を生やした美女は初見さんだ。

階段の下にはいつの間合流したのか案内役のユリが、恐らくは同じ<sub>ブレアデス</sub>戦闘メイドの仲間と共に佇んでいた。夜会巻きの彼女を含めると、三つ編み、ストレート、シニヨンと

制作者たちの趣味が伺える。

改めて階段の最上階、玉座に座るアインズを見る。

ユグドラシルではお馴染みの死の支配者オーバードの外見に、アインズをアインズたらしめる他の死の支配者オーバードと差別化させる赤黒い球体が腹部で妖しく光っている。そして、動画で猛威を振るっていたギルド武器。このふたつがマップギミックと連動し、高レベルプレイヤーたちを蒸発せしめた。

正直、敵対していなくても対峙するには覚悟がいる。

ふと彼の足元で揺らめく赤黒いオーラにユグドラシルつぼさを覚えて物懐かしくなる。カルマ値がマイナスよりのプレイヤーに人気があつた外装データだ。

階段の下、NPCたちの前まで到着するとアインズに侍る美女が、その容姿に相応しい綺麗な声を発する。

「アインズ様。異相協会ギルドマスター、クラーナ・デア・セルペンス・ウエネフィカ様、並びにギルド員、ヴィクトル・ヴィ・ニエボ・アルヒミア様がお見えになりました」

「良くぞ来られた、異相協会の者よ」

「お招きいただき感謝するわ。アインズ・ウール・ゴウン殿」

威厳あるアインズの言葉にナザリックのNPCたちが得意気な表情を浮かべるが、次の瞬間その表情が戸惑いに変わる。なぜなら彼らの主たるアインズが玉座を立ち、階段

を降り始めたからだ。どんどん階段を降りるアインズに対し、NPCたちは慌ただしく追従する。

主を見下ろすのは不敬と言わんばかりの様相だ。

そうこうするうちにアインズがクラリーナの目の前に到着する。

そしてクラリーナの手を取り、硬く握手する。

「久しぶりだな、クラリーナ。本当に、会えて良かった」

「ふふ、まだ一週間くらいしか経ってないわよ。えーと、——アインズ、と呼んでいいのかしら?」

「そうしてくれるとありがたい。それと——」

アインズが俺に向きなおり頭を下げる。

ざわりとナザリックのNPCたちが動揺するなか彼は続ける。

「ヴィクトルさん、知らなかったとはいえ貴方の配下を殺してしまった。誠に申し訳なく、心よりお詫びしたい」

「事故だと聞いている。そんな軽々しく頭を下げないでほしい」

「そうはいかない。逆の立場なら私は私を許せない」

想像以上にアインズは事態を重く受け止めているようだ。

肌を重ねたとはいえクレマンティーヌはこの世界で拾った犯罪者。殺した相手がア

インズ・ウール・ゴウンであればギルドの利益を優先できる程度の存在だ。

「——分かった、謝罪を受け取る。ひとつ貸しにしよう。だから頭を上げてくれ。それと俺のことも呼び捨てで構わない」

「寛大な心に感謝する。私のこともアインズと呼んでくれ。——ペストーニヤ、彼女を」

アインズに呼ばれた犬頭のNPCがクレマンティーヌを連れて現れた。

「こちらに。〈<sup>トウル・リザレン・コン</sup>真なる蘇生〉で復活を行いました。記憶の混乱はあるものの状態異常はありません。装備も修復済みです……わん」

その報告に頷いたアインズがクレマンティーヌを差し出すように彼女を導く。

「ヴィクトル、仕様がユグドラシルと同じなら復活によるレベルダウンは2くらいだろう。墳墓エリアを開放するのでレベル上げに使ってほしい。もちろんこれは謝罪の内、借りとは別だ」

見た限りクレマンティーヌは最後に会ったままの姿だ。

しかし様子が変わだ。真っ先に俺の横に待るかと思いきや、彼女が控えたのはアエラの横。置かれている状況が飲み込めないのかやや落ち着きがないし、なんとなく避けられている気もする。

俺がクレマンティーヌの様子を不思議に思っているとアエラから念話が届く。

『ヴィクトル様、クレマンティーヌは御身の粘体姿<sup>スラム</sup>を初めて見るのでは』



「あ、そうか。そうだったな」

クレマンティーヌは俺たちが人間ではないことを知っている。でも正体を見せたこととはなかった。このなかで彼女に見覚えがあるのは唯一アエラだけ。たとえアインズが目の中の粘体スライムをヴィクトルと呼んだとしても確証がなかったのだろう。

俺はアエラの指摘を受けて人の姿に擬態すると、クレマンティーヌがビクリと姿勢を正す。

「!? ヴィクトル様!」

「おう、災難だったな。まだ混乱しているだろうから話は後だ。そこで大人しくしてろ」  
混乱しているクレマンティーヌを待機させ、アインズに話を振る。

「アインズ、ちなみにどういふ状況でこいつと戦闘に?」

「ああ、それはだな——」

アインズの証言をまとめると、エ・ランテルの不死者騒動アンデッドの折に首謀者と思わしき集団とクレマンティーヌが一緒に居たらしい。クレマンティーヌが首謀者の仲間であると疑い売り言葉に買い言葉、互いの挑発で後に引けなくなつて戦いに至り、致命傷を与えた直後に首輪のギルドマークに気づいてクラーナにメッセージを繋いだという。

なお後日落ち着いたクレマンティーヌを確認すると、どうやら彼女は首謀者たちから魔導具を取り戻そうとしたものの、接触したときには封鎖された霊廟内で儀式の真つ

最中。不<sup>アンデッド</sup>死者が溢れ出し、ようやく出てきた首謀者と言い争いになったらしい。

その後はアインズの証言通りだ。

「こいつは喧嘩っ早いからな、自業自得だな。そうだ、ひとつ死<sup>オーバード</sup>の支配者としての意見がほしー」

「私に答えられるものなら喜んで」

「こいつは多くの命を奪ってきた人間だ。死罪に値するほどだ。——今回、アインズによつて死を得た訳だが、復活したこいつの罪をどう測る？」

アインズが僅かに首を傾げる。

「死刑執行後に蘇生したら自由の身になる」という都市伝説を語り合いたい訳ではなさそうだな」

アインズがクレマンティーヌへ赤黒く光る眼光を向ける。

死<sup>オーバード</sup>の支配者に見下ろされた当のクレマンティーヌは顔色が悪い。

「ふむ。ナザリックにおいて死はこれ以上の苦痛を与えられないという意味で慈悲である。それは転ずれば生きているうちは罰を受け続けなければならないということだ」

「つまり死刑を経ても罪は消えないと？」

「死刑とは人間の尺度で作られた法に基くもの、死を容易に覆せないからこそその刑罰だ。命の価値を最高値に設定しているからこそ、死に値する罪」とやらを相殺したことに

できるし、被害者遺族を納得させることができる。違うか？」

「確かに蘇生が容易なら命も軽くなる。犯した罪の重さを相殺できなければ赦免もありえないか」

「この世界の人間にとつても死はなかなか重いようだがね。——その女がどんな罪を犯したのかは知らないが、死罪を相殺できるだけの「償い」は存在しないと私は考える。もしそんなものがあるのなら死刑なんぞ必要ないだろう」

「なるほど。相殺できないなら償い続けるしかないか」

俺はクレマンティーヌを落ち着かせるように跪く彼女の頭を撫でる。

飼うと決めたのは俺だ。生きるのに精一杯だった完全環境都市時代ならいざ知らず、今は精神的にも余裕がある。俺自身、人を正せるだけの徳があるとは微塵も思わないが、最後まで面倒を見るしかなさそうだ。

「そろそろいいかしら？ なにか相談があるから呼んだんでしょ」

痺れを切らしたクラーナが本題とばかりに切り出す。

俺は彼女と入れ替わるように一歩下がる。ここからはギルドマスター同士の話だ。

「ああそうだった。冒険者組合から呼び出しがあつて時間がない。今日のところは手短

に、アインズ・ウール・ゴウンは異相協会との同盟を希望する。どうだろうか」  
クラリーナが僅かに逡巡し、そして肯定するように頷く。

「異相協会の基本方針は中立。でもそうね、この転移劇は非常事態。同盟を組みましよう。そこで提案があるのだけれど——」

クラリーナがインベントリから一枚の金貨を取りだし、アインズが骨の指で器用に受け取る。

「ユグドラシル金貨、それも旧バージョンか。懐かしいな。私はこちらのデザインの方が好きだったのだがね」

「ふふ、私もよ」

ユグドラシルには貨幣と呼べるものは金貨しかなかったが、実は新旧2種類の硬貨が存在する。初期からある男性の横顔が彫られた旧硬貨と、大型アツプデート「ヴァルキュリアの失墜」から使用された女性の横顔が彫られた新硬貨だ。

これらの硬貨はプレイヤー間の取引はもちろん、ギルドの運営やシモベの召喚、スクロールの作成やNPCの復活など、利用方法は多岐にわたる。

アインズが手の中で金貨を転がす。

「それでこの金貨で何をしようって？」

「異相協会は生産ギルド、商売は自由にさせてもらおうわ。アインズ・ウール・ゴウンの活

動には配慮するけれど、どこかで物事が競合するかもしれない。そこでこの旧硬貨を提示された場合に限り、何をおいてもそちらとの取引を優先的に行なう——つてことでどうかしら」

「面白い提案だ。事故は想定して然るべきだし、要らぬ衝突を避ける仕組みは必要だ。加えてこちらからもひとつ。最重要な取引は旧硬貨、ユグドラシル由来の取引は新硬貨、その他この世界に由来する取引はこの世界の硬貨を使うのはどうかな？」

「いいわよ、それでいきましよう」

「成立だ。アルベド、シモベたちに情報を共有しろ。異相協会とは同盟を組む、敵対行為は厳禁だ。外に出ている守護者たちにも忘れずにな」

「アインズが側に侍っていた美女に指示を出すと秘書然とした復唱が返ってくる。

「畏まりました、アインズ様。アインズ・ウール・ゴウンと異相協会との同盟をシモベたちに周知させます」

「うむ。——そういうえば、その狼は」

鷹揚に頷いていたアインズが不意にアエラへ注意を向ける。

俺は手招きしてアエラをアインズの前でお座りさせる。

「アエラだ。獣王メコン川さんとヘロヘロさんの助力を受けて生まれたNPCだ」

「ああ、あの時の！」

アインズのテンションが目に見えて高くなる。

「懐かしいなあ。——この子の人化を頼めるかな?」

俺がアエラに目配せすると赤毛の狼から黒ナース服姿に変わる。

「やはり面影があるな。ルプスレギナ、ここへ」

アインズに呼ばれた戦闘<sup>ブレアデス</sup>メイドが緊張気味にアエラの隣へ並ぶ。

彼の言う通りアエラとルプスレギナは同じ赤毛で顔立ちも似ていた。

それもそのはず、希少アイテムを獣王メコン川に譲る代わりに出した交換条件は「犬を飼いたいから手伝ってくれ」。外装データは獣王メコン川の伝手を借り、犬の動作はへロへロにプログラムしてもらったのだ。

最終的に俺の手が入っているものの、アエラとルプスレギナが似ているのは必然だ。

「ギルド会議で相談された時は代金を立て替えようとも思ったが、うむ、許可を出して良かった」

アインズが懐かしむように独り言ちる。

「お前たちもこつちに来い。この娘にはメコン川さんとへロへロさんの意志が宿っている、言わばルプスレギナの従妹。メイドたちの親戚みたいなものだ」

アエラと戦闘<sup>ブレアデス</sup>メイドたちが親睦を深めるべく交流する様子を、俺とクラナ、そしてアインズは少し離れたところで見守る。

それはまるで幼い我が子を見守る親のようだった。

## 第11話：脅威

「何ですって?!」——分かったわ、助けは必要?」

アインズからの〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>にクラリーナが緊迫した声を上げる。ナザリック地下大墳墓から戻って1時間もしないうちに再びアインズから連絡が入ったのだが——。

「——ええ、連絡を待ってるわ」

〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を切ったクラリーナがソファアールから立ち上がる。

「ヴィクトル、馬車へ移動するわよ。リオ、屋敷を引き払う。準備なさい」

「緊急事態か?」

「シャルティアが精神支配を受けたそうよ」

「ありえないだろ。種族特性で無効化されるはずだ」

「ええ、それは彼も理解している。だからこの世界固有の力を疑っているわ」

「——未知の魔法か、生まれながらの異能か」

<sup>スライム</sup>粘体も精神作用無効を持っているが、それを突破しうる力があるとしたら事態は深刻だ。

俺たちは慌ただしく屋敷に持ち込んだものを回収する。



「クラーナ、アインズはどう動くつもりだ？」

「冒険者組合がエ・ランテル近郊に吸血鬼ヴァンパイアの出現を認めたとすよ。彼は冒険者として討伐を名乗りでるつもりみたいね。状況が動き次第また連絡するって」

「俺たちはどうする？」

「予定通り大門が開く時間になったら出発よ。それまでは馬車で待機ね」

俺はその指示に納得する。

バルドには申し訳ないが、彼の屋敷より馬車の方が安全だ。

\*\*\*

時刻は大門が開く少し前。俺たちは屋敷をバルドの使用人に託し、エ・ランテルの西門広場に馬車を移動させた。初めてエ・ランテルに到着した時は南門だったが、門や広場の作りは同じだ。

こちらの広場は南門以上に商人の荷馬車や護衛に雇われた傭兵たちでごった返している。それもそのはず、西門は王国全土に通じているからだ。「城塞都市エ・ランテル」は言わば諸国と繋がる玄関。貴重な輸人品を得られる場でもある。ここに集う武装した商隊は、これから各領地へ仕入れた品を持ち帰るのだ。

相変わらず異相協会の豪華な馬車は人目に付く。昨夜の件もあるので御者台にクレマンティーンを配置して警戒させている。俺も馬車の横でアエラと戯れている素振りをしてつつ、技能スキルを使って周囲を観察中だ。

「アルヒミア様、お待たせしました」

俺は若い女の声に呼ばれて振り返る。

「ご苦労だったな、リタ、ソレーヌ。少しそこで待つててくれ」

朝市で日用品を買い込んだリタとソレーヌだ。

実はグニラの店から4人ほど引き抜いた。経営組のカーリンと、娼婦のリタ、ソレーヌ、ナタリーだ。表に出せる使用人にするつもりなので、選考基準は「文字の読み書きができる」と「稼げない女」、そして「宣伝効果がある娘は除外」。これらの条件で残ったのが先の4人だ。

カーリンは王国、リタは帝国、ソレーヌとナタリーは法国の文字に対応できる。ただしナタリーは読めはするが両手が無い。つまり物理的に書けない訳だが、当然これだと洗濯屋の労働力としても微妙だったことで連れていくことになった。リタも20代前半でまだまだ稼げるはずだが、同じ帝国組の年長ふたりが除外されたので消去法で選ばれた。

なおグニラには引退した冒険者を警備兼労働力として雇い入れるよう命じてある。

あとはバルドと上手く連携して稼いでくれれば今後の活動がしやすくなる。

ちなみにクレマンティーヌは元々家柄が良く教育に恵まれていたのと、漆黑聖典という特殊な環境下で訓練を積んだおかげで3ヶ国語の読み書きができる。法国粹を彼女で補う案もクラナナからは提案されたが俺は却下した。

理由は単純、人格に難があるからだ。命令すれば今の彼女なら真面目に遂行するだろう。しかしアインズとの一件がある。目が届かない場所では正直なにをしでかすか分からない。飼い主としては不安が大きいのだ。

「おお、間に合いましたか。餞別にとっておきの果物を持ってきましたよ。あと、少ないですが路銀の足しにどうぞ」

「ロフール殿?! まさか見送りに来ていただけるとは。それに餞別まで」  
前日に出入の挨拶は済ませている。

にもかかわらず改めて見送りに来てくれるとは義理堅い。

「お気になさらずに。我々は言わば共同事業者のようなもの。これは支援であり投資だと思ってください」

「では、遠慮なく」

バルドから餞別品を受け取る。

この世界の硬貨はまだ手持ちが少ないので助かる。

不意に広場が騒めき、バルドも驚きの声を上げる。

「!? こ、これも魔法ですか?」

「馬車の機能だが、魔法みたいなものだな」

エ・ランテルに到着した日とは逆に、クラーナによって馬車の外装が「汽車の客車」から「ログハウス」に換装されたのだ。その際、御者台にいたクレマンティーヌがすつ転んだが見なかつたことにする。

改めて「魔女の家」に戻された理由は、クラーナがアインズ・ウール・ゴウンに感化されたせいだ。俺はあの規模とディテールの細かさにただただ圧倒されただけが、クラーナは維持され続けたナザリツク地下大墳墓を目の当たりにし、ギルドマスターとして思うところがあつたらしい。

「この外観がお気に入りだね。一番長く……、そうだな、長く愛用している」

「山小屋風というのも趣があつて宜しいですねえ。世の中がもう少し安全なら私もこのような馬車で旅を試みたいものですよ」

バルドが共感を示す横で、御者台裏の扉が開く。

御者のマーシャが旗を抱えて現れ、そして御者台の庇に括りつける。

以前は異相協会の旗だけだったが、今日からは俺とクラーナの紋章が入った旗もある。

「では、私は店に戻ります。またエ・ランテルを訪れた際はよろしくお願いしますよ」  
「もちろんだ。世話になった」

バルドと握手を交わし、そして見送る。

果たして「次」があるのか、旅先で偶然バッタリ再会するなんてことはないだろう。

この世界の旅行事情は絶望的だ。モンスターがいけない世界でさえ一生を10キロ圏内で終える時代があった。教会の鐘が聞こえる範囲でしか生存できない時代があった。この世界にはモンスターがいる。旅をするには財力、もしくはそれ相応の実力と運が必ず要だ。

『開門！ 開門!!』

ゴーンゴーンと時を知らせる鐘の音とともに衛兵が叫ぶ。

落とし格子が巻き上げられ、大門がゆっくりと開く。

「マーシヤ、クレマンティーン、頼んだぞ」

『お任せください』

「よし、ふたりとも馬車に乗れ。アエラお前もだ」

外装換装中で待機させたままだったリタとソレーヌ、それに寝そべっていたアエラを馬車に乗せる。

いよいよこの街ともお別れだ。

\* \* \*

馬車で移動中、なんとなしにクラリーナの部屋に顔を出したらマスターソースを開いていた。

聞けば大した理由ではなかった。

「どうだ？」

「悩ましいわね。なんで10部屋しか作れないのかしら」

「文句は運営に言え。——俺の部屋はいじるなよ」

「辛辣ね、分かってるわよ」

クラリーナは馬車の部屋割りを編集していた。

それは何故か。

「ああもう！ 念願のハーレムなのに!!」

そう、大した理由ではないのだ。

さつきまで感傷に浸っていた奴とは思えない。

俺はマスターソースと睨めっこするクラリーナを置いて居間に移動する。

居間も貴族然とした優雅なものからダイニングキッチンに戻っている。魔女の大鍋

に見立てた「ダグザの大釜」、壁の棚には様々な水薬類<sup>ポーション</sup>、天井からは錬金属材の葉草が吊るされている。わずか1週間振りの光景だが、やはり長く見慣れたこの居間が一番落ち着く。

「すまないな、もう少し時間がかかりそうだな」

『いつまでもお待ちしております！』

グニラの店から連れてきた4人が口を揃える。

ユグドラシルの移動式拠点はその拠点として登録した時点でギルドの最大登録人数が10人になるペナルティーを受ける。そのためか拠点に作れる部屋の数も最大10部屋に制限されていた。課金アイテムでもこれ以上の拡張はできない。

なおクラリーナは「部屋」と称しているが、正確には「エリア」だ。だから今のクラリーナの部屋のように「スイートルーム」の外装を使用すれば居間や寝室、浴室などを含むエリアになる。

馬車の間取りは一見すると3LDK。しかしそのうちの一部屋はハブ空間だ。これは馬車に入って早々、廊下に扉がズラリと並んで見えるのを嫌ったクラリーナが生産系の部屋に繋がる扉をひとつにまとめたものだが、当然このハブ空間もエリアにカウントされる。なので実質部屋として自由に使えるのは9エリアだ。

クラリーナは己の欲望のためにプレイルームを作ろうと苦戦しているが、それとは別に

カーリンたち使用人の部屋——とは言っても相部屋ではあるが、キッチンと用意しようとしているところがいかにも彼女らしい。

どうせプレイルームに籠ることになるのだから使用人たちの部屋も兼ねてしまえばとも考えるが、きつとそれでは駄目なのだろう。クレマンティヌを床で寝かせている身からするとなんとも手厚い扱いで頭が下がる思いだ。

「準備できたわよ。はいこれ、見取り図」

部屋から出てきたクラリーナから見取り図を受け取って確認する。クラリーナの部屋、俺の部屋、居間、ハブ空間、倉庫、生産施設、工房、使用人部屋（NPC）、使用人部屋（人間）、ヤリ部屋。

「おい、ヤリ部屋ってお前。もう少し名付けようがあつただろ」

「よくよく考えたら私と貴方で使うものだし、ハーレム部屋は違うかなって」

「お前がなにを言っているのか分からん」

「人に見せるでもなし、気にしなさんな。やる事はひとつなんだから、いいじゃない」

マスターソースは俺たちにしか呼び出せない。紙に書き出したものは例外だが、確かに人様の目に付かないのであれば気にし過ぎても仕方がないのかもしれない。言いくるめられているようで面白くはないが。

改めて見取り図を見る。クラリーナが望んだ部屋が全て収まっている。使用人部屋と



ヤリ部屋はもちろん、リリたちサキユバス組の部屋まで新たに作られている。ふたつずつあった生産施設と倉庫、それに転移してすぐの頃に作ったバストイレ用の部屋を改装したようだ。風呂とトイレは居住用の各部屋に備わっている。エリアをひとつ消費してまで個別に用意する必要はない。

「ちよつと待て、俺の部屋とヤリ部屋が繋がってるじゃないか」

よく見るとヤリ部屋は廊下やハブ空間とは繋がっておらず、クラーナの部屋と俺の部屋、それとふたつの使用人部屋と繋がっていた。

「まあまあ、いいじゃない。このほうが便利でしょ？」

悪びれた様子のないクラーナに呆れる。

「生産施設と倉庫の中身はどうした？」

「生産施設はリリたちの部屋と一緒にしたわ。世話が必要なプランターとかを中心にね。倉庫の中身は私の部屋に。——できれば錬金術系の素材はヴィクトルの部屋で預かってくれると嬉しいんだけど」

クラーナが上目遣いで、媚びるようにお願いしてきた。

倉庫の中身はかなりの量だった。きつと自室を圧迫しているのだろう。

「仕方がない、運び込んでおいてくれ」

「ありがとう！ 好きよ、ヴィクトル」

「そりやどうも」

甘いとは思うが仕方がない。倉庫の中身を各部屋に分けてもいいが、なかにはカーリンたちには危険な物も多くある。そういったものは流石に引き受けないと彼女たちの命がいくらあっても足りない。

「さあさあ、付いてらっしゃい。部屋に案内するわ」

カーリンたちに持参させた私物を持たせ、クラリーナが向かった先はハブ空間。

そこには新たに使用人部屋に繋がる扉がふたつ増えていた。

クラリーナを先頭にカーリンたちが入室し、俺は後からどんな部屋になったのかと室内を見渡す。

内装はログハウス風の外装を少し小奇麗にしたものだった。床と柱は木目を活かした材木のままで、壁は清潔感のある白い壁紙。窓が無い代わりにランダムで風景を映す大きな魔法の額縁が閉塞感を和らげていた。

「手前の扉がトイレ、奥がお風呂。向かいの扉が寝室。私物は各々ベッド脇の収納箱にしようといいわ。衣装棚の中に仕事着があるから、昼用と夜用。まあ見れば分かるわ。あと食事は基本的にジルが作るけど、居間の台所は自由に使いなさい」

入つてすぐの一室は家具や収納棚が並びリビングルーム、そこからシングルベッドが6台並ぶベッドルーム、バスルーム、トイレに繋がるようだ。ベッドルームはやや手狭

だが、リビングルームには食事用の大きなテーブルと長椅子、それにゆつたりと寛げそうなソファがある。

「す、すごい」

「こんな立派なお部屋を……」

カーリンたちが見事な部屋に感嘆する。

貴族の屋敷のように贅を尽くすでもなく、娼館のように扇情的でもない。しかしユグドラシルのものなので何もかもが質が良い。

「次の街までは距離があるから、まずは荷物整理をしてもらおうわ。仕事着に着替えたら私の部屋にきなさい」

『仰せのままに』

\* \* \*

俺が引き受けた素材を整理しているとクレマンティヌが呼びに来た。

「ヴィクトル様、追跡されています」

「すぐに行く」

俺は廊下から御者台に向かい、さらにそこから屋根の上に設置された銃座――、小さ

なルーフバルコニーに登る。銃座には既にジルが陣取っており、走行する馬車の後方へ短抗銃バイルガンのスコープを向けていた。

「相手は？」

「馬に乗った集団が、数は10。じきに追いつかれます」

「装備は？」

「クロスボウ、剣、棍棒。統一性はなく、ユグドラシルの装備にも見えません」

後を走っているだけでは敵認定はできない。

だがバルドの言っていた野盗の類だろう。

「エ・ランテルで目を付けられたか」

壁の外に法の目は届かない。

追いはぎにとつて護衛を連れている俺たちはいい鴨だ。

「エ・ランテルを出た他の馬車は？」

「すでに4キロ以上離れています」

普通の馬とは違い、アイアンホースゴーレムは坂でも足場がしっかりしていれば速度を保つことができる。そのため同時刻に出発した他の馬車とは距離が開いていた。4キロも離れば地平線の向こう側、目撃はされない距離だ。

御者台のマーシャが指示を仰ぐ。

「振り切ることもできませんが、如何しますか」

「このまま速度を維持だ。絡んできたら停めろ、反撃を許可する。だが馬は殺すな、売り払う」

『畏まりました』

マーシャ、ジル、クレマンティーンが了解する。

馬は殺さない。別に愛護精神からではなく、言葉通り売るためだ。向こうの世界では“生き物”の価値は高かった。きつとこの世界でも同じはずだ。

「おいー！ 止まれー！」

追いついた強面の野盗が御者台のマーシャとクレマンティーンへ怒鳴るが、ふたりの容姿を見て早くもその表情は弛む。マーシャが馬車を停止させると、野盗たちはぐるりと周囲を取り囲んだ。下卑た笑いに囲まれ不愉快極まりないが、この状況に一種の懐かしさを覚える。運び屋をしていると稀に襲われることがあるのだ。

しかし、転移して俺は変わった。粘体スライムとしての特性で人間だった頃に感じたひりつくような緊張感がない。冷静に野盗の位置取りを分析している。感情が無くなったとは思いたくないが、修羅場においてはありがたい。

「おにーさんたち、なにか用？」

クレマンティーンがアインズの件で反省したのか、まずは会話から入った。いきなり襲いかからなかったことを褒めてやりたいが、そんな彼女に野盗のリーダーらしき男が近寄る。

「おいおい、本当にこの馬車か？ まあいい、おい女、降り——」

小さく「カシユツ」と乾いた音、間髪入れず「カンツ」と小気味いい金属音とほぼ同時に「ザンツ」と何かが地面に突き刺さる。

「リーダー？」

さつきまで喋っていた男が落馬していた。

いや、正確にはジルの短銃パイルガンに撃ち下ろされて地面に串刺しにされていた。

今度は立て続けに「カシユツ、カシユツ」と響き、これで馬車の御者台左側を囲んでいた3人の野盗が地面に固定された。ジルは野盗の中から「視界から孤立した者」から順次射撃したため、当の野盗たちは「物音はするが仲間は静か」で状況判断が遅れる。派手な銃声がないので反対側にいる連中はまだ気付いていない。獲物を逃がすまいと馬車後部の扉を見張ったままだ。

「な、なんだ!?! ギャー！」

御者台の近くで異変に気づいた野盗の眉間にクレマンティーンのスタイレットが刺

さり、マーシャもサイレンサー付きの魔導銃で側にいたひとり射殺する。

そして射線を移したジルの短抗銃が反対側の野盗を襲う。

「馬を集めました」

「よし。マーシャ、死体を運び込むぞ。ジルは上で警戒を頼む」

馬の面倒をクレマンティーヌに任せ、俺はマーシャと死体を工房へ運ぶ。

痕跡を残さないためでもあるが、目的は装備を剥ぐこと。これではどちらが追いはぎか分からない。

野盗は即死。死体はどれも穴がひとつ空いているだけで原形をとどめている。ジルが装備している短抗銃はユグドラシル最終日にクラナが買い与えたものだが、彼女は以前からこの種類の銃を愛用している。彼女のユグドラシル時代、馬車が走っていた頃の役割は、走行中の馬車からMOBやプレイヤーを足止めすること。レベル40台の彼女には始めから戦闘は期待されておらず、猟兵や狙撃手といった職業も全ては足止め用の技能を強化するためだ。

短抗銃はそんな技能と相性が良く、命中時のストッピングパワーが極めて高い。基本的に逃げ撃ちしかしないので、高レベルのプレイヤーを1秒でも止められれば万々歳と

いう運用だ。

なおマーシャが最終日に買い与えられた武器は鈍器としての使用のみで射撃は禁止した。流石にこの世界で神器級ゴッズを普段使いさせると悪目立ちする。なので以前使っていた伝説級レジェンドの魔導銃、チャージ・サブコンパクトウェポン・ヴァルキリー9、通称CS CW・V9を装備させている。装弾数60発で単発とフルオートの切替可。サイレンサー付きの魔導銃だ。

発射レートが極めて高く、瞬間火力は馬鹿高い代わりに使い勝手が悪い武器だ。ただマーシャの本業は御者、馬車を走らせることだ。使用に迫られる状況とはつまり追いつかれた時であり、そうなったらギルドメンバーが応戦するので援護さえできれば良いとされていた。

野盗の装備を剥ぎながら状態を確認する。

「意外と手入れがしつかりとされているな」

「リペアすれば売れそうですね」

統一性はないものの商売道具には気を配っていたようだ。野盗といえどもその点では好感を持てる。とはいえ、なんの魔法効果もない普通の武具なので、異相協会として販売するからには少し手を加える必要がある。

どんな魔法を付与しようかと考えていると、クラーナから「メッセージ」が届く。



『ヴィクトル、すぐに来て』

「——分かった」

声の調子からまたアインズ絡みだろう。

「マーシヤ、すまないがクラーナに呼ばれた。後は任せる。装備を回収したらリリたちに伝える。彼女たちが死体を処理してくれる。そしたら出発してくれ」

マーシヤに指示をだし、俺はクラーナの部屋に向かう。

\* \* \*

「どうした？」

「彼から連絡が来たわ。結論から言うと世界級ワールドアイテムが使われた可能性があるみたい」

言葉が出なかった。精神作用無効のシャルティアが洗脳されたと聞いて気付くべきだった。この世界に転移した直後に世界級ワールドアイテムを疑ったのにその可能性に至らなかった。

「それは確かなのか？」

「この世界固有のものである可能性はまだあるわ。でも超位魔法での解除は叶わなかつ

たそうよ」

「なるほど、超位魔法を超える力はユグドラシルにはひとつしかない」

「その通り。だから手段がなんであれ、世界級アイテムと同等のものだと考えなければならぬわ。ちなみに洗脳は物理的に解除したらしいけど、本人に事情を聞いても犯人は分からなかったって」

「——そうか」

「この世界の人間とNPCが同じかどうかはわからないが、クレマンティーヌも復活前は記憶が曖昧だった。犯人の手がかりを得られなかったのは残念だが仕方がない。」

「どうする？ 向こうと合流するか？」

「いいえ、その逆よ。しばらくは〈伝言メッセンジャー〉とか、シモベを介した間接的な接触だけになつたわ」

「同盟を組んだのにか？ 世界級アイテムが想定される状況なら戦力を分散しないほうがいいと思うんだが」

「私もそう考えたけど断られたわ。彼はシャルティアへの攻撃が偶然ではなかった場合を懸念している。アインズ・ウール・ゴウンと知って攻撃を仕掛けてきた可能性を疑ってるわ。もしそうなら異相協会が合流したところで大局は変わらない。いつそ別動隊として情報収集に専念してほしいって頼まれたわ」

俺はその言葉に唖る。犯人がアインズ・ウール・ゴウンだと理解したうえで攻撃したなら厄介だ。アインズ・ウール・ゴウンとの戦争に踏み切れる相手に、異相協会の戦力では渡り合えない。互いにレベル100の製造職と戦闘職が戦えば当然後者に軍配が上がる。「戦闘ができて製造もできます」はまずありえない。そんなことを運営が許してしまつたらゲーム内のマーケットが成り立たないし、なんでもひとりで出来てしまつては課金での搾取機会も減るからだ。

少人数で兼業が多い今の異相協会ならなおさらGvGは無理だ。

「トップ同士で決めたなら俺はそれに従おう」

「よろしく。しばらくはアインズ・ウール・ゴウンとの関係も秘密。でも勘のいい相手なら同時期に現れた私たちの関係性に気付くかもしれないわね」

「まあ、その時はその時だ」

「それじゃあ、これをアエラちゃんに渡してあげて」

そう言つて渡されたのは水晶で作られたまがたま勾玉の耳飾り。

ワールド 世界級アイテムの潮干玉・潮満玉。

ワールド 世界級アイテム対策よ。私も外に出る時は極光の面纱を装備するわ」

クラーナの対策は必須だが――。

「アエラでいいのか？」

「レベル100のあの娘に何かあったらそれだけで大損害よ。リオにも持たせたいけれど、天御柱アメノミハシラを抱えての日常生活は流石に無理よね」

確かに高レベルNPCほど異変が起こったら対処が面倒だ。それでなくとも莫大な復活費用がかかる。クラーナの言い分はギルドマスターとして正しいが、損得勘定で割り切られたマーシャとジルが少々不憫だ。

しかし、どうしようもない。異相協会が所有する世界級ワールドアイテムは4つ。俺の身体の中にあるひとつ、設置型がひとつ、そして装備型がふたつ。取り回しが良く、かつ日常生活の妨げにならないのはふたつしかない。レベル順で与えるならアエラに装備させるのが妥当だろう。

馬車が動きだした気配を感じ、話題を変える。

「このまま王都を目指す——、でいいのか？」

不安要素は拭えないが、今は前に進むしかない。

城塞都市エ・ランテルから西にある王都を目指すにはふたつのルートがある。道なりに最短を目指すならエ・ペスベル領、少し北へ迂回するとエ・レエブル領がある。もちろんそのどちらも選ばず道なき道を通つ切る選択肢もある。

「まずはエ・レエブルね。レッテンマイア都市長に薦められたし、魔法職にも理解があるそうだから」

「ほう、この国の領主にしては期待できそうだな」

リ・エステイゼ王国は魔法職の扱いが悪い。いや、細かいところへ目を向けられればそれなりに優遇はされている。しかし優遇しているのは理解ある雇用者で、国策としての支援はない。

例えば王国にも魔術師組合はある。魔法詠唱者の育成や魔導具マジックアイテムの販売を行なっていない。組合長が共同保証人になるくらいには信用のおける組織だ。しかし、財政は芳しくない。適合者が少なくて授業料では稼げず、組合員も少ないので会費も期待できない。魔導具は高価で販売機会にも恵まれない。

これらは王国がなんらかの支援をすれば改善できるものだ。手品の類ではない、本物の魔法であるにもかかわらず実に勿体ない。

「俺は部屋に戻る。まだアイテム整理が残ってるからな」

方針と行き先が決まったので、俺はクラーナの部屋を後にした。

\* \* \*

その日の夜、さっそくクラリーナが全メンバーをヤリ部屋に招集した。

ヤリ部屋は薄暗く、赤を基調とした部屋は淫靡な雰囲気を漂わせていた。四方の壁には各部屋に通じる扉と間接照明、部屋の中央には天蓋つきのキングベッドがひとつ、壁際はぐるりと大きなソファアールが並び、サイドテーブルにはマーシヤの鍛冶スキルを存分に発揮して作られた「大人の玩具」が並べられていた。

部屋全体を媚薬効果のある濃密で甘い香りが覆い、クレマンティーヌらが悩まし気に身悶えている。

「ソレーヌ、そしてナタリー。このクラリーナ・デア・セルペンス・ウエネフィカが、いまこの時をもって貴女たちふたりの罪を許し、無辜の信徒として迎え入れましょう。同志らと正しい道を歩むことを望みます」

『ウエネフィカ様、あなたの御名を讃美します。私どもの祈りを聞いて下さり、感謝します。これからは同志と共に、信仰者の道を歩んで行きたいと思えます』

鬼子母神姿カリテイモのクラリーナが洗礼を模した儀式を行なっていた。

実はソレーヌとナタリーのふたりが元罪人だと判明したのだ。

きつかけはクレマンティーヌとの顔合わせだ。彼女たちの出自と「身体の状態」から、ふたりの身の上を言い当てたのだ。曰く、まともな法国民は国を出る理由がない。手首を切り落とす刑罰はどの国でもみられるが、とりわけ法国でよく行なわれる私刑の

ひとつだと。そう指摘されたソレーヌとナタリーは蒼白となり、そのまま流れでクラーナに懺悔し、許しを乞うたのだ。

ふたりの話を詳しく聞くと、ソレーヌは姦淫を犯して相手方の女性と揉めた際に右目を負傷、治療を受けぬまま宗教警察に引き渡された。ナタリーは駆け落ちの資金にしようとして奉公先から銀食器を盗んで捕まり、悪しき両手を切り落とされた。

ふたりとも罪を流布された挙句に身分を奴隷へと落とされ、巡りめぐってリ・エステイーズ王国へと売られたらしい。

儀式を終えたクラーナがベッドにふたりを残し、蛇女状態のままスルスルと壁際のソファアーに移動してきた。

涙を流して喜ぶふたりに聞こえないように、俺は小声でクラーナに問う。

「今の儀式に意味はあったのか？」

ひとりは片目を失い、ひとりは両手を失っている。その後も十数年を奴隷や娼婦として生きた。ここでことさらに儀式の真似事までして信者として迎え入れる意味があるのか疑問だった。今後の活動を見据えて手勢を増やす意味で信者を増やすのはいいとして、祀られる者が直接儀式を執り行うのはなんだか違うような気がする。そういったものは巫女や司祭の仕事だ。

俺の疑問にクラーナは少し困ったような視線を向ける。

「ヴィクトル、少なくとも彼女たちには意味のある行為よ。それと誤解しているようだから言うけれど、彼女たちが欲しているのは神の許しであつて、人が与えるそれではないわ」

「ああ、そういうことか」

クラリーナの指摘で合点がいった。ソレーヌとナタリーはスレイン法国出身、教義ありきの環境でいままで生きてきた人間だ。罰を受けた時点で許されて然るべきだが、彼女たちは奴隷とされ、果ては異国の地で身を売るしかなかった。質が悪いことに、それらを行ったのが法国の司法機関とは無関係の自警団を名乗る宗教警察であることだ。公の組織ではないものの、その土地の人間で構成されているために影響力がある。正式な裁判もなく、彼らが信じる教義に基づいて断罪したのだ。

それがいけなかった。本来なら裁判を経て罪を償い、司祭のような神殿関係者が「許し」を与えるべきなのに、彼女たちにはその機会が与えられなかった。さらに流れついたり・エステイーズ王国の神殿も性従事者に排他的だ。信心深いスレイン法国の民が、神に見捨てられたまま生きてきたのだ。

彼女たちに必要なのは神の許し、再び歩きはじめるための節目、きつかけが必要だったのだ。

「私の言葉で変われるならいくらでも声をかけてあげるわ。前に進めるなら罰だつて与



えてあげる。——ただし、身内に限るけれどね」

この場合の身内とは信者のことだろう。

「すつかり神様だな」

「やめてよ、その言い方」

「貴女たち、奉仕なさい」

クラーナが側に控えていたカーリンとリタを呼ぶ。ふたりはクラーナが「夜用の仕事着」と称した卑猥な下着を着ていた。胸には隠すべきものも隠せない小さな薄い布切れが2枚、股間には秘部をなぞるように真珠が連なった紐が食い込んでいる。他にもチョーカーやリボンなどの装飾品類もあるが、これらをわざわざ4人分も用意したマリーシャを労りたい。

先のソレーヌとナタリーは、中央のベッドで淫魔たちと絡み合っていた。

ソレーヌがベッドに大の字に固定され、幻術を解いた女淫魔姿サキユバヌのリリが顔面騎乗位でその秘部に奉仕させている。同時に、リエが媚薬塗れの手で乳房を揉みこみ、さらに膣と肛門には深々とナタリーの腕が挿入され、前後交互に激しく往復していた。

一方でナタリーはソレーヌへ両腕を挿入したなかば四つん這いの格好のまま、背後か

らりオに鞭で叩かれながら後背位で突かれていた。「淫魔の体液には催淫効果がある」と定かではない情報をどこかで聞きかじったことがあるが、ソレーヌとナタリーが上げる嬌声がそれを裏付けているようで興味深い。

クラリーナが奉仕を受けながら、乱交ショーを見て眩く。

「身体売つてると良くあるのよね」

「何がだ？」

俺は専用のソファアールでアエラとクレマンティーヌを侍らせながらショーを眺める。

「同性愛に傾くだよ。異性の嫌なところばかり目につくし、境遇を理解できるのも、共感してくれるのも身近な仕事仲間だから。女に限った話じゃないわよ？」

ソレーヌとナタリーの関係は初耳だ。それに男娼も同じだと言いたいらしい。

「自由恋愛だ。共存だとしてもほっといてやれ」

歪な愛だとしても当事者が合意のうえなら問題ないだろう。

「それにしても、世界級アイテムワールドの脅威を聞いた直後でコレか」

「現実逃避も時には大切よ。——まあ、今回はあの娘たちのお願ひもあつたけれどね」

しばらく経つとベッドはベッドで盛り上がり、クラリーナも自分の世界に浸ってしまった

た。

手持無沙汰の俺は、この機に隣クリトリスで陰核の拡張に勤しむクレマンティーヌに声をかける。

「クレマンティーヌ、俺の前へ。ああ、立ったままでいいぞ」

自然と跪いて奉仕しようとするクレマンティーヌを制し、俺は宣告する。

「突然だが、お前には人間を止めてもらう」

陰核クリトリスへの刺激で上気していたクレマンティーヌの表情が凍る。

返事がないので続ける。

「今のお前に不満はないが、戦力を拡充する必要がある。当初はナザリックで再強化するつもりだったんだが、その予定も崩れてしまった。だから異形種化して手っ取り早く強化しようと思う」

クレマンティーヌはなおも反応を示さない。

「決定事項だが、一応お前の意見を聞いておこうか」

「——嫌です」

シンプルに拒絶されて「まあ、嫌だよな」と分りきっていた答えに納得する。

クレマンティーヌはドミネイト・パースンへ人物支配を恐れていた。単に支配されることを嫌っていると見て取れるが、その本質は暴力が支配する世界で己という存在を確立したからこそその

反応だ。命を懸けた戦いの場に身体ひとつで生き抜いてきた者の自我を脅かされたくないのだ。

彼女が「どんな責苦も敗者の宿命」として自らの意志で俺に奉仕しているのはそんな理由からだ。

しかし、拒否はしたもののクレマンティーン自身も半ば諦めているのか物静かだ。

そんな彼女が疑問を口にする。

「人間を止めるって——、何にされるんですか？」

「アエラの眷属、ワウルフ人狼だ」

ユグドラシルプレイヤーやNPCの「レベル」には種族レベルと職業レベルの2種類がある。ふたつの合算がプレイヤーらのレベルであり、レベル100でカウンターストップとなる。種族は人間種、亜人種、異形種の3種類あるが、このうち人間種だけ職業レベルのみで種族レベルを持たない。そしてプレイヤーではない「ゲーム内で自然発生するモンスター」にはそれらとは別にモンスターレベルが割り振られていた。

ここで注目したいのはプレイヤーが操るアバターのワウルフ人狼と、ゲームの敵として現れる人狼ではレベルの扱いが異なる点だ。

俺の狙いはクレマンティーンをアエラの眷属とし、彼女の職業レベルにユグドラシルワウルフに由来する人狼のモンスターレベルを上乗せすること。最低値のレベル6——この世

界の基準でいう難度18でも死を挽回できる。仮に目論見が外れたとしても、異形種の成長率”を得られれば万々歳だ。

これで強化が実現すればゆくゆくは人狼軍団だって作れるだろう。クレマンティーヌはそのための実験体だ。

「慰めにはならんと思うが獣人状態を月に一度、満月の夜だけに限定できる。基本的に今の姿を維持できるから安心しろ。身体能力も夜目と嗅覚が利く以外は筋力と頑強さがある普通の人間だ。強いて欠点を挙げるなら銀に弱くなるくらいだな」

眷属化で引き継ぐ能力は基本的に劣化する。変異したクレマンティーヌでは満月の夜に人の姿を維持するのも、理性を保つこともできないだろう。アエラが持つ月齢の影響を抑え込む〈古の血〉は、人狼ワウルフの上位種〈古狼の血脈〉しか取得できない常時発動型技能パッシブスキル。流石に眷属化では引き継がないものだ。

クレマンティーヌにできる対策といえば魔導具マジックアイテムによる理性の強化のみ。理性で野生の暴走を抑えるしかないが、こればかりは本人の精神力頼みだ。

クレマンティーヌが項垂れる。俺の言いようから異形化は免れないと悟ったのだから。

アエラに目配せし、眷属化の準備をさせる。対象を人狼化するには〈感染〉と〈呪い〉がある。アエラの場合は爪牙による攻撃で〈感染〉を引き起こす必要がある。

とはいえ、この世界で仕様が変質している可能性もある。全てアエラに任せつつもりだ。俺が粘体スライムの身体を無自覚に理解していたように、NPCも自分自身を理解しているはずだ。

アエラの身体がにわか膨れ上がると、ベッドの方から小さな悲鳴があがる。だがそれも仕方がない。全身が紅い毛皮に覆われた身長2メートル強の人狼ワウルフ、その醜い姿は初めて見る者には鮮烈すぎる。

アエラがクレマンティーンアエラの背後に控える。

俺は項垂れたままのクレマンティーンアエラに声をかける。

「クレマンティーンアエラ、人間であるうちに何かやり残したことはあるか？」

心残りがあるなら聞いてやりたい。

そんな思いから声をかけたが、不意にクレマンティーンアエラの全身に力がみなぎる。

「糞があああああ！」

絶叫と共に繰りだされた手刀が俺の左目に突き刺さり、弾け飛んだ眼鏡が落ちる音が空しく響く。

「満足か？」

「……ひと思いにやりな」

なんらダメージを与えられないことぐらいクレマンティーンアエラも分かっていたはず。

それでも放った一撃は彼女の慟哭だ。人としての最後の抵抗を受け取った。

アエラに合図すると、その大きく鋭い鉤爪でクレマンティーヌの背後から両腕を掴み、ゆつくりと俺から引き離す。そして、無抵抗な首筋に噛みついた。アエラの大きく裂けた口はクレマンティーヌの首筋にとどまらず、前は胸元、背中は肩甲骨辺りまでを覆い、無秩序に生えた大量の牙がズブズブと食い込む。

パキツ、パキツと骨が砕ける音と共に濃厚な血の香りが部屋に漂う。

「うあ……ああ……」

クレマンティーヌが呻く。チョロチョロと失禁しているが、叫びもせずよく我慢している。むしろ表情はやや恍惚としてる。この部屋に充滿する催淫効果がいい具合に苦痛を紛らわせてくれているのだろう。

「アエラ、その辺にしておけ」

新鮮な血の香りに興が乗ったのか、血を啜り始めたアエラを止め、俺はソファアに座りながら晒した陰茎ペニスを跨ぐようクレマンティーヌに命じる。

「クレマンティーヌ、傷を癒してやる。来い」

「は、はい。ご奉仕させて、いただきます」

クレマンティーヌはフラフラの身体を奮い立たせ、自ら対面座位で俺の陰茎ペニスを挿入する。こんな扱いを受けてもまだ服従してくれるようだ。

「う、んん……」

腰の動きに合わせて噛み痕からトクトクと血が溢れでる。ここで軟膏を使ってもいいが、今回はあえて種族技能スキルの「接触治療タッチリカバ」を発動する。噛み痕を素手でなぞると、触れた先から傷が癒えていく——が、クレマンティーヌの血色は変わらない。

止血はできても失われた血までは戻らないようだ。

「ヴィクトル様、こちらを」

「ああ、ありがとう」

アエラが眼鏡を拾ってきてくれた。魔法の眼鏡なので手刀程度で壊れることはない。

「眷属化できたのか？」

「はい。気配といますか、目が合えば眷属かどうか分かりそうです」

興味深い。気配でどうこうなどはユグドラシルにはなかった。あとはクレマンティーヌが感染させた者をアエラが認識できるか調べる必要がある。頂点おきてに立つアエラが群れ全体を把握できれば良し、出来なければ「勝手に増やすな」と掟おきてを作らなければならない。

「ふむ、クレマンティーヌはどうだ？」

痛みを紛らわせようと、必死に快楽を貪るクレマンティーヌを突き上げる。

「い、ひいいい！ はい！ 支配、されているようなあ！ アエラ様を、上位者として感じ



ます！ ただ——」

言葉を切ったクレマンティーヌが自分の裸体を改める。

「ただ、なんだ？」

「人狼になったのか、よ、よく分かりません」

「常時獣人状態というわけじゃないからな。そういう意味でなら次の満月にならないと自覚はできないだろう」

クレマンティーヌがエ・ランテルで死んだ夜は満月だったと聞いた。つまり彼女の暴走はだいたい30日後まで待たなければならぬ。

なお初めての変身は実験も兼ねて経験させるつもりだ。どこまで眷属を増やすかはまだ考えていないが、将来的にアエラの国とかができたらそれはそれで面白いかもしれない。いまから少し楽しみだ。

「よし、胸元周りは治ったな。次は背中を見せてみる」

## 第12話：エリアス・ブランド・デイル・レエブン

「——実に惜しい。だがこれ以上の条件は難しい。ウエネフィカ殿、せめて友人でありたいものだ」

「それはもちろんですわ。今後ともよろしくお願いいたします、レエブン候」

俺たちは城塞都市エ・ランテルを出て西に進み、しばらくしてから進路を北にとった。右手に大森林と山脈を望みながら、数日をかけてレッテンマイア都市長に薦められたエ・レイブル領に辿りついた。

滞りなく領内を進み、今はレエブン候の屋敷で当主であるエリアス・ブランド・デイル・レエブン侯爵に挨拶と滞在する旨を伝え終えたところだ。

レエブン候はリ・エステイーゼ王国の六大貴族の一人だ。齢は40代前後、長身瘦躯で金髪オールバック。切れ長の碧眼で、唇は薄い。蛇を思わせる風貌だが、各方面の情報をまとめると「蝙蝠」と揶揄されるくらい王派閥と貴族派閥の間を巧みに飛び回っているらしい。蝙蝠外交の是非はともかく、六大貴族であることから政治手腕は確かなのだろう。

「レッテンマイア卿から連絡をもらった時は半信半疑だったが、貴殿らの力は本物。領

内の妖巨人<sup>トロール</sup>を討伐してくれたことには重ねて礼を言おう、感謝する」

「お気持ちは嬉しく思いますが、すでに褒賞を頂いております。我々は自衛したに過ぎません、あまりお気に留められませんがようお願ひいたしますわ」

実はエ・レイブル領内の村が妖巨人<sup>トロール</sup>と人食い大鬼<sup>オウガ</sup>の群れに襲われているところへ異相協会の馬車が出てきたのだ。名声を上げるために軽く狩り尽くし、エ・レイブルの冒険者組合に切り落とした首を提出したのだった。

冒険者ではないので報酬は期待していなかったが、そのあまりの数に驚いた冒険者組合から領主のレエブン候へ連絡が行き、村を救った褒賞として正式に支払われたのだ。この世界のモンスターは金貨もデータクリスタルもドロップしないので最良の結果だ。

なお本来は耳などかさ張らない部位を切り取って提出するものらしいが、クレマンティーンがうろ覚えだったために「頭をまるごと持っていけば確実じゃん」となった経緯がある。

「つつましさは淑女の美德ではあるが、この件に関してはそうもいかない。妖巨人<sup>トロール</sup>を野放しにしていたらと思うと背筋が凍る思いだ。本来なら兵を出しただろうが、被害の拡大は免れなかったはずだ。——そうだろうか？」

応接室にはレエブン候の他に、彼が信頼しているという軍師と護衛の男4人がいた。

その全員が頷いた。

軍師が言う。

「過去に小鬼ゴブリンと人食オ大鬼ガが同時に現れたことはあります。ですが今回のような、人食オ大鬼ガの群れを率いる妖巨人トロールの出現は初めてです。ボリス殿らの力をもつてすれば討伐はできたと思いますが、被害そのものは甚大なものになっていたはずです」

ボリスと呼ばれた護衛のリーダーらしき男が続く。

「軍師殿の言う通りだ。我々は犠牲覚悟の戦いを強いられただろうな」

軍師と護衛の肯定を受けたレエブン候は呆れ顔だ。

「聞いた通りだ、ウエネフィカ殿。魔物を“ただ倒しただけ”ではないのだよ」

彼は念押しするかのようこの場に居る配下全員に視線を送り、そして不意に話題を変えた。

「ふむ、くど過ぎててもいかな。——そうだ、個人的な趣味に付き合わせてしまうかもしれないが、もしよかったら今まで見聞きしたモンスター、魔法、アイテム、何でもいい、話を聞かせてほしい。有用な情報には報酬もはずもう」

「ふふ、お話に聞いた通り勤勉ですね。領地の整備にもご熱心だと伺いましたわ。私の知識で宜しければいつでも」

言葉を切ったクラーナが俺に視線を送る。

「ただその前に、この出会いを記念して、この場に居る皆様にささやかな贈り物を。ヴィ

クトル、よろしく」

「ご指名を受けて俺は鞆から複数の指輪を取り出す。

「レエブン候と軍師殿には、〃矢を退ける指輪〃を、そして護衛の方々には、〃勇壯の指輪〃をどうぞで」

「鑑定させていただきます。ルンドクヴィスト、頼む」

護衛のひとり、レエブン候よりもやや年上のように見える魔法詠唱者がテーブルに並べられた指輪を鑑定する。

「——間違いありません、本物です」

「全く恐れ入った。魔導具マジックアイテムを扱うと書かれてはいたが、これで裏取りもできた。商談がしたい。明日にでも商品目録を見せていただききたい」

俺はその言葉を聞き、事前に用意していた目録をテーブルに置く。

「こちらが商品目録です。ご覧ください」

「ほう、準備がいいな」

流石に聖遺物級以上のものは目録から省いた。それでも厚みのあるそれを、レエブン候はペラペラと捲る。カーリンに代筆させたので読めはするはずだ。

価格はあえてこちらの世界に合わせた。つまりユグドラシル時代よりも若干高く設定したのだ。この世界ではそれだけの価値があり、充分通用する値段だと判断した。特

に今回は侯爵相手の取引。価格はそのまま信用にも繋がる。

仮に、場の空気を読まずにゲーム感覚で安くしたとする。するとどんなに上等な商品でも偽物を疑われかねないのだ。それに安すぎると客の質も落ちる。いま必要なのは、この世界に合わせた現実味だ。

「素晴らしい。だが、やはり値が張るな。——ウエネファイカ殿、どうだろう、素材や品をこちらで用意したらその分値引きは可能だろうか」

高価な品物を取引する場において値段交渉は避けて通れない。だがクラーナもギルドマスターだ。その手の交渉事はこなれている。

「もちろんですわ。ただ付<sup>エンチャント</sup>呪には触媒以外にも術者の魔力が必要です。量によってはお時間を頂くことになりますわが」

「問題ない。ヨアキム、これを機に私兵の強化をするぞ」

決断が早い。

レエブン候と軍師がさっそく相談を始めたのだった。

\* \* \*

異相協会の者が退席し、深く息を吐く。

「久しぶりに有意義な時間を過ごしたぞ」

「閣下、とんでもない連中でしたね」

「そうだな。この際だ、都市の整備も異相協会に相談してみるか」

「宜しいのですか、その……」

軍師が言い淀む。異相協会の協力を得るには都市の地図を開示する必要がある。しかし市中のみならず周辺地理の情報は都市防衛の要。彼はその取り扱いに慎重なのだ。

「お前の心配はもつともだが、今回は投資時だと考えるべきだ。——それよりもだ」  
テーブルに置かれたままの指輪を見る。

私と軍師、そして護衛にと用意された7つの指輪。

「ロックマイアー、気付いていたと思うか？」

「ええ、間違いなく。彼女は、この場に居る皆様へ」と言いました。指輪の数が何よりの証拠でしょう」

そうなのだ。身を潜ませた5人目の護衛、ロックマイアーの存在を認識していた。でなければ高価な魔導具マジックアイテムを無償で譲ったことになる。

今回、異相協会の連中が有用であることはレットンマイア卿の親書で知らされていた。だからこそ妖巨人トロールの件を聞いた時、手っ取り早く接触するために褒賞を与えた。それも恩を売ろうと相場より高く設定してだ。

ところが、その恩を相殺するかのように指輪を渡してきたから抜け目がない。あの女当主はこの手の駆け引きに通じた相手と見るべきだろう。

貴族間の貸し借りは高く付く。なるべく借りを作らないことが大切なのだ。

「実に惜しい相手だ」

「味方にほしいご婦人でしたね」

「彼女だけではない。アルヒミア殿も、その配下たちも一流だ」

無能な貴族に囲まれているせいも、優秀な人材を見かけると欲しくなる。例えば目の前にいる護衛や軍師はともに平民出身だ。領内の貴族や騎士たちはいい顔をしなかったが、その優秀さを示すことで黙らせた。

その点、異相協会はその手の妬みを軽く跳ね返せるだけの实力を持っている。第五位階魔法を行使できる魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>が2人、オリハルコン級以上と思われる私兵が3人。これだけで下手したら上級貴族が率いる一軍に匹敵する戦力だ。

しかし、勧誘は叶わなかった。こちらが提示した条件以上となると、残るは六大貴族と同等の地位と領地を用意するしかないが、こればかりは私ひとりの裁量ではどうにもできない。

できることがあるとすれば、陛下への進言と周囲への根回しくらいだろう。

「確か、ロフール商会と懇意にしていると聞いていたな」



「はい。そのロフール商会ですが、少し前に大広場への移転を出願しておりました。諸々の行事と重なっていたため保留としておりましたが、よろしいですね？」

「許可する。それとロフール商会を注視するよう諜報部に伝えろ」

間接的すぎるが異相協会が特定の者と接触するなら情報収集は容易くなる。

だが関係を深めるには直接的な何かをほしい。

「やはり土地か人材か、資源でもいいな。多少強引でも提供するしかないか」

「また断られるだけでは？」

「ひとつでも受け取ってくればそれでいい。準備だけはしておけ」

「畏まりました」

\* \* \*

俺たちはレエブン候の屋敷を後にして馬車に戻った。レエブン候の計らいで馬車は市場が開かれる都市一番の広場に停めてある。

ここがエ・レイブル滞在中の拠点だ。

住人は遠巻きに様子を窺うだけで近づこうとしない。それもそのはずで、エ・レイブルの住人は「妖<sup>トロール</sup>巨人<sup>ル</sup>や人<sup>オー</sup>食い大鬼<sup>ガ</sup>の首を沢山ぶら下げた魔女の家」という最悪の第一印

象しか持っていないのだから仕方がない。

これに関しては冒険者組合や領主のレエブン候からフォローが入るはずなので明日以降に期待だ。

「いい取引ができたわね」

クラリーナはレエブン候との取引にご満悦だ。

今回、レエブン候から武器の強化依頼を受けた。剣には〈鋭利〉、鎧には〈頑強〉といった具合に単純なものだ。だが数が多い。彼の持つ專業兵のうち上位3000人分の武器。他にも数は少ないものの都市に所属する各生産系組合ギルドの道具も強化対象として依頼を受けている。こちらは組合長や上級職人に対象を絞り、普段扱っている道具エンチャントへの付呪を頼まれている。

「馬が散々だったからな、稼げそうでよかった」

野盗から奪った10頭の馬は、エ・レイブル領に入ってすぐに売却した。だが期待したほどの値では売れず、合わせても金貨5枚にしかならなかったのだ。これは買い叩かれた訳ではなく、単に野盗たちの馬が「荷馬」だったのが原因だ。これが軍馬なら5倍の値がついたらしい。

「ヴィクトル、明日から大変だけれど、無茶はしないでよ」

「ああ、任せとけ。程よく手を抜くさ」

この「手を抜く」は品質を落とすのではなく、魔力が枯渇しないように1日の作業量を抑えるという意味だ。

この世界ではログアウトしてPKをやり過ぎなんて手段が取れない。有事の際に戦えるだけの魔力は残しておかなければならないのだ。

クラリーナが憂う。

「魔力の回復方法が見つかればいいのだけれど」

「気長に探せばいいさ」

八欲王とやらが位階魔法を広めてから500年は経つ。回復方法のひとつくらいは見つけるなり発明するなりしてほしいところだが、魔法詠唱者同士の繋がりが弱く、また一層はなはだしく冷遇されているリ・エステーゼ王国では期待もできないだろう。

悩ましい問題だ。

\* \* \*

翌朝、広場にでると馬車の周囲は露店の準備に追われる人々で賑わっていた。背負子や荷車で商品を運ぶ者が多く、その荷車も人力か大型犬に牽かせるスタイルが主流のよ

うだ。商品は野菜や果物、肉、日用品雑貨などの他、日用品の修理を行う職人も居る。

それはそれとして今現在、異相協会の馬車の周囲に人だかりができていた。人だかりの半分は野次馬で、残り半分は雇用を求める労働者だ。おおかた俺たちが多額の報奨金を受け取ったことを聞きつけたのだろう。

「奥様、力仕事なら任せてくれ！」

「この子を街の案内にどうだい。気立てもいいですぜ！」

「読み書きができます！ 雇ってください！」

飛び交う売り文句を前に、クラーナが労働者たちを品定めしている。エ・レエブル滞在中は現地の労働者を積極的に雇うことにしたのだ。これは客以外の口コミ効果——、羽振りの良さを広めるためだが、純粹に労働力としても利用するつもりでもない。

朝市に参加するにしても商品を並べる手間があるし、場合によっては買い出しもあるだろう。そういった細々とした仕事に従事させる予定だ。

「旦那様、この子を買ってやってはくれませんか」

幼い娘を連れられた母親らしき女が売り込みに来た。ペストマスクの俺を恐れずに話しかけてきた気概は認めるが、朝つぱらから売春の斡旋とは恐れ入る。風体から察するに間違いなく私娼だ。

「お願いします、一晩だけでいいんです」

差し出された娘は大人びた化粧を施されているが、どう鼻眉目に見ても未成年。着ている服は特別着飾ったものでもなく、ごく普通の町娘の格好だ。くたびれた服を観察すると丁寧に繕った痕が所々に見てとれる。姉妹の御下がりかもしれない。なんにせよ、その様子から最低限の愛情は受けているのだろうと推察する。

都市の住民ならなにかしらの労働階級に属しているはずだが、この場で母子揃って商売相手を探していることから旦那が働けないか、そもそも居ないかだろう。

どのように断ろうかと考えていると、俺と彼女たちの間に男が割って入ってきた。

「ご婦人、施しを受けたければ神殿へ足を運びなさい」

昨日レエブンを護衛していたひとり、ヨーラン・デイクスゴードだ。40代後半だろうか、年季の入った装備からは熟練の戦士であることがうかがえ、また宗教的な意匠がデカデカと織られた外套を見れば熱心な信者でもあると分かる。

ヨーランに諭された母娘が立ち去る。しかし広場を離れる様子はなく、取り合えず口煩い神官戦士から離れたといった感じだ。

彼はその様子に軽く一息つくくと、改めて俺に向きなおる。

「アルヒミア様、お迎えにあがりました」

「デイクスゴード殿、世話になる」

「では、さっそく参りましょうか」

彼は武具が保管されている倉庫への案内役、目的地は都市の外縁部に位置する兵舎だ。

「神殿は貧しい者を受け入れているのか？」

道すがら先ほど疑問に思った事を質問すると、ヨーランが慎重に言葉を選ぶ。

「正確には神殿に併設されている施療院で、ですね。無償で食事や衣服を、必要であれば部屋も与えられます」

「無償とは太っ腹だな」

ヨーランは苦笑する。

「噂に尾ひれがついて誤解されがちですが、何でもかんでもお金を取る訳ではありませんよ」

「その噂というのは冒険者組合と交わしている協定の話だな？」

「はい。支給するのも現物だけですし、金銭を渡すことはありません。働き口を紹介することもありますよ」

グニラやリイジーの話を聞き、神殿とは酷く排他的な印象を持っていた。

しかし、教えの範囲内で彼らなりに社会貢献をしているようだった。

考えてみれば当然か。不平等な一面があることも確かだが、そもそも人々に受け入れられなければ教えを広めることもできない。癒し手の支持を得られなければ組織が成り立たないのだから。

「四大神信仰に席を置くひとりとして言わせていただくなら、神殿は大昔から人々に寄り添い共にあつたのです。酒場でどのような噂がされようとも、これからもそれは変わりません」

ヨーランは言う。神殿は裕福な信者に喜捨を促し、それにより得た資金で神殿や施療院の運営を行っている。施しが現物支給なのは貧民を騙る不届き者から寄付金を守るためで、ひいてはそれが地域の治安維持に繋がると。

「神殿内に腐敗が無いわけではありませんが、それは極一部。信仰のもとに正されると信じています。——さあ、着きました。どうぞこちらへ」

守衛に話は通っていたのか、俺はベストマスクのままヨーランの案内で兵舎の敷地に入れた。兵舎の脇を抜けた先に広い訓練場があり、その一角に目的地の武器庫と、それに併設された小さな鍛冶場があつた。

「オヤジさん、居ますか？」

「おお、待ってたぞ」

ヨーランが鍛冶場に声をかけると、いかにも“鍛冶屋のオヤジ”という風体の男が現れた。

「こちらが本日符<sup>エンチャント</sup>呪していただく、ヴィクトル・ヴィ・ニエボ・アルヒミア様です。アルヒミア様、この者が専属鍛冶師のジュー・カルム殿です」

「ご紹介いただいたヴィクトル・ヴィ・ニエボ・アルヒミアだ。放浪の身でね、気楽に接してくれると嬉しい」

「そりゃあ助かる、礼儀作法の類は苦手だね。ここの専属鍛冶師、ジュー・カルムだ」  
俺の名前の長さに表情が硬くなりかけたジューの緊張を解すと、快活な挨拶が返ってきた。

「アルヒミア様、オヤジさん、早々に申し訳ありませんが、私はレエブン候のもとに戻ります」

「おう、後は任せておけ」

ヨーランはレエブン候の護衛に戻るようだ。

「案内に感謝する。明日からはひとりで大丈夫だ」

「承知しました。では、失礼します」

ヨーランを見送り、ジューに向きなおる。



「カルム殿、早速だがどうする？ 先に職人たちの得物から済ませようか」

「ああ、そうしてくれると助かる。仕事馬鹿な連中ばかりだから、早く返さんと後が煩い」

ジューウが指す近くの机を見ると、彼が「朝一でかき集めてきた」という上級職人たちの得物——、金槌ハンマや鑿チゼル、鋸ノコギリや矢床フライヤが並べられていた。符呪エンチャントする効果は「職人の幸運」。ユグドラシルでは製造職の技能判定にボーナスを得るものだ。

他にも得物を軽くしたり火耐性を上げたりも可能だと提案したが、これらはレエブン候や軍師殿に却下された。曰く、「職人とは得てして五感を重視する」というものだった。

温度や質感、色味や重さなどなど、物作りには経験で培った感覚が大切らしい。そこで成果物結果にボーナスを得る「職人の幸運」クラフタース・フォーチュンが選ばれた訳だ。

ただ異相協会に提供できるものがそれしかなかったとも言える。

ユグドラシルでの製造を雑に説明するなら、職業レベルや特殊技能スキルを上げ、必要な材料を集め、プログラムが弾きだす結果に一喜一憂するだけのもの。プレイヤーの「感覚」が介在する余地があるとすれば、特定の製造過程において「タイミングを計る」必要があったが、経験頼りだったそれも後のアップデートでタイミングを計るための「ゲージ」が実装された。

おかげで製造の失敗が減ったものの、変わりに価格破壊が起きて市場が混乱した。

「すぐに取り掛かる」

「わしは付<sup>エンチャント</sup>呪する武具を選別してくる。終わったら奥の倉庫に来てくれ」

ジューウが腰の鍵束を弄りながらノシノシと鉄棒で補強された扉へ向かう。その先が併設された武具庫なのだろう。

俺は了解の意を示して手短な所に触媒とスクロールを広げた。

\* \* \*

「勘弁してくださいえ」

「許してください……、もう二度としません」

異相協会の馬車を引く4頭のアイアンホース・ゴレム、その先頭の2頭に、それぞれ裸にされた30代くらいの男女が跨っていた。両者とも後ろ手に縛られ、胸元には王国文字で大きく「泥棒」と書かれている。文字自体は濃い青色で、日光で分かりにくいのが、よく観察すると青白く発光しているのがわかるだろう。

クレマンティーヌは下卑た笑みを堪えながら、そんな男女の盗人を見上げる。

このふたりの盗人はクレマンティーヌが捕まえた獲物だ。

「命は助かったんだからさー、下手なことは考えるんじゃないよ」

手口は単純。女が注意を引き、男が盗む。よりにもよって——、いや、幸運なことに、このクレマンティーヌ様が店番の時にやらかしてくれた。「窃盗の被害者」という大義名分のもと、嬉々として盗人ふたりを可愛がった。

が、途中でウエネフィカ様から「待った」がかかった。女主人は盗人ふたりの傷を癒し、「宣伝になる」として晒し物にしたのだ。

「ご主人様が慈悲深くてよかったねえ」

甘くは感じるが、これはこれで有りだ。そもそも盗品は取り返した。それに実のところこの盗人には感謝すらしている。なにせ人狼ワウルフになって相手する初の人間。手加減を学べた。

これで格下相手でも上手くやれる。

「姉ちゃん、この革レザー・アーマー 鎧を売ってくれ」

こんな状況でも馬車の横では、カーリンとリタの接客で売買が続けられている。

ウエネフィカ様は雇った人夫を連れてロフォーレ商会に約束の品を卸しに行っている最中だ。

「畏まりました。いま着てらっしゃる鎧を下取りいたしますか？」

「頼む」

「盗人<sup>アイツら</sup>らを治した薬が欲しい。売り物じゃないのか？」

「あの薬は近々ロフーレ商会へ卸す予定です。それまでしばらくお待ちください」

「この香水を包んでおくれ」

「はい、ただいま」

売れ行きは順調。特に野盗から剥いだ装備は人気で、なかでも値が張る割には消耗品であるところの「靴」が真っ先に売り切れた。

中古品ではあるものの異相協会の手が入っている。目が肥えた者なら質と値が釣り合っていない。掘り出し物だとすぐに気づく代物だ。

そんな品々がゴロゴロあるのだから敵情視察に訪れた行商人たちの表情も硬い。

冒険者たちが噂を聞きつけたのか少しづつ客足が伸びてきた。昼までにはまだ時間はあるが、魔法が付与された高価な武器や防具も売れ始めている。

当然だ。本来この手の品は、良好な関係を築いた相手<sup>マジックキエスター</sup>が優先され譲渡されるもの。冒険者なら仲間、魔法詠唱者なら弟子、貴族の家宝なら代々受け継がせるものだ。

なんの伝手も無く手に入れようと思つたら財産片手に専門店へ駆け込むしかない。あるいは王都リ・エステイ・ゼヤ帝都アーウィンター並みの大都市に足を運び、目を皿のようにして露店市を漁らねばならない。

「——失礼」

売買を眺めていると数人の衛兵が現れた。

「こちらに窃盗犯がいると——、ああ、そいつらですな」

「遅いじゃん、ちゃちゃつと連れてつちやつてよ。あ、服はそこね」

引き渡されると悟つた盗人ふたりが青ざめている。領地に属する男たちがそのまま戦闘員を担う王国のような地域はえてして犯罪者に厳しい。窃盗罪で都市の外壁に吊るされることはないと思うが、都市内に頼れる有力者がいなければ水責めくらいはされるだろう。

「この文字は、消えるんですか？」

「勝手に消えるって言つてたかな」

裸のまま連行するわけにはいかないのか、衛兵はせめて上着だけでも思つたのだろう。盗人の胸元で光る「泥棒」の文字が目に入ったようだ。

ウエネフィカ様曰く、「この光る洋墨インクは落書きにしか使えなかつたけれど、愛好家はとつても多かつた」と思い出を語っていた。主力商品ではないが、作れば売れる需要の

高い魔導具マジックアイテムだつたらしい。

衛兵たちを見送り、気持ち切り替えて子供たちへ声をかける。

「お〜い、おチビ君たち。仕事だぞ〜」

『はい！』

痩せた子供たちがワツと現れて、先ほどまで盗人が跨っていたアイアンホースゴーレムを磨く。

その日暮らしてなんの保証もない、日雇いの子供たちだ。

異相協会で一日働けばしばらく飢えずに済むだけの給金が支払われる。

貴族や商人が施す黴臭いパンではなく、焼きたての黒パンを買えるのだ。

「せっかくの機会だ、上手くやれよ〜」

誰にともなく呟く。仕事を完璧にやれって意味ではない。

帰ったら上手く立ち回れってことだ。

浮浪児童ならまとめ役の兄貴分が、犯罪組織と関係を持つていれば元締めが稼ぎを確認する。その時にどう振舞うかはこいつら次第だ。

まあ、上前を撥ねられたとしても悪いようにはならないだろう。

貧困街スラムから離れたこの大広場までわざわざ足を運ぶ奴は使える。たとえ犯罪組織に働かされていたとしても、盗みにしか使えない奴らよりはましってことだ。

裏社会の連中も馬鹿ではない。一度の失敗で失う駒より、合法的に稼げる駒を重宝する。そこらの平民やごろつきよりも、歴とした裏社会の人間のほうが非合法的な活動に慎重なのはなんとも皮肉な話だ。

もちろん純粹な順法精神ではない。腕力だけではやっていけないことを知っているのだ。

\* \* \*

職人用の付エンチャント呪は数が少なかったのですぐに終わった。

俺は仕事道具を鞆にしまい、ジューウに指示されていた武器庫に向かう。

鉄棒で補強された扉をくぐると今度は鉄格子の扉、2重扉だ。壁もやたらとぶ厚い。これで居住空間があればちよつとした砦だ。さらに魔術的な守りを追加で施せれば万全になりそうだが、エ・レエブル領といえどもここはあの王国だ。こんなものなのだろう。

「終わったぞ、カラム殿」

「おお、早いな。こつちだ」

所狭しと立ち並ぶ柵の奥からジューウが顔を出す。

そこへ向かうと、同じ規格で揃えられた武器がずらりと並べられていた。

1人分の武器を列挙すると、頭、胴、腕、手、腰、足、靴、剣、盾の8種。これを300人分、2400個のアイテムに付エンチャント呪いしなければならない。

ユグドラシルならひとつひとつ作業してもボタン連打で30分とかからない量、マク口を組めば数分で済む量だ。

「何をしているんだ?」

ジーウが装備品の一部を分解して手を加えていた。

「最後の微調整だ。付エンチャント呪うると手入れが難しくなるからな」

「なるほど」

付エンチャント呪方法は様々だが、永続化すると総じて修復が面倒になる。多くの場合、希少な素材や専用の特ス殊キ技能ルが必要になる。

「カルム殿、今日は1日でどれくらい付エンチャント呪できるかを試したい。どれから手を付けなければいっ?」

「そこに50人分ある。まずはそれで様子見だな」

ジーウには試したいと言ったが、1日の作業量はすでに決めてある。不測の事態に備えてMP残量に余裕を持たせなければならぬので、1日20人分前後に抑えるつもりだ。総作業期間は半月ほどになるだろう。



俺は剣を手にとると、付呪師エンチャンターの他、複数の職業技能クラススキルを併用しながら作業を開始した。

## 第13話：依頼、領民、ときどき読書

レエブン侯の依頼を請け負ってから半月後の夕刻、無事に依頼を終えたところに侯爵様本人が俺と鍛冶師ジューウを労いに武器庫を訪ねてきた。符エンチャント呪が施された武器を見にきたついでかもしれないが、確認や支払いを部下任せにしないあたり彼には好感が持てる。

俺は受け取った報酬をアエラに背負わせた鞆に詰め込む。実際にはアイテムボックススへと放り込んでいるのだが、鞆の容量を上回る収納力を見せても、レエブン侯もジューウもその不自然さに言及するつもりはないようだった。

報酬の内訳はクラーナの要望で、交易共通白金貨、王国金貨、銀貨、交易共通小切手に分けてもらっている。

懐いせつぎょうかいから異相協会の印が入った上質な紙を取り出す。

「領収書です」

「確かに受領した。これで領地の守りもより強固になるだろう。——この後の予定は？」

「本日は大役を果たした祝いにカルム殿の家で食事に誘われています」

この半月の間、ジーウ・カルムとは親睦を深めた。何度か夕食に招かれ、今では腹を割って話せる仲だと思っている。

そんな彼はレエブン侯の手前、武器庫の隅で大人しく取引を見守っていた。雇い主であるうと貴い身分の相手が苦手なようだ。

レエブン侯はひとつ頷いて続ける。

「そうか、実は護符の購入を検討している。エ・ランテルで話題になっているらしいぞ」「話題、ですか?」

「先の不死者事変で無傷だった店があるよね。レッテンマイア卿が神殿連中を宥めるのに苦労したそうだ」

身に覚えのある話だ。確かにグニラの店には俺から購入した護符があった。そのおかげで不死者の襲撃を免れたのも事実。しかし、彼女らと行動を別にしてからは連絡がない。つまり困った状況にはないはずだが――。

「いったい何が神殿を?」

「不死者が都市に溢れた時、少なからず神殿へも押し寄せたそうだ。神官や信者が撃退して被害は無いようだがね。だがその後、ある噂が連中を刺激した」

レエブン侯は一呼吸間を置いて続ける。

「生者を憎む不死者が見向きもしなかった娼館がある、とね。邪悪な儀式で不死者を

操ったのではと騒いだらしい。まあ、レッテンマイア卿のもとに店主の異議申し立てが届いて事なきを得たみたいだがな。それに冒険者組合からも力添えがあったそうだ」

俺はグニラが真っ先にクラーナを頼らなかつたことを評価する。冒険者組合の意図は分からないが、おそらくは冒険者モモンの活躍が関係しているのだろう。不死者の発生源を含め、冒険者組合はあの事件に関して神殿よりは詳しいはずだ。

「なるほど、そのような事があつたのですか」

「神殿を唸らせるほどの実績があるならば是非とも欲しい。そちらの都合のいい日でもない、屋敷に持つてきてくれ」

「そういうことでしたら、明日にでも伺いますよ」

俺は新たな依頼を快諾し、ジーウと共に通い詰めた武器庫を後にした。

\* \* \*

「少し寄る所がある」

ジーウが向かった先は食糧品店。

この転移世界には24時間営業のコンビニエンスストアは無い。その日に消費する食品は市場で仕入れ、長期間保存が利く食品や保存食などは定期的に大量購入するのが

一般的だ。

彼のような都市に住み家庭を持つ者なら、3ヶ月から半年分の食糧を常に貯蓄しているのだとか。それができないと甲斐性なしと蔑まれるらしい。

庶民はもっぱら既存の製法で作られた安価な保存食を買う。食品の鮮度を保つ魔法プリザベーション「プリザベーションへ保存」が付与された食品はやや値が張り、祭日などの安売り時を狙って買い溜める。

肉や魚なら干物・燻製・塩漬け・酢漬け、農産物なら漬物・寒干、果物ならジャムなどが一般的な保存食。それらをプリザベーション「プリザベーションへ保存」を付与した木箱や瓶に詰めれば保存期間を延ばすことができ、さらに規模が大きくなると倉庫そのものにプリザベーション「プリザベーションへ保存」を付与してしまうらしい。

なお最も値が張るのは未加工の食材に直接プリザベーション「プリザベーションへ保存」が付与されたものになる。

俺たちの世界で一般家庭に冷蔵庫が普及したのは20世紀初頭だ。対して缶詰の発明が無いまま生鮮食品を長期保存できるこの転移世界。食糧の安定供給は人口増加に必須だが、繁殖力の高い人外がこれらの技術を獲得したなら果たして人類に居場所は残るだろうか。

視線の先でジューウが小麦や干し肉、乳製品を自宅に届けるよう店主に注文している。大量に購入する際は少しの手間賃で後日店の奉公人が配達してくれるらしい。このような宅配サービスは都市ならではだろう。

「待たせた。さあ、行こう」

ジーウの手持ちは大きな鳥二羽。首を落とし、血抜きと羽毛処理が済んだ鶏肉だ。仕事納めに奮発したらしい。

ジーウ・カルムの家は、俺が現実<sup>リアル</sup>で住んでいた“あばら家”とは比較にならないほど立派だ。通りに面した仕事場があり、その奥に続く居住空間を持つ。三階建てで地下室を持つ住宅だ。

そんなカルム家がある区画は製造職が多く、通りからは細く縦長の店舗が密集しているように見え、都市の景観にある種の統一感を作っていた。

俺にとつての「家」は、粉塵と酸性<sup>あせ</sup>雨<sup>め</sup>を凌ぐだけのものだった。一方、カルム家は人の生活を支える様々な機能を有していた。居住者はジーウを含めた家族8人、3人の職人、2人の見習い、2人の女中、計15人。それは住居であり、育児の場であり、作業場であり、店であり、倉庫だ。

これはリ・エステイーズ王国で家庭と職を持ち、弟子や雇い人を抱える者の平均的な環境だ。そして住む者が変われば、家は塾となり、病院となり、祈りの場となるのだ。

招待された夕食は毎回賑やかだった。居住者全員、15人が一堂に会すのだ。初めて夕食に招かれた時は歓迎会かとも思ったが、この「大勢での食事風景」が彼らの日常だと知ったときは衝撃を受けた。ただその驚きも、老若男女交えた会食が一種の「教育の場」であることに気づき納得に変わった。

リ・エステイゼ王国で安定した教育を継続して受けられるのは、貴族や裕福な商人の跡取りくらいだと聞く。であればカルム家の食卓で交わされる会話は、たとえそれが生活や仕事に即した技術や知識に偏ったものだとしても、経験の浅い若者たちへの貴重な学習機会と言えるだろう。

そんな賑やかな夕食の後、ジーウからふたりで話したいと誘われた。

3階の一室に案内され、勧められるまま椅子に腰を下ろす。

「改まって話とはなんだ？」

「ウルリカをお前さんとこのサツチャー殿に弟子入りさせてほしい」

酒が入っているものの冷静で、そして真面目な口調だ。

ウルリカは彼の長女、サツチャーはクラーナが考案したマーシヤの名字だ。

何度か鍛冶場で働くウルリカを見た。娼婦のリタと同じ20代半ばで、容姿は王国で一般的な金髪碧眼。日ごろから槌ハンマーを振るっているので娼婦らよりは筋肉が付いていた。

鍛冶場での手際は素人目に見ても堂に入っているものだったと記憶している。

ここ半月の間、俺の仕事とは別に、異相協会も広場での商いを続けていた。その商品をジーウが手にし、制作者であるマーシヤの技能について何度か触れた。その時に包み隠さず——とは当然いかなかったが、彼がマーシヤのことを知っているのはそんな経緯からだ。

だからこそ疑問だ。確かにマーシヤは鍛冶師、刀匠、銃工の特殊技能を持つ。特に前者ふたつはこの世界でも最高水準だろう。しかし、ジーウも領主に雇われるほどの鍛冶師で腕は確かだ。いかに親睦を深め、そして異相協会の技術が素晴らしくとも、娘を根無し草に預けようとする意図がわからない。

仮に異相協会の技術がほしだけならジーウ本人がマーシヤから学べばいい話だ。

「なぜだ。あんたは親方<sup>マスター</sup>だろう？ 自分で教えてやればいいじゃないか」

「もちろん技術は教えられるしそうしてきた。だが組合<sup>ギルド</sup>の規則で遍歴経験のない者は見習い以上にはなれんのだ。どんなに腕が立とうともな」

続くジーウの説明によると、どうやら多くの製造職組合は遍歴修行を必須としているとのことだった。職人業は代々技術を親から子へ、あるいは師から弟子へ継いでいくものではあるものの、「組合員の質」を保つため、特に見習い期間中は親族以外への師事が不可欠らしい。これは未熟なまま身内最顶层で「一人前」を名乗らせないため、さし



もの親方マスターであるジューウも従わざるをえないと言う。

ただこの「組合員の質を保つため」というのも建て前で、本来は先達の職人たちが都市内の限りある食い扶持を奪われないために若手を追い出すのが目的らしい。ジューウ自身も弟子を抱える身だ。組合の事情は理解しつつも、やはり娘を放浪させる事には抵抗があるのだろう。

ジューウは深いため息をつく。

「本来ならこの道を認めた時点で強引にでも他所に預けるべきだったんだが、気づけばあれも行き遅れてしまった。弟子に嫁がせることも考えたが、困ったことに本人にその気がない。このままだと工房も持てない半端者だ」

娘可愛さに先延ばしにしてきた親の責任だとジューウは自嘲する。

親心とやらは分らないが、男だらけの界限に娘を放り出すと考えれば想像はつく。漠然と心の奥底で焦りを抱えていたところへ、マーシャという腕の立つ女鍛冶師の存在を知った。その伝手である俺がレエブン侯の仕事を終えた今、せつかくの機会を逃すまいと意を決して提案してきたのだ。

ジューウは軽く頭を振ると声の調子を戻す。

「弟子入りの話は無理にとは言わん。だが街を出る時に同伴を頼みたい。王都へ行くんだろ？ 王都の組合ギルドでならあぶれずに食っていけるはずだ。片道だけでいい、娘の独り

立ちに協力してくれ」

「事情は分かった。だが彼女の主は別でね、弟子入りの話は一旦持ち帰って検討させてもらう。もし駄目でも同伴に関しては俺の裁量で連れていけるからそこは安心してくれ」

「そうか、恩に着る」

俺の言葉にジーウは心底安堵した表情を見せたのだった。

\* \* \*

深夜、アエラと共に帰路につく。

この世界の夜は、暗い。その暗さは俺が知る現実リアルのそれとは異なり、大気を覆う粉塵が無い分、広く開けた場所なら月明かりだけで歩けるほどに闇が澄んでいた。

逆に「路地裏」は危険だ。都市構造体、つまり密集した建造物の隙間には月明かりは届かず、街灯が少ないことも相まって深い闇が生まれるのだ。

大通りに人影は無い。燃料が貴重なこの世界の消灯時間は総じて早い。そんな誰も寝静まる中、暗闇に紛れて出歩く者がいるとしたら、それは目的をもって行動している奴だ。

『——ヴィクトル様』

『ああ、見えている』

アエラの警告に応える。

広場に戻ると、馬車に一番近い建物の屋根に“透明化した大きな何か”を種族能力〈生命感知デイトクトライフ〉が捉えた。見張りのジルに目配せすると、彼女は「大丈夫」とひとつ頷き返した。

察するにアインズ・ウール・ゴウンの関係者だろう。

クラリーナの部屋に顔を出すと、応接間のソファアーに小さなお客様が座っていた。

アインズ・ウール・ゴウンの主要NPCのひとり、闇妖精ダークエルフのアウラ何某。「お邪魔しています」と会釈してくれた彼女は、コーラを飲みながらクラリーナの作業を待っているようだ。

「いいところに来たわ。これに目を通して」

「——回覧板？」

俺はリリが用意してくれた椅子に座り、クラリーナから回覧板を受け取る。

状況からアウラが持ってきた物だろう。

「回覧板だなんて彼も古風よね」

「外だと割と現役だったぞ」

「本当に？ 再生紙で？」

「いや、端末の回し読みだ」

度重なる震災でボロボロになった外界の通信網は、外に住む技術屋が細々と延命していた。お世辞にも設備の状態は良いとは言えず、完全環境都市内と比べると通信状況も不安定だった。旧時代のITインフラに限界が迫っていたのも確かだが、最大の要因は大気を覆う粉塵が作りだす静電気。電子機器の信頼度が天候に大きく左右されてしまふのだ。

無線による通信に信頼が置けなくなつて採られた手段が、有線で記録した端末を一次ソースとして関係者間で回し読みすること。それを指して外の連中は「回覧板」と呼んでいた。

「この話は後にしよう」

アウラが興味深そうに聞き入っていたので話を切り、回覧板の内容を確認する。

アインズ扮するモモンがアダマンタイト級冒険者になったこと。現地の万能薬を手に入れたこと。リザードマンとの戦争を控えていること。偽ナザリックを建築中であること。牧場経営を始めたこと。王都にNPCを派遣したこと。等々、ここ最近の出来

事がまとめられていた。

またそれとは別にトブの大森林の地理情報もあった。

「資料と地図はもらっていいのかな？」

俺はなるべく優しい声音でアウラに話しかける。

他所様の子供に話しかけるのはいつ以来だろう。

「はい、御二方のサインだけ頂ければ大丈夫です」

アウラの澆刺とした返事に頷き、俺は資料を抜き取る。

「ヴィクトル、彼に伝えたいことがあるなら一緒に書きちやうけど？」

「ああ、そうだな」

クラリーナの言葉に甘える。

モモンの昇級祝いなど社交辞令はクラリーナが済ませているようなので、俺は少し実のある要求をしようと考える。

まずは「現地の万能薬」とやらの株分け。アルケミスト錬金術師として無視はできない。

次いで研究用に生きたりザードマン。クレマンティーヌで人間と人狼ワーウルフに対する薬効は試せた。あと1〜2種族くらいを相手に実験し、ユグドラシルとの違いに慣れておきたい。

最後に、王都リ・エステイーズに先行しているナザリックのNPCとの接触を希望す

る。アインズを通じた情報の共有も有用だが、王都入りの際に現場でしか得られないものもあるはずだ。

これらの対価は要相談と付け加えておく。

「――よし。書けたわ」

記入し終えたクラーナが羽ペンを置き、彼女の紋章が刻まれた印シグネットリング環で手紙に封をする。羽ペンを走らせている姿もだが、楽しそうに垂らした蠟に印を押しあてている。

「じゃあ、これをよろしくね、アウラちゃん」

「お預かりします。――それでは、本日は夜分の訪問にもかかわらずお時間頂きありがとうございます。どうぞございました。そろそろおいとましようと思います」

「今度は弟さんと遊びに来てちょうだい。リリ、お見送りを」

アウラが退室すると、俺とクラーナは一息つく。

「可愛かったわね」

「手を出すなよ」

「馬鹿ね、私をもつと信用なさい」

普段の行いを思うと不安しかない。

「ヴィクトル、まずはお疲れ様。ゲームと違って気苦労もあつたでしょ」

「まあな、これが報酬だ。それとレエブン侯から追加依頼だ。明日また商談に行く」

俺はアイテムボックスから報酬を取り出し、クラーナの机に積む。交易共通白金貨10枚、王国金貨900枚、銀貨1000枚、金貨100枚と書かれた交易共通小切手が4枚だ。

そしてレエブン侯から聞かされたグニラの一件を伝える。

「依頼に関しては了解よ。グニラたちの件もね。でも、組織ギルドマスターの長としては事後報告をしてほしかったわ。先方にお礼の手紙も書かないとだし、知らないところで借りを作るのは嫌よ。——それよりも」

クラーナが会話を区切り、机の上の金貨に手を伸ばす。

「これでツケを払えるわ」

「また娼館に行っていたのか?」

ここ半月の間、クラーナは淫欲に溺れていた。売る側から買う側になった反動か、娼婦や男娼を馬車に連れ込むこともあれば娼館を丸ごと貸切ることもあり、ずいぶんと派手な生活を送っていた。

異相協会の稼ぎがあるものの、娼館への支払いを宝石などの現物や、時にはツケにして店を後にする有様だったのだ。

だがここで注目すべきは、クラーナがツケにできるだけの社会的信用をこの短い期間で構築できたことだ。異相協会が扱う商品はどれも品質が良い。しかし、だからといってただ売るだけでは信用は得られない。彼女が有力者と顔を合わせて接待や商談をまとめた成果といえるだろう。

ただし、商談の際に「異相協会の女会長は色を好む」との噂が広がり、その色欲に付け込もうと高級娼婦を同伴する「分かりやすい輩」が増えたの言うまでもない。

「それなんだけど、複数の娼館から接触があったの」  
「ツケを払えって？」

「違うわよ！ いや、それもあるけれど、パトロンにならないかって」

「こっちは住所不定なのにか？ よく誑たぢし込めたな」

俺の言いようにクラーナは苦笑する。

「言い方。——まあ、いい金蔓だと思われているのは確かね」

「背後関係が気になるな」

売春業は地域密着型の生業だ。冒険者組合や豪商が地域をまたいで足並みを揃えているのに対し、売春業は組合らしい組合も無く、街や国を越えての連携はない。その根底には、性従事者とは「所有された持たざる者」という実情があるのだ。

封建社会では大概の事柄に王侯貴族や聖職者が絡んでいる。性従事者の直接の所有



者が誰であれ、金が行きつく先はどちらかだ。

エ・ランテルの衛兵隊長の忠告通り、何者かの暗躍を警戒する必要がある。

「私が調べておくわ。問題がなさそうならグニラの店みたいに取り込むつもりよ」

「管理はどうする？」

大事にならなかつたとはいえエ・ランテルの神殿と対立しそうになつた事実は無視できな

「ひとまずグニラとマリーに任せるわ。満点ではないけれど行動で示してくれたんだもの。無理が生じたら人員を増やせばいいわ。あと、レエブン侯に色々と掛け合つてみるつもり」

「——レエブン侯か」

以前クラーナが娼館組合を作ろうとした時はこの世界に転移したてで右も左も分からなかつた。だが今は現地人と交流を持ち、アインズとも接触した。多少はこの世界に關して理解を深めたといえるだろう。

前回は国王直轄領<sup>エラント</sup>だったので娼館組合の件は白紙としたが、今回はレエブン侯が治める領地。彼を味方にできれば組合の件も実現できるかもしれない。

娼館の件はクラリーナに任せるとし、俺はジーウの願いをクラリーナに伝えた。

俺がジーウの世話になったことはクラリーナも知っている。その娘をマーシヤの弟子にと頼まれれば彼女も無下にはできないだろう。

「弟子入りねえ、……迷うわね」

クラリーナが肘をつき、顎に手を添える。

その手には先ほどアウラが持つてきた資料がある。

「決めた、弟子入りを認めましょう」

クラリーナの承認にひとつ疑問を投げる。

「こっちの人間にユグドラシルの技能スキルを習得できると思うか？」

「それを調べるのよ。アインズも死デス・ナイトの騎士が武技を覚えられるか実験しているみたいだし、逆を試すの」

その言い分に納得する。可能なら俺もクレマンティーヌで実験をしたいところだが、生憎と異相協会には戦士職を教授できる人員がいらない。ジーウの娘でかなうなら試す価値はある。

「俺からジーウに伝えておく。具体的な話は追々だな」

「ええ、よろしく。じゃあ、今日はお開きね。——ふふ」

「なんだ？」

察してはいるが、クラリーナの含みのある笑みに眉をひそめてみせる。

「最近お盛んみたいじゃない？ アエラちゃんが可愛いのも分かるけど、たまには大部屋にも顔を出して？」

何の事はない、*「あつち」*のお誘いだ。

「敢えて否定はしないが、俺は男娼になつたつもりはないぞ」

「ヴィクトルに貢ぎたくて給金を貯めてる娘もいるんだから、ご指名に応えてあげなさいな」

「ホストでもない。——というか、金の使い方は他にもあるだろう」

クラリーナの言葉に呆れてしまう。

彼女たちもギルド内割引で異相協会の物を買えるというのに。

「あら、何事にも*「対価を」*と言つたのは貴方よ？」

「あれは異相協会としての話だ」

「分かつてるわ。でも、これでいいのよ。食事、衣装、娯楽、なんでもいいわ。自分への*「褒美は生き甲斐になるもの」*」

「左様でございますか。まあ、気が向いたら行くさ」

「ふふ、お願いね」

仰々しく返事をし、結局折れてしまう。

俺はここまで押しに弱かったらどうするか。

俺は仕事以外の人間関係が希薄だった。

プライベートの時間を誰かと過ごすことがなかったので調子が狂う。

俺は妖しく微笑むクラリーナを尻目に、彼女の部屋を後にした。

\* \* \*

自室に戻って最初に向かう先は寝室と書斎を兼ねた最奥だ。

外行きの上着を脱ぎ棄てて独り掛け用の革張りソファに座る。

そして読みかけの魔導書を手に取る。

クラリーナが大部屋に誘うほどに俺が自室に籠っている理由は、読書。暇を見つけては娯館通いをしていたクラリーナとは違い、俺はユグドラシル由来の書籍を読み漁っていた。

夜は暇だ。睡眠とは無縁の種族。この世界の何かを観察しようにも、都市全体が寝静まるのでそれもかなわない。

睡眠代わりにバスタブに収まることもあったが、それも連日となると「落ち着きたい」を通り越して「時間が勿体ない」と感じるようになってしまった。

結果、俺が取得している職業や技能クラス スキル、位階魔法に関する本を読むことにしたのだった。そして、俺がクラナの言った「お盛ん」を否定しなかったのもまた、ある意味では事実だからだ。

「ヴィクトル様、ご奉仕させていただきます」

黒ナース服のアエラが、ソファに座る俺の前に屈みこむ。

成すがままズボンのチャックを下ろされ男根ペニスを露わにされる。

アエラが愛おしそうに亀頭に口付けをし、そのまま躊躇いも無く根元まで一気に咥えこむ。

「じゅるる、じゅるるううう」

そして男根ペニスを咥えたまま、慣れた所作で頭の往復運動を始める。

エ・レエブル滞在から少し経った頃、アエラは周囲に感化されて俺を求めるようになった。

求めるとはいつでも、もっぱら彼女による口戯フエラや、自慰を補助する陰核クリトリスへの愛撫と可愛いものだ。

以前アエラへは狼として侍ってほしいと伝えたが、同時に我儘も許すと宣言した手前、ペットをあやすつもりで相手をしている。

しかし、あやすつもりで始めたものの、少しばかり心情の変化があった。

「じゅるる、じゅるる——、ぐっ!?!」

「アエラが根本まで啞えたタイムリングを狙い、自分の右脚を彼女の首に絡めて固定する。プロレス技で例えるなら「首四の字固め」だが、背後からではなく正面から固めている点で異なる。

俺は気ままに脚を緩めたり、逆に強く締めてアエラの反応を楽しむ。

こうした意地悪をなんの宣言も無く、一方的にしたくなるのだ。

粘スライム体になつて希薄になつた性欲だが、代わりに食欲と征服欲、それに嗜虐心を加えて、

俺は「女を抱く楽しみ」を得たのだった。

「おお、お、じゅる、おええ、えっ」

喉に突き刺さる異物を追い出そうとアエラがえずく。

咽頭反射で不随意に跳ねるアエラの身体を楽しみつつ、読書を続ける。俺にしてみれば口で飴を転がしながら本を読んだり、音楽を聞く感覚に近い。

アエラも俺が楽しんでいることを理解している。無理に逃れようとはせず、その乱暴な行為に身を委ねていた。

普通であればイラマチオは危険な行為だ。強制される側は耐え難い苦痛を感じるだけでなく窒息の危険もある。反射による顎の痙攣が起これば強制する側も噛み千切られることもある。

だが都合のよい事に、この粘体スライムの身体に物理的損傷の心配は無い。アエラも普通の人間ではないので無茶ができてしまうのだ。

アエラは両目に涙を湛えたまま、しかしそんな状況でも彼女の股間からは早くも雌の匂いが漂いはじめていた。

俺は不意にクレマンティーヌのことを思い出し、本を置く。

アエラの喉を楽しむ傍ら、書齋の隅で縮こまっていたクレマンティーヌを呼びつける。

「クレマンティーヌ、今日の成果をみせろ」

「は、はい」

相変わらず床に敷いた毛皮が彼女の寝床だ。

目の前まで来たクレマンティーヌは裸だ。飾り付けしたピアス以外はなにも身につけていない。恥丘の下、陰裂の隙間からは、拡張されて肥大化した陰核クリトリスが顔をのぞかせている。

客人がいない限り、この部屋にいる間は、これが彼女の正装だ。

俺は自分の左脚をトントンと叩いて示すと、その太腿を跨ぐようにしてクレマンティーヌは自らの股間を押し付ける。するとプリツとした陰核クリトリスが押し出され、拡張具合が先ほどよりも露わになる。

「ご確認ください。ひいっ!？」

クレマンティーヌの言葉を待たず、ズボンの生地が愛液を吸って小陰唇ラビニアが張り付いていたのを構いなしに、俺は彼女の腰を引いた。

ズボンの生地は上等とはいえ摩擦が無いわけではない。そこを赤剥けて繊細になつた実が擦つたのだ。

俺の太腿はナメクジが這つた跡のようにぬらぬらとランタンの光を返す。

「ずいぶんと大きくなつたな。そろそろか」

「ひいっ」

クリトリス  
陰核を摘まむ。

根元の径が15ミリ、長さは30ミリほどだ。

クラリーナの見積もりよりも成長が早い。クレマンティーヌの努力を誉めるべきか、「遊び」を延々と強要し続けたクラリーナに呆れるべきか、迷うところだ。

「クレマンティーヌ、自慰を許す。いつも通り手を使わず、俺の膝を使え」

「か、畏まりました」

クレマンティーヌが覚悟を決めた表情で両手を頭の後ろで組む。

そしておずおすと後ずさると、中腰のまま、腰を巧みに操り、俺の膝で秘裂を擦り始める。



クレマンティーヌはゆっくりと、小陰唇<sup>ラビエ</sup>で快感を味わうかのように、緩やかに腰を動かす。彼女は学んだ。俺やクラーナの「許す」がある種の命令であると。自慰は許されたが、休むことは許されていないと。

絶頂を迎えても休めない。彼女は甘美な快樂の先にある苦痛を知っている。緩慢な動きは必ず訪れる苦痛を可能な限り先延ばしにしたい心理の表れだ。

アエラの嗚咽とクレマンティーヌの湿った音を環境音に、俺は読書を再開する。

「いっ、っ、いぎますー」

クレマンティーヌの何度目かの自己申告に、俺は読書の海から意識を浮上させる。

彼女は足腰に限界がきたのか、床に崩れ落ちそうになるのを踏ん張ると、腰をぐいと突き出して俺の太腿に座り込む。

休憩は許していない。股間を膝から離すことも許していない。仮に床の潮溜まりへ崩れ落ちていたなら「お仕置き」が待っていた。それを踏まえると俺の太腿に留まっただけで及第点だろう。

クレマンティーヌは弱々しく腰をくねらせる。

休んではいけないとのアピールだが、はたから見ても限界だと分かる。

アエラはアエラで顔を涙と涎まみれにしながら酸欠で朦朧としていた。

始めは四つん這いのままきちんと奉仕しようとした頭も、いまは両手を床に投げ出し、俺が脚に込める力の強弱に任せたままだ。

長時間のイラマチオに喉が慣れたのか、喉奥まで犯しているにもかかわらず嘔吐反射が弱まっていた。

「起きろ、アエラ」

「ん、ぐう?!」

気付け代わりに喉を一突きすると、焦点の定まっていなかったアエラが覚醒する。

俺が男根を一旦引き抜くと、次の行動を察したアエラが大きく口を開けて舌を出す。

「分かっているな? 待てだ。——出すぞ」

俺はそう宣言し、アエラの口に射精する。

クラーナをして「多すぎ」と言わしめた精液が瞬間にアエラの口を満たすと、そのまま涙と涎で塗れていた顔に上塗りするかのようにつっかける。

溢すなどは命じていないが、アエラは健気にも顔から溢れ落ちる精液を両手で受けていた。

「ふたりで分け合え」

口に精液を湛えたままのアエラにクレマンティーヌを差し向ける。

自慰の強制から解放されたクレマンティーヌが秘裂から糸を引きながら立ち上がる  
と、動けないアエラに顔を重ね、口付けをする。

「じゆるるっ、ちゆるる、じゆるるるう」

「ちゅっち、ゅっ、んじゅっ、れろお」

ふたりの女が俺の精液ザーメンで顔を濡らしている。

俺が吐き出したそれを、まるで愛おしいもののように分け合い、飲み下していく。

片や無条件に従順な女、片や力で屈服させた女。

どちらも歪な出会いだが、それでも初めはモノのように扱うことに罪悪感を覚えていた。

しかし回数を重ねるごとにその罪悪感は薄れていき、今では征服欲が増した。  
もつと執拗に犯したい。

あるいは、いつそのこと畜生にまで墮としてしまいたいとさえ思い始めていた。

そんな自身の変質を意識しながら、俺は懐から〈清潔クリーン〉の巻物スクロールを取り出すのだった。

## 第14話：召喚、娼館

昼過ぎ。俺とアエラは商品の護符を携え、レエブン侯の屋敷を訪ねた。

そして、護符の効果を説明する流れで設置場所を直接確認することになった。

レエブン侯の案内で敷地内を移動する。

随伴者はアエラと軍師、そして少し離れたところに姿を見せない護衛がひとり。

道すがら周囲を見渡すと、広い庭に面した石畳の広場が目に入る。

広場にはジグザグと不自然に歪んだ人工池があった。

石畳を乱暴に切り取ったかのようなその池は、周囲を植え込みで飾ってはいるものの、観賞用にしてはあまりにも風情が無い。

「気になるかね？ あれは魔神が暴れていた頃の名残りだ」

俺の視線に気付いたレエブン侯が語る。

曰く、古くは屋敷が建つ土地に砦があり、広場は防壁跡地、人工池は防壁に沿う掘りだったそうだ。歴代の領主がその時々に必要な施設、流行の建築様式を取り入れて増改築を繰り返し、それらに合わせて防壁の位置も変化していったのだ。

「最近では優雅さを重視した改築をする領主も増えた。他人の趣味をとやかく言うつもり

はないが、今は特段に平時という訳でもない。優先すべきことが他にあると思うのだがね」

レエブン侯が横を歩く俺に顔を向ける。

「見栄のために散財する者を愚かだと思うかね？」

突然の振りに戸惑う。

しかし、俺の答えは決まっている。

「見栄を張ることで掴めるものもある。大切なのは自分を見失わないことだ」

「同感だ。だが一方で見栄のために身を滅ぼす者もいる。嘆かわしいことにな」

見栄を張ること自体は悪いことではない。誰だつて一度は自分を良く見せようと見栄を飾る。

俺だつて分割払いで手に入れたクアッドバイクや、防塵マスク、ゴーグルなどは、——  
今思えば悪趣味なデザインのペイントも含め、間違いなく同業者や取引相手に対する見栄だった。良くも悪くも、人は多くを見た目で判断する。はつたりがチャンスと呼び込むこともあるのだ。

だが、どんなに良い装備で身を固めても、実力を伴わない行動はいつかその身を亡ぼす。背伸びして繕った虚像で己を見失つてはいけない。

「レエブン侯、自滅するような連中のために憂うことはない。俺は見栄を張る連中は御

しやすいと思っている。逆に見栄を張れなくなつた連中は何をしでかすか分からない。卿が目を向けるべきはそういった者たちでは？」

レエブン侯が抱える貴族事情は知らないが、底辺に生きた者として言えることがある。

貧困が極まると人は見栄すら張れなくなる。

極限に達した境遇は、人間を「人」から「獣」に変える。

見栄を張れるうちは——、社会に属しているうちは人間だ。

「はは、なりふり構わない者がどれだけ脅威なのかは百も承知だ。だからこそ憂慮に堪えないのだよ。私がどう呼ばれているか知っているかね？ 蝙蝠だ」

余程腹に据えかねているのだろう。

レエブン侯の語気が強くなる。

「愚か者どもが暴走しないよう私がどれだけ苦心して——、いや、忘れてくれ。王国の醜聞を口にすべきではないな」

「珍しい話でもない。まあ、聞かなかつたことにするさ」

「そうしてくれると助かる。——さて、話しているうちに着いたぞ。ここが入口だ」

着いた先は古ぼけてはいるが頑丈そうな地下への扉。

周辺の様子から城壁跡地だと分かる。

「見ての通り、ここも十三英雄時代の遺構だ。我が先祖は領民と共にここに籠り、魔神の襲撃を凌いでいたと伝えられている」

\* \* \*

冷気が漂う地下へと降りると、そこはまさにシエルタワーだった。

入ってすぐの空間は、素早く大勢を収容できる大広間。

床や壁、柱には細かい傷がある。過去に使われた痕跡だ。

隣接する大部屋に移動する。

「ここは礼拝堂だ。珍しくも四大精霊が揃っている貴重なものだ」

魔神襲来という非常事態のなかで合祀されたのだろう。

魔神への恐怖を振り払うには心の拠り所が必要だ。

この手の配慮はシエル閉鎖空間タワーの秩序維持に欠かせない。

「いっつちだ」

続く廊下の奥には大中小の部屋が続く。

用途は寝室から炊事場、倉庫など様々だ。

部屋を見て回る内に疑問が生まれる。

「レエブン侯、どの部屋も物資を詰め込み過ぎでは？」

どの部屋も面積の半分以上を物資が占めていた。

避難所としての機能に支障がでる程だ。

「ああ、純粹に倉庫として使っているからな。人の収容は考えていない」

やや言葉が足りないレエブン侯の説明に軍師が補足を入れる。

「十三英雄時代とは事情が変わりました。今は領地の各所に避難所があり、ここにある備えは魔神ではなく帝国を意識したもののなのです」

「彼の言う通り、我々が直面している脅威は帝国との戦争だ。より正確には鮮血帝の戦略に備えているのだよ。——ここだ」

レエブン侯が両開きの扉を開く。

一見して保存食や酒樽が大量に積まれた貯蔵庫だ。

「この貯蔵庫がいわくつきだね。私の代ではまだないが、過去に幽霊ゴーストが現れたとの記録がある。これを予防したい」

「なるほど。幽霊ゴーストは不味いな」

ここの物資が必要となる時は切羽詰まった状況だ。そんな状況の中で物理攻撃が効かない非実体のモンスターが現れたら厄介だ。特に補給物資などを扱う後方兵科では対処が難しいと容易に想像がつく。



それを護符で防げるならと、レエブン侯は今回の購入に踏み切ったのだろう。魔除けの護符を軍師へ数枚手渡す。

「護符の効果範囲は護符を中心に球体状に広がっている。この広さなら中心に一枚設置すれば外の廊下まで護れるはずだ。残りはおまけだ、好きに使ってくれ」

軍師が頷きながら護符を受け取る。

何処に設置するかはお任せだ。

レエブン侯が唸る。

「気前が良すぎる」

「異相協会をご鼻屑にして頂ければ安いものだ」

「率直に言うが、異相協会の売り込み方は異常だぞ」

最後に、ついとばかりに貯水室へ案内された。

天井に近い場所から水を引き込み、細かく分けられた幾つもの貯水槽に水が溜まる仕組みだ。全ての貯水槽が満杯の今は、溢れた分が部屋の隅にある穴から排水されていた。

レエブン侯が語る。

「幸いなことに我が領地にはアゼリシア山脈の恵みがある。こうして貯めることができるだけ他所よりはいい方なのだが、——この水を使う日が来ないことを祈っているよ」

水は簡単に腐る。だからこそ保存が利く酒類を貯蓄するのが一般的だ。レエブン侯の言うように避難所の中に水源があるだけで恵まれていると言えるだろう。

だが恵まれてはいるが、この水は一目見ただけで不衛生だと分かる。水の出入りに格子と網が嵌っているものの目が粗く、小動物の他、小さな異物が混入してもおかしくはない。

「レエブン侯、こちらは飼育されているので？」

「ほう、よく気づいたな。衛生粘体だ。サニタリースライム水が腐らぬよう流水で常に入れ替えてはいるが、天候次第で濁ることもある。それを浄化するためだな」

ふと目にした貯水槽に何体もの粘体スライムが潜んでいた。

水に潜む半透明の粘体は視認が難しいのだが、ディテクト・ライフ「生命感知」のおかげで気づけた。

「差し支えなければ数匹分けてほしい」

「これとか？」

なんの脈絡も無く粘体スライムを欲しがる俺に、レエブン侯は訝しげな表情を向ける。

当然の反応だ。彼は異相協会を取り込もうとあの手この手でクラーナに貸しを作る

うとしていた。何を提示してもなびかなかったクラーナを知る彼の目には下水処理用の粘体スライムを欲しがる俺は変わり者に映っただろう。

「まあいいだろう。定期的に間引いているものだ。自由に持って行ってくれ」

\* \* \*

「それで粘体スライムを持ち帰ってきたの？」

「召喚用だ。アインズの資料にあった時間制限の解除を確認するつもりだ」

クラーナの応接室で衛生粘体サニタリースライムを披露する。

「ヴィクトル、実演するならちよつと待って。リオ、貴方も見ておきなさい」

壁際に控えていたリオが歩み寄る。

彼は召喚特化なので後学のために見せてやりたいのだろう。本人も興味があるのかその目は真剣だ。

対してアエラは狼姿のまま足元で寝そべっていた。こやつめと小言のひとつでも言つてやりたいが、耳だけはこちらを窺っているので完全に無関心というわけではなさそうだ。

活きのいい1匹を掴み上げる。

ドクター・フディング  
滋養の泥濘

魔法を発動すると衛生粘体の表面がブクブクと泡立ち、膨張しながら全体の色が徐々に変化する。そして泡立ちが治まると、馴染み深いエメラルドブルーの粘体スライムになった。

こいつはユグドラシル基準だと小型で、モンスターとしては熱帯雨林のようなフィールドで遭遇する。生息域での発見はやや困難だがノンアクティブモンスターであり、近づいて触れると回復してくれる良い奴だ。もちろん不用意に攻撃すれば能力値異常を伴う反撃を受けることになる。

アインズの実験に間違いがなければ貴重な回復要員になるだろう。

「こいつとの『繋がり』を感じる」

「資料にあったやつね。どんな感じ？」

「言葉では言い表せない。とにかく存在を感じる」

感覚としては微弱なものだ。

意識を向けなければ気が散ることもないだろう。

召喚した滋養の泥濘を床に下ろし、今度は技能スキルを発動する。

セルコロリエーション  
〈細胞増殖〉

握りこぶし4個分の大きさ、容量にして1リットルほどの漂う聖なる肉塊デイヴァインゲロブスターが俺から分離するのように召喚される。

〔セルフロリアーエーション〕  
 〈細胞増殖〉は粘体種のプレイヤーが特殊イベントをクリアすることで取得できる技能だ。発動に触媒を必要とせず、発動者の分身を召喚する。

分身は発動者の8割の能力値で複製され、魔法や技能も一部制限がかかる。制限の一例として超位魔法の使用不可などがあるが、発動者自身の分身なのでプレイスタイルに合わせたAIを組みやすく、またレベルを重ねることで召喚時間の延長やサイズ変更などでもできるようにする。1日の使用可能回数が少ないことを除けば大した欠点が無い技能と言える。

ユグドラシルでは小型サイズの自律行動する囃となるようマクロを組んでいた。

俺は分身に命ずる。

〔擬態で〃売り子(女)〃になれ〕

「……これでいい?」

小型の分身がそのサイズに関わらず登録された少女の姿に正しく擬態する。

腰まで届く黒髪を持つ12歳ほどの少女。コンソールを通さず客観的に見るのは久しぶりだ。

そして、想像はしていたが裸だ。

インベントリの中身が勝手に移動しないと思えば納得できるものの、これだと衣装を毎回用意せねばならず利便性に欠ける。

「なぜ召喚されたか分かるか？」

「うん、召喚時間の確認でしょ？」

「——そうだ」

俺以上に上手く少女を演じる分身に内心眉を顰める。

ただそれ以上に召喚時の意図をきちんと酌んで召喚されるのはありがたい。

召喚の度に説明が必要では実用は難しい。

「クラーナ、こいつを預けておく」

「いいの!？」

俺の提案にクラーナが食い気味に目を輝かせる。

「ああ、時間の確認だけ忘れるなよ」

「任せなさい!」

さっそく膝の上に乗せて堪能するクラーナの様子を前に、制限時間があつてよかった、と密かに思う。仮にも自分と同じ存在が本人の与り知らないところで長時間あれこれされるのは嫌だ。

実験と報告を済ませて仕切り直す。

「そつちはなにか進展あつたか？」

「娼館をいくつか掌握したから組合を作つたわ」

「急だな。例の接触してきた連中か？」

「そうよ。各代表者らを拉致つてお茶会を開いたの」

不穏な単語を聞いた。

「拉致つた、だと？」

「同じ話を何度もするのは面倒でしょ？ 異相協会に何を期待しているのか聞き出して、諸々検討したうえで組合を作ることにした訳よ」

クラリーナは俺の呆れた顔を気にせず気だるげに続ける。

「でね、八本指とかいう組織と揉めそうなのよね」

「背後関係を調べるつて言つただろ」

「調べたわよ。王国を股にかける犯罪組織みたいなんだけどね。ただ、例のお姫様の政策で、売春業まわりが弱つていたみたいだから。付け入るなら今かなつて」

クラリーナの言いたいことは分かつた。

ギルドマスターが商機と捉えたなら任せよう。

「俺にできることは？」

「今は無いわ。幸いなことにこの世界の情報伝達は遅いから、向こうが動きだす前にま

「ずは組合の地固めね」

「実際どうするつもりだ？　グニラたちが居るとはいえ異相協会は製造職のギルドだ。組み込むにしても規模が大きければ勝手も違うと思うぞ」

俺の懸念にクラリーナが小さく笑う。

「そこは心配しないで。私が現実<sup>リアル</sup>で所属していた組合を参考にするから。プラウドール、聞いたことない？」

「ああ、聞いたことはある。けど名前だけだ。実態は知らない」

クラリーナによるとプラウドールとは2050年に設立された労働組合だ。性風俗に関連する分野（性労働、製薬、寝具や衣装の生産など）に携わる労働者であれば誰でも加入できる国際的な組織で、属する国によつて若干傾向が異なるが、主だった活動内容は政府への請願、社会的地位の向上、裁判など法律や権利に関する相談窓口、医療や生活必需品の提供などらしい。

「参考になるものがあるなら大丈夫か」

「心配しないで。異相協会に資金が流れるようにするし。——あ、そうだ」

クラリーナが何かを思い出したのか、ポンと手を叩く。

「ヴィクトル、アエラちゃんと夫婦にならない？」

「なんだって？」



その突然の提案にクラリーナの膝に座る分身もピクリと反応する。

「アエラに至っては動揺を隠せず、耳と尻尾がせわしく形容しがたい動きを見せている。」

「まあ聞きなさいな。私は一部で既に神格化されているでしょ？　今はまだ噂話に人間味があるけれど、そのうち近寄りがたくなると思うのよ」

「畏れられると言いたいのか？」

「相手次第ではそうなるわね。だから緩衝材ワックッションを置く意味でヴィクトルには間に立ってほしいのよ」

クラリーナの狙いは分かったが――。

「それでなんでアエラと夫婦になる話になるんだ」

「信用の問題よ。20代前半の見た目で未婚の男はこの世界で体裁が悪いの。それに経験上、“名義”は幾つあってもいいのよね。神殿勢力と連携することがあるとして、彼らが愛妻家の貴方と娼婦を擁する私のどちらと付き合いやすかった話よ」

体裁を指摘されると返す言葉も無い。運び屋をしているとフロント企業を通しての依頼ばかりだった。逆に所属していた組織も客の都合に合わせた名義をいくつも持っていた。それらは実務的な問題として、裏社会と繋がりが疑われる名義の取引は第三者に監視または妨害されやすいからだ。

とどのつまり他人からの評価で信用の優劣が決まるからこそ体裁そとづらは疎かにできないのだ。

「協力するのは各かではないが」

「まあアエラちゃんさえ嫌でなければ——」

「謹んでお受けいたしますっ！」

食い気味にアエラが人間の姿になる。

目に見えて嬉しそうなアエラにクラリーナは微笑む。

「決まりね。でもひとつだけ、アエラちゃんには我慢してほしいことがあるの」

「御方や異相協会のためであれば、如何なる試練にも耐えてみせます」

クラリーナの言葉に舞い上がっていたアエラが落ち着いた様子で返事をする。

それにしても「御方」とは。

ナザリックのNPCと交流した時に覚えたか。

「試練だとか、そんな大袈裟なものではないわ。アエラちゃんにはヴィクトルの正妻になつてもらふつもりだけれど、ヴィクトルには側室も迎えてもらふかもしれないの。だから、嫉妬するのは自由だけれど、追い出したり虐めたりしたら駄目よ」

「側室」のワードに思わず口を挟む。

「ちよつと待て。アエラだけじゃ駄目なのか」

「基本的には断つてもらつていいわ。実際、私のところに娘をヴィクトルにつて話も来てるの。断つているけどね？　でも、側室を迎えざるを得ない状況もあると思うの」

王侯貴族は書面によるビジネス関係よりも婚姻による繋がりを重んじる。

それは理解できるが――。

「前にも言ったが、俺にも選ぶ権利はあるぞ」

「もちろんよ。私も面倒だとは思うけれど、娘を出すことで安心する連中が居るつてことだけは覚えておいて」

仕方がない。俺は了解の意味を込めて手を挙げる。

アエラも頭を下げてクラリーナの意に沿う意思を見せると、クラリーナが満足そうに声を張る。

「で、さつそくなんだけど。まずはふたりの指輪を用意しましょう？」

\* \* \*

バーバラ・ベックはエ・レエブルで小さな娼館を営む元娼婦だ。

生まれはトブの大森林に接する開拓村。貧しくとも幸せだった14歳の時、魔物によつて村と親兄弟を失つた過去を持つ。

バーバラは自分のことを不幸だとは思っていない。むしろ幸運だと思っている。

村が魔物に襲われた時、生き残ることができた。行商人に拾われ、奴隷にもされずに街までたどり着いた。行商人の口利きで奉公先も見つかった。

16歳の時、奉公先の小さな酒場が潰れたが、公娼の申請に許可が下りた。

19歳の時、貴族の寵愛を受けることができた。

38歳の時、貴族の支援の下、娼館の主となることができた。

45歳の時、貴族は死に、その遺族から支援の打ち切りを宣言されたが、野垂れ死ぬことなくやってこれた。

そして52歳の今、クラリーナ・デア・セルペンス・ウエネフィカと出会った。

「なんだこれは!! ここはどこだ!」

「——全員揃ったわね」

喧しい男の声に続き、凜とした女性の声でバーバラは思考の海から浮上する。

男が動揺するのも致し方が無い。

バーバラとて半生を走馬灯のように振り返る程度には異常な状況だ。

バーバラが今いる場所は草原。

何もない大草原に円卓がひとつ、強制参加のお茶会だ。密かに嘆息する。

目の前にある茶器や焼き菓子、円卓に椅子、側に控えるメイドまでが上物。そして、バーバラが知るどの女よりも美しいこのお茶会の主催者、クラリーナ・デア・セルペンス・ウエネフィカ。

今日のクラリーナは普段見る扇情的なドレスではなく、魔法詠唱者を思わせる深く暗い真紅のローブを着ていた。

いや、もともと魔法詠唱者だと聞いているので、こちらが本来の彼女なのかもしれない。

円卓に並ぶ顔ぶれは見知った者ばかりだ。

彼らを見て、連れて来られた理由を察した。

同業者、つまり娼館を営む主たちだ。

無限抱擁の主、ビリエル・ダール。届かぬ恋慕の主、ボルイエ・オースルンド。輝く薔薇の主、コニー・ビョルク。鳥籠の夢想の主、オルガ・アレリード。そして赤い白夜の主であるバーバラ・ベック。

全員が全員、ただでさえ深い皺をさらに深くして、円卓を囲っている。

「さて、今日は異相協会の長として貴方たちを集めさせてもらったわ」

クラーナの言葉に娼館の主たちの目付きが変わる。

「そ、それならそうと初めに仰つてくださいよ。心臓に悪いですが、ウエネフィカ様」  
ボルイエが代表して皆の気持ちを代弁してくれた。

「変わった趣向のお茶会だと思えばこれもいい経験かもしれないわね」

続いたオルガの言葉に皆が頷く。

「早速だけれど、ここに招いた皆さんには熱烈なお誘いを受けたわ。客としてではなく後援者としてね」

クラーナの言葉に全員が素早く目配せする。

その表情にはどこかきまり悪さが窺える。

「ひとつはつきりさせておくけれど、異相協会は営利組織であつて慈善事業も福祉事業もしていないの。一方的な支援はできないわ」

「もちろん承知しておりますぜ。後援者になつてほしいとは言つたが、本音を言えば異相協会の商品を無限抱擁へ卸してほしいんだ。店の料金を割引する、どうだ？」

「待て、ダール。異相協会の商品はここにいる全員が欲している、——いや、必要として  
いるんだ。抜け駆けは許さんぞ」

ピリエルの主張にすかさずコニーの牽制が入る。

コニーが他の主らに視線を巡らせば全員が同意するように首を縦に振る。

コニーの言い分は正しい。クラリーナが娼館を訪れるたびにばら撒く薬や嗜好品に、娼婦や男娼が完全に溺れてしまった。しかも娼婦らの稼ぎではロフール商会で売られる価格はギリギリだ。黒粉のような危険な薬物ではないにしても、少ない貯金を切り崩してしまつては将来が危ぶまれる事態と言える。

今はまだクラリーナが頻繁に來客するのでおこぼれをいただけるが、彼女が姿を消した時が問題だ。下手すると娼婦らが彼女を追いかけて出ていく可能性もある。

それが、ここに集まる五つの娼館が抱える潜在的な問題だ。

「うちは割引きどころか無料にしてもいいわ」

「それならこちらは付けを帳消しに——」

女主であるオルガが媚びた様子で口を開けば、堪らず他の主たちも条件を出す。

それらに耳を傾けていたクラリーナが不意にバーバラへ問う。

「バーバラ・ベック、だったかしら。先ほどから静かだけれど、貴女からは何かないの？」

円卓が静まる。

この場に呼ばれた意味を考えればおのずと答えは絞られる。

そして、その答えの中でも他の娼館にはできない提案をバーバラならでできる。

バーバラは乾いた唇をお茶で潤して気持ちいを落ち着ける。

「ウエネフィカ様、赤い白夜の経営権をお売りします」

他の主たちからどよめきが起こる。

エ・ランテルから流れてきた娼館の噂は他の主も耳にしているはず。選択肢のひとつとしてあったかもしれないが、彼らにはバーバラのように踏みだせない事情がある。

「喜んでお受けするわ。他に売ってくれる人はいないのかしら？」

「——俺も、売ろう」

しばしの沈黙の後、ボルイエ・オースルンドが意を決したように名乗りでる。

「オースルンド！ 正気か!？」

「構わん、俺の店だ。届かぬ恋慕の経営権を売る」

名乗りでなかった3人からは動揺が窺える。

逆にバーバラは見知った者が同じ判断をしたことにひとつ安堵する。

当のボルイエは神経質そうに眼鏡を弄っている。

バーバラはその仕草に懐かしさを感じる。彼がまだ客だった頃からの癖だ。

身受け話の相談を受けた時、娼館経営の相談を受けた時、そして妻を亡くした時も、深く思い悩んでいる時に見せる癖だ。

分かりやすいからこそ嫌いになれない腐れ縁の男だ。

クラーナがパンパンと手を叩いて注意を引く。

「ベックとオースルンドは後で書面を交わしましょう。——さて、本題よ。娼館関係者



からなる組合を設立するから、それに参加なさい。組合費を課すけれど、見返りに異相協会の商品を割引きしてあげるわ。もちろんベックとオースルンドの店もよ」

場の空気が重くなる。

「ウエネフィカ様、興味深いお話だが、そりや無理だ」

「誰だつて一度は組合があればと考えるさ。だがなあ」

「そうだな、領主や神殿から横槍が入るに決まっている」

「うちは参加するわよ。異相協会の商品が安く手に入るならかまわないわ」

クラリーナの提案に男性陣が遠慮がちに應えるなか、オルガだけが毅然と賛同する。

オルガの表明を受け、あれこれと天秤にかけて男性陣も最終的には首を縦に振る。

「うーむ、——駄目元だ。やってみよう」

「もしもの時は領主か神殿に手土産を渡せばなんとかなるかもしれん」

「賛同してくれて嬉しいわ。組合費の価格設定を改めて相談すると思うから、それまで

少し待っていてちょうだい」

クラリーナが椅子から立ち上がる。

「私からは以上よ。貴方たちを長くとどめておくのも悪いからお開きにしましょう。

バーバラ・ベック、ボルイエ・オースルンド、ふたりにはもう少し付き合ってもらおうわ

よ」

「畏まりました」

「あ、はい。畏まりました」

バーバラはたじろぐ。

人の下につく感覚は十数年振りだ。

クラリーナが娼館の主たちを見据える。

「最後に、へ今日の出来事を誰とも情報共有してはならない」

「なにを……」

気のせいかもしれないが、バーバラにはクラリーナの目が微かに光ったように見えた。

狼狽える娼館の主たちをクラリーナは宥める。

「ふふ、私との約束よ。横槍は面倒でしょう？」

「も、もちろんですとも。お約束します」

「私もお約束します」

「秘密にします」

「——じゃあ、お開きね。リオ、皆を帰してあげて」

\* \* \*

メイドが有無を言わさずひとりひとりを元の場所へと転移魔法で送っていく。そして円卓にはバーバラとボルイエ、クラーナだけになる。

「貴方たちも行くわよ。手を取りなさい」

差し出されたクラーナの手を取ると、次の瞬間には草原から見慣れぬ室内に居た。

「お待ちしておりました、ウエネフィカ様」

クラーナを迎える声。

バーバラより二回りも若そうなふたりの女が跪いている。

「紹介するわ。エ・ランテルの店を任せているグニラとマリーよ」

「グニラ・ブレンドレルです。エ・ランテルで『白蛇の泉』の主を任されています」

「同じく、『白蛇の泉』で経営補佐を任せております、マリー・マルムボリです」

バーバラとボルイエは、ふたりがメイドでも娼婦でもなく、まさかの経営者側である

ことに驚く。

さらに会話の流れから転移した先がエ・ランテルであることも察する。

「そしてこちらのふたりはエ・レエブルで娼館の主をしているバーバラとボルイエよ」

「バーバラ・ベックです。『赤い白夜』の主でした」

「ボルイエ・オースルドだ。『届かぬ恋慕』の主だった」

バーバラとボルイエの挨拶にクラーナが苦笑する。

「ふふ、契約を交わしていないんだから、貴方たちはまだ娼館の主よ？」

ボルイエの本心は分からないが、バーバラは覚悟を決めている。

50歳を迎えてから身体にガタが来た。そろそろどこかしらの後ろ盾がなければ店を守れないと考えているのだ。

クラリーナが続ける。

「今日は異相協会の一員になるうえで覚えてほしい規則を彼女たちから説明してもらわ。その後は店の雰囲気を実際に見てもらって、最後に改めて経営権をどうするか聞いわね。決心が揺らいだら遠慮なく撤回してもらって構わないから」

応接室で規則の説明をグニラたちから受けていると、不意にクラリーナの楽しそうな声  
が上がる。

「あらあら、約束したのに。困ったものね」

いつの間にかクラリーナの前に不思議な鏡が浮いていた。

いや、正確にはクラリーナを映していないので鏡ではないのだろう。

「皆、これを御覧なさい」

「これはいったい……」

「オルガ？」

先ほど別れたオルガが床の上でのたうちまわっていた。

その表情は苦悶に満ちている。

「近くに娼婦がいるわね。うっかり話したのかしら」

オルガの近くには状況を飲み込めず右往左往する気の毒な娼婦の姿が映し出されている。

バーバラは堪らず問う。

「ウ、ウエネフィカ様、何が起こっているのでしょうか？」

「<sup>ギアス</sup>〈制約〉よ。今日の出来事を誰とも情報共有してはならないと約束したのに。——相当

辛いみたいね。ああ、貴方たちにはかけていないわよ」

クラリーナの言葉に安心したのもつかの間、釘を刺すように彼女は続ける。

「でもね、ボルイエ」

「は、はい。なんででしょう」

突然話を向けられたボルイエが背筋を伸ばす。

「八本指と連絡を取っては駄目よ」

ボルイエの額に汗が滲む。

「ご存知だったのですか」

「ええ、バーバラ以外、八本指と繋がっていることは承知よ。異相協会の商品を転売しようとしていることもね」

バーバラも驚く。他の娼館が八本指と通じていることは事実だ。八本指も悪名高く、素人が知っていてもおかしくはない。犯罪組織と娼館を結びつける噂はいくらだつてある。だが、具体的に「どこそこの娼館が」といった情報は、それこそ業界に属していないと知るのには難しい。

それを派手に娼館を出入りしていたとはいえ、街に着いて間もないクラナが知っていたのだ。

「娼婦に甘い」という評判がなければ貴方も制約ギアスで縛っていたわ」

ボルイエは元商人だ。ひとりの娼婦に入れあげて身受けし、紆余曲折あつて娼館経営に手を出した男だ。そして本人が娼婦を身受けした経験があるからか、他の経営者なら渋る娼婦の身受け話にも寛容。根っからの悪人でもないことから、行き詰まっている女に働き口として彼の店を紹介する者もいたりする。

「ウエネフィカ様！ 誓つて後悔はさせません。ウエネフィカ様のもとで働かせてくださいー！」

「そんな必死にならなくてもいいわよ。ケツ持ちなんて普通でしょ。それよりも娼婦を身受けした貴方には多少の好感を持っているの」

貴方はまだ何もしていないじゃないとクラーナは諭す。ゴロツキから店や娼婦を守る手段は人それぞれだし、少なくとも店を手放す覚悟を彼は見せた。

「先ほども言ったけれど、まずは店の雰囲気を知ってちようだい。その後で気が変わっても咎めはしないわ。——話の腰を折っちゃったわね。グニラ、規則の説明を続けてちようだい」

数時間後、契約書にサインをするふたりの姿があった。  
そしてバーバラは幸運を噛みしめるのだった。

## 第15話：蒼の薔薇の災難

リ・エステイーズ王国は封建制度により統治される人間の国家である。多くの人間種国家が他種族の脅威に晒されているなか、リ・エステイーズ王国は大きな侵略もないまま長く安定した歴史を持つ。アゼルリシア山脈の西に位置し、山脈から流れる水が隣接する大森林の腐葉土を通ることで肥沃な土地にも恵まれていた。

しかし、その豊かさゆえに王侯貴族は墮落した。支配者たちは派閥争いに明け暮れ、領民たちは重税と徴兵により疲弊した。

そして悪いことに、犯罪組織の蔓延をも許していたのだった。

王国を蝕む犯罪組織「八本指」は、王国社会を裏から牛耳る犯罪組織だ。麻薬、奴隷売買、警備、密輸、暗殺、窃盗、金融、賭博の八つの部門からなり、その影響力は王国に存在する大小様々な組織に通ずると噂される。

そんな強い影響力を持つ八本指の各部門ではあるが、彼らは決して一枚岩ではなかった。

表立っての対立や抗争はないものの、各部門が独立した犯罪組織だった過去を持つことから、隙を見せれば互いに足をすくう関係でもあった。



八本指の麻薬部門は金回りがいい。性質上どの身分階級にも影響力を持つ部門でもある。

主力商品は植物性違法薬物、ライラの粉末。通称黒粉<sup>くろこな</sup>。安価で手軽に多幸感と陶酔感をもたらし、禁断症状が弱く、依存性が高い。

黒粉は売る側に都合の良すぎる薬物であり、八本指の重要な資金源であった。

\* \* \*

満月の夜、王国の冒険者3人が雑木林を探索していた。

ひとりは仮面を付けた小柄な人物で、ふたりは目元以外を黒装束で覆った女だ。

3人は王都の冒険者組合に所属する5人組のアダマンタイト級冒険者チーム「蒼の薔薇」のメンバー。魔法詠唱者のイビルアイと、ローグのティアとティナだ。

彼女たちの目的は黒粉の栽培地を見つけること。

八本指と繋がりのある地方を治める領主の噂を聞きつけ、遥々王都から遠征してきたのだ。

雑木林を進む3人が不意に足を止める。

木々の切れ目、満月が照らす空き地に馬車を見つけたのだ。

街道から外れた雑木林に4頭立ての馬車。

その光景に3人は違和感を覚えた。

月明かりに照らされた馬車は、見ようによつては魔女の家にも見えた。

3人は月光に照らされないよう木陰に潜む。

黒装束のふたり、ティアとティナが馬車を窺う。

「例の畑とは無関係そう」

「調べる？」

「待て」

イビルアイがふたりを制す。

「あの馬、生命を感じない」

「不死者？」

「それも違う。張りぼてでないとしたら、おそらく動像だ」<sup>ゴレム</sup>

「全部？」

「ああ」

短い肯定に沈黙が降りる。

言葉を失うのも無理はない。動像はそれ自体が珍しいものの、例えば魔術師組合などは警備用に所有していることもある。だが1体でも非常に高価であり、ましてや馬形、それも4頭ともなると個人での所有は難しいからだ。

「八足馬なら帝国の線もあつたけど」<sup>スレイブニール</sup>

「法国？」

「依頼の範疇外だ。ここで悩んでも仕方がない」

逸れ始めた思考をイビルアイが一旦区切る。

「手掛かりになるか分からないが御者台に旗がある。それだけ調べて仕事に戻るぞ」  
「なら、ティナと見てくる。イビルアイは周囲を警戒してて」

3人とも夜目は利く。

とはいえ、風もなく垂れさがった旗を確認するには近づくしかない。

イビルアイを残し、黒装束のふたりが馬車に向かう。

ティアとティナは前後に組んで素早く行動する。

前を進むティアが御者台にたどり着くと、背中に手を回して指を複雑に動かす。

——待機、すぐ戻る。

暗殺者が使う手話だ。

振りむくことなく、発話を介さず意思を伝えることができる技能だ。

ティアが御者台を調べ、ティナは不測の事態に備えて下で待つ。

ティナがティアを視界に入れながら周囲を警戒していると、不意に後方で待機しているイビルアイが息を飲む。何事かと視線をイビルアイへ向けたやさき、今度は馬車が大きく軋み「ボトリ」と小さな落下音がした。

ティナは反射的に視線を戻す。

共に厳しい訓練を積んだティアが任務中に体勢を崩し、そのうえ何かを取り落とし。そんな「らしくない」失態に内心驚きつつ御者台を見上げ、思考が止まる。

ティアから視線を逸らしていた時間は僅かだったはず。

御者台に上っていたティアが、消えていた。

それだけではない。

ティナは直前に聞いた落下音を目で追う。

足元に見慣れた手が、手首から先が、落ちていた。

それがティアのものだと認識すると同時に、襟元を強く引かれる。

「走れ！ 振り返るな！」

イビルアイに急かされるまま走る。

ティアとティナは暗殺者として育てられた過去を持つ。

任務中、仲間の損耗に心が動かないよう訓練を受けた。

仲間の死に心動かされることはない、と思っていた。

「っ!？」

ティナの足がもつれるがすぐに立て直す。

厳しい訓練が転ぶことを許さなかった。

だが、ティアの消失に僅かな動揺を自覚する。

「しっかりしろ！ クソツ、あんな規格外、あれは無理だ！」

並走するイビルアイが吐き捨てる。

「よし、飛ぶぞー！」

\* \* \*

エ・レエブルを出て数日後の深夜。

王都を目指す異相協会の馬車は雑木林に停車していた。

疲労とは無縁の鉄の馬動像アイアンホース・ゴレムではあるが、いまの異相協会には転移世界の人間が所属している。そんな人間の従業員のために「夜は休む」とクラーナが定めたのだ。職場と住居が一緒なので「生活にメリハリが必要」だとクラーナは言う。

もつとも、それは雇った人間たちへの配慮であって、俺やクラーナ、NPCたちにはただの自由時間ではない。

しかし、夜を自由時間と定めたものの、この世界の人間にとつて夜は寝る時間だ。カーリンらも夜に何かをする習慣はなく、それこそクラーナから夜伽を申しつけられないう限り就寝する。プレイヤーの影響を受けたであろうこの世界であっても、灯りが無ければ「夕食」という概念すら危うくなるのかと驚いたものだ。

そんな周囲が寝静まった異相協会の工房で、俺はクレマンティヌを相手に魔導具をとつかえひつかえ試着させていた。

「こいつはどうだ？」

「グウ、ナントカ、保テマス」

「もつとランクが必要か」

今夜は満月。

クレマンティーンが人狼ワウルフになって初めての満月だ。

彼女は今、満月の影響で人狼化中だ。その姿は狼の頭を持つ獣人。アエラの種族「古狼の血脈」とは違い、クレマンティーンの口は裂けてはいない。ただ口蓋や喉の形が変わったことで発声がややぎこちなく、流暢に喋るには慣れが必要そうだった。

そしてやはりと言うべきか、人狼化の発現と同時に理性を失ったのだ。

今は暴走に対処すべく魔導具で精神力を補おうとアレコレと試している最中だ。

インベントリから漆黒の石が留められた指輪を取り出す。

「これはどうだ？」

「落着キマシタ。意識モ、ハッキリ、シテマス」

「ならこれで決まりだな」

俺は側で控えていたマーシャとウルリカに指示を出す。

「マーシャはこれを10個試作してくれ」

「畏まりました」

「ウルリカもやってみろ。素の技量で無理なら『ゴヴニユの槌』の使用も許す」

「はい、鋭意努力します」

俺は鍛冶師ジーウの願いを受け、異相協会は彼の娘を預かった。ウルリカはマーシヤに弟子入りし、ユグドラシルのアイテムを作るか、または技能スキルを習得できるかを実験中だ。

彼女も人間なので本来ならカーリンらと同じように就寝してもおかしくないのだが、実験を効率的なものにしようと思えば貸し与えた維持リテグ、ネフ、サステナスする指輪のせいで工房に籠りがちだ。これは本人のヤル気の表れだと思っているが、このままワーカホリックにならないことを願っている。

ゴヴニユの槌はそんなウルリカの技量を大きく上昇させるアイテムだ。ダグザの大釜ハンマーと同じ分類のアイテムで、ステータス補正の高い槌としてそのまま使えるほか、金貨の消費で各種鑄塊インゴットを生み出すこともできる代物だ。

ユグドラシルではもっぱら「採掘場で掘れば安く済むが金貨で解決できるならそれでもいい」といったスタンスの製造職に重宝されていた。

マーシヤとウルリカの作業を眺めていると、アエラが工房にやってきた。ひと目で「何かやらかした」と察する。

アエラは黒装束の女を抱えていた。それも片手がない。鋭利な刃物で切り落とされ



たかのような傷口だ。呼吸も荒い。吐く息に血の香りが混ざっている。外見からは分らないが、肺に損傷を受けるほどの衝撃を受けたのだろう。

「あおう、ヴィクトル様」

「急を要する時ほど簡潔に、だぞ」

「はい。——実は」

要約すればこうだ。

満月の夜、人狼化して夜の散歩を楽しんだ帰り、不届き者が異相協会の旗を盗む現場に遭遇。咄嗟に手を出してしまったが、直後に仲間と思しき二人組が転移で逃亡。吹っ飛ばした相手を回収し、今に至る。

「申し訳ありません、取り逃がしました」

「気にするな。俺もこんな辺鄙なところで魔法詠唱者マジックキャスターと遭遇するとは思わなかった」

アエラは取り逃したことを気にしているようだった。

咎める気はない。そもそも散歩を促したのは俺だ。満月の夜でも人化を維持できるアエラでさえ感情は昂る。馬車に籠って過ごすよりは気分転換になればと古狼化を許して送り出したのだ。

それにクレマンティーヌの他、この世界の人間からは熟練の魔法詠唱者マジックキャスターで第三位階程度と聞かされていた。転移魔法を扱える者とは早々出会うことはないだろうと高を

括っていた。

不可抗力。番犬が番犬らしく仕事をしたに過ぎない。

ここで叱ることで、このさき委縮して吠えなくなつては困る。

懸念があるとすれば古狼化した姿を見られたことだろう。

だが変身の中を見られたわけではないし、野盗が騒ぎ立てたところでどうとでもできる。

「アエラ、次からはもう少し加減しろ。お前なら傷つけずにすむはずだ」

「畏まりました」

「そいつを見せろ」

アエラが抱える黒装束の女、その口元を覆う黒い布をずらして顔を晒す。

頬をペチペチと叩く。

「おい、意識はあるか？ ——これは」

顔を晒して気づいた。

緩んだ黒装束の内側に、以前見たことのあるクレマンティーヌコレクシヨンの収集品に酷似した物。

《クラリーナ、面倒なことになったかもしれない》

《伝言》を飛ばしつつ、俺は苦々しくそれを見る。

冒険者プレート。

それも厄介なことにアダマンタイト製のプレートだ。

\* \* \*

王都リ・エステイゼ、昼。

アダマンタイト級冒険者チーム「蒼の薔薇」は仲間一人を欠いたまま、拠点とする最上級の宿に集合していた。

酒場と食堂を兼ねた1階。チームメンバーの誰が主張した訳でもないが、最奥にある半ば「指定席」扱いの丸テーブルは重苦しい雰囲気に含まれていた。

「まだ死んだって決まったわけじゃねえんだろ？ 場所を教えろ、イビルアイ」

大男と見紛うほどの筋骨隆々な女が声を低く荒げる。

対してイビルアイと呼ばれた小柄な仮面の女は冷静に突き放す。

「駄目だ、ガガーラン。遭遇したらお前も失う事になる」

「馬車は人目を避けていたんだ。事を起こしたなら移動しているさ。ティナもそう思うだろ？」

話を振られたティナは、しかし首を横に振る。

「ティアを囿に罫を張っているかもしれない。それに、イビルアイが魔神をも凌ぐと言  
うなら、きつとそう。今は周囲に警告を出すべき。——捜索は後でいい」

一番近いはずのティナから慎重な言葉が出たことでガガーランは押し黙る。

鼻息荒く納得した様子はないものの、ガガーラン自身もアダマンタイト級冒険者だ。  
歴戦の猛者として優先すべきことはわかつてはいるのだ。

ガガーランはひとつ息を吐いて落ち着いてみせると、チームリーダーに声をかける。  
「で、どうするんだリーダー」

話を向けられた蒼の薔薇のリーダー、ラキユースは目をつぶり考えに耽っている。

普段であれば「生命の輝き」とも呼べる彼女の魅力ある容姿は、心労からか僅かに影  
が落ちていた。いつもならきちんと整えられている金髪も、今はどことなく色褪せて見  
えていた。

「王に謁見を求めるわ。それに叔父様を呼び戻してもらわないと。ガガーランは組合  
へ、イビルアイは——」

〈次 元封鎖〉  
デイメンショナル・ロック

「誰だ！」

不意の魔法詠唱に対してガガーランが立ち上がろうとした瞬間、背後からその首を掴まれる。

「くっ?! た、立てねえっ!」

ガガーランは戦慄する。

背後を取られただけでなく、力自慢が膂力で制されたのだ。

ガガーランの後から警告が飛ぶ。

「全員動かないでもらえるかしら。でない、くびるわよ」

蒼の薔薇に脅しをかけた「赤毛の襲撃者」は店内を窺う。

そして周囲の反応にほくそ笑む。

「防音対策とは感心ね。好都合だわ」

昼時の食堂はその時間帯の割には客が少なかった。なぜなら最上級の宿ともなればその食堂のメニューも高額だからだ。この場には高額な料金を支払えるだけの裕福層や上級冒険者などの極少数しかないのだ。

彼らは注意を一瞬向けながらも、すぐに感心をなくしたように気を逸らす。それは一見するとテーブルにつく蒼の薔薇に女が親し気に話しかけているだけであり、加えてアダマンタイト級冒険者チーム「蒼の薔薇」を覗き見続ける無粋な客層でもないからだ。

もつともその無関心さに拍車をかけているのは他でもない、当の蒼の薔薇が講じた防

音対策によるものが大きい。一般人ならいざ知らず、上級冒険者であれば「聞こえない」ことに違和感を覚えてもおかしくはない。だが、アダマンタイト級冒険者チーム「蒼の薔薇」がなにかしらの手段で防音対策をしているのであれば、上級冒険者たちはそこに「聞くな」という意思を読み取るだろう。

冒険者は互いに深く干渉しない文化を持つ。それがいま、この場に見えない力となつて働きかけているのだ。

「あら、あなたたち双子だったの」

ティナを見た襲撃者から驚きの声上がる。

そこにイビルアイの声が重なる。

「——その気配は!!」

「今度は逃がさないわよ」

正体に気付いたイビルアイが殺気立ち、それに当てられたガガーランも怒気を纏う。

「てめえがティアを!」

「抑えて、ふたりとも」

「——チツ、分かったよ」

蒼の薔薇のチームリーダー、ラキユースが会話を引き継ぐ。

「チームリーダーとして対話を希望するわ。ガガーランを放してもらえないかしら」

「始めからそのつもりよ」

襲撃者はあつけなくガガーランから手を放すと、躊躇わずに空いている席へと座る。ラキュースの正面、いつもならティアが座る席だ。

「マジかよ」

背後にいた赤毛の女の姿を初めて認めたガガーランが驚嘆する。

その恐ろしく整った美しい顔立ちもさることながら、自分を押さえ込んだ臂力が細腕から生み出されていたことを知って驚いたのだ。

アダマンタイト級冒険者4人を前に赤毛の女は切り出す。

「まずは自己紹介をさせていたたくわ。私の名はアナスタシア。アナスタシア・デア・ルプス・アルヒミア。異相協会の共同経営者、ヴィクトル・ヴィ・ニエボ・アルヒミアさ、——アルヒミアの、——っ」

『っ?』

「っ、妻です」

頬を朱に染めて恥ずかしがるアエラを前に、それまで警戒心を露わにしていた蒼の薔薇メンバーの間に微妙な空気が流れる。

「な、なるほど。私は蒼の薔薇のリーダー、ラキュースと申します」

「ラキュース・アルベイン・デイル・アインドラ」

「！」

フルネームを呼ばれたラキユースの顔が僅かに強張る。

「家名を伏せられたのは、あくまでも冒険者として対話を望む、と受けとつていいのかしら」

アエラの問いにラキユースは逡巡する。

「ええ、その認識で構わないわ。——それで、まず先に聞きたいのだけど、ティア——貴女が襲つた仲間は無事なのかしら」

ラキユースの質問にアエラの笑みを深くする。

「もちろん無事よ。落とした手も元通り。——ただ、今のところは、と付け加えさせてもらうけど」

アエラの言い様に蒼の薔薇のメンバーは顔をしかめる。

そんな彼女らにアエラは言い聞かせる。

「ひとつ誤解があるようだから訂正。襲つたのではなく自衛、野盗から馬車を守つただけよ。ティアさんが冒険者だと分かつたからこそ、こうして話し合いに来たの」

起こつた出来事だけを並べればアエラの言い分に矛盾はない。

ラキユースが受けた報告はティナとイビルアイの主観によるもの。ふたりが離脱したその後でティアから蒼の薔薇の情報——例えばこの宿のことなどを聞き出したのだ



としたら、アエラの言う通りティアの生存も期待できるだろう。

逆に問題となるのは当時のティア、ティナ、イビルアイの3人が冒険者組合を通さな  
い依頼を受けていたこと。「ティアを襲った魔物」はイビルアイしか見ておらず、深夜に  
第三者へ忍び寄った状況は野盗だと誤解されても仕方がない。

特に不味いのは組合に問い合わせられること。流石のアダマンタイト級冒険者で  
あつても流血沙汰となれば事情聴取は免れず、場合によつては依頼者の立場に悪影響を  
及ぼす恐れもある。

それを理解したラキユースが首肯する。

「お互いに誤解があつたようね。でも、この場にティアを連れて来なかつた理由は？」

「蒼の薔薇の行動は不適切だった。私も過剰な攻撃だった。これでお相子にしたいとこ  
ろだけど、そちらの仮面のお仲間さんが私の正体を見てしまつている」

「つまり、ティアを返してほしければ正体を秘密にしろと？」

「話が早くて助かるわ」

ラキユースが仲間たちへ目配せする。

「みんな聞いたわね。今回の出来事はちよつとしたすれ違いで起こつたこと。他言無用  
よ」

「分かつた。リーダーの決定に従う」

「脅かされているようで釈然としねえが、ティアのためだ」

「ひとついいか」

「なにかしら」

ティナとガガーランが了承するなか、イビルアイがアエラに問う。

「いまの会話でお前が理性的な存在だとは理解した。だが、お前の力は強大だ。この国にとつて脅威とならないかを懸念している」

「その言葉、そのまま貴女に返すわ。どこにでも転移できる不死者だなんて、結構な脅威だとは思わない?」

蒼の薔薇に緊張が走る。

「ああ、ティアあの娘が口を割った訳ではないわ。信用してあげて」

「いつから……」

「私は聖職者。不死者退治は専門なの」

アエラが凄むと周囲を神聖な空気が包む。

「くっ!」

「イビルアイ!?!」

近くで見ないと分からないが、イビルアイの僅かにのぞく肌から白い煙が漂う。

アエラの〈清浄なるオーラ〉が焼いたのだ。

だがそれも一瞬。すぐに神聖な空気は霧散する。

「無害であること。それを証明するのがいかに困難か、貴女も理解しているのではありませんか？ せつかく双方丸く収まったのだから、変な疑いで話をこじらせないでほしいわね」

「——確かに無粋な問いだった。私も秘密を守ると約束しよう」

イビルアイも思うところがあつたのか、しかし不承不承ながら引き下がる。

アエラが席を立つ。

「話がまとまって良かったわ」

「待って、ティアはいつ？」

立ち去ろうとするアエラにラキユースが慌てて声をかける。

「明日か明後日。怪我を負わせたお詫びに会長がもてなしてるの。少しの辛抱よ」

「信じていいのね？」

「もちろんよ。——あ、そうだ。聞きそびれるところだったわ」

アエラが何かを思い出したのか、今度は逆にラキユースへ質問する。

「ロフォーレ商会ってどこかしら」

\* \* \*

「アエラがフロアを退出するのを見届け、俺は暗殺者の監視技能を解除する。〈清浄なるオーラ〉はやり過ぎな気もするが揉めずに済んだ。終わり良ければ全て良し、初めてのお使いにしては上出来だ。

ほどなく宿を出たアエラと合流する。

今日のアエラは黒ナース服ではなく、クラリーナが新たに用意した司祭用のユグドラシル産衣装。修道女とゴシック調のロングドレスを混ぜた、いかにも「ゲームらしい」デザインクレリックの装備だ。色合いは黒を基調とし、赤と金を差し色としている。

聖遺物級なので黒ナース服よりは劣るものの、クレマンティーヌ曰く「普段使いなら過剰なほど」らしい。

アエラにとっては2着目の私服だ。

ちなみに俺は以前エ・ランテルでも着たイタリアの国家憲兵をモデルにした制服を着ている。儀礼的な装飾が施されているので厳格な雰囲気クレリックの司祭と並んでも遜色がないからだ。当面の間はこの制服が「赤いペスト医師」に代わる普段着となる。

俺もアエラも揃ってクラリーナの着せ替え人形だ。

ただこの衣替えは「アエラと並ぶ」以外にも切実な理由がある。

有り体に言えば冒険者でもないのに革レザー鎧アーマーを着込んでいると不審がられるからだ。「自分で素材集めをする」と説明できれば一番自然なのだが、レイジーやンファイアが

そうであつたようにこの世界の錬金術師アルケミストは冒険者から素材を買い取るか、採集しに行くにしても荒事は雇つた冒険者に任せるのが一般的なのだ。

これがユグドラシルなら「職業構成クラスが錬金術師アルケミストと暗殺者アサシンのハイブリッドだから」などと説明もできるのだが、実社会で暗殺者アサシンだと公言すれば信用はだだ落ち間違いなしだろう。

どちらにせよ今の俺に「錬金術師アルケミストはエプロン姿」という固定概念を覆せるほどの知名度がないことが問題なのだ。それこそ説明不要に至るには時間が必要だろう。

それまでは初代ギルマスの「商人営業は目だつてなんぼターゲット」も常識の範囲内で加減するつもりだ。

王都のみすぼらしい大通りをアエラと進む。

目的地はロフール商会だ。

アエラが俺を見上げる。

「如何でしたか、ヴィクトル様」

「〃様〃を外せ。約束しただろ」

「申しわけありません、——ヴィクトル」

「少し硬いが、まあいい。お使いは合格だ。よくやった」

「ありがとうございます！」

合格を聞いてアエラの表情がパツと明るくなる。

「頑張ったのはお前だ。『ありがとうございます』は変じやないか？」

「でも、お褒めの言葉をいただきました」

NPCの悪いところが出ている。

「『ホツとした』とか、『嬉しい』の方が自然だと思うが……」

「はい、嬉しいです」

鵜呑みにしているだけなようで腑に落ちない。

きちんと理解しているのだろうか。

「私の正体を流布されたらどういたしますか」

「話の伝わり方次第では放置、明確に敵対するなら排除する」

実のところ「アエラは化物だ」と騒ぎ立てられたところで致命的な状況に陥るとは考

えていない。アエラの〈完全なる変身〉は俺の〈擬態<sup>ミミツク</sup>〉とはそもそも質が違う。彼女が

人間の姿をしているとき、それは間違いない生物学的に人間。蒼の薔薇が目撃した「古

狼状態のアエラ」と「人間状態のアエラ」を同一だと立証するのは非常に困難だからだ。

あの満月の夜、接触したのが下級冒険者や野盗であったならば「無かったこと」にし

ただろう。だがアダマンタイト級冒険者相手ではそうはいかない。蒼の薔薇を排除しなかつたのは彼女たちの社会的地位が高かつたからだ。

蒼の薔薇が万が一にも敵対したその時は、王都に不死者アンデッドを放つて彼女たちを犯人に仕立てるつもりだ。イビルアイをやり玉に上げ、冒険者組合が彼女らを庇いだてするようなら「不死者アンデッドを匿うのか」と糾弾する。そして王侯貴族と神殿を焚きつけて孤立させるのだ。

社会的に貶めたくえで消す。完全環境都市アイコロジーを牛耳る複合企業がよく使う手でもある。アエラが了承とばかりに頷いてみせる。

「なるほど。そうなると王都のアダマンタイト級冒険者にクレマンティーンを置くのも面白いかもしれませんね」

「エ・ランテルには冒険者モモンがいるしそれも有りかもしれない。だが王国が噂通りなら長く滞在はしないだろう。仮に冒険者登録するにしても王国である必要はないさ」「確かにそうですね。——あ、そういえば」

アエラが不意に話題を変える。

「例の娘ですが、蒼の薔薇には2日ほどで返すと伝えたのですが、——大丈夫ですよね？」

「ああ、クラリーナの『おもてなし』か」

俺は心のなかで唸る。

ぶっちゃければ性的なおもてなしなのだ。

クラリーナがなにをどう読み取ったのかは知らないが、ティアと名乗った娘の性癖に感づいたのだから仕方がない。あの夜からずっとハーレム部屋でよろしくやっているのだ。

「流石に大丈夫だろう」

脳内がピンクでもギルド長だ。

ラインを守るだけの分別はあるはずだ。

\* \* \*

ティアは微睡から目覚める。

「ん……、あえ？」

何かがおかしい。

動けない。

痛みはないが、身体がとても重かった。

「あら、お目覚め？」



「あ……、ク、クラーナ、様……。つい、!？」

クラーナの声を聞いて身体が思い出す。

気を失うまで翻られた身体がいまだに熱を持っている。

動悸が激しい。

気だるさを振り払うように首を振り、霞む目で置かれた状況を把握しようと周囲を見渡す。

広い部屋の中央に置かれた天蓋付きのベッドに寝かされていた。それもクラーナに膝枕をされた状態で、両隣には添い寝するように年端もいかない娘たちが横たわり、動けないティアアの身体を思い思いに愛撫をしている。

「ゆつくり休めたかしら？」

美しい女主人が妖艶に微笑む。

この笑みにまんまと騙された。

いや、隙を見せたのは自分自身だとティアアは反省する。

性癖を見破られ、甘い言葉に流された。

相手の目的を察し、心に少しの期待を秘め、媚薬が盛られていると知りながら、出された紅茶を飲んでしまった。

慢心。

未知の薬だったのだ。

暗殺者になるべく様々な訓練を積んだ身体が一口で飛んだのだ。

「お、お……」

「意識が無くても身体は反応するものなのね。寝てる貴女も可愛かったわよ」  
クラーナの手が伸び、すらりとした指がティアの乳首を弾く。

「ひっ!？」

媚薬のせいか乳首を弾かれただけで達してしまった。

全身が性感帯になったようだ。

「なかなかの感度、ねっ!」

「おおんっ!!」

クラーナが再度、今度は強く乳首を弾くと、ティアは腰をガクガクと震わせて潮を吹く。

「いい顔ね。もっともっとダメにしてあげる。——ナタリー、いらっしやい」

「はい」

「分かっているわね? 愛を以って奉仕するのよ」

「仰せのままに」

ナタリーが潮で濡れたティアの股下に陣取る。

「ほら、見て」

クラリーナがナタリーの腕を指す。

「……嘘」

「凄いでしょ？ 改造したの。気持ちいいわよ、あれ」

「い、嫌……」

ナタリーは両手首から先が無かった。だが、問題はそこではない。

クラリーナが「改造した」と言ったのはナタリーの前腕。明らかに異常な凹凸があるのだ。それも前腕に何かを巻きつけたなどといった生易しいものではなく、皮膚の下に直接埋め込んでいるのだ。

少女たちが前腕に媚薬を塗りつけると、それは部屋の光をテラテラと反射し、その醜悪で歪な肉棒の形をより際立たせる。

「さあ、よく顔を見せて」

クラリーナが膝に乗せたティアの顔を両手で挟み、強制的に目を合わせる。

「ゆ、許して」

「貴女に怪我をさせたのはこちらよ？ 許してもらおうのは私たち。だからね、誠意を受けとってほしいの」

クラリーナがナタリーに合図を送ると、ティアの秘部に添えられた彼女のゴツゴツとし

た前腕に力が入る。

グチュツと音を立てたと同時にティアの腰が大きく跳ねる。

「ん、ほおおお!!」

ただでさえ媚薬で過敏な膣をナタリーの腕が抉る。

耐えられるはずがない。

女の細腕とはいえ一般的な男性器より太いのだ。

ティアの潮を顔に浴びながら、ナタリーは前腕をゆつくりと慣らすように抽送する。

「あひひひ!!」

絶頂の連鎖にティアは盛大に潮を吹き散らす。

「いいイキツぷりね。快楽に必死に耐えようとするそのドロドロの顔も可愛いわ」

ティアの顔はクラリーナに固定されたまま、霞む涙目で女神の如き美しい双眸を見つめ返すしかできない。今のティアにとって醜態を観察されていることなど些末なことなのだ。

だが――。

「さあ、本番はこれから。楽しむのよ?」

強烈な快感に晒されていた意識が不穏な言葉を捉えた。

クラリーナとナタリーが嗜虐的な笑みを浮かべる。

「力を抜いて」

下半身からナタリーの声が届くのと同時にぬるりとした感触を膣以外から感じ取る。それが肛門に添えられたもう一本の前腕だと気づき、ティアは危機感を募らせる。

「ヒイ………！」

「さあ、墮としてあげる」

ぬつと押し込まれた異物の先端は媚薬と愛液で意外なほどするりと侵入する。

だが、先端の侵入を許したものの続く前腕から肘前にかけての太さはそうもいかな  
い。

「——っ!! いっひっ!!!」

少しずつ、ミチミチとナタリーの腕が深く刺さるたびに、プシツ、プシツ、と小刻みに潮が飛ぶ。

「心地いい締めまり具合です」

「それはよかったわ。それじゃあ、初めて」

ティアの「中」をうつとりと堪能するナタリーにクラーナが指示を出す。

するとティアの股間に両腕を挿入した一見窮屈そうな体勢にも関わらず、ナタリーは上体を器用にくねらせながら凶悪な両腕を高速で出し入れを開始する。

「おっっっおほおおおっ おおお!! おっっ! おっっ!」

ティアは逃れたくても顔はクラリーナに、両腕両脚は少女たちに押さえられていた。

いま彼女にできることと言えば、無様なアへ顔を晒しながら、唯一動かせる下腹部を反らせ、ベッドから腰を浮かせることだけ。

ナタリーの繰りだす抽送が強く激しくなるにつれ、ティアの腰も高く高く反つていく。

そしてそんなティアの反応に合わせて動きに緩急がつけられる。

「お、お、っ！ お、お、っ！ お、お、っ！ い、い！！ しゅ、しゅごい！！」

「気に入ってくれたみたいで嬉しいわ。——んちゅっ」

「お、んん、ぶちゅちゅっ!?!」

ティアの喘ぎ声とは呼べない雄叫びを上げる口にクラリーナの唇が重なる。

『じゅるっ！ じゅるるっ！ ぢゅぢゅっ!!』

クラリーナとティアの舌を吸い合う音と、ナタリーが責め上げるグチュツ又チュツとした湿った音が入り混じる。

ティアは快楽の濁流に飲まれ、抵抗もなくされるがまだまだ。

「ぶはあ、——美味しかったわ。ふふ、貴女が同性愛者でなければ中出しの良さを仕込めたんだけど」

クラリーナが愛おしそうにティアの頭を撫でる。

しかしティアは痙攣するだけで意思のある反応を返せない。

「ナタリー、仕上げよ」

「かしこまりました」

肛門アナルからヌポツと引き抜かれた腕が今度はティアの下腹部を圧迫するように押し当てられる。

「にやっ、なにを!!? お、ほおおおお!!」

ティアが覚醒する。

自分に何が起こったか理解できないまま腰を最大限に浮かせて潮吹きブリッジを披露する。

「い、ぐっ! い、ぐう!! お、お!! と、止まらなひい!!」

ナタリーの両腕がティアの子宮を内と外から、円を描くように、パン生地をこねるように、グリグリと押し潰しているのだ。

「ああ、堪らないわ」

「ん、ほお、お、んぐう?!」

クラーナは膝枕を止めて一旦膝立ちになると、今度はそのままティアの顔面に腰を落とす。

「催してきちゃったわ。——飲みなさい」

クラリーナは自分の秘部をティアの口に当て、ぶるりと小さく震えながら容赦なく放尿する。

「んぐっ！ じゆる、えお！ ぐくっ、ぐくっ、じゆるるる!!」

「良いわ。もつと下品な音を立てて吸うのよ」

クラリーナの生暖かい尿を喉へ直接流し込まれたティアは嘔吐きながらも必死に飲み下す。

その間もナタリーの責めは続き絶頂も止まらない。

そしてクラリーナの股間から解放されたティアは――。

「ぶはあ……、あ ああ?! い……、あああ……」

もはやまともな思考はできず、ただただ生まれたての赤子のように、言葉にならない音を奏でるだけの肉人形になると、次第に甘美な夢心地に微睡みながら意識を手放すのだった。